

一般国道
10号線 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集

宇野代遺跡

福岡県築上郡新吉富村所在宇野代遺跡の調査

1995

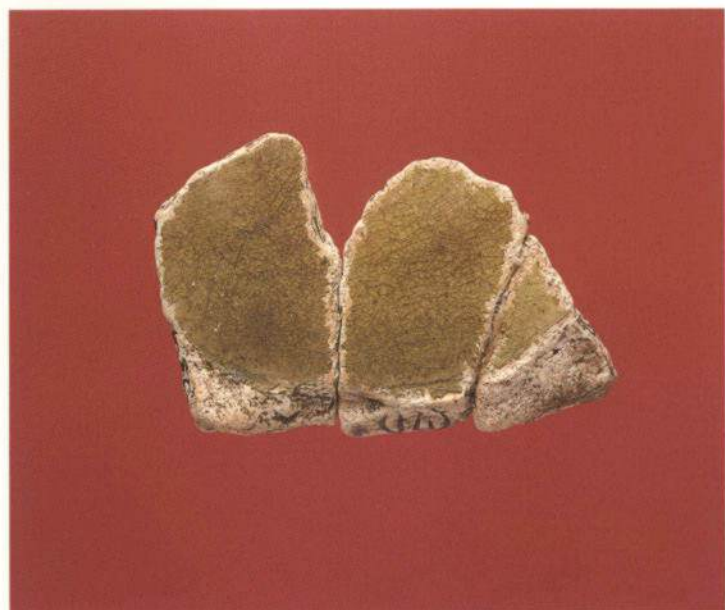
福岡県教育委員会

宇野代遺跡

福岡県築上郡新吉富村所在宇野代遺跡の調査



宇野代遺跡全景（空中写真 南東から）



- 1 1・16号墳出土土師器
- 2 3号溝出土緑釉陶器

序

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局の委託を受けて、昭和62（1987）年度から一般国道10号線豊前バイパスの建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。発掘調査は、平成6年度に終了し、豊前バイパスは平成7年3月に全線開通いたしました。

この報告書はその第1冊目にあたるもので、平成3年度から平成4年度に発掘調査を実施した築上郡新吉富村大字垂水所在の宇野代遺跡のものであります。

発掘調査および整理報告にあたって、ご協力いただいた地元の方々をはじめ関係各位に深甚の謝意を表します。

なお、本書が文化財愛護思想の普及、学術研究に役立つことを祈念します。

平成7年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光 安 常 喜

例 言

- 1 この報告書は、平成3・4年度（1992）に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道10号線豊前バイパス建設予定地に関わる埋蔵文化財の発掘調査の記録である。
- 2 本書は、一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書の第1集で、宇野代遺跡^{うのだい}を報告する。
- 3 遺構の実測は、小川泰樹・日高正幸・犬塚カヲル・木下秀子・植山智保子・友田鈴香・是石美知子・原田和代が、出土遺物の実測を小川・吉田東明・棚町陽子・江口幸子・坂田順子・堀之内久美子・藤原さとみ・久富美智子・山本千鶴美が、製図を豊福弥生・原カヨ子が行ない、出土品の復元整理を岩瀬正信の指導の下に九州歴史資料館復元室で実施した。
- 4 遺構の写真撮影は小川が、出土遺物の写真撮影を石丸洋・北岡伸一が行ない、空中写真を（有）空中写真企画に依頼した。
- 5 使用した方位は磁北である。
- 6 本書の執筆はI-1を柳田康雄が、その他と編集を小川が担当した。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査の経過	1
2	調査の組織と関係者	4
II	遺跡の位置と環境	7
III	遺構と遺物	13
1	古墳	13
	1号墳	13
	2号墳	18
	3号墳	21
	4号墳	22
	5号墳	33
	6号墳	42
	7号墳	45
	8号墳	46
	9号墳	48
	10号墳	51
	11号墳	52
	12号墳	53
	13号墳	57
	14号墳	58
	15号墳	59
	16号墳	61
	17号墳	63
	18号墳	66
	19号墳	67
2	竪穴住居跡	69
	1号竪穴住居跡	69
	2号竪穴住居跡	71
3	掘立柱建物	72
	1号掘立柱建物	72

4	縦穴状遺構	73
	1号縦穴	73
	2号縦穴	76
5	土 墳 墓	76
	1号土墳墓	76
6	土 坑	77
	1号土坑	77
	2号土坑	79
	3号土坑	79
	4号土坑	79
7	溝状遺構	80
	3号溝	80
	6号溝	81
	8号溝	82
8	その他の遺構と遺物	82
IV	おわりに	103

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 宇野代遺跡全景（空中写真 南東から）
- 巻頭図版 2 1. 1・16号墳出土土師器
2. 3号溝出土緑釉陶器
- 図 版 1 宇野代古墳群全景（空中写真 南東から）
- 図 版 2 1. 1号墳全景（南東から）
2. 1号墳石室全景（南東から）
- 図 版 3 1. 2号墳全景（南東から）
2. 2号墳石室全景（南東から）
- 図 版 4 1. 3号墳全景（南西から）
2. 3号墳石室全景（南西から）
- 図 版 5 1. 3号墳石室近景（南西から）
2. 4号墳全景（南東から）
- 図 版 6 1. 4号墳石室全景（南東から）
2. 5号墳全景（南東から）
- 図 版 7 1. 5号墳石室全景（南西から）
2. 5号墳石室近景（南西から）
- 図 版 8 1. 5号墳石室内土器出土状況（南東から）
2. 6号墳全景（南東から）
- 図 版 9 1. 6号墳石室全景（南東から）
2. 7号墳全景（南西から）
- 図 版 10 1. 7号墳石室全景（南西から）
2. 7号墳玄門部状況（北東から）
- 図 版 11 1. 8号墳全景（東から）
2. 8号墳石室全景（東から）
- 図 版 12 1. 9号墳全景（南東から）
2. 9号墳石室全景 閉塞石除去前（南東から）
- 図 版 13 1. 9号墳石室全景（南東から）
2. 10号墳全景（南東から）
- 図 版 14 1. 10号墳石室全景（南東から）
2. 10号墳根石状況（南東から）

- 図 版 15 1. 11号墳石室全景 上層床面 (南東から)
2. 11号墳石室全景、下層床面 (南東から)
- 図 版 16 1. 12号墳石室全景 (南西から)
2. 12号墳石室全景 (南西から)
- 図 版 17 1. 12号墳石室閉塞石状況 (北東から)
2. 12号墳石室内土器出土状況 (北から)
- 図 版 18 1. 12号墳石室左側壁状況 (南から)
2. 12号墳石室右側壁状況 (北西から)
- 図 版 19 1. 12号墳石室奥壁状況 (南西から)
2. 12号墳墓道の土坑 (南西から)
- 図 版 20 1. 13号墳石室全景 (東から)
2. 13号墳石室近景 (東から)
- 図 版 21 1. 14号墳石室全景 (南東から)
2. 15号墳石室全景 (南東から)
- 図 版 22 1. 16号墳石室全景 (南東から)
2. 16号墳石室近景と土器出土状況 (南東から)
- 図 版 23 1. 17号墳石室と2号竪穴住居跡の重複状況 (南東から)
2. 17号墳石室全景 (南東から)
- 図 版 24 1. 18号墳石室全景 (南東から)
2. 19号墳石室全景 (南東から)
- 図 版 25 1. 1号竪穴住居跡 (北東から)
2. 2号竪穴住居跡 (南東から)
- 図 版 26 1. 1号掘立柱建物 (南東から)
2. 1号竪穴 (西から)
- 図 版 27 1. 2号竪穴 (北西から)
2. 1号土壇墓 (南西から)
- 図 版 28 1. 1号土坑 (北西から)
2. 2号土坑 (南から)
- 図 版 29 1. 3号土坑 (西から)
2. 4号土坑 (東から)
- 図 版 30 1. 3号溝 (南東から)
2. 8号溝 (北東から)
- 図 版 31 1～3号墳出土土器・鉄器

図	版	32	4号墳出土土器
図	版	33	4号墳出土土器
図	版	34	4号墳出土土器
図	版	35	4号墳出土土器・鉄器
図	版	36	5号墳出土土器
図	版	37	5号墳出土土器
図	版	38	5号墳出土土器・鉄器・玉類
図	版	39	7～12号墳出土土器・鉄器
図	版	40	13～19号墳出土土器・鉄器
図	版	41	1号竪穴出土土器
図	版	42	1号竪穴・1号土墳墓・3号溝・6号溝出土土器・鉄器・石器
図	版	43	包含層その他出土土器
図	版	44	包含層その他出土土器
図	版	45	包含層その他出土土器
図	版	46	包含層その他出土土器
図	版	47	包含層その他出土土器
図	版	48	包含層その他出土土器 包含層その他出土土製円盤
図	版	49	包含層その他出土石器
図	版	50	包含層その他出土石器
図	版	51	包含層その他出土土器・瓦・石器

挿 図 目 次

第 1 図	豊前バイパス路線図 (1/500,000)	1
第 2 図	周辺の遺跡分布図 (1/50,000)	11
第 3 図	宇野代遺跡周辺地形図 (1/2,000)	12
第 4 図	1号墳地形測量図 (1/100)	14
第 5 図	1号墳石室実測図 (1/40)	15
第 6 図	1号墳出土土器実測図 (1/3)	16
第 7 図	2号墳地形測量図 (1/100)	17
第 8 図	2号墳石室実測図 (1/40)	18
第 9 図	2号墳出土土器実測図 (1/3)	19
第 10 図	2号墳出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	20
第 11 図	3号墳地形測量図 (1/100)	20
第 12 図	3号墳石室実測図 (1/40)	折込
第 13 図	3号墳石室閉塞石実測図 (1/40)	21
第 14 図	3号墳出土鉄器実測図 (1/2)	21
第 15 図	4号墳地形測量図 (1/100)	22
第 16 図	4号墳石室実測図 (1/40)	23
第 17 図	4号墳出土土器実測図① (1/3)	25
第 18 図	4号墳出土土器実測図② (1/3)	26
第 19 図	4号墳出土土器実測図③ (1/3)	27
第 20 図	4号墳出土土器実測図④ (1/4)	28
第 21 図	4号墳出土土器実測図⑤ (1/4)	29
第 22 図	4号墳出土土器実測図⑥ (1/4)	30
第 23 図	4号墳出土鉄器実測図 (1/2)	30
第 24 図	5号墳地形測量図 (1/100)	31
第 25 図	5号墳石室実測図 (1/40)	32
第 26 図	5号墳石室閉塞石実測図 (1/40)	33
第 27 図	5号墳出土土器実測図① (1/3)	34
第 28 図	5号墳出土土器実測図② (1/3)	35
第 29 図	5号墳出土土器実測図③ (1/3)	36
第 30 図	5号墳出土土器実測図④ (1/4)	37

第 31 图	5号墳出土土器実測図⑤ (1/4)	38
第 32 图	5号墳出土鉄器実測図 (1/2)	39
第 33 图	5号墳出土玉類実測図 (2/3)	40
第 34 图	6・10号墳地形測量図 (1/100)	41
第 35 图	6号墳石室実測図 (1/40)	42
第 36 图	7号墳地形測量図 (1/100)	43
第 37 图	7号墳石室実測図 (1/40)	44
第 38 图	7号墳石室閉塞石実測図 (1/40)	45
第 39 图	7号墳出土土器実測図 (1/3)	46
第 40 图	7号墳出土鉄器実測図 (1/2)	46
第 41 图	8・9号墳地形測量図 (1/100)	47
第 42 图	8号墳石室実測図 (1/40)	48
第 43 图	9号墳石室実測図 (1/40)	49
第 44 图	9号墳石室閉塞石実測図 (1/40)	50
第 45 图	9号墳出土土器実測図 (1/3)	50
第 46 图	10号墳石室実測図 (1/4)	折込
第 47 图	10号墳出土土器実測図 (1/3)	51
第 48 图	10号墳出土鉄器実測図 (1/2)	51
第 49 图	11号墳石室実測図 (1/40)	折込
第 50 图	11号墳出土土器実測図 (1/3)	53
第 51 图	12号墳閉塞石実測図 (1/40)	54
第 52 图	12号墳石室実測図 (1/40)	折込
第 53 图	12号墳出土土器実測図 (1/3)	55
第 54 图	12号墳出土鉄器・耳環実測図 (1/2)	55
第 55 图	13号墳石室実測図 (1/40)	56
第 56 图	13号墳出土土器実測図 (1/3)	57
第 57 图	14号墳石室実測図 (1/40)	58
第 58 图	14号墳出土土器実測図 (1/3)	59
第 59 图	15号墳出土土器実測図 (1/40)	60
第 60 图	15号墳出土土器実測図 (1/3)	60
第 61 图	16号墳石室実測図 (1/40)	62
第 62 图	16号墳出土土器実測図 (1/3)	63
第 63 图	17号墳石室実測図 (1/40)	64

第 64 図	17号墳出土土器実測図 (1/3)	65
第 65 図	18号墳石室実測図 (1/40)	65
第 66 図	18号墳石室閉塞石実測図 (1/40)	66
第 67 図	18号墳出土土器実測図 (1/3)	67
第 68 図	18号墳出土鉄器実測図 (1/3)	67
第 69 図	19号墳石室実測図 (1/40)	68
第 70 図	19号墳出土鉄器実測図 (1/2)	69
第 71 図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	70
第 72 図	1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	70
第 73 図	2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	71
第 74 図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)	72
第 75 図	1・2号竪穴実測図 (1/60)	73
第 76 図	1号竪穴出土土器実測図① (1/3)	74
第 77 図	1号竪穴出土土器実測図② (1/3)	75
第 78 図	1号竪穴出土石器実測図 (1/3)	76
第 79 図	1号土墳墓実測図 (1/30)	77
第 80 図	1号土墳墓出土遺物実測図 (1/3)	77
第 81 図	1～4号土坑実測図 (1/30)	78
第 82 図	1・2号土坑出土土器実測図 (1/3)	79
第 83 図	3号溝出土土器実測図 (1/3)	80
第 84 図	3号溝出土土錘実測図 (1/2)	81
第 85 図	6号溝出土土器実測図 (1/3)	81
第 86 図	6号溝出土鉄器実測図 (1/2)	82
第 87 図	包含層その他出土の縄文土器実測図① (1/3)	84
第 88 図	包含層その他出土の縄文土器実測図② (1/3)	85
第 89 図	包含層その他出土の縄文土器実測図③ (1/3)	86
第 90 図	包含層その他出土の縄文土器実測図④ (1/3)	87
第 91 図	包含層その他出土の縄文土器実測図⑤ (1/3)	88
第 92 図	包含層その他出土の縄文土器実測図⑥ (1/3)	89
第 93 図	包含層その他出土の縄文土器実測図⑦ (1/3)	90
第 94 図	包含層その他出土の土製円盤実測図 (1/3)	91
第 95 図	包含層その他出土の石器実測図① (1/3)	92
第 96 図	包含層その他出土の石器実測図② (1/3)	93

第 97 図	包含層その他出土の石器実測図③ (1/3)	94
第 98 図	包含層その他出土の石器実測図④ (1/3)	94
第 99 図	包含層その他出土の石器実測図⑤ (2/3)	95
第 100 図	その他出土の土器実測図① (1/3)	96
第 101 図	その他出土の土器実測図② (1/3)	97
第 102 図	その他出土の瓦類実測図 (1/3)	98
第 103 図	その他出土の石製品実測図 (1/2)	99

表 目 次

表 1	一般国道10号線 豊前バイパス関係遺跡一覧表	2
表 2	5号墳出土玉類計測表	40
表 3	宇野代遺跡出土縄文土器観察表	99
表 4	宇野代遺跡出土石器観察表	101
表 5	宇野代古墳群石室一覧表	104

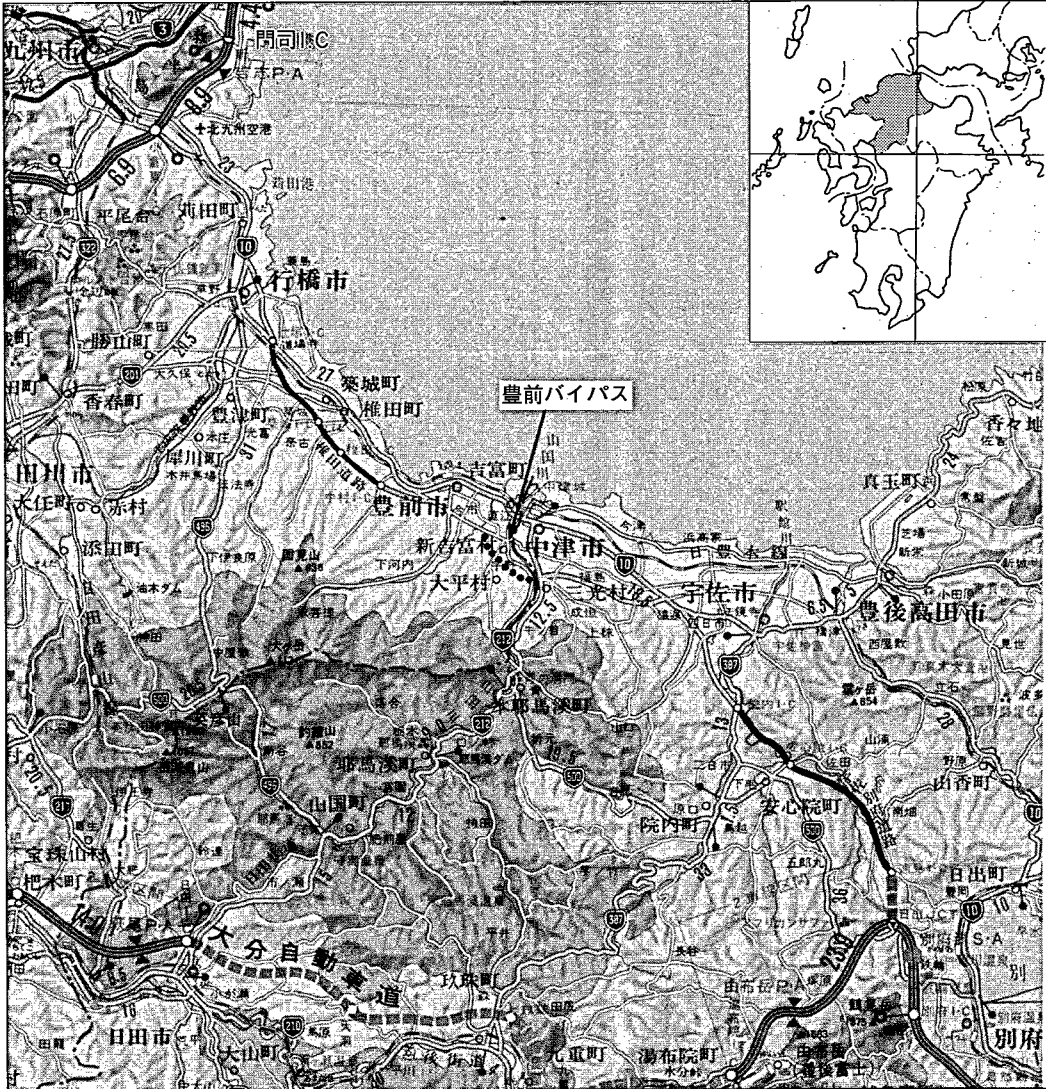
付 図 目 次

付図	宇野代遺跡遺構配置図 (1/200)
----	--------------------

I はじめに

1 調査の経過

一般国道10号線は、現在の陸上交通体系からすると、九州の本州に対する玄関口の北九州市を起点とし、東九州の主要都市の行橋市・豊前市・中津市・別府市・大分市・延岡市・宮崎市・



第1図 豊前バイパス線路図 (1 : 500000, 道路施設協会「九州自動車道」1983. 10を改変)

表1 一般国道10号 豊前バイパス関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	分布面積 (㎡)	調査面積 (㎡)						報告書									
					62年度	63	平成元	2	3	4		5	6							
1-A		新吉富村垂水	弥生～古墳 集落	40,000																
1-B	池ノ口遺跡	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落							4,000		3,500	2,000							
1-C		新吉富村垂水	弥生～古墳 集落							3,200										
1-D	三ツ溝遺跡	新吉富村垂水	古墳～平安 集落							3,500										
1-E	長田遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落									5,000	1,900							
1-F	宇野垂水遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落									4,000	500							
1-G	竹ノ下遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落								3,000		500							
1-H	宇野代遺跡	新吉富村垂水	縄文～平安 集落・墓地他								2,000									1
2-A	上桑野遺跡	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落・墓地	4,000							700	9,000								
2-B	上桑野遺跡	新吉富村垂水	近世	1,600							1,600									
3	桑野遺跡	大平村下唐原	弥生 集落	4,800							4,800									
4	大塚本遺跡	大平村下唐原	縄文～江戸 集落・墓地他	16,000							18,000									
5	小松原遺跡	大平村下唐原	縄文～近世	11,200							10,000									
6	上の熊遺跡	大平村下唐原	旧石器～古墳? 集落他	4,500							4,500									
7	金居塚遺跡 (旧カネツキ)	大平村下唐原	縄文～江戸 集落・墓地他	14,000						13,000										
8-A	上唐原遺跡	大平村上唐原	縄文・弥生～奈良 集落	18,000	10,000	2,000														2
8-B	郷ヶ原遺跡	大平村下唐原	弥生～古墳 集落	6,500						6,500										
計				120,600	10,000	2,000	6,500	13,000	39,600	21,700	14,300	4,900								

都城市を結んで鹿児島市に至る延長約450kmの動脈で、東九州地域の経済・社会・文化活動の発展に重要な役割を果たしている。

ところが、近年の経済発展にともない、北九州市に近い沿線の急激なベッドタウン化による人口増加が著しく、これに伴う国道の交通量の激増が見込まれていた。このような状況の中で国道10号線のうち、北九州市から大分市間の約136kmを約125kmとして走行所要時間を約半分に短縮する「北大道路」の整備が計画された。

福岡県内の国道10号線のバイパス建設については、その用地内に含まれる埋蔵文化財の取扱いについて、建設省九州地方建設局と県文化課との協議がもたれることになった。昭和47年1月31日の協議によって、ルート決定後に、埋蔵文化財の分布調査を実施し、以降の協議資料とすることになった。文化課は、昭和48年3月26日に一部路線の予備分布調査を実施、6月6日付で北九州国道事務所に回答した。

豊前バイパスについては、昭和55年11月10日付で文化財によるルート変更の可能性と所在地の追加の有無の問い合わせがあり、11月18日に文化課が回答し、ルート選定について問題ない旨伝えた。

その後も協議が継続され、昭和59年9月19日付で北九州国道事務所から10号線全線について再確認分布調査依頼が文化課に出され、文化課が昭和59年9月27日付で回答したが、豊前バイパスは上唐原地区のみであった。

昭和60年になると、文化課は3月28日付で10号線全線に対する昭和60年度埋蔵文化財事前発掘調査実施計画書を北九州国道工事事務所に提出した。さらに文化課は、7月20日付で昭和59年9月19日付の全線の再確認分布調査依頼に対する回答も提出した。これらに対し北九州国道工事事務所は、7月26日付で文化課の調査計画書に対し、昭和60年度中の調査実施が不可能で、61年度実施に向け努力する旨の文書が提出された。

結局、豊前バイパスの発掘調査は、第8A地点の上唐原遺跡を昭和62年11月2日から昭和63年5月6日まで実施することができた。

次いで、第8B地点の郷ヶ原遺跡の発掘調査を平成元年4月11日から9月12日まで実施。

平成2年2月3日付で、北九州国道工事事務所は、文化課に10号線全線の発掘調査依頼を提出。これに対し文化課は、7月13日付で豊前バイパスの第1・2地点以外の試掘調査結果を北九州国道工事事務所に通知した。

発掘調査は、第7地点の金居塚（旧カネツキ）遺跡を平成2年5月14日から平成3年4月30日まで実施した。

第5地点の小松原遺跡は、平成3年1月14日から3月30日まで発掘調査を実施し、以後割合順調に発掘調査が実施できるようになった。

今回報告する宇野代遺跡は、平成4年1月16日から7月22日までの期間発掘調査を実施したものである。

(柳田)

2 調査の組織と関係者

平成3・4年度の調査関係者は下記のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

	3年度	4年度
所 長	竹中 幸生	竹中 幸生
副 所 長	中山 高虎	中山 高虎
建設専門官	田中 睦憲	田中 睦憲
工務課長	溝上 利毅	中山 蔵太
工務係長	浅田 敏光	平田 政生
調査課長	松崎 安則	山田 茂利
調査係長	荒瀬 美和	柴田 智
建設技官	沓掛 孝	沓掛 孝

福岡県教育委員会

総括 教育長	御手洗 康	光安 常喜
教育次長	光安 常喜	月森清三郎
指導第二部長	月森清三郎	松枝 巧
文化課長	森山 良一	森山 良一
参事	森本 精造	松尾 正俊
	石松 好雄	柳田 康雄
課長補佐	国武 康友	石川 元彬
	松尾 正俊	
文化財保護室長	石松 好雄 (兼)	柳田 康雄 (兼)
室長補佐		井上 裕弘
調査班総括	柳田 康雄	副島 邦弘
総括補佐	井上 裕弘	
参事補佐	副島 邦弘	佐々木隆彦
庶務 管理係長	岸本 実	毛屋 信
主任主事	安丸 重喜	安丸 重喜
調査 調査班総括	柳田 康雄	
技 師	小川 泰樹	小川 泰樹

発掘調査では地元在住の次の方々の協力を得た。

犬塚カヲル 植山智保子 岡田美代子 小川猪佐夫 小川シゲヨ 小川ひろ子
小川フサ子 奥野テルヨ 木下チヨ子 木下 秀子 熊谷たつ子 熊谷トシ子
熊谷 久子 熊谷 房子 桑野 早子 是石美知子 高野 夏子 武吉リツ子
垂永 一子 垂永 信子 垂永 典夫 辻原 霞 友田 鈴香 豊田智恵子
中原三重子 中村サザ子 原田 和代 原田 綾子 東 正吉 東 ミサ子
藤本 貞子 藤本真由美 三浦ヤス子 村上チフミ 室谷サツキ 八坂 初子

調査期間中には、宮本工（福岡県文化財保護指導委員）、伊崎俊秋、緒方泉（京築教育事務所）、小川国男（宇野垂水区長）、宮秋伸一（新吉富村教育委員会）、栗焼憲児、棚田昭仁（中津市教育委員会）、植田由美（三光村教育委員会）、などの方々のご援助、ご指導を得た。記して謝意を表する。

報告書作成にかかわる、平成6年度の関係者は次のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

所長	大内英吉郎
副所長	平川 輝義
建設専門官	安部 純弘
建設監督官	田中 敏則
工務課長	中川 博勝
工務係長	徳重 栄紀
調査課長	田中 光助
調査係長	柴田 智
建設技官	田辺 稔
用地課長	桑田 優二
用地係長	川崎 政義

福岡県教育委員会

総括	教育長	光安 常喜
	教育次長	松枝 功
	指導第二部長	丸林 茂夫
	文化課長	松尾 正俊
	参事兼文化財保護室長	柳田 康雄
	課長補佐	清水 圭輔
	文化財保護室長補佐	井上 裕弘

	調査班総括	橋口 達也
庶務	文化課管理係長	杉光 誠
	同 事務主査	安丸 重喜
整理	九州歴史資料館調査課	小川 泰樹 (整理・執筆担当)
	整理指導員	岩瀬 正信 (接合復元) 平田 春美 (土器実測) 北岡 伸一 (写真撮影) 豊福 弥生 (製図)
	整理補助	原 カヨ子 棚町 陽子 江口 幸子 坂田 順子 堀之内久美子 藤原さとみ 久富美智子 山本千鶴美 寺町 恭代 小国みどり 古賀八重子 高島 妙子 坂本恵津子 安永 啓子 近藤 京子 穴見 裕子

報告書作成にあたっては、この他にも福岡県文化課小池史哲、池部元明、水ノ江和同、吉田東明、九州歴史資料館横田義章、石丸洋、佐々木隆彦、北九州教育事務所高橋章、北筑後教育事務所赤司善彦、南筑後教育事務所伊崎俊秋、筑豊教育事務所緒方泉、京築教育事務所飛野博文などの諸氏のご協力をいただいた。また、本報告書作成のために本務が疎かになり、九州歴史資料館調査課諸兄にはご迷惑をかけ、また様々な面で応援していただいた。

II 遺跡の位置と環境

福岡県築上郡新吉富村は福岡県の東端にある。南西には英彦山山系の犬ヶ岳・経読岳・雁股山・瓦岳・大平山等の峰が連なって聳え、分水嶺をなすと同時に大分県との県境にもなっている。新吉富村はこの北東麓に位置し、村域の3分の1は雁股山の支脈松尾山の北斜面にあたる。佐井川・山国川とその支流は分水嶺の山麓を浸食して複雑な谷地形をつくりだし、中・下流では扇状地を形成して中津平野の西部に含まれる。村の東は山国川を挟んで大分県中津市に面し、また北は直接海に面しないものの、吉富町を挟んで周防灘とは至近距離にある。

宇野代遺跡は新吉富村大字垂水字宇野代および字坂ノ下に所在する。2つの小字にまたがってはいるが、遺構等の内容が一連のものと考えられるため同一遺跡とした。遺跡は山国川の支流である友枝川によって形成された河岸段丘上に立地し、遺構は上位段丘面上から段丘崖面上に広がり、一部は低位段丘面上にもおよぶ。遺跡の標高は19~25mの間に含まれる。

この周辺の中津平野地域は、歴史資料が豊富に知られている北の京都平野地域と東の宇佐平野地域に挟まれており、従来あまり注目される事がなかった。しかし、近年の国道10号線バイパス建設をはじめとする大規模開発に伴う事前の発掘調査によって、この地域の空白の時代が徐々に埋められつつある。

縄文時代でも早・前・中期の段階は、この周辺地域では遺構・遺物の発見は少ない。新吉富村垂水遺跡(註1)・大分県中津市植野貝塚(註2)では早期の土器が、大平村土佐井遺跡(註3)では早期~中期の土器が出土しているが、いずれも破片数点の出土である。また、豊前市吉木遺跡(註4)では早期の土器がかなりまとまって出土しているものの遺構については不明である。周辺でこの時期の明確な遺構を伴った遺跡としては大分県下毛郡本耶馬溪町粉洞窟(註5)がおそらく唯一の例であろう。ここでは早期から後期までの生活遺構が6層に堆積しており、時期ごとの埋葬形態の違いがみられる。

後期になると、昭和55年に中津市ボウガキ遺跡(註6)で石囲炉をもった竪穴住居跡が発見されたのを端緒に、豊前市中村石丸遺跡(註7)、小石原泉遺跡(註8)、大平村上唐原遺跡(註9)、土佐井遺跡、原井三ツ江遺跡(註10)、大分県下毛郡三光村佐知遺跡(註11)、佐知久保畑遺跡等で竪穴住居跡の発見が相次いでいる。貝塚としては中津市植野貝塚(註12)・入垣貝塚(註13)があり、また垂水遺跡も遺構は不明ながらこの時期の遺跡である。しかし、晩期になると再び遺跡数が減少する。豊前市小石原泉遺跡で晩期初頭の竪穴住居跡1軒が検出された以外は、大平村土佐井遺跡、川下遺跡(註14)、中津市高畑遺跡(註15)、本耶馬溪町多志田遺跡(註16)等で遺物が出土しているものの遺跡の性格は判然としない。

弥生時代になっても前期に比定される遺跡は決して多くはない。新吉富村中桑野遺跡(註17)

と牛頭天王遺跡(註18)は立地その他から同一遺跡と考えられ、前期後葉～中期後半にかけての集落跡で3棟の大型建物を含む掘立柱建物、住居跡の他多数の貯蔵穴・土坑等を検出した。また中期中葉から後半には山国川を自然の濠として一部利用した環濠が掘られたようである。中津市森山遺跡(註19)でも集落の一部が前期中頃にまで溯る。他に豊前市赤熊・永久遺跡(註20)等でも前期の土器が採集されているが何れも遺構に伴わない。

中期になると、先述の中桑野・牛頭天王遺跡をはじめ、新吉富村尻高畑田遺跡(註21)、上桑野遺跡(註22)、大平村桑野遺跡(註23)、土佐井ミソンデ遺跡(註24)、中津市森山遺跡、樋多田遺跡(註25)、三光村佐知遺跡等で集落が、大平村大塚本遺跡(註26)、中津市森山遺跡で墓地がそれぞれ近年調査されている。また、大平村大字東下より出土したとされる中広形銅矛が現在宮崎県立総合博物館に所蔵されている(註27)。他に大平村金居塚遺跡(註28)では細形銅剣破片が、三光村佐知遺跡では同じく細形銅剣破片と土器が出土している。弥生時代の青銅器は中津平野地域では現在のところこの3点が知られているのみで、30点以上が出土している東の宇佐平野地域とは明らかに様相を異にする。

後期から終末期の集落としては、環濠を検出した大平村郷ヶ原遺跡(註29)をはじめとして上唐原遺跡・上唐原稲本屋敷遺跡(註30)・川ノ上遺跡(註31)・新吉富村池ノ口遺跡(註32)・豊前市小石原泉遺跡(註33)・中村団後遺跡(註34)・中津市上万田遺跡(註35)・三光村佐知遺跡等があり、古墳時代にまで継続して営まれるものが多い。墓地としては最近大平村穴ヶ葉山遺跡(註36)・金居塚遺跡で石蓋土墳墓群を調査している他に村内の上野地八幡宮の丘陵等数箇所石蓋が露出しているのを確認出来る。また、上万田遺跡でも終末から古墳時代初頭にかけての石棺墓・甕棺墓が発見された。

この地域ではこれまで古墳時代前・中期の古墳はほとんど知られていなかったが、大平村で西方古墳・能満寺3号墳の2基の前方後円墳を含む数基の前期古墳が発見されたのを契機ににわかに関心を集めるようになった(註37)。前方後円墳としては中期に属する吉富町楡生山古墳(註38)が最近調査され、また中津市にはかつて全長70m級の亀山古墳が存在したという(註39)。他に中津市幣旗邸古墳群(註40)、勘助野地古墳群(註41)、永添遺跡(註42)で中期の方墳・造出付円墳が調査された。

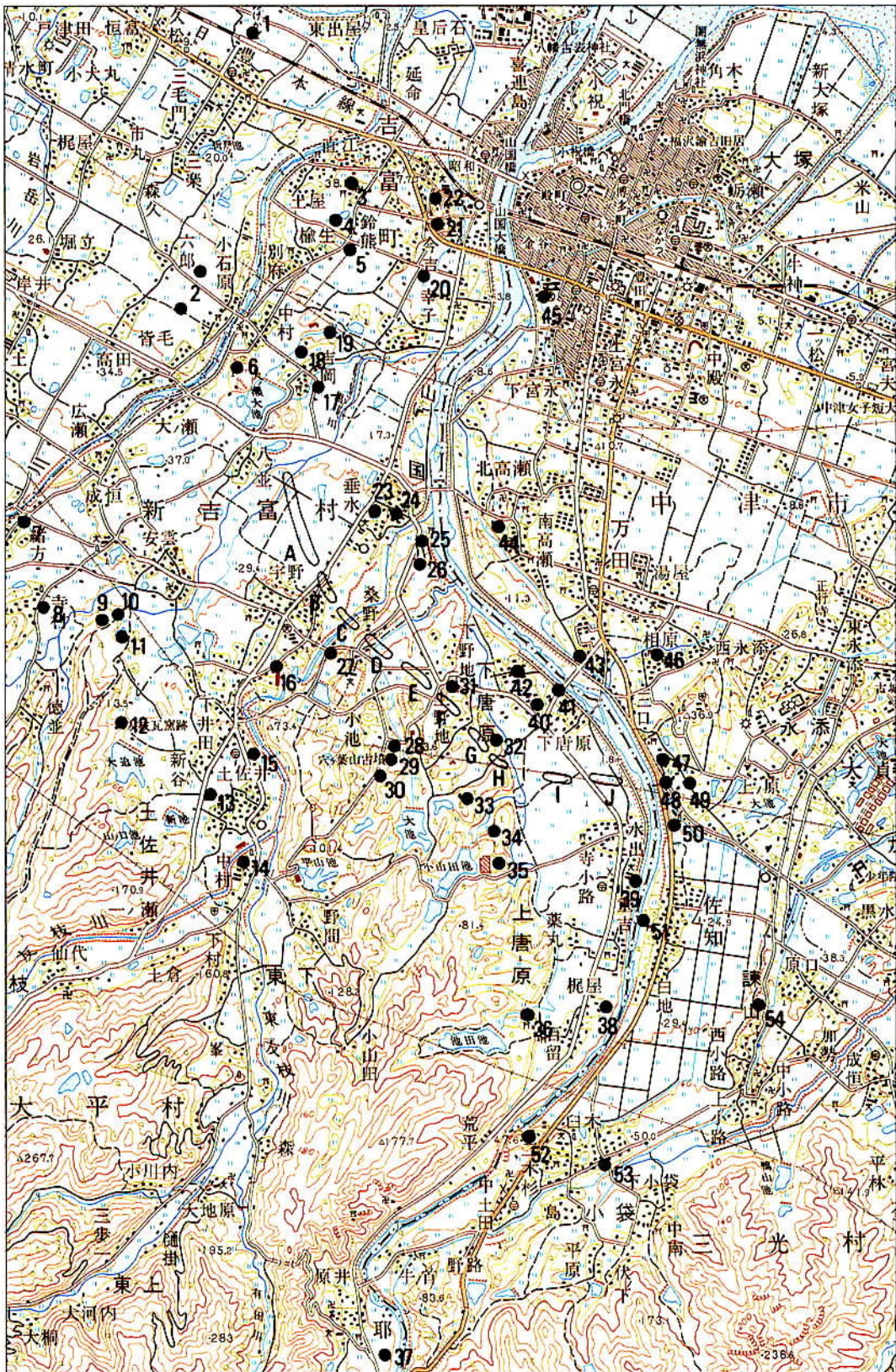
後期の群集墳の時代になると、半径1～2km圏内だけでも木の葉文等の線刻で知られる大平村穴ヶ葉山古墳群(註43)をはじめ、金居塚古墳群、上ノ熊古墳群(註44)、土佐井古墳群(註45)、新吉富村桑野題古墳群(註46)、宇野台古墳群(註47)、巨石塚古墳、吉富町天仲寺古墳、広運寺古墳(註48)等々枚挙に暇がない。その他未調査の古墳まで含めれば膨大な数に上るであろう。横穴墓としては5世紀後半代の初期横穴墓を含む80基の横穴墓を調査した三光村上ノ原横穴墓群(註49)が、その調査研究成果とともに名高い。山国川対岸の大平村でも上ノ原横穴墓群と同じく風化砂礫層を掘り込んだ金居塚横穴墓群や、凝灰岩を掘り込み赤色・黄色

顔料で彩色を施した百留横穴墓群（註50）等がある。

飛鳥・奈良時代になるとこの地域には山国川を挟んで2つの寺院が建てられる（註51）。新羅系軒瓦と軒平瓦下顎部の華麗な法相華文で著名な新吉富村垂水廃寺（註52）と百済系軒瓦の出土した中津市相原廃寺（註53）である。それぞれの寺に瓦を供給した窯として前者に大平村友枝瓦窯跡（註54）、新吉富村山田瓦窯跡（註55）、桑野原瓦窯跡（註56）が、後者に中津市伊藤田ホヤ池瓦窯跡（註57）が現在知られている。また、垂水・相原の両寺院の脇を通る古代官道の存在が以前から想定されていたが（註58）、平成6年度の新吉富村池ノ口遺跡の調査では幅6mの硬化面をもつ官道跡を長さ約60mにわたって検出している。2つの寺院は上毛郡・下毛郡と旧郡を別にするものの直線距離で3kmと離れておらず、官道を通る人々には2つの塔が並んで見えたことであろう。

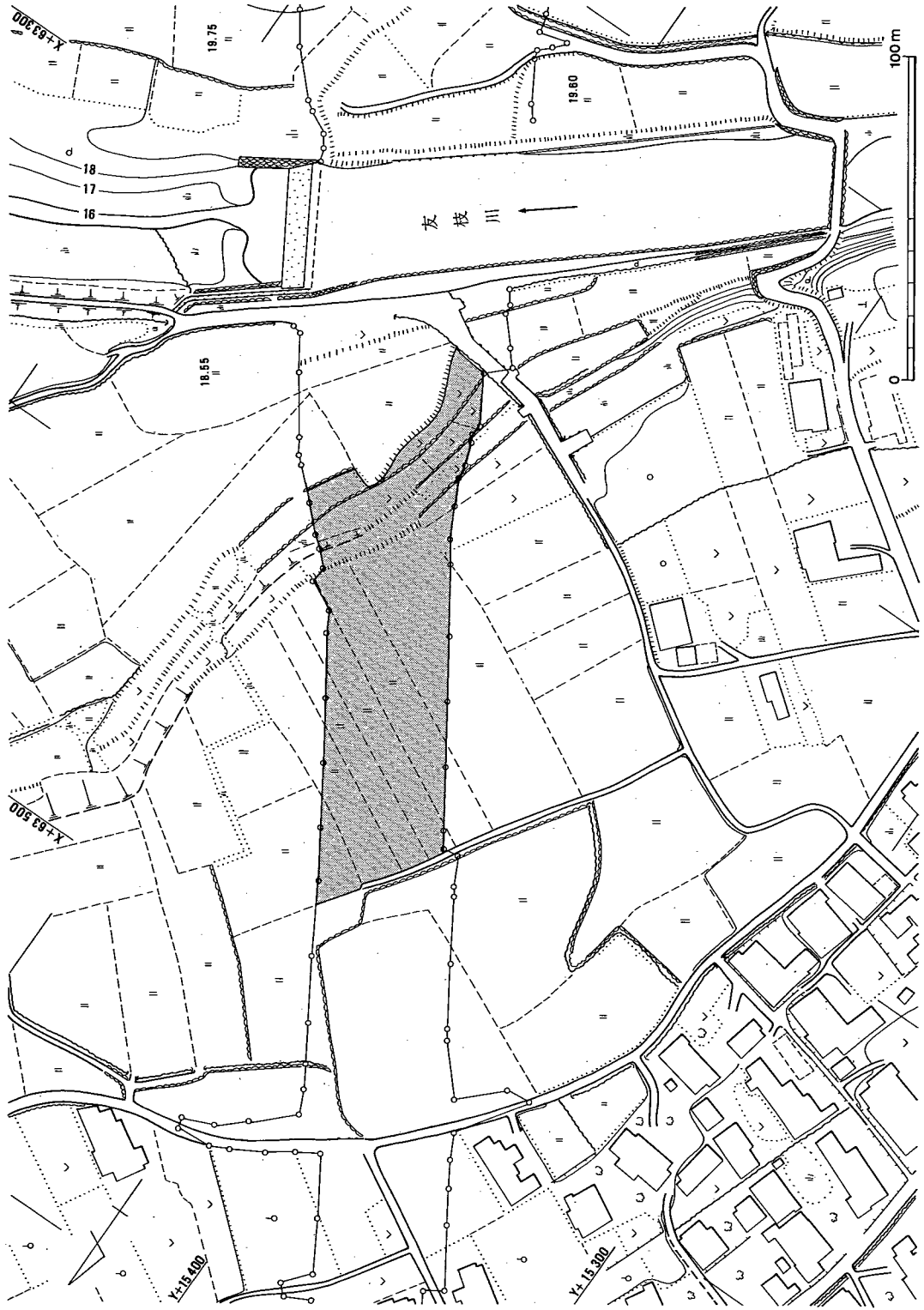
- 註1 渡部正気「福岡県築上郡新吉富村垂水遺跡調査報告」『古文化談叢』第11集 1983
- 註2 大分県教育委員会「早水台」『大分県文化財調査報告書』第3輯 1955
- 註3 大平村教育委員会「土佐井地区遺跡」『大平村文化財調査報告書』第5集 1990
- 註4 福岡県教育委員会「吉木遺跡」『福岡県文化財調査報告書』第83集 1989
- 註5 賀川光夫他「大分県粉洞窟発掘調査概報—第1, 2次調査」『考古学論叢4』 1977
- 註6 三保の文化財を守る会・中津市教育委員会「ボウガキ遺跡」 1992
- 註7 豊前市史編集委員会『豊前市史 考古資料』 1993
- 註8 註7に同じ
- 註9 福岡県教育委員会「上唐原遺跡」『豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集 1995
- 註10 大平村教育委員会「原井三ツ江遺跡」『大平村文化財調査報告書』第5集 1989
- 註11 大分県教育委員会「佐知遺跡」『大分県文化財調査報告書』第81輯 1989
- 註12 中津市教育委員会「大分県（豊前）中津市植野貝塚調査報告」 1957
- 註13 宇佐市教育委員会「石原貝塚・西和田貝塚」 1979
- 註14 宮本工・村上久和・城戸誠「山国川流域における縄文時代後・晩期の遺跡」『九州考古学』第59号 1984
- 註15 福岡県高等学校教職員組合『北九州古文化図鑑』第1輯 1950
- 註16 豊前市史編集委員会『豊前市史』上巻 1991
- 註17 新吉富村教育委員会「中桑野遺跡」『新吉富村文化財調査報告書』第3集 1978
- 註18 新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡 垂水高木遺跡」『新吉富村文化財調査報告書』第8集 1994
- 註19 大分県教育委員会「樋多田遺跡 森山遺跡 寺迫遺跡」『中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』(3) 1992
- 註20 註7に同じ
- 註21 新吉富村教育委員会「尻高畑遺跡」『新吉富村文化財調査報告書』第7集 1992
- 註22 豊前バイパス建設に先立って福岡県教育委員会が調査を行なった。現在整理中。
- 註23 註22に同じ
- 註24 大平村教育委員会「土佐井ミソソデ遺跡 穴ヶ葉山4号墳 穴ヶ葉山墳墓群」『大平村文化財調査報告書』第7集 1991
- 註25 註19に同じ
- 註26 註22に同じ
- 註27 大平村誌編集委員会『大平村誌』1986年
- 註28 註22に同じ
- 註29 註22に同じ
- 註30 山国川堤防建設に先立って福岡県教育委員会が調査を行なった。現在整理中。

- 註31 註27に同じ
- 註32 註22に同じ
- 註33 註7に同じ
- 註34 註7に同じ
- 註35 中津市刊行会「中津の歴史」1980
- 註36 註24・大平村教育委員会「穴ヶ葉山遺跡」『大平村文化財調査報告書』第8集 1993
- 註37 大平村教育委員会「能満寺古墳群」『大平村文化財調査報告書』第9集 1994
- 註38 吉富町教育委員会「楡生山古墳」『吉富町文化財調査報告書』第3集 1991
- 註39 註35に同じ
- 註40 中津市教育委員会「幣旗邸古墳」『中津市文化財調査報告書』第4集 1984
- 註41 大分県教育委員会「勘助野地遺跡」『中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』(1) 1988
- 註42 中津市教育委員会「永添遺跡 中津城跡(御用屋敷跡) ホヤ池窯跡」『中津市文化財調査報告書』第13集 1993
- 註43 註24・大平村教育委員会「穴ヶ葉山南古墳群」『大平村文化財調査報告書』第2集 1984
大平村教育委員会「穴ヶ葉山古墳群」『大平村文化財調査報告書』第3集 1985
- 註44 大平村教育委員会「上ノ熊古墳群」『大平村文化財調査報告書』第1集 1978
- 註45 註3に同じ
- 註46 新吉富村教育委員会「桑野題古墳」『新吉富村文化財調査報告書』第4集 1989
- 註47 新吉富村教育委員会「宇野台古墳」『新吉富村文化財調査報告書』第5集 1990
- 註48 吉富町教育委員会「天仲寺古墳・広運寺古墳」『吉富町文化財調査報告書』第1集 1983
- 註49 大分県教育委員会「上ノ原横穴墓群Ⅰ・Ⅱ」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』(2) 1989・1991
- 註50 註27に同じ
- 註51 他に新吉富村中桑野遺跡で6世紀後半～末頃の、三光村塔ノ熊廃寺跡で8世紀中頃の瓦が出土している。
村上久和・吉田寛・宮本工「豊前における初期瓦の一樣相」『古文化談叢』第18集 1987
三光村教育委員会「三光村の遺跡」『三光村文化財調査報告書』第1集 1989
- 註52 新吉富村教育委員会「垂水廃寺」『新吉富村文化財調査報告書』第2集 1976
- 註53 中津市教育委員会「豊前中津市相原廃寺調査報告」1955
中津市教育委員会「相原廃寺」『中津市文化財調査報告』第7集
中津市教育委員会「相原廃寺Ⅱ 大下遺跡」『中津市文化財調査報告』第8集
中津市教育委員会「相原廃寺Ⅲ」『中津市文化財調査報告』第10集
- 註54 註52に同じ
- 註55 註52に同じ
- 註56 註52に同じ
- 註57 註42に同じ
- 註58 大分県教育委員会「宇佐大路一字佐への道調査一」『大分県文化財調査報告』第87輯 1991



第2図 周辺の遺跡分布図 (1/50,000 中津)

1. 三毛門遺跡 2. 小石原泉遺跡 3. 鈴熊山古墳 4. 檜生山古墳 5. 今吉古墳 6. 熊鷹山古墳群 7. 緒方古墳群 8. 尻高畑田遺跡 9. 山田瓦窯跡 10. 山田窯跡群 11. 山田1号墳 12. 友枝瓦窯跡 13. 土佐井ミソノテ遺跡 14. 今蔵遺跡 15. 土佐井遺跡群 16. 宇野台古墳群 17. 吉岡遺跡 18. 巨石塚古墳 19. 大塚古墳 20. 矢頭田遺跡 21. 天仲寺古墳 22. 広運寺古墳 23. 垂水廃寺 24. 垂水遺跡 25. 牛頭天王遺跡 26. 中桑野遺跡 27. 桑野代古墳群 28. 六ヶ葉山南古墳群 29. 六ヶ葉山南古墳群 30. 六ヶ葉山南古墳群 31. 能満寺古墳 32. 金居塚前方後古墳 33. 上ノ熊古墳群 34. 小山田古墳群 35. 血山古墳群 36. 百留横穴群 37. 原井三ツ江遺跡 38. 百留居屋敷遺跡 39. 上唐原縮本屋敷遺跡 40. 下唐原居屋敷遺跡 41. 下唐原宮園遺跡 42. 川下遺跡 43. 上万田遺跡 44. 高瀬遺跡 45. 高畑遺跡 46. 相原廃寺 47. 幣旗郎古墳群 48. 上ノ原横穴群 49. 勘助野地遺跡 50. 佐知久保畑遺跡 51. 佐知遺跡 52. 城横穴群 53. 白木古墳群 54. 諫山遺跡群
- A. 垂水地区遺跡群 B. 宇野代遺跡 C. 上桑野遺跡 D. 桑野遺跡 E. 大塚本遺跡 F. 小松原遺跡 G. 上ノ熊遺跡 H. 金居塚遺跡 I. 郷ヶ原遺跡 J. 上唐原遺跡



第3図 宇野代遺跡周辺地形図 (1/2,000)

III 遺構と遺物

遺跡は山国川の支流である友枝川の左岸、河岸段丘上の標高19～25mの範囲に立地する。ここは調査以前は水田として利用されていた土地で、耕作土・床土とその下層の黒色土を除去すると、河原石の礫混じりの暗褐色土層が現れた。遺構はその上面にあり、水田面からの深さは場所によって若干の相違はあるものの、概ね50cmにも満たない。このため、水田の開墾・耕作等によって遺構が削平・攪乱を受けている事が当初から予想された。

検出した遺構は古墳群が主体であるが、他に縄文時代から鎌倉時代までの遺構・遺物がある。以下順に紹介する。

1 古墳

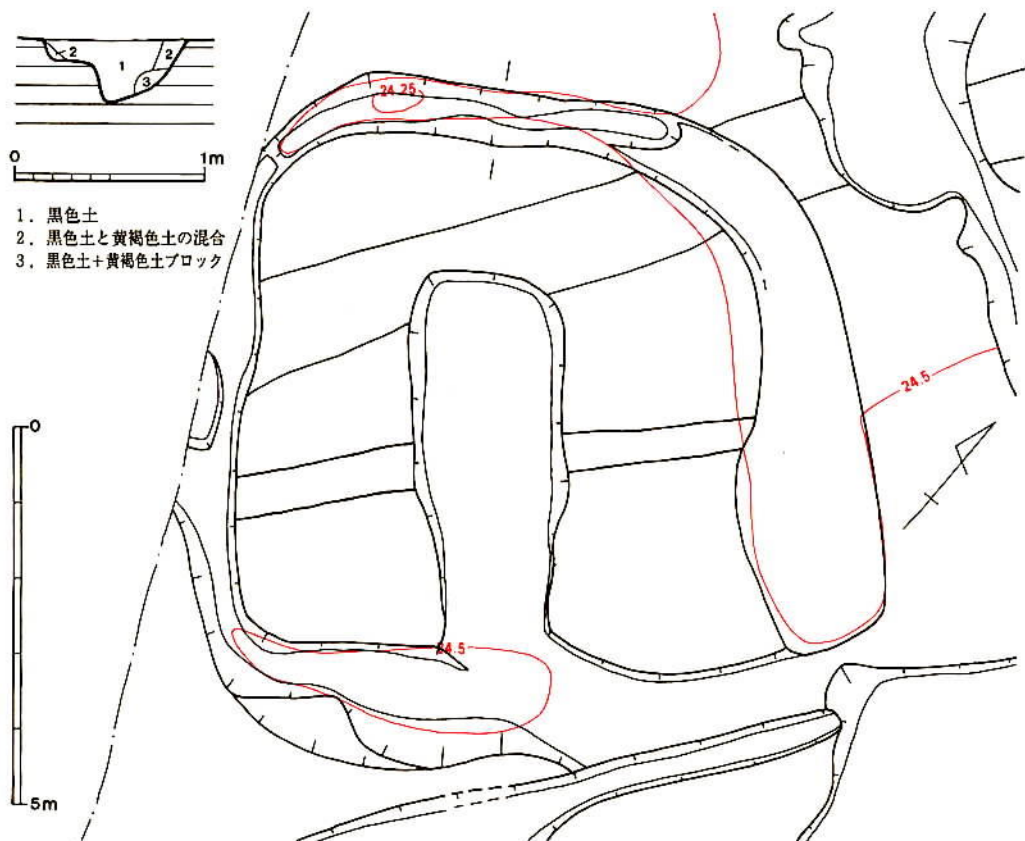
今回の調査では上位段丘面から斜面（段丘崖）・下位段丘面にかけて19基の古墳を検出した。土地の人に聞いたところでは、この地周辺には20～30年前までは古墳の墳丘状の高まりが累々と連なっていたという。今回の調査区内でもそれを裏付けるように、古墳同志が互いの周溝を重ね合わせながら、近接した状態で検出された。幅30～40mの限られた範囲内でこれだけ密集している事を考えれば、古墳群全体では数百基を数えたという話もあながち間違いとも言い切れないのではなかろうか。

検出した19基の古墳は、全て上部が削平を受けて墳丘が失われており、石室についても周壁の石積みが2～3段程残っている12号墳を除けば、腰石のみか、あるいはそれすらも抜き去られて床面しか残っていない状況であった。また、上位段丘面上のものは周溝が辛うじて残存していたため、墳形・墳丘規模をある程度知り得るが、斜面から下位段丘面上に造られた古墳については石室を検出したのみである。

石室の石材には、周囲にいくらでもある安山岩の河原石の、大人1人か2人で動かせる程度のものを使用している。石室自体も、玄室長150～250cm・幅150cm以下と、総じて小型である。

1号墳（図版2，第4・5図）

上位段丘面の、斜面上端から北西に25m程離れた位置にある。4号溝とその南東にある小溝を切る。周溝は円形というよりむしろ隅丸方形に巡っており、方墳の可能性もある。周溝の北西側（石室奥壁側）は30cm程の深さが残存しているが、北東側（石室右側壁側）では削平のためほとんど残っていない。墳丘は既に失われているが、周溝の内側で測れば、墳丘長は縦（石室主軸方向）・横（石室主軸に直行する方向）共6.8mとなる。



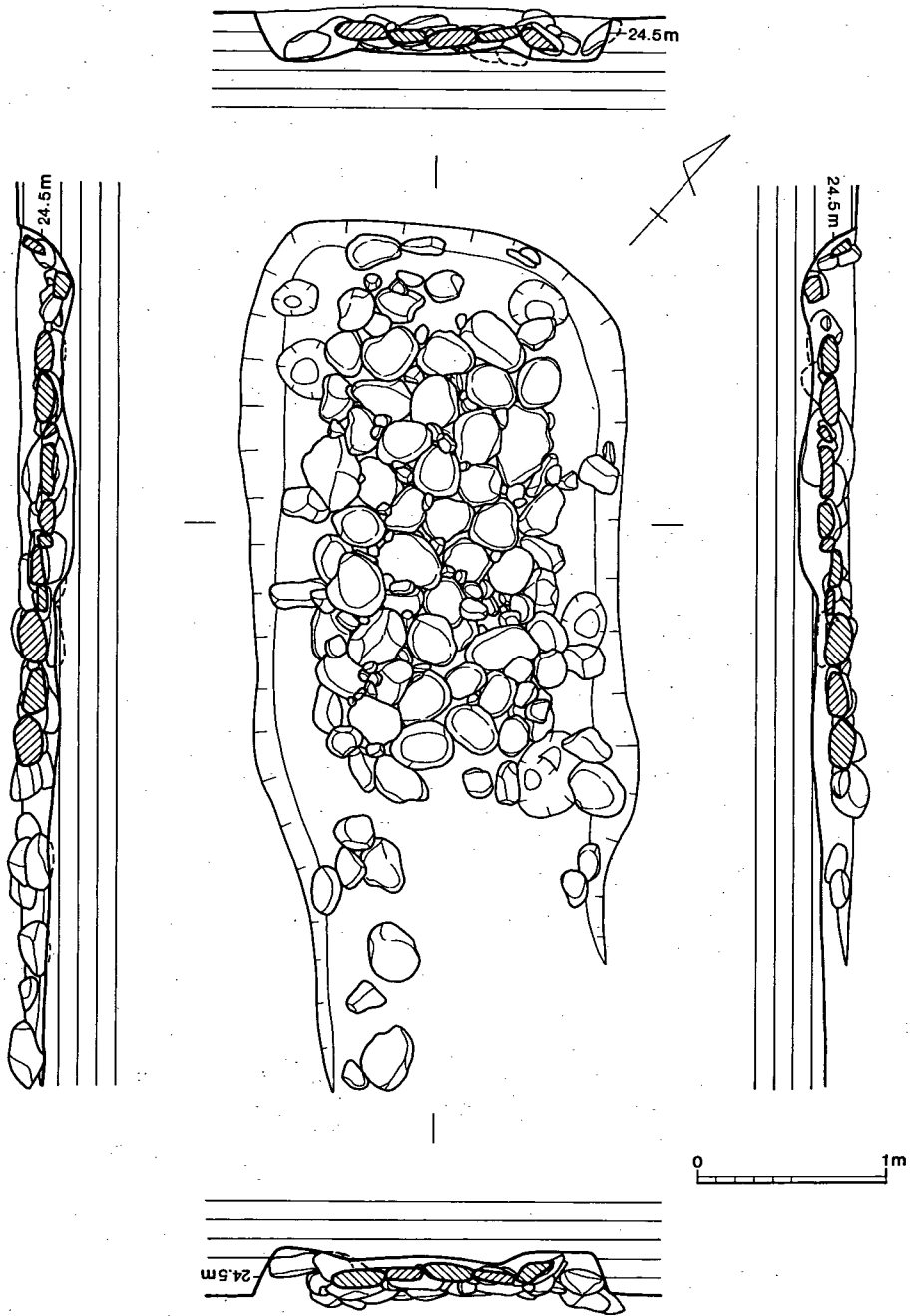
第4図 1号墳地形測量図 (1/100)

石室は、周壁の石材が全て失われており、床石を残すのみであった。床石には25～30cmの偏平な河原石を敷き並べ、その隙間を埋めるように5～10cm大の石が詰まっている。この手合いの床面構造はこの地方の後期古墳・横穴に一般的に見受けられるものである。

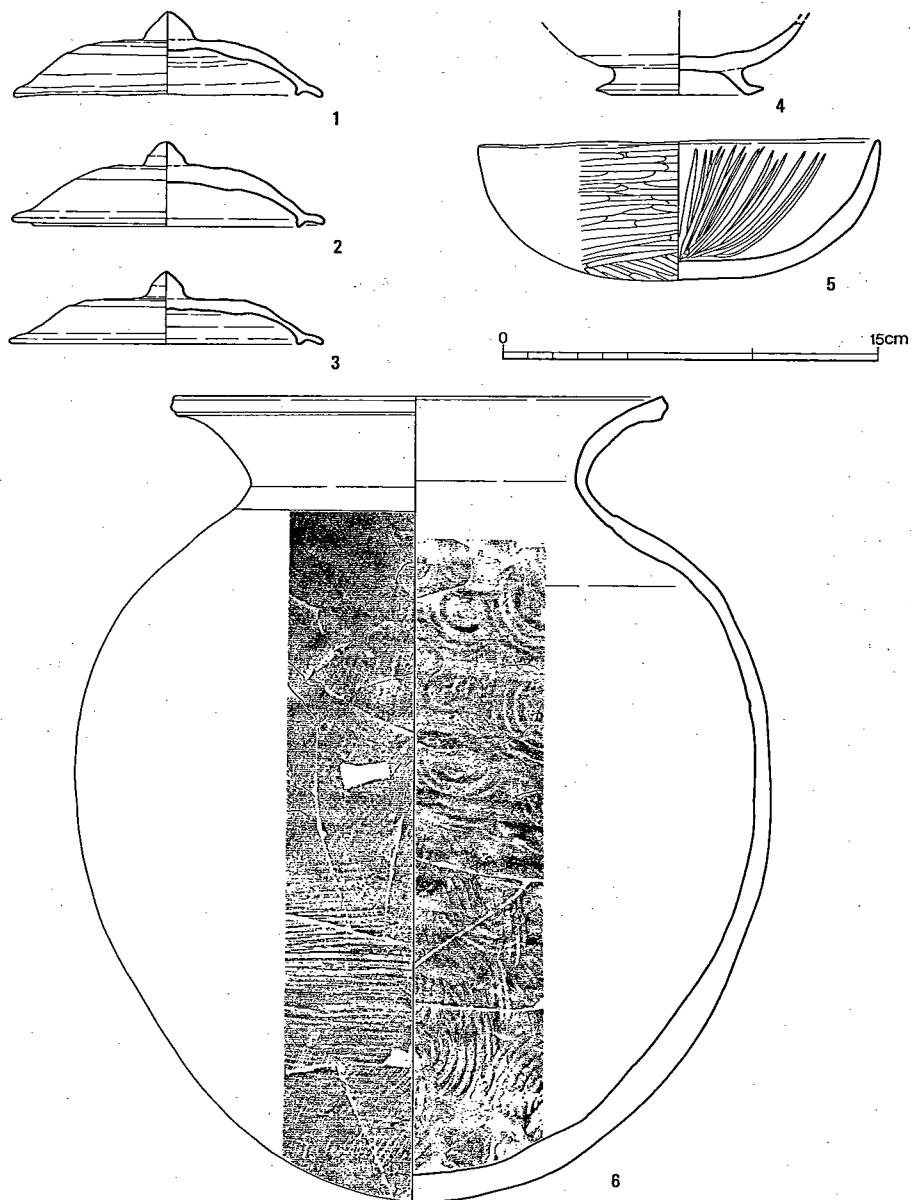
石室手前側（南東側）の床石は、奥側より厚い石を使用する事によって床面が一段高くなっている。3・4・9・19号墳の石室でもほぼ同様の構造を確認しており、それらによるとこの高くなった部分全体が框石（框施設）の役割をするものと考えられる。ただし、他の4基の石室が袖石等があり玄室部分より幅が狭くなった箇所はこの框施設があるのに対して、1号墳石室では奥の玄室部分と手前の框部分の幅に変化がみられない。

墓壇は幅200cmで、手前のくびれて細くなった部分からが墓道とするならば、長さは350cmとなる。周壁の石材を並べた部分には特に抜き取った痕跡は見受けられなかったが、この部分全体が中央の床部分より僅かに5cm程低くなっており、石材を安定させるために詰めたと思われる石が残る。

また、周壁が失われているため正確は期し難いが、復元すれば石室主軸はN-42°-Wで、玄



第5图 1号墳石室実測図(1/40)



第6図 1号墳出土土器実測図(1/3)

室長150cm, 幅は奥壁側・玄門側共に125cm程の矩形の長方形となる。

出土遺物(図版31, 第6図)

石室床面から墓道部にかけての部分から出土した。

須恵器

杯蓋(1~3) 3点とも口縁部内面に短いかえりを有するタイプ。回転ヘラ削りした天井部

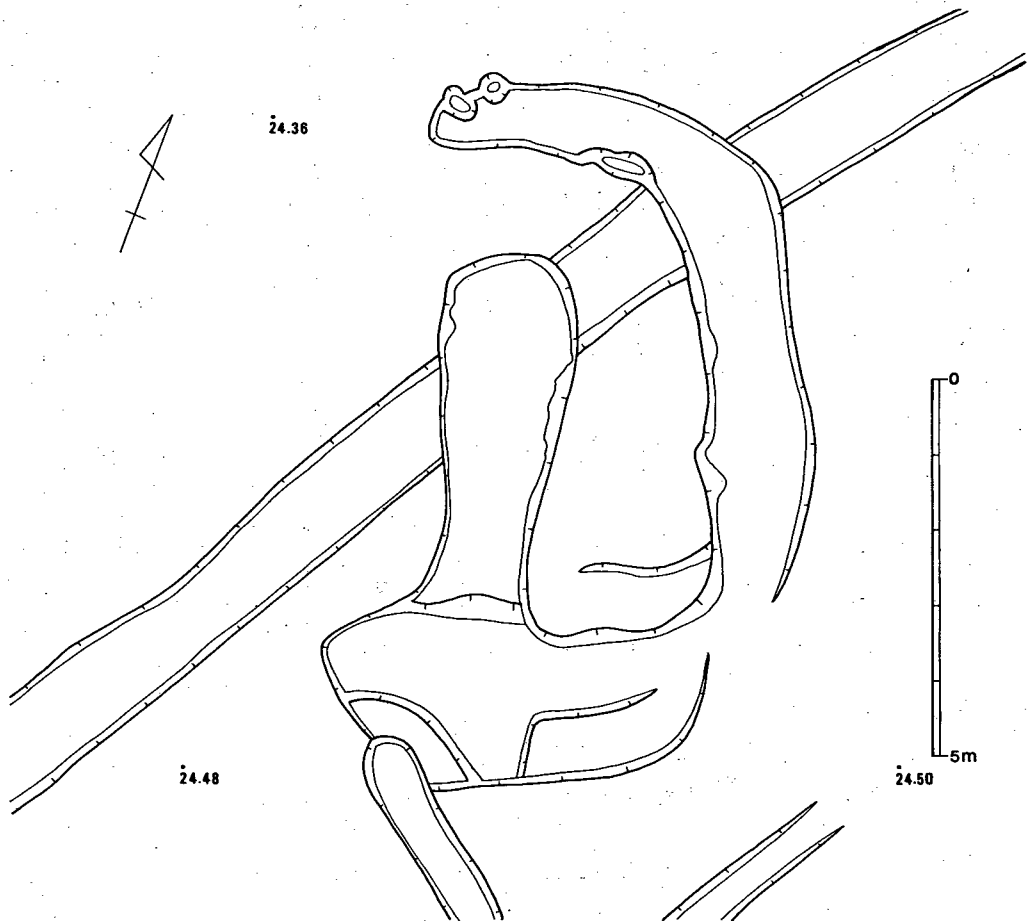
中央に裾広がりの宝珠様のつまみが付く。口径は12.4~12.6cm, 器高は2.9~3.5cm。

杯(4) 屈曲して広がり端部が鋭く尖る高台をもつ。高台径6.7cm。体部外面の底部周辺は回転ヘラ削り, その他は回転ナデ調整を施す。なお, 1~4の須恵器は4点ともアズキ色を呈しており, 特徴的である。

甕(6) 墓道部分から出土した。最大径は胴部の上位にあり, 外湾しながら開く口頸部をもつ。胴部外面は格子目文叩き板によるタタキの後回転ヨコナデ調整。胴部下半部ではヨコナデがかキ目風になっている。胴部内面には青海波文状に当て具痕が残るが, 上半部と下半部では当て具痕に差異があり, 二種の当て具を使用したものと考えられる。口径20.0cm, 器高32.2cm, 胴部最大径28.0cm。

土師器

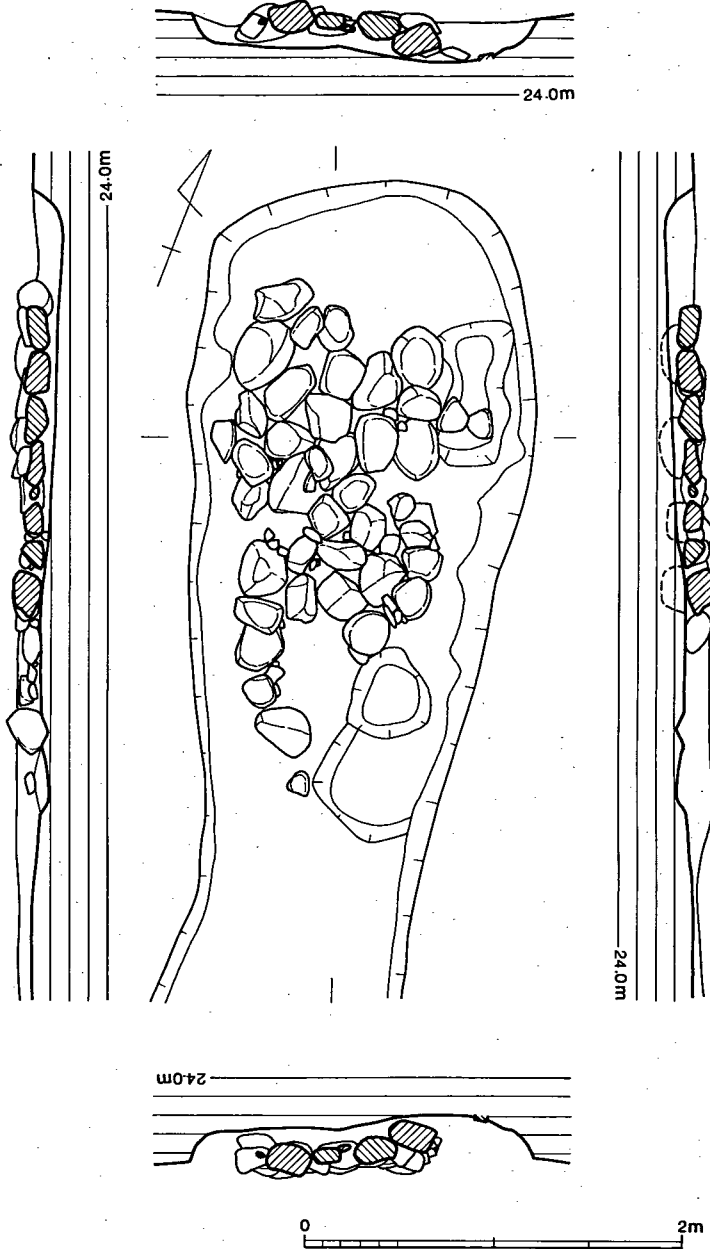
碗(5) 体部は内湾しながら立ち上がる。外面は丁寧に磨き, 内面は外面と同様の器具を使用して放射状の暗文を密に施す。口径16.1cm, 器高5.6cm。



第7図 2号墳地形測量図(1/100)

2号墳 (図版3, 第7・8図)

1号墳から北東に10m程離れた位置にあり, 1号墳同様4号溝を切る。周溝は左半部分(南西側)が削平のために失われているが, 右半部分は隅丸方形で, 1号墳同様方墳の可能性があると考えられる。周溝から墳丘の規模を復元すると, 縦方向(石室主軸方向)6.8m, 横方向は



石室の中心で折り返せば5.4mとなる。

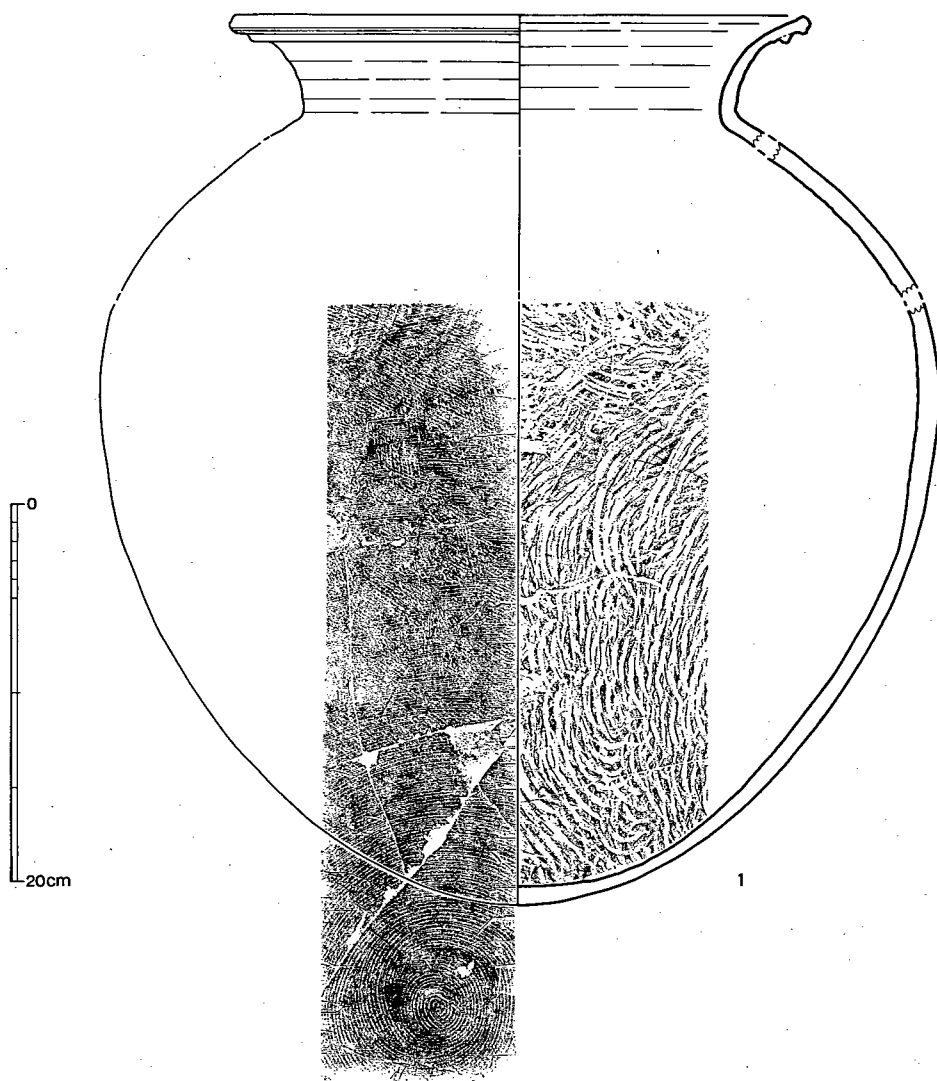
石室は周壁の石材が全て抜き取られており, 床石の一部が辛うじて残っている。20~30cm大の河原石を並べて床面としているが, 石の並べ方はやや雑である。床石の両側には中央部分より大きめの石を配しており, 周壁腰石を安定させる役割があったものと考えられる。床石の状態から石室を復元すると, N-21°-Wを主軸に取り, 玄室長は不明ながら幅110cmの長方形の石室であったと思われる。

第8図 2号墳石室実測図(1/40)

出土遺物（図版31，第9・10図）

須恵器

甕(1) 墓道と周溝の境に置かれていた。胴部の最大径は上半部にある。外湾して開く口頸部外面の口縁部直下には1条の突帯が付く。胴部外面は(擬)格子目文タタキ調整の後カキ目調整。内面は青海波文状に当て具痕が残り，上半部はその後にヨコナデ調整を施す。口径30.6cm，胴部最大径44.5cm。



第9図 2号墳出土土器実測図(1/3)

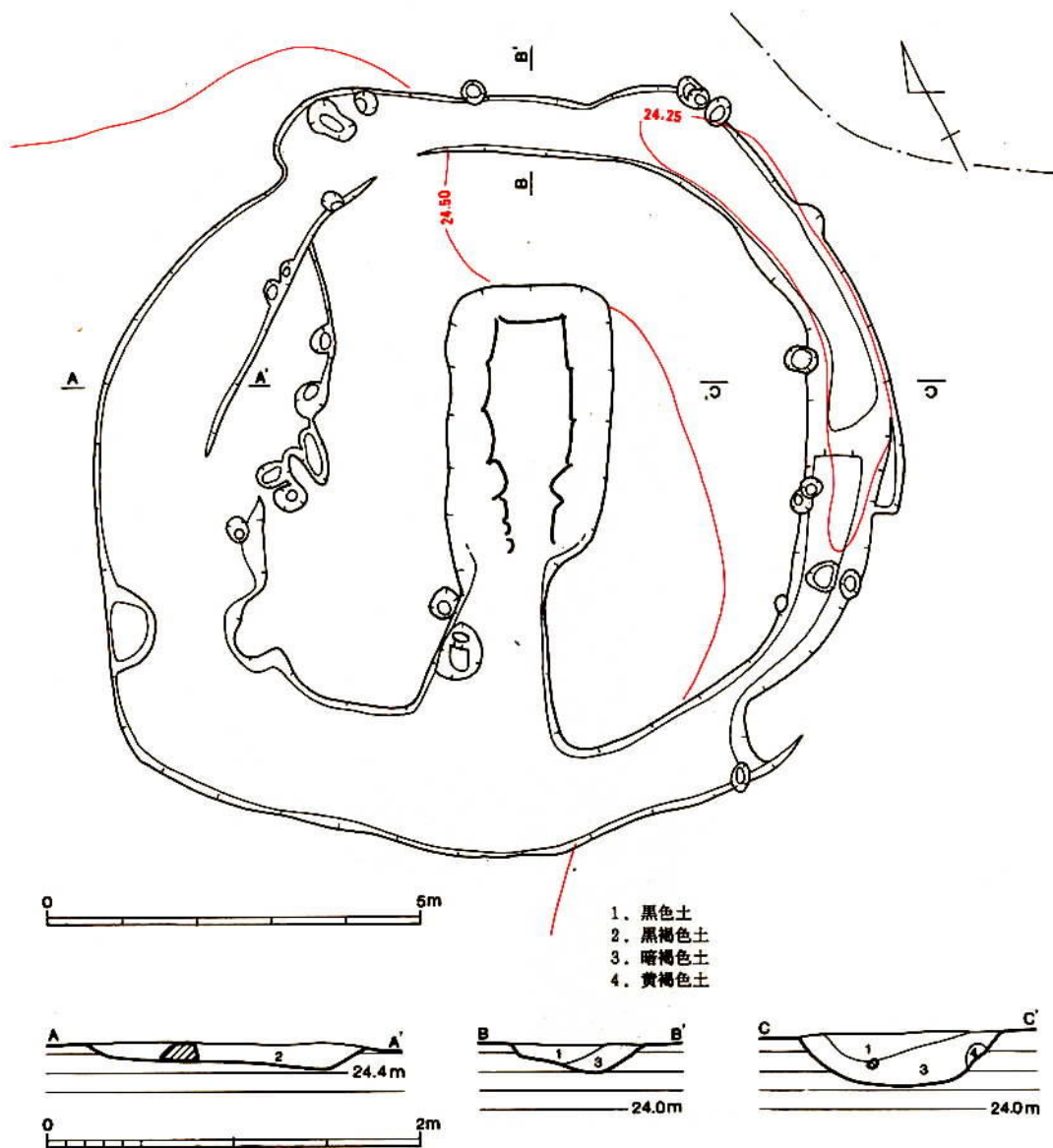
土師器

皿(2) 底部はヘラ切り。復元口径7.6 cm, 底径4.9 cm, 器高1.2 cm。

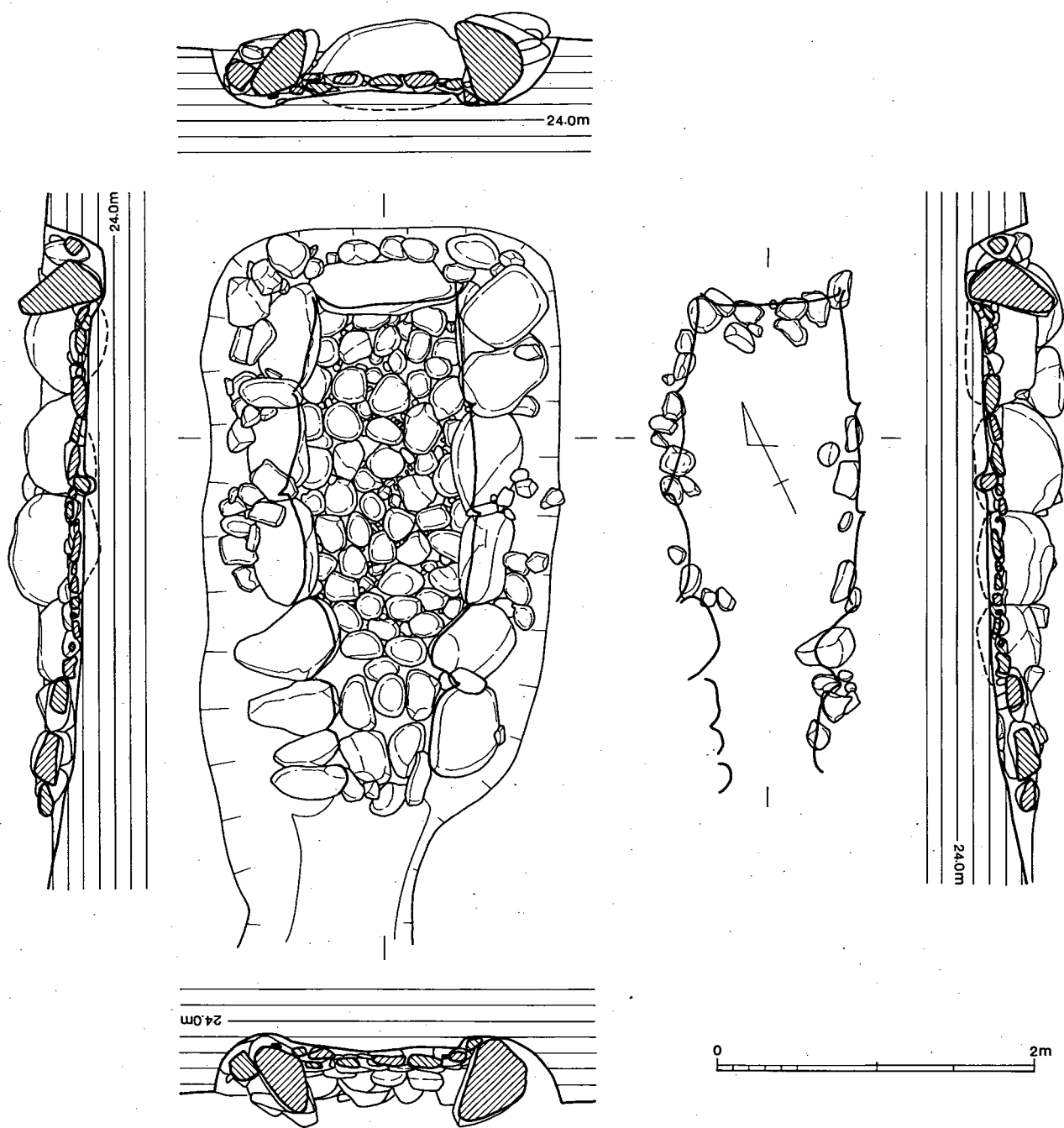
青磁

椀(3) 龍泉窯系青磁。底部の器肉が厚く, 内面見込みに片切り彫りの花文, 外面に鎗蓮弁文を有する。

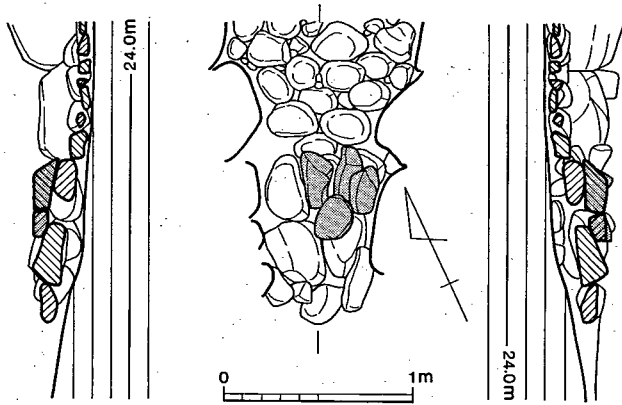
第10図 2号墳出土土器・陶磁器実測図(1/3)



第11図 3号墳地形測量図(1/100)



第12图 3号石室实测图 (1/40)



第13図 3号墳石室閉塞石室実測図(1/40)

3号墳(図版4・5, 第11~13図)

2号墳から南東に6m離れた場所に位置する。周溝は現状で幅0.8~1.7m, 深さ0.1~0.3mで円形に巡り, 南東側の一部が5号墳周溝と重複する。墳丘は縦・横方向とも8.0m程に復元出来る。

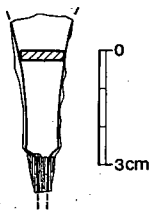
石室は, 奥壁に1個, 左右の側壁にそれぞれ3個のやや大形の河原石を横位に立てて腰石としている。右側壁に僅かに2段目の石積みが残っており, それによると腰石より上は偏平な河原石を小口積みにしていた事が判る。玄門部分は, 右側2個, 左側4個の河原石を, 小口を内側に向けて平置きで並べている。つまりこの石室は, 玄室部分は最下段に腰石を据えて2段目以降を小口積みにし, 玄門部分は基底部から小口積みで構築したと考える事が出来る。

石室床面は, 20~25cmの偏平な石を敷き並べ, その隙間に小石が残る。玄門部分は, 1・4・9・19号墳と同様に床石が玄室部分より一段高くなっており, 框施設と考えられる。この段が袖石より手前(外側)にあるのが特徴的である。

床石を全て取り除いたところ, 腰石・袖石の下に詰めた石が現れた(第12図右側平面図)。腰石は, これらの石を内側から詰めて根締めとし, 一方外側は墓壙との隙間に石を詰めて安定させている。床石はその後で並べた事になる。

石室の主軸はN-25°-E。玄室長は, 框施設までを玄室とするなら230cm, 袖石までと考えるならば185cmとなる。閉塞石が框施設の上だけにあることから(第13図), 前者の方が妥当と思われる。玄門部まで含めた石室全体では320cmである。玄室幅は, 奥壁側85cm, 玄門側100cmで, 玄室中央部分が110cmとやや胴張りの平面形状となる。玄門部幅は, 袖石部分で60cm, 手前で50cm。

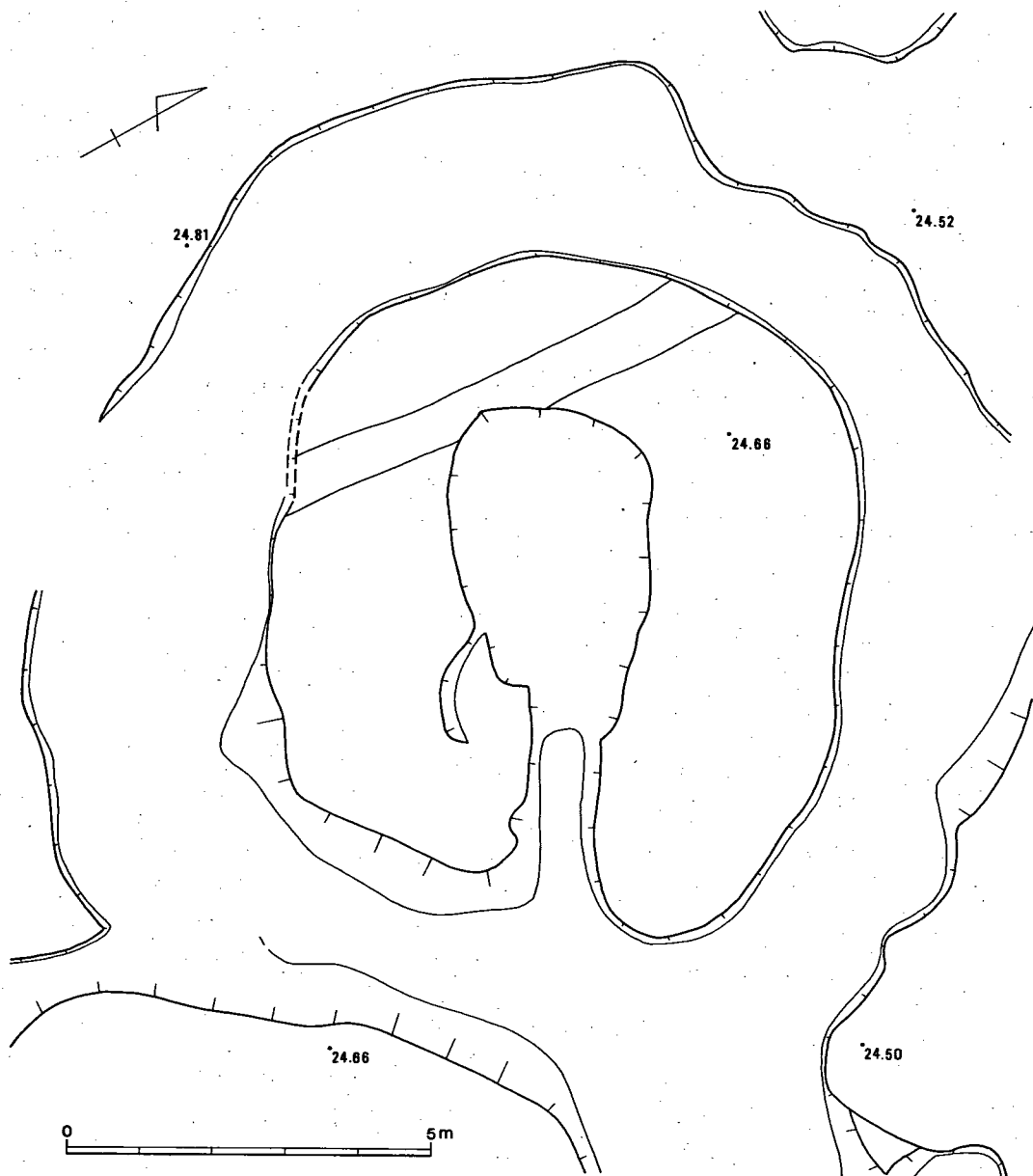
出土遺物(図版31, 第14図)



鉄器

鉄鏃 方頭斧箭式または圭頭斧箭式の鉄鏃の篋被部と茎部の一部である。茎部には矢柄の木質が残る。

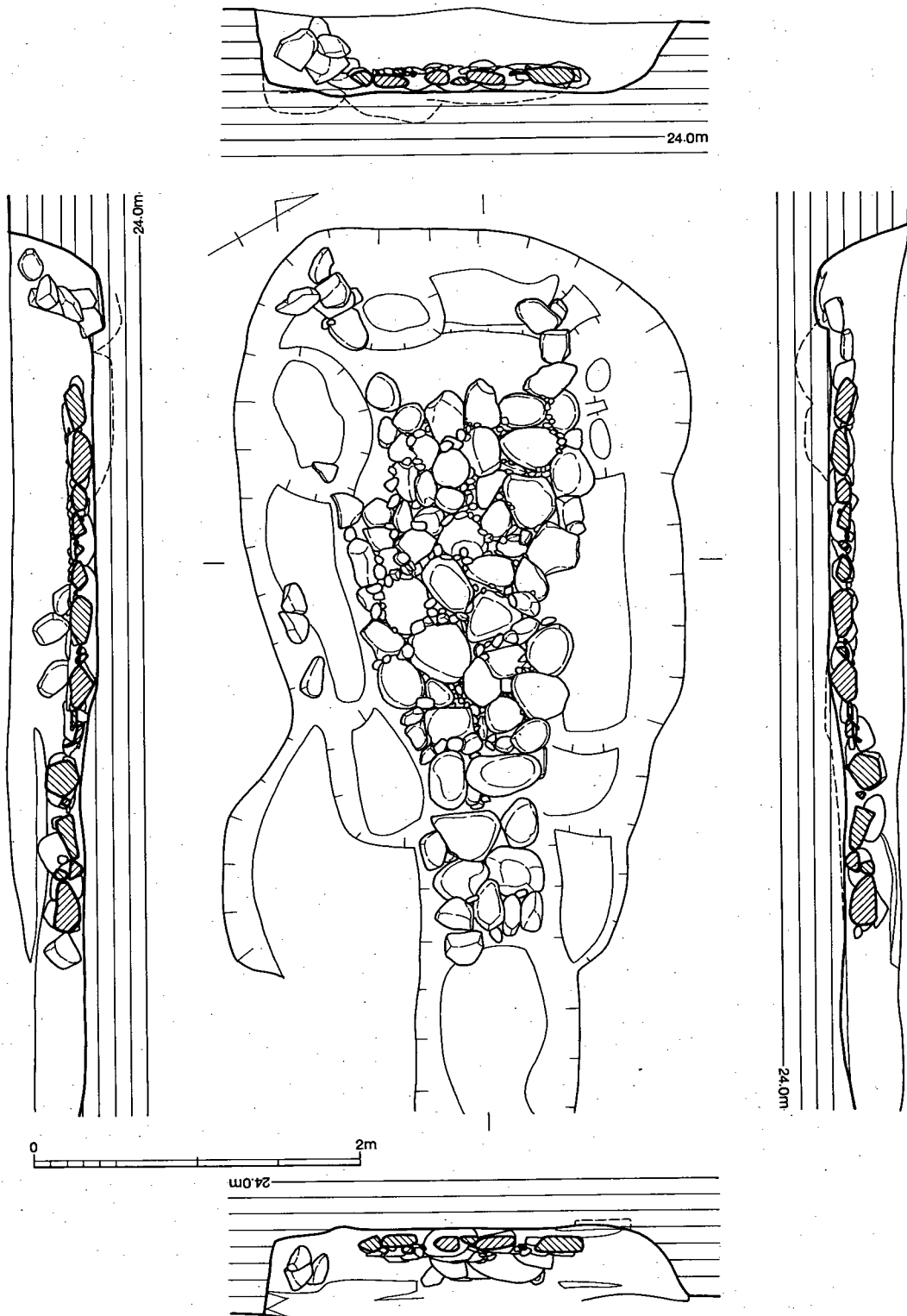
第14図 3号墳出土鉄器実測図(1/2)



第15図 4号墳地形測量図 (1/100)

4号墳 (図版5・6, 第15・16図)

1号墳と4m離れて立地する。周溝は、現状で幅1.6~3.3mで、やや楕円形に巡る。南東側で7号墳の周溝と、北東側で3号溝と重複し、南西側の一部を3号土坑に切られている。墳丘規模は、周溝の内側で計って縦9.0m、横8.0mに復元される。



第16图 4号墳石室实测图 (1/40)

石室は周壁の石材が全て抜き取られており、床石だけが残る。床石は20~30cm大の偏平な河原石を敷き並べ、その上に5~10cm大の小石が残っている。床石の手前側が一段高くなって框施設となるのは1・3・9・19号墳と同様である。ただし、この石室の框施設については、現地でそのように判断して調査を進めたものの、実測図や写真を改めて観ると、石が不揃いで面も揃っていない。玄室側の2個の石だけが框石で、その手前にある石は閉塞石である可能性もあるように思う。ともあれ、ここでは一応調査時の所見を優先させて、全体で框施設としておきたい。

石室周壁石材の抜き取り痕は比較的明瞭で、床石の状態と合わせて石室を復元すると、主軸はN-65°-Wで、玄室長260cm、玄室幅は不確定ながら奥壁側140cm、玄門側90cm程の羽子板形を呈するものと思われる。

出土遺物 (図版32~35, 第17~23図)

須恵器

杯蓋(1) 口縁部内面に段が有り、端部を丸くおさめる。天井部外面は回転ヘラ削り調整。口径14.0cm, 器高5.0cm。

杯(2~6) 底部外面は回転ヘラ削り調整。口径は11.5~12.0cm, 受け部径14.0~14.3cm, 器高4.4~4.7cm。

高杯蓋(7・8) 2点ともボタン状のつまみが付く。7は天井部外面にカキ目調整, 8は回転ヘラ削り調整を施す。口径16.4~16.5cm, 器高5.7~6.0cm。

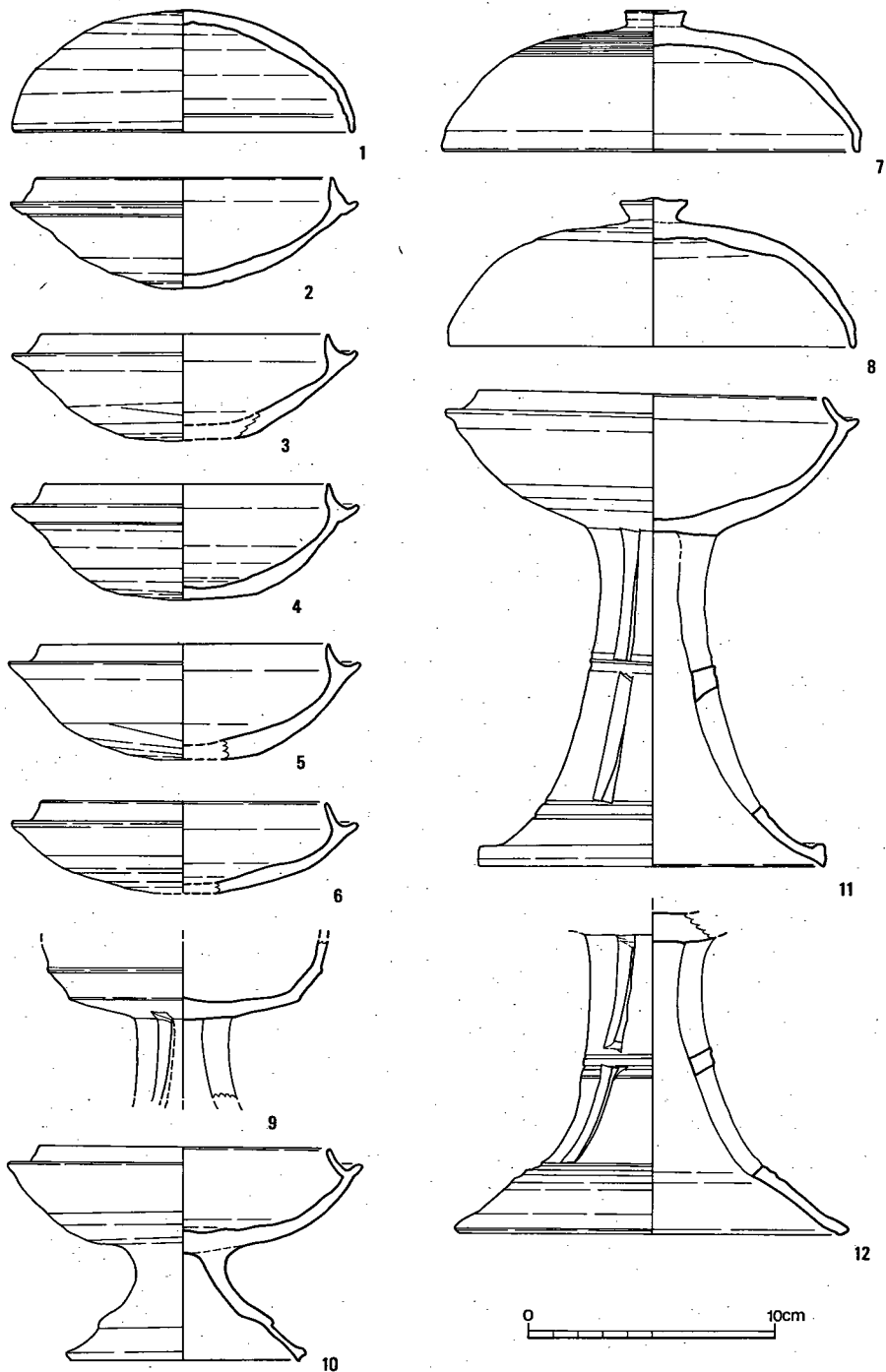
高杯(10~15) 9は無蓋高杯。長脚で3方向に長方形透し孔が有る。有蓋高杯には短脚のもの(10)と長脚のもの(11~15)がある。長脚のものは長方形二段透しをもつ。15は透し孔の有無が不明。

壺(16) 体部の最大径は中位にある。肩部には沈線で上下を区画した間に刻み目文を巡らせる。体部下半部は回転ヘラ削りをおこなった後、底部にカキ目を施す。体部最大径9.8cm。

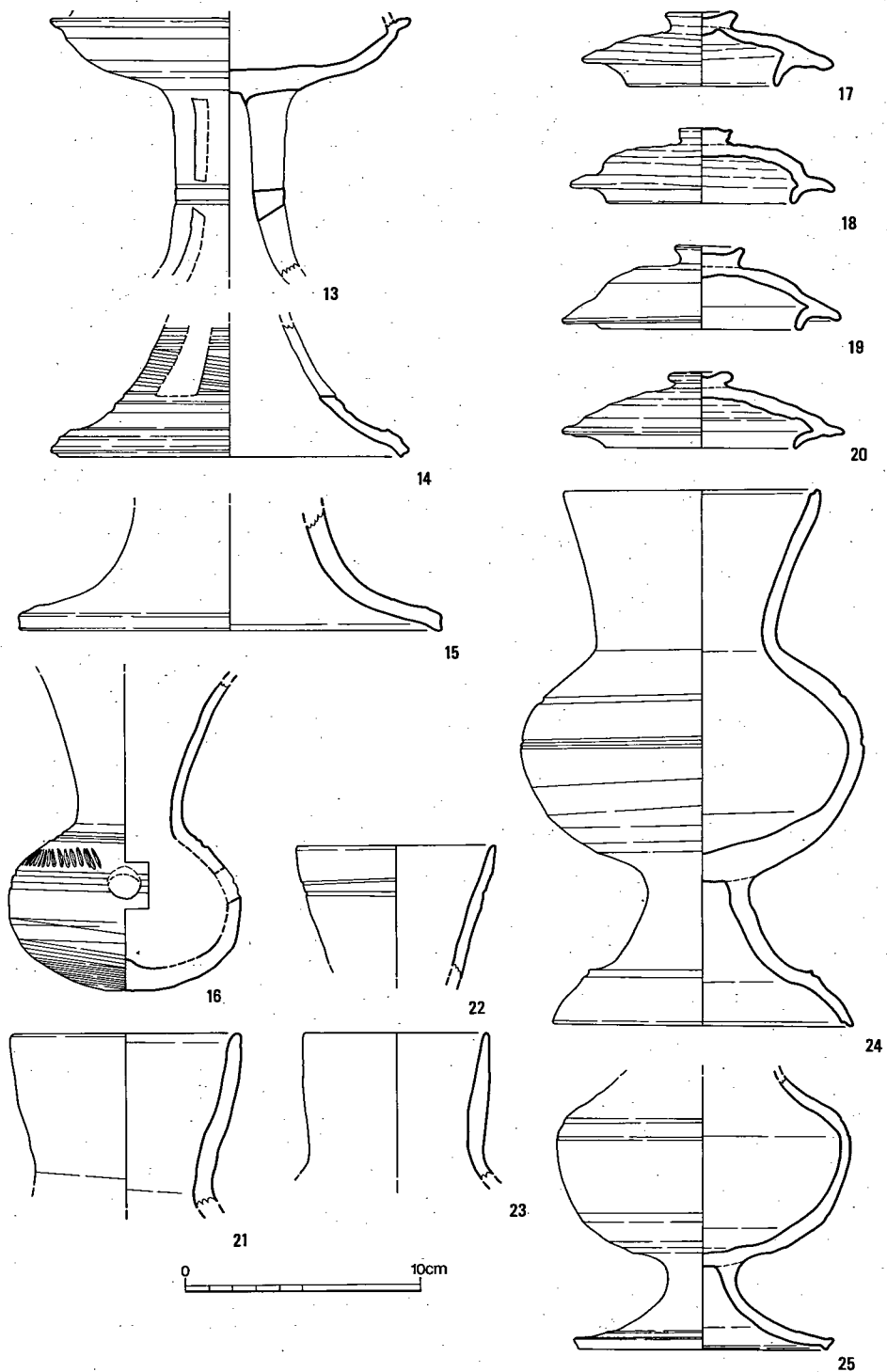
脚付壺蓋(17~20) 脚付壺の蓋であろう。4点とも口縁部内面にかえりをもち、天井部にボタン状つまみが付く。天井部外面は回転ヘラ削り調整。17は口径6.3cm, 受け部径10.6cm, 器高3.1cmとやや小振りで、18~20は口径7.9~8.4cm, 受け部径11.2~11.9cm, 器高3.2~3.6cm。

脚付壺(21~26) 24は上方に開く頸部が口縁部付近で僅かに内湾する。口縁部内面に段を有する。体部の最大径は中位にあり、下半部の外面は回転ヘラ削り調整。脚部は外反して開き、下位で屈曲する。脚端部内面に段を有する。口径10.7cm, 体部最大径14.5cm, 脚端部径12.7cm。25は体部の最大径が上位に有る。体部下半部外面は回転ヘラ削り調整を施す。外反して開く短い脚部が付く。体部最大径12.4cm, 脚端部径11.0cm。21~23もこの手の壺の頸部であろう。

長頸壺(26) 脚付長頸壺であろう。頸部は上方に向かって開き、上部で僅かに内湾気味となる。体部の最大径は中位にあり、この部分に鈍い稜がつく。体部下半外面は回転ヘラ削り調整。



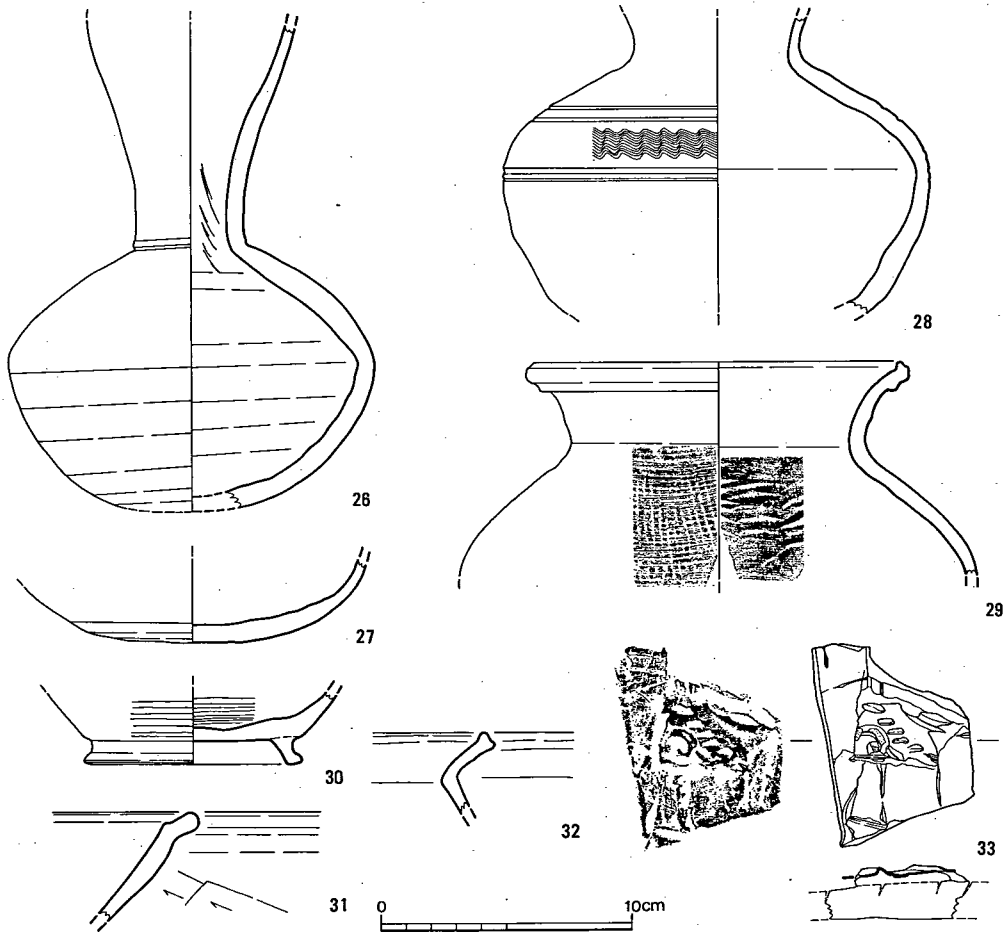
第17图 4号填出土器实测图①(1/3)



第18图 4号墳出土土器実測図② (1/3)

壺(27・28) 27は丸底の底部に回転ヘラ削り調整を施す。28は最大径が体部の上位に有り、肩部には上下を沈線で区画した中に櫛描波状文を巡らす。体部最大径17.0cm。

甕(29・34~36) 29は小形のもの。体部外面は平行文タタキの後カキ目調整。内面には当て具痕が残る。口径は復元して15.2cm。34~36は中型のものである。34は直立気味に立ち上がる頸部が口縁部付近で屈曲して開く。体部外面は擬格子文タタキの後上半部は部分的にカキ目調整をおこない縞模様状になる。下半部は斜め方向に刷毛目調整を行う。体部内面には青海波文状に当て具痕が残るが、上半部と下半部では当て具痕の形状が異なり2種の当て具を使用したものと考えられる。口径20.1cm、体部最大径35.2cm、器高41.7cmに復元する事が出来る。35は頸部が短く外反し、口縁端部を丸くおさめる。体部外面は平行文タタキの後カキ目によって調整する。復元口径23.6cm。36は頸部が直線的に立ち上がり、口縁端部を外に折り曲げる。体部外面は格子目文タタキの後にカキ目を入れる部分と入れない部分を交互にあしらい、縞模様状になる。内面には34と同様に上半部と下半部とで使い分けた2種の当て具痕が残る。口径31.6



第19図 4号墳出土土器実測図③(1/3)

cm, 体部最大径59.2cmに復元される。

器台(37) 杯部は内湾して立ち上がり, 口縁部で短く開く。口縁端部は丸い。脚部は沈線によって区画した中に, 4方向に6段の長方形透かし孔をあける。最下段のみは三角形透かし孔である可能性がある。脚部は下半で「八」の字形に開き, 端部付近で内湾する。端部は鈍い三角形になる。口径29.2cm, 底径25.8cm, 器高45.0cmに復元出来る。

土師器

椀(30) 「八」の字形に開く高台をもつ。体部内外面と底部内面は回転ヘラ磨き, 底部外面は回転ヘラ削り調整。

弥生土器

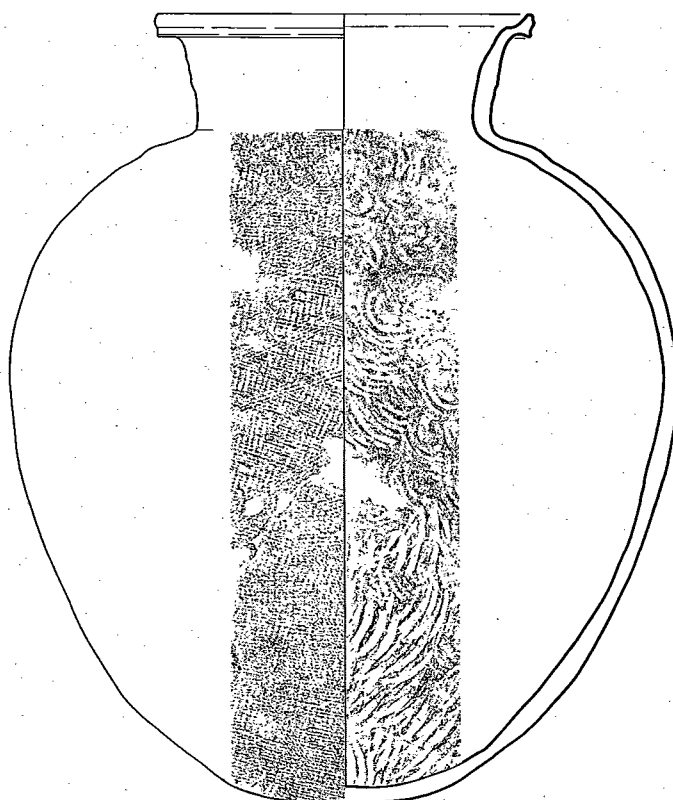
甕(32) 「く」の字口縁で端部をはね上げる。

瓦質土器

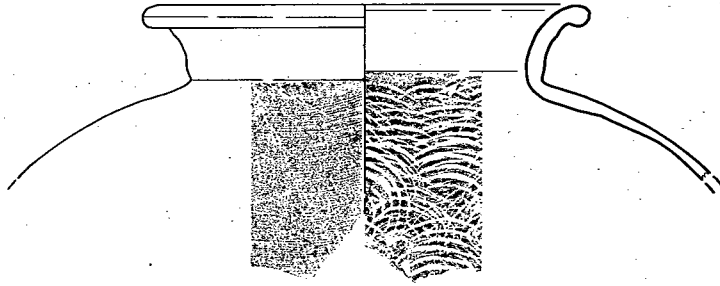
鉢(31) 屈曲して開く口縁部をもつ。体部外面は削り調整, 内面はナデ調整である。

瓦埴類

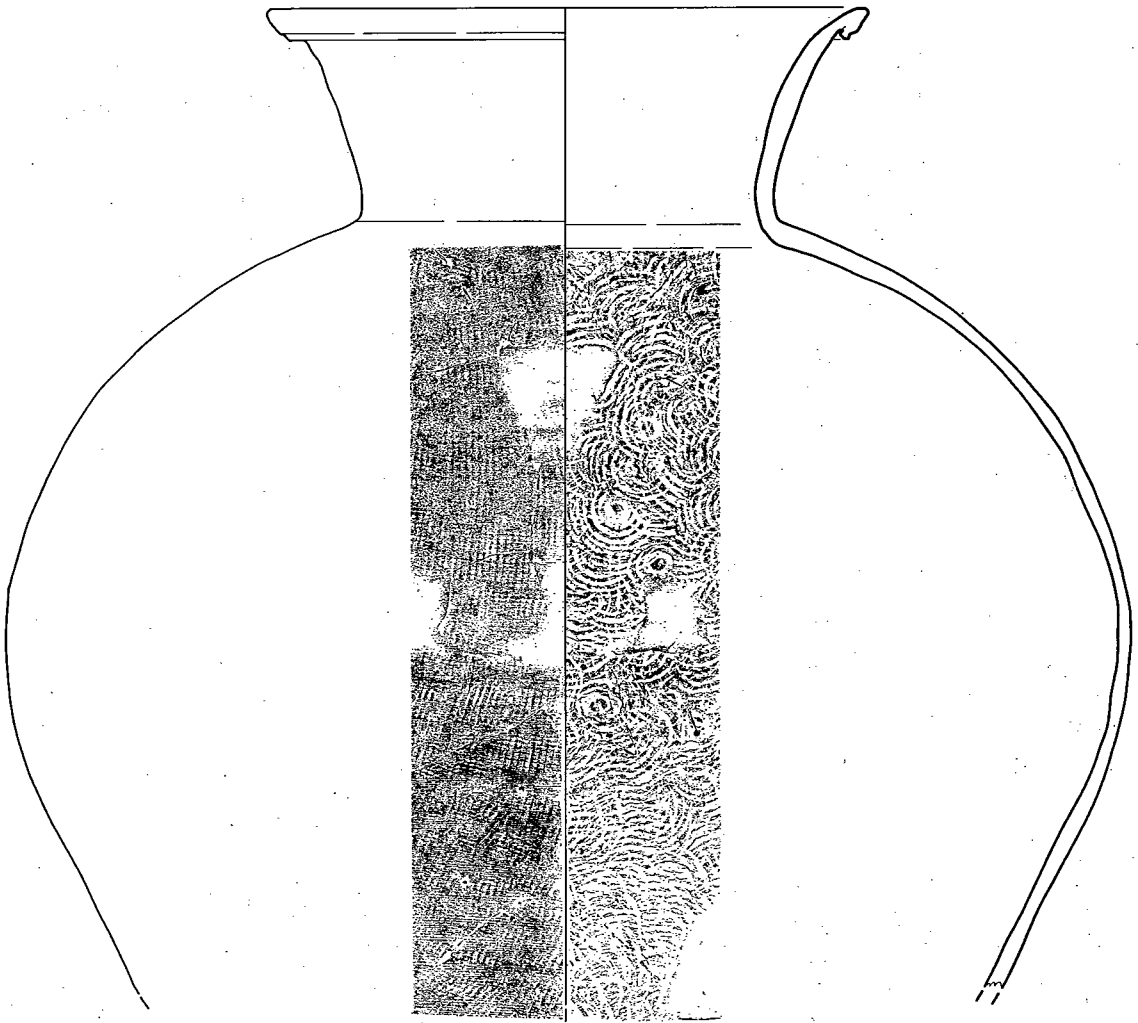
不明瓦埴類(33) 厚さ1.0~1.5cmの粘土板の上面に縦横に数本の切り込みを入れて, 厚さ0.5cm内外の粘土を張り付けて, この面に箆を押し付けている。文様面には断面三角形の2本の曲線がみえ, 箆から離れた後に付けた刺突文列がその2本の曲線を画している。この文様は垂水廃寺や友枝瓦窯跡で出土している軒平瓦類部の宝相華文と覗花文の一部ではないかと考えられる。垂水高木遺跡出土の実物と見比べた限りでは矛盾はないように感じるが, 現在までに出土したこの種の瓦には刺突文がみられない。



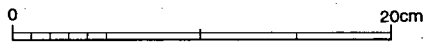
第20図 4号墳出土土器実測図④(1/4)



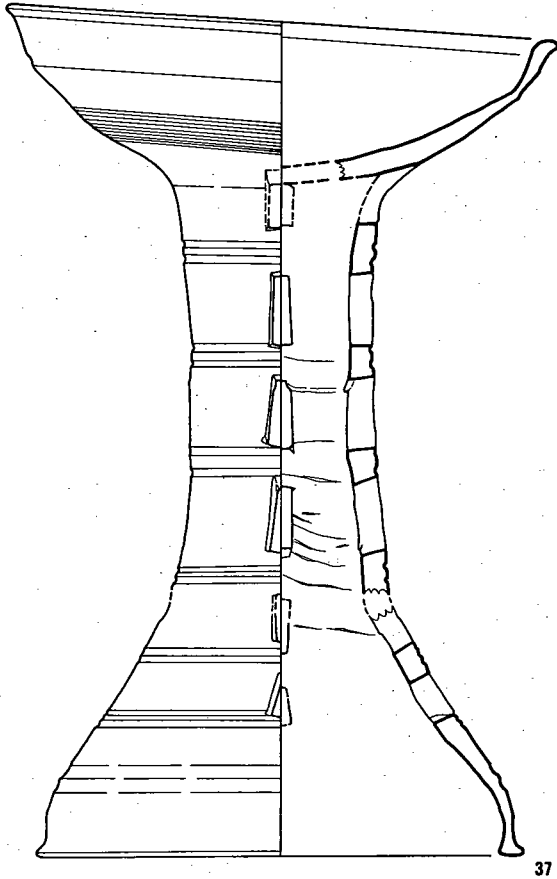
35



36



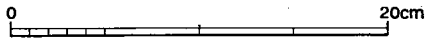
第21图 4号填出土土器实测图⑤ (1/4)



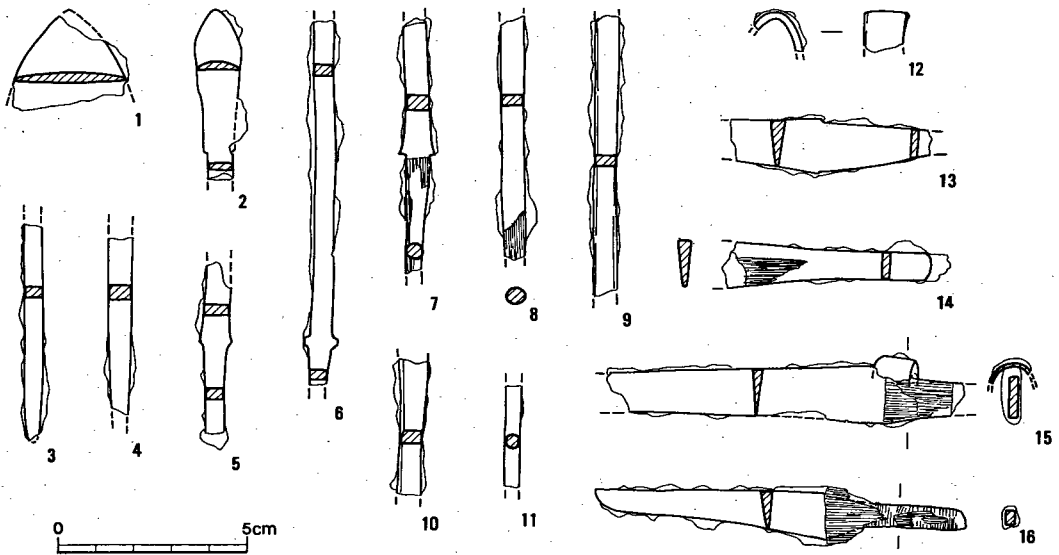
鉄器

鉄鏝(1~11) 1は鏝身部が幅広いタイプ。2は鑿箭式のもので鏝身部の最大幅1.2cm、長さは関までで3.8cm。3~11は篋被部から茎部にかけての部分である。5・6は篋被が張り出している。

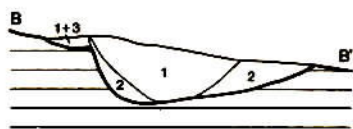
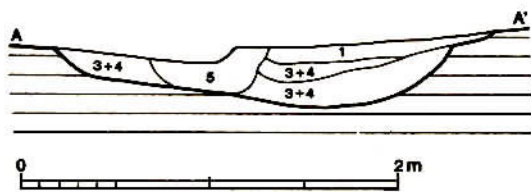
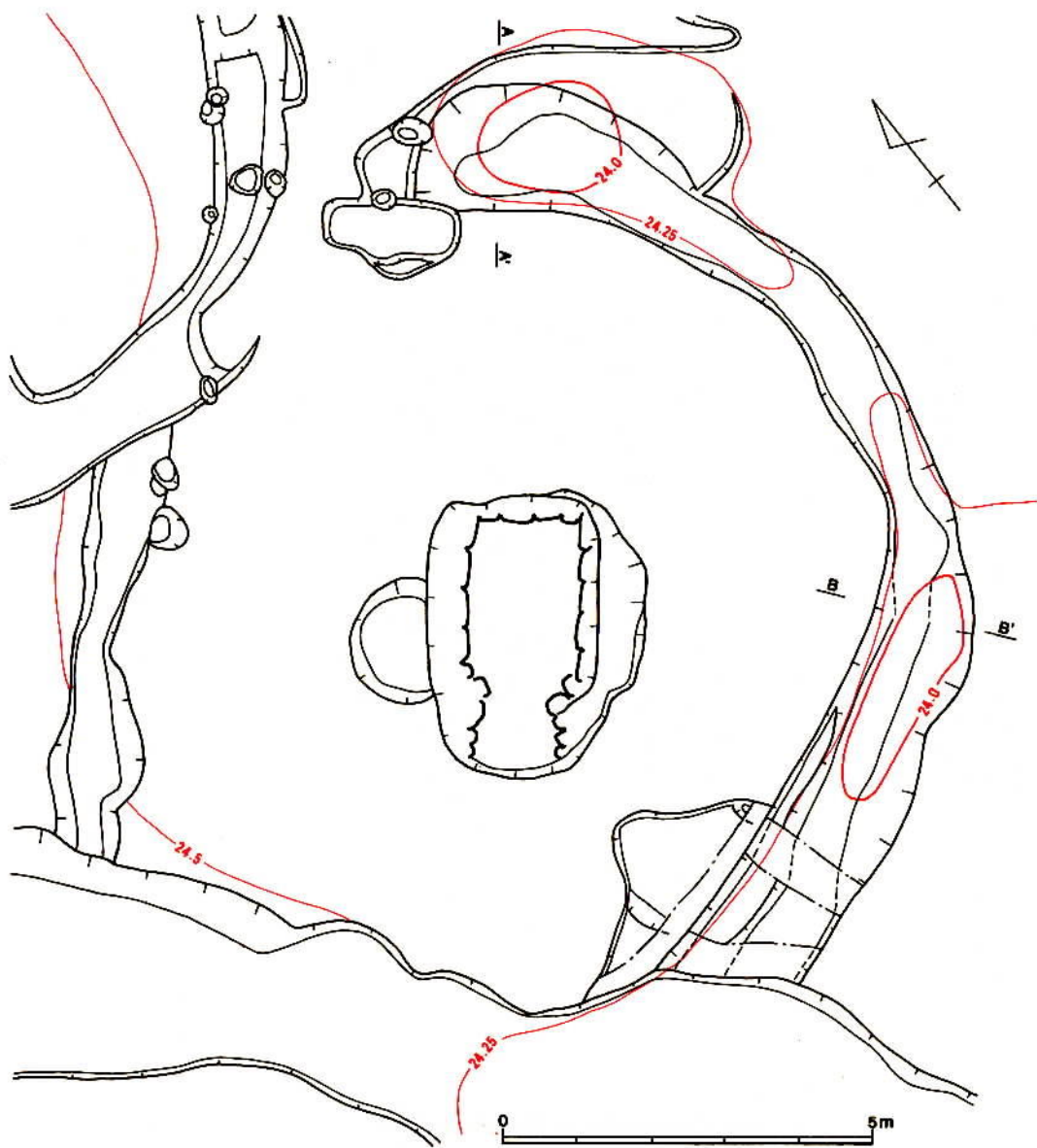
刀子(12~16) 12は柄の縁金具で厚さは1mm程である。15にも縁金具が残っている。15・16は研ぎ直しの為に刃部がすり減っている。16は現状で刃渡り6.1cm、刃部の身幅は関部付近で1.4cmあるものが鋒部付近ではすり減って6mmになっている。14~16には柄の木質の痕跡が認められる。



第22図 4号墳出土土器実測図⑥(1/4)

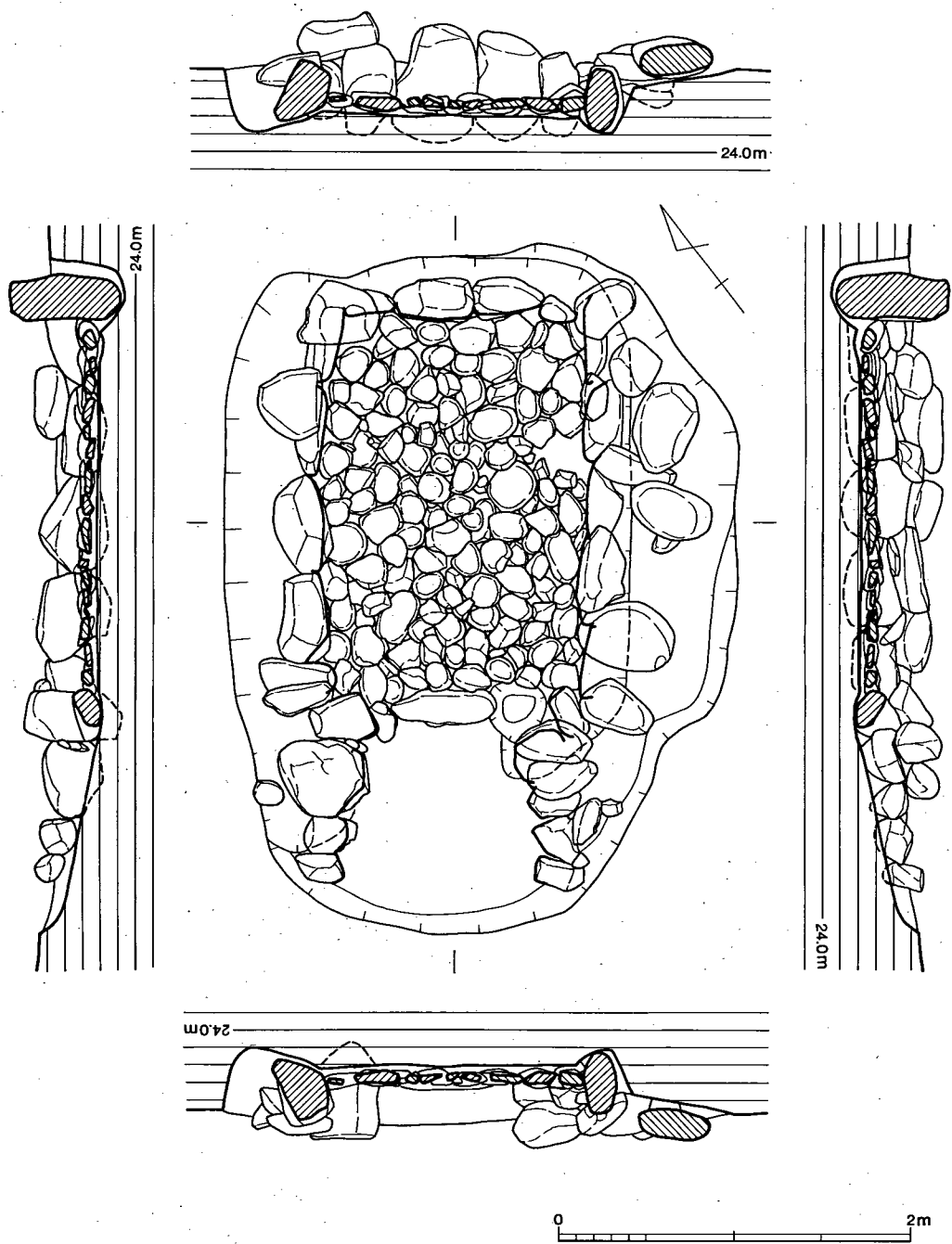


第23図 4号墳出土鉄器実測図(1/2)



- | | |
|----------|---------|
| 1. 黑色土 | 4. 暗褐色土 |
| 2. 暗黄褐色土 | 5. 黑褐色土 |
| 3. 黄褐色土 | |

第24图 5号填地形测量图 (1/100)



第25图 5号墳石室实测图 (1/40)

5号墳 (図版6～8, 第24～26図)

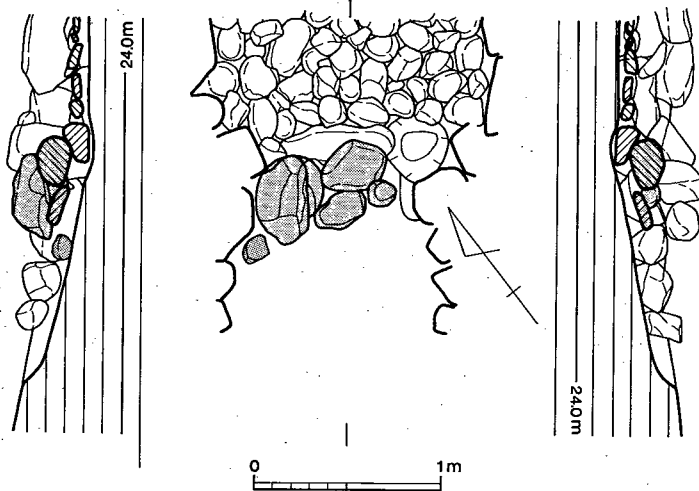
3号溝を挟んで4号墳の反対側にある。周溝は現状で幅80～170cm, 深さは最大50cmで, 円形に巡る。周溝は北側で3号墳周溝と重複し, 南西側は3号溝に切られる。本来はこの部分で4号墳の周溝と重なっていたものと考えられる。周溝から墳丘の規模を復元すると, 縦10.9m, 横10.2mのほぼ円形で, 中心に石室がある。

石室は, 奥壁に偏平な河原石を4個縦位に立て, 左右の側壁にはそれぞれ5個の同じく河原石をこちらは横位に立てて腰石とし, 2段目より上は石材を小口積みにして構築する。袖石は奥壁と同じく偏平河原石を縦位に立てるが, 右側の袖石は失われている。左右の前庭部側壁は基底部から小口積みにする。

玄室床面には10～25cm大の小振りの偏平石を敷き詰め, 左右の袖石の間には幅20cm程の框石を置く。框石から前庭部にかけての部分には閉塞石の一部が残っていた (第26図)。

石室の主軸はN-37°-Eで, 玄室長220cm。玄室幅は奥壁側135cm, 袖石側140cmだが, 中央部では150cmと, 玄室は左側壁がやや膨らんだ長方形の平面形になる。前庭側壁は左右の袖石の間隔70cmから「八」の字形に開いて手前では110cmの幅がある。

この石室の特殊なところは, 石室の前面に墓道がなく(あるいは削平されており), 玄門の手



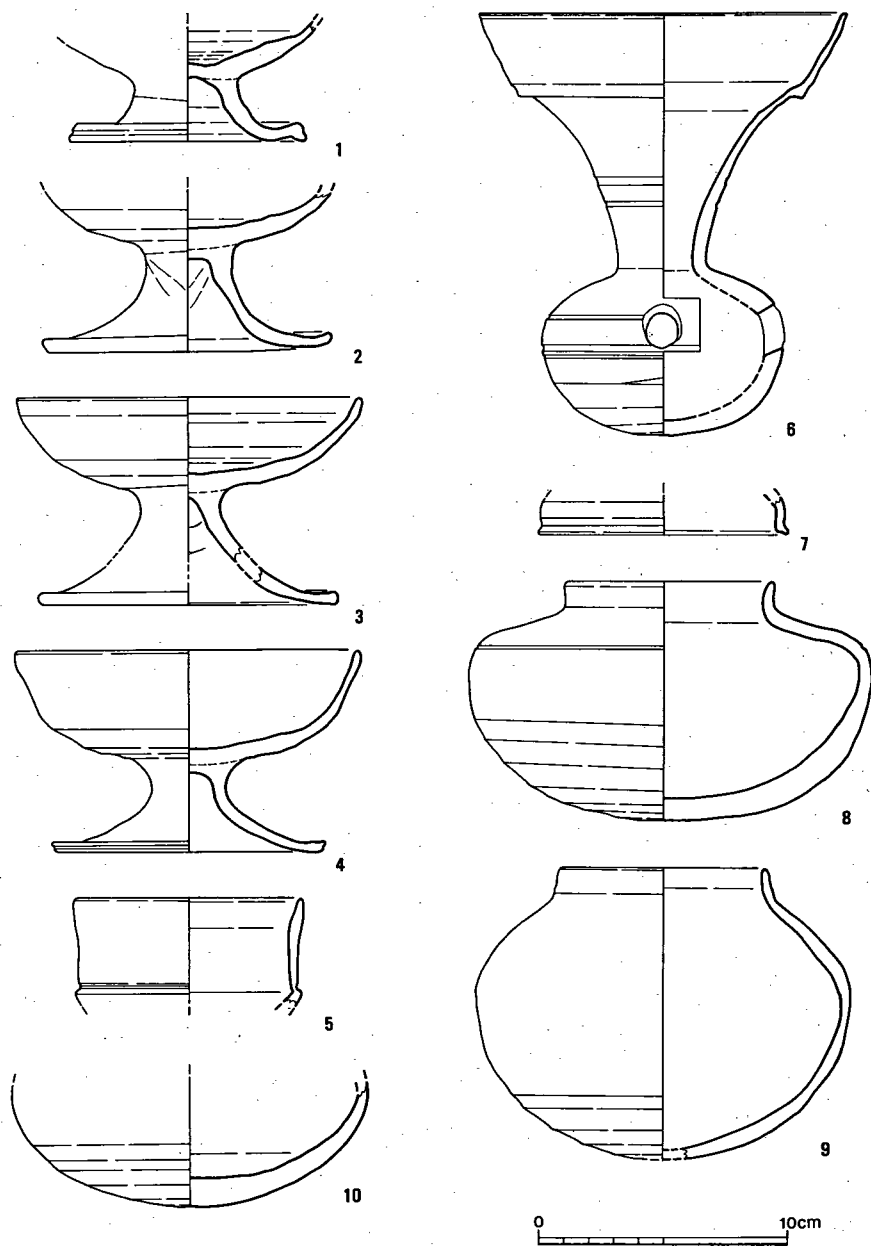
第26図 5号墳石室閉塞石実測図 (1/40)

前に傾斜のある前庭部を造って, 斜め上方から石室に入る構造になっていることである。今回の調査区内では他に, 前庭側壁が無い等の違いはあるものの7号墳が同様に斜め上方から入る石室構造をもつ。

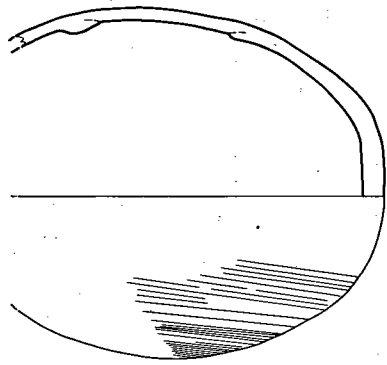
出土遺物 (図版36～38, 第27～33図)

須恵器

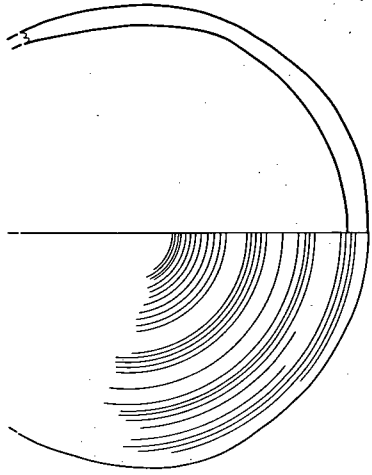
高杯(1～5) 全て短脚の高杯である。1は杯部の底外面を回転横ナデで調整し, 脚端部径が9.5cmと他のものより小さめで, 端部を下方に折り曲げる。2～4は杯部の底に回転ヘラ削り調整を施し, 3・4は杯部が内湾しながら立ち上がり口縁端部は丸い。口径は3・4とも13.8



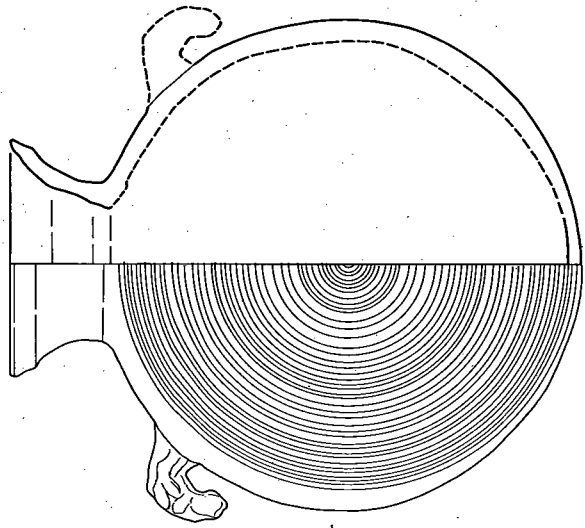
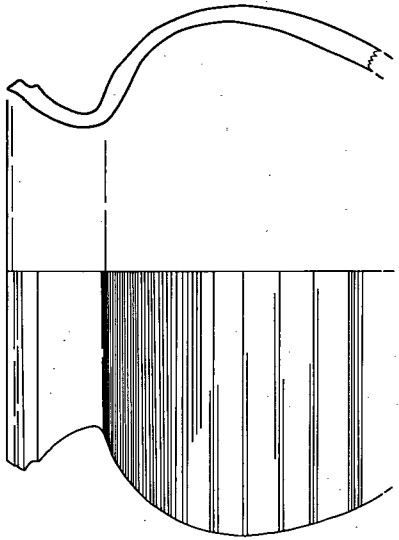
第27图 5号墳出土土器实测图① (1/3)



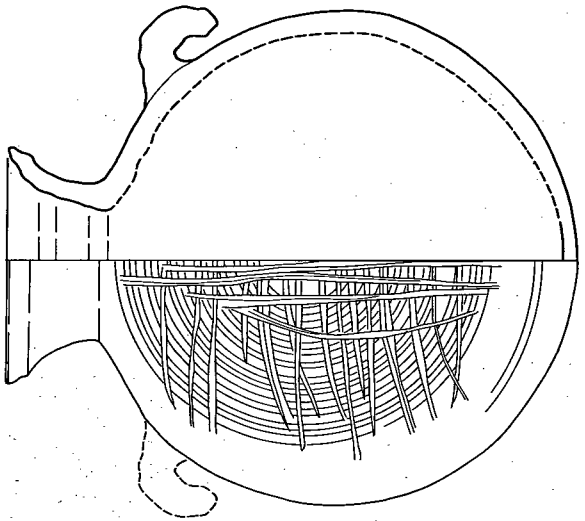
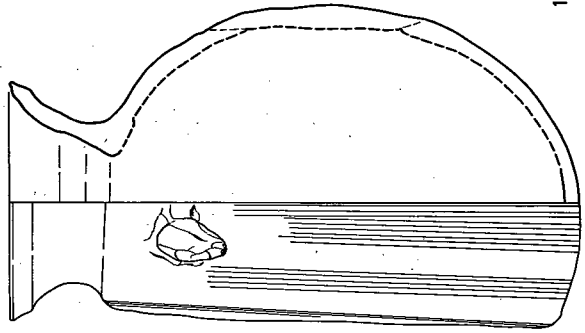
12



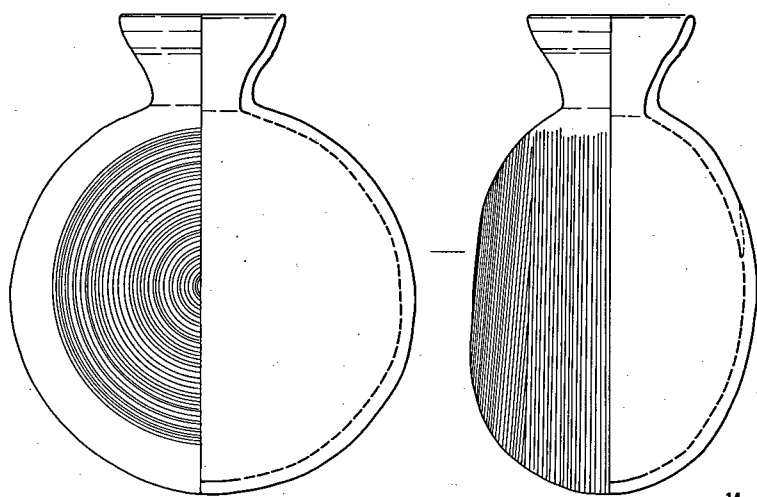
11



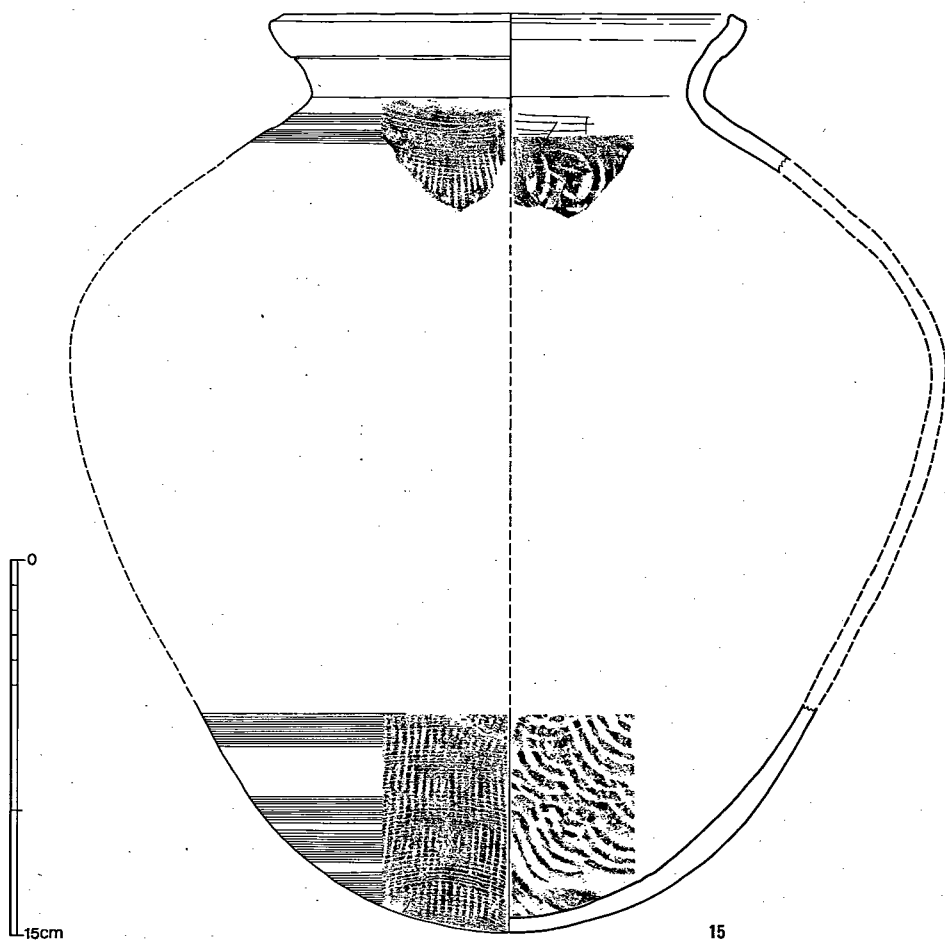
13



第28图 5号填出土器表测图②(1/3)

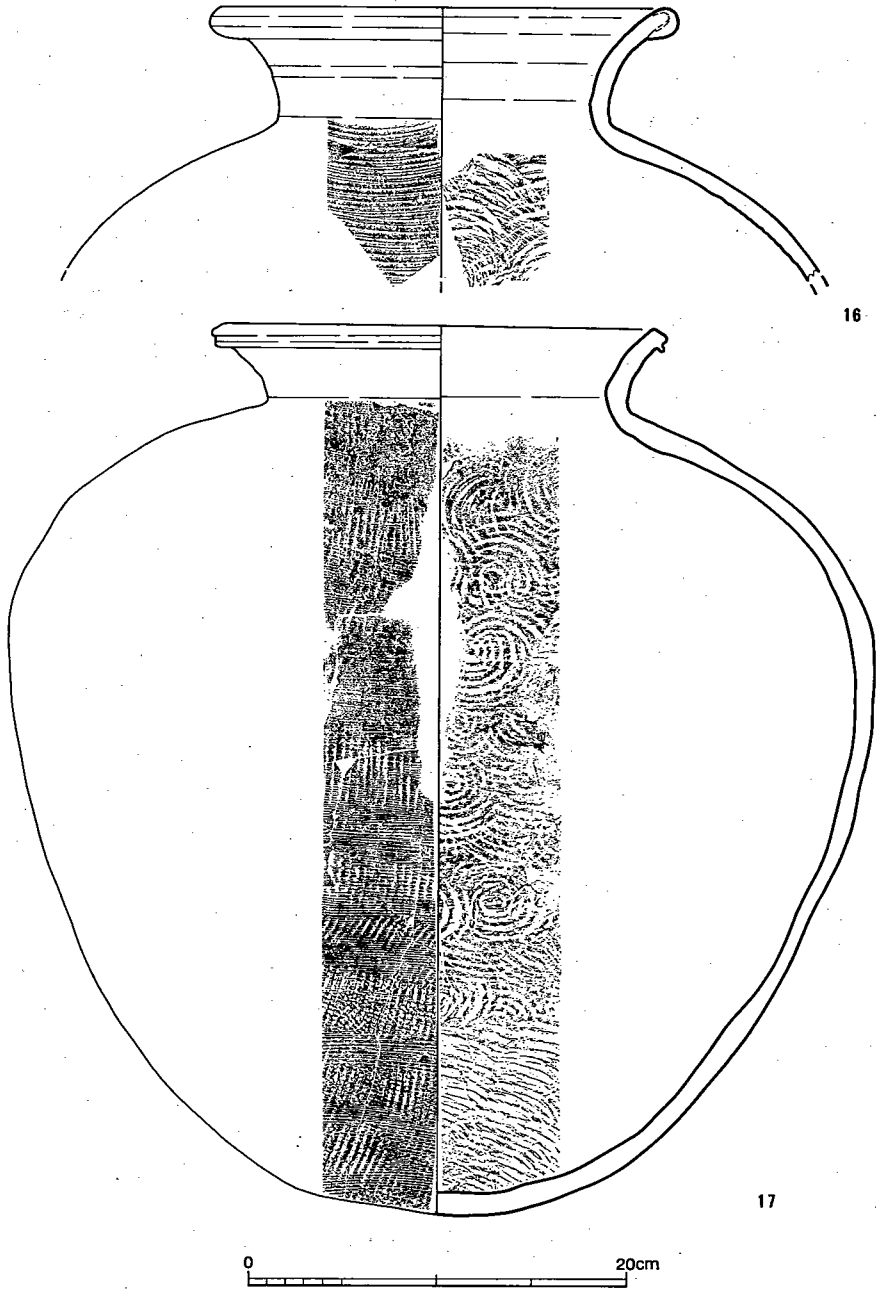


14



15

第29图 5号墳出土土器実測図③ (1/3)



第30图 5号墳出土土器実測図④(1/4)

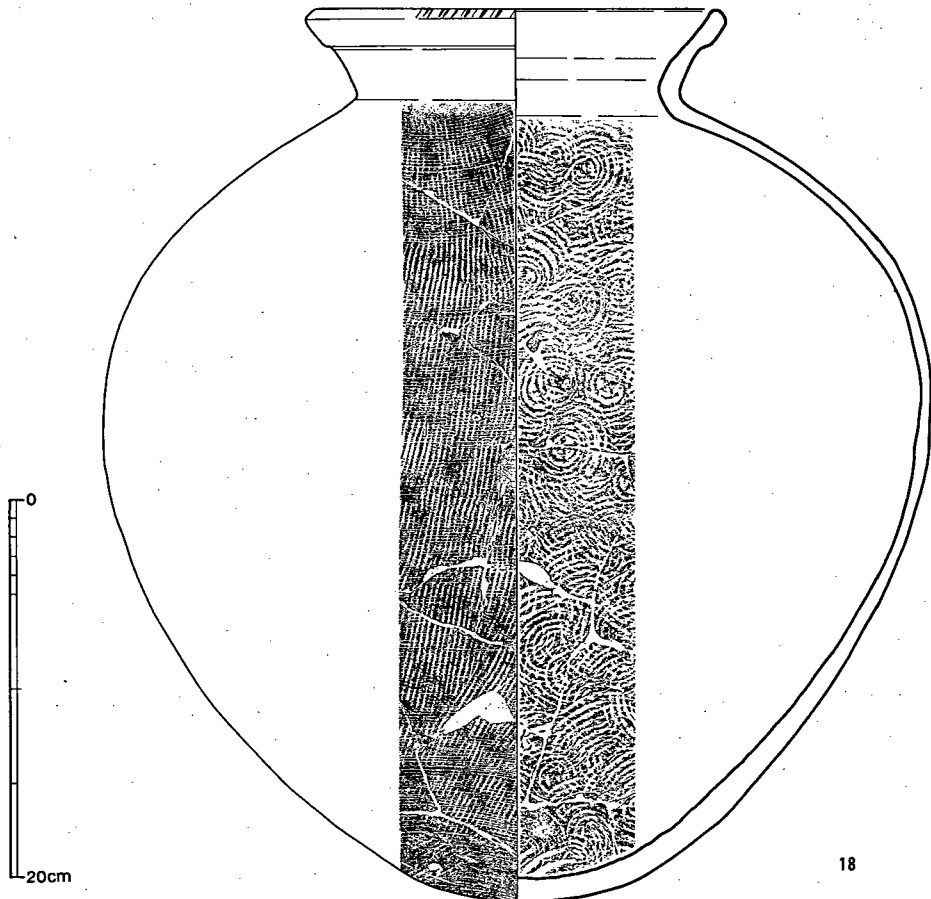
cmで、2～4の脚端部径は11.0～12.0cm。5は杯部の口径が小さく体部が直立するタイプで、体部と底部の境に明瞭な稜があって両者を分ける。口径9.2cm。

甕(6) 頸部は大きく広がり、口縁部付近で屈曲する。体部の最大径はわずかに上半部にあり、穿孔もその位置にある。体部下半は回転ヘラ削り調整。頸部の中位と、体部の穿孔の上下に沈線が入る。口径14.6cm、体部最大径9.7cm。

短頸壺蓋(7) 口縁端部が外方に開く。小破片であるが、復元すると口径10.0cmになる。

短頸壺(8・9) 8は器高が低く肩の張った器形で、口縁部はわずかに開き気味に立ち上がり端部は丸い。肩部に沈線が入り、体部下半外面は回転ヘラ削り調整を施す。口径9.5cm、体部最大径16.0cm、器高9.6cm。9は8と比べてナデ肩で、最大径も体部中位にある。口縁部は閉じ気味に立ち上がり、端部は丸い。底部の器壁は薄く、外面は回転ヘラ削り調整。口径8.4cm、体部最大径14.9cm、器高11.6cm。

壺(10・11) 10は底部である。底部外面は回転ヘラ削り調整、内面には無数の指頭痕が残る。



第31図 5号墳出土土器実測図⑤(1/4)

11はわずかに外反する頸部をもち、口縁端部は上方につまみ上げる。体部外面にはカキ目調整を施し、中位ではそれを回転ナデで部分的にナデ消して縞模様状にしている。口径15.6cm、体部最大径21.1cm。

提瓶(12~14) 石室内と周溝から3点の提瓶が出土した。12は円形の体部の両面をカキ目調整で仕上げるが、側面はナデ調整だけでカキ目は施さない。体部最大幅18.5cm、厚み13.9cm。13は玄室の左手前隅部で側壁の腰石に立て掛けた状態で出土した(図版8-1)。一方の把手を欠くだけの完形品である。口頸部は外反して開き、口縁部外面に稜をもち端部は尖り気味になる。体部は一面を平坦にして、もう一面は大きく張り出しており、半球形を呈する。体部外面には全面にカキ目調整をおこなうが、平坦面上はカキ目の上から、縦横に引いた直線を交差させて網目文状に暗文を入れている。把手は鍵形で、一方が剥離して失われている。口径9.5cm、体部最大幅19.6cm、厚み12.6cm、器高22.7cm。14の口頸部は稜を境にして下部は外反、上部は内湾する。体部は全面にカキ目調整で仕上げる。口径6.6cm、体部最大幅16.5cm、厚み11.3cm、器高19.1cm。

甕(15~18) 15は、破片が3号墳の周溝から斜面下の19号墳や1号住居跡までの広い範囲から出土した。出土割合からここでは一応5号墳に伴うものとしておく。短く開く口頸部は外面中程に稜をもち、口縁部と頸部とを分けている。体部外面は平行文タタキの後にカキ目調整、内面には当て具痕が残る。色調は灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。16~18は3点とも中形品で、外面は平行文叩き板によるタタキの後カキ目調整を施し、内面には青海波文状に当て具痕が残っている。16は口縁部を外側に折り曲げて肥厚させている。18は口縁端部の一方向の5cm程の範囲だけにキザミを入れる。口径22.1~24.7cm、胴部最大径43.6~45.5cm、器高47.0~47.2cm。

鉄器

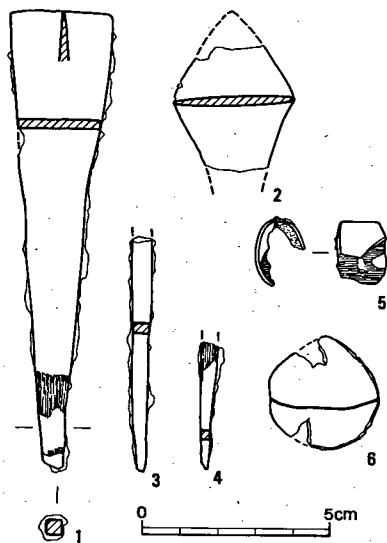
鉄鏃(1~4) 1は方頭斧箭式の鏃。残存長12.2cmで29.8g。2は圭頭斧箭式の鏃。3・4は鏃の頸部であろう。

縁金具(5) 刀子の縁金具である。幅1.2cm、厚さ1mm程で、刃部側を内側に折り曲げている。木柄の痕跡が残る。

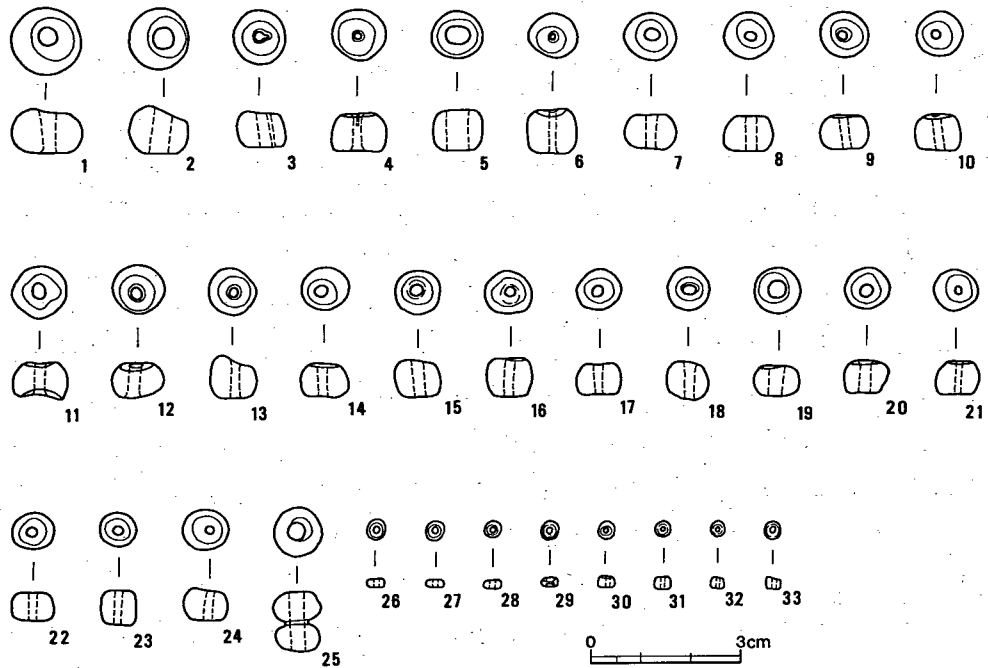
不明鉄器(6) 直径2.9cm、厚さ0.5mm程で、ほぼ円形を呈するが一方がわずかに尖る。

玉類

玄室奥右の床石上からまとまって出土した。全てガラス製であり、コバルトブルーの色調を呈する。



第32図 5号墳出土鉄器実測図 (1/2)



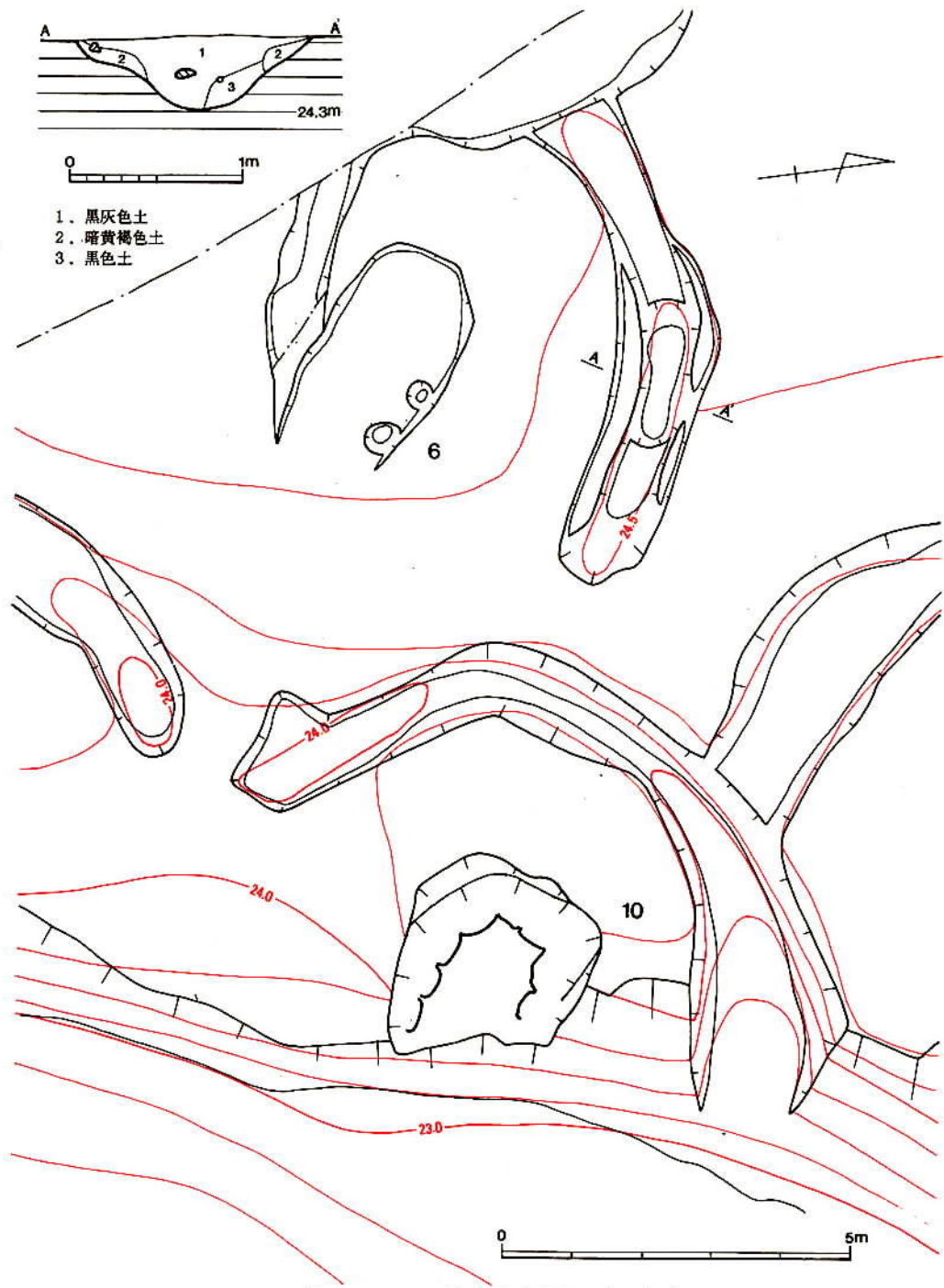
第33図 5号墳出土玉類実測図 (2/3)

丸玉(1~25) ガラスの気泡は孔と平行に伸び、両端面は面取りをする。25は2個の丸玉が完全に切れずに、いわゆる「連玉」状になったもの。質的には他の玉と違いはない。

小玉(26~33) 丸玉同様気泡は孔と平行に伸びる。丸玉と同質と思われるが、小玉の方が色が薄く見える。厚みの違いからくる透明度の差であろう。26は実測中に割れてしまい、写真で示す事が出来ない。29は砂粒を含んでいる例。

表2 5号墳出土玉類計測表

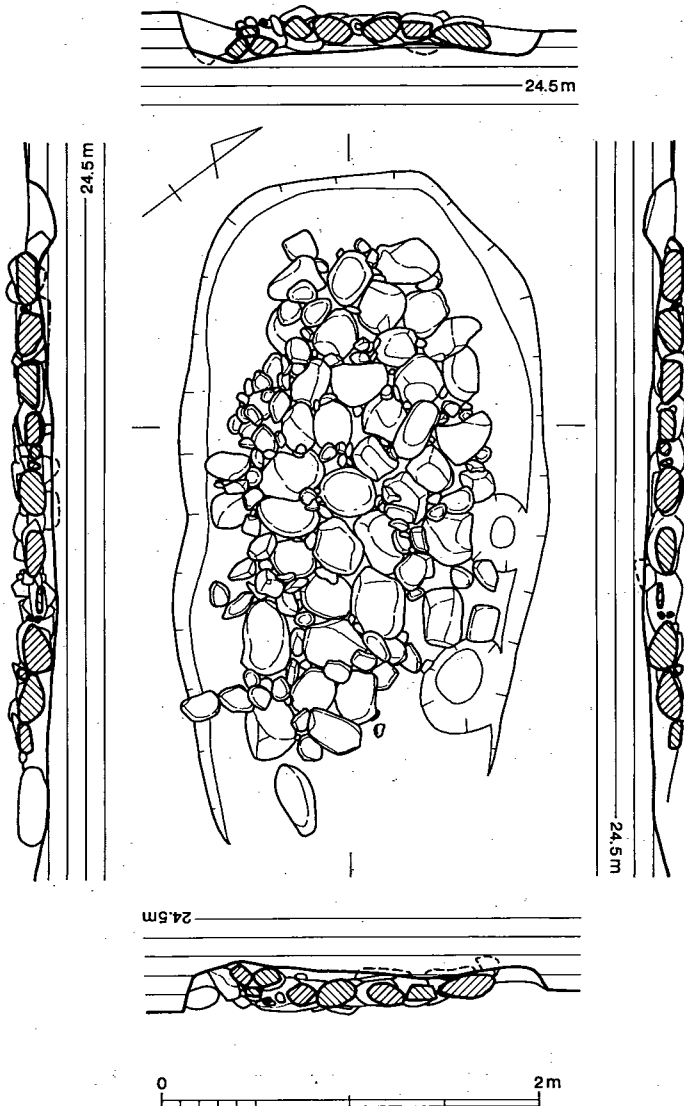
No.	径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	No.	径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	13.0×13.5	2.0×3.0	7.5~8.5	2.0	少風化	18	8.5×9.0	2.0×2.5	7.0~7.5	0.7	
2	12.0×12.0	3.5×4.0	7.0~9.5	1.7		19	8.5×9.0	2.5×3.0	5.0~5.5	0.6	
3	10.0×11.0	2.0×2.5	7.0~7.5	1.2		20	8.5×9.0	2.0×2.5	6.0~6.5	0.7	
4	9.5×10.5	1.5×1.5	6.5~7.5	1.1	風化	21	8.0×8.5	1.5×2.0	7.0	0.6	少風化
5	9.0×10.0	3.5×4.5	7.5~8.0	0.9	少風化	22	7.0×8.0	2.0×2.0	5.0~5.5	0.5	
6	9.0×10.0	1.5×1.5	8.5~9.0	1.2		23	6.5×7.0	1.5×2.0	6.5	0.5	
7	9.5×10.0	2.0×2.5	6.5~7.0	1.0		24	7.5×8.5	2.0×2.0	5.5~6.5	0.6	
8	9.0×9.5	2.0×2.0	6.5~7.0	1.0		25上	9.5×9.5	3.5×3.5	5.5~6.0		1.1 連玉状
9	9.0×9.5	2.0×2.0	6.0~6.5	0.9		下	9.0×9.5	3.0×3.5	4.5~5.0		
10	9.0×9.0	2.0×2.0	6.5~7.0	0.9		26	3.5×3.5	1.5×1.5	2.0	—	欠損
11	10.0×11.0	2.5×3.0	6.5~7.0	1.0	風化	27	3.5×3.5	1.0×1.0	1.5	—	
12	9.5×10.0	2.0×2.5	6.0~6.5	0.8	少風化	28	3.0×3.5	1.0×1.0	1.5~2.0	—	
13	9.0×9.5	2.0×2.0	6.5~8.0	0.9	少風化	29	3.5×3.5	1.0×1.0	1.0~1.5	—	砂粒含
14	8.5×9.5	2.0×2.5	6.0~6.5	0.7		30	3.5×3.5	1.0×1.0	2.0~2.5	—	
15	8.5×9.0	2.5×3.0	6.5~7.0	0.7		31	3.0×3.0	1.0×1.0	2.5	—	
16	8.5×9.5	2.0×2.0	7.5	0.9		32	3.0×3.0	1.0×1.0	2.0~2.5	—	
17	8.0×8.5	1.5×2.5	6.0	0.6		33	3.0×3.0	1.0×1.0	2.0~2.5	—	少風化



第34图 6·10号墳地形測量图 (1/100)

6号墳 (図版8・9, 第34・35図)

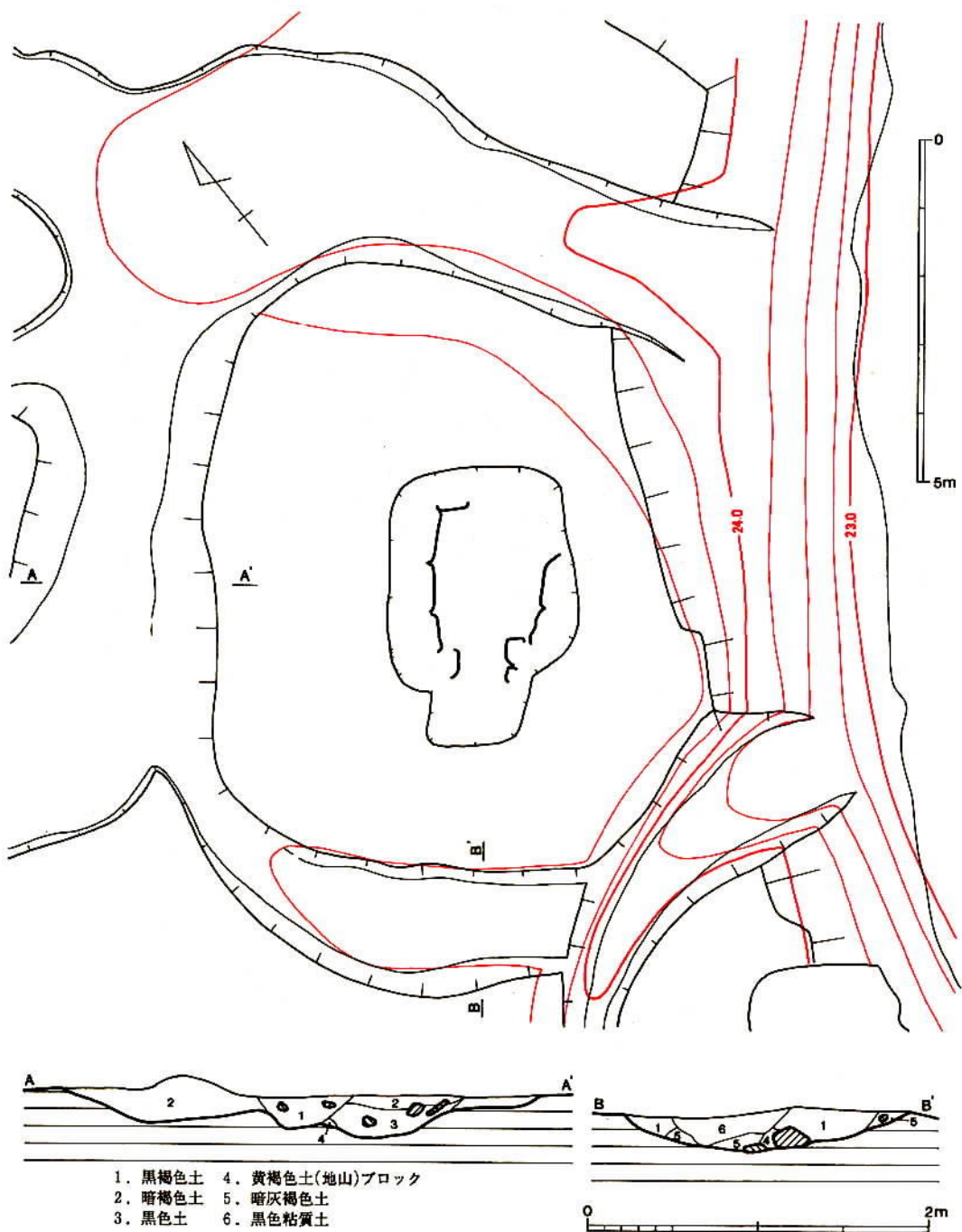
4号墳の南側, 5m離れた位置にある。古墳の南西側は調査区の境にあたり, 周溝の一部は調査区外にある。周溝は東側で7号溝と重複し, また東側から南側の部分は削平され失われているが, 本来は9・10号墳の周溝と接していたものと思われる。周溝の形から円墳と考えられ, 墳丘の規模は周溝の一部が失われているため正確な数値は出せないが, 石室が中心にあるものと考えれば縦方向は7~8m, 横方向は6.5m程になるであろう。



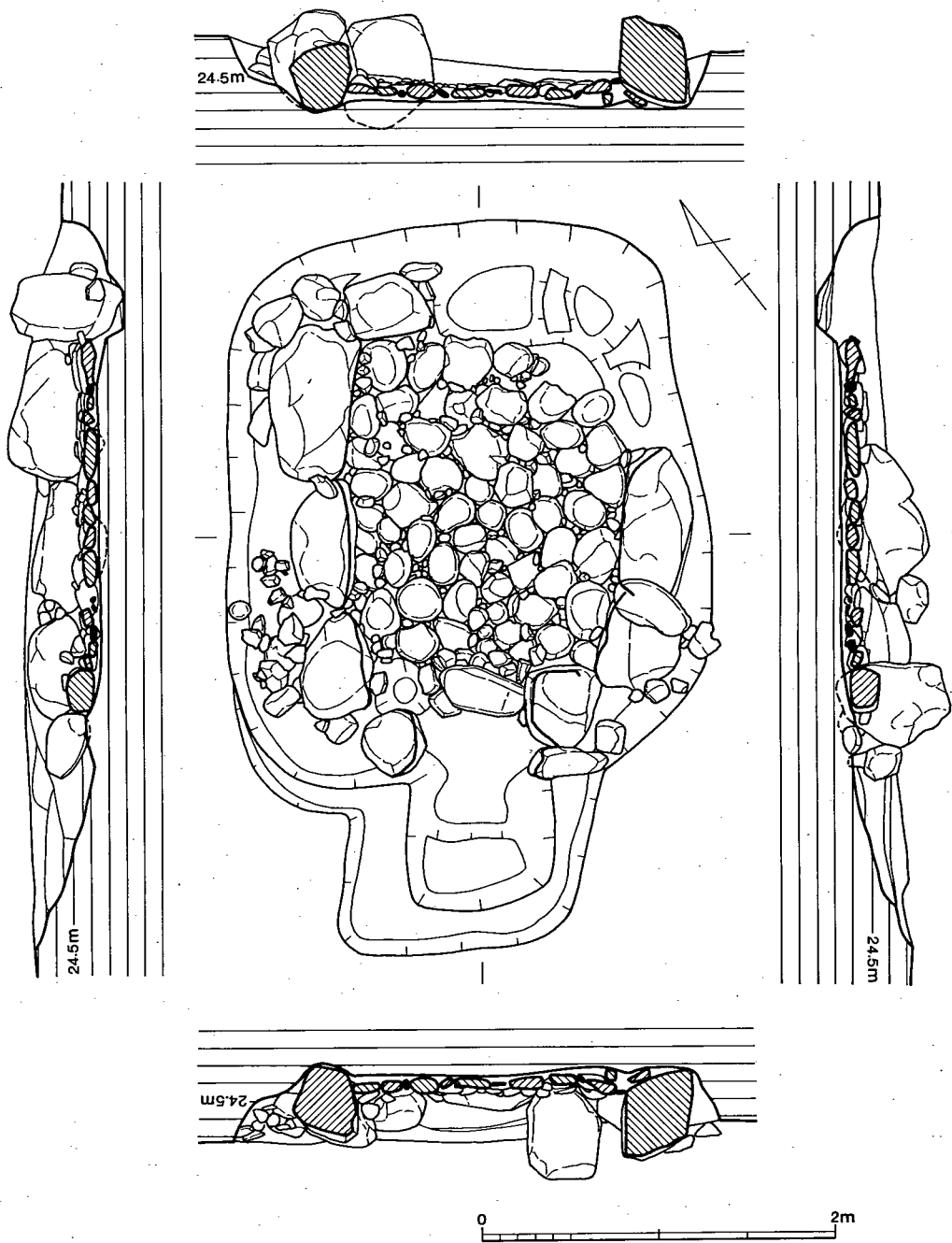
第35図 6号墳石室実測図 (1/40)

石室は周壁の石材は全て失われて床石のみが辛うじて残るが, その床石も手前部分は削平されている。石室床面には20~30cm大の扁平な河原石を敷き詰め, その隙間に10cm内外の石が残る。石室の平面形は床石の状況から判断して, 3・10・13と同様に前後の幅が狭く中程の幅の広い, やや胴の張った形になると考えられる。石室主軸はN-54°-Wで, 幅は奥壁側が約90cm, 中程の幅の最も広がった部分で約130cmで, 手前側は不明。石室長も不明であるが, 現状で310cmあることから, それ以上

にはなるであろう。石室の手前側が失われているため、玄門部の位置・構造等は全く不明である。遺物の出土はなかった。



第36図 7号墳地形測量図 (1/100)



第37图 7号填石室实测图 (1/40)

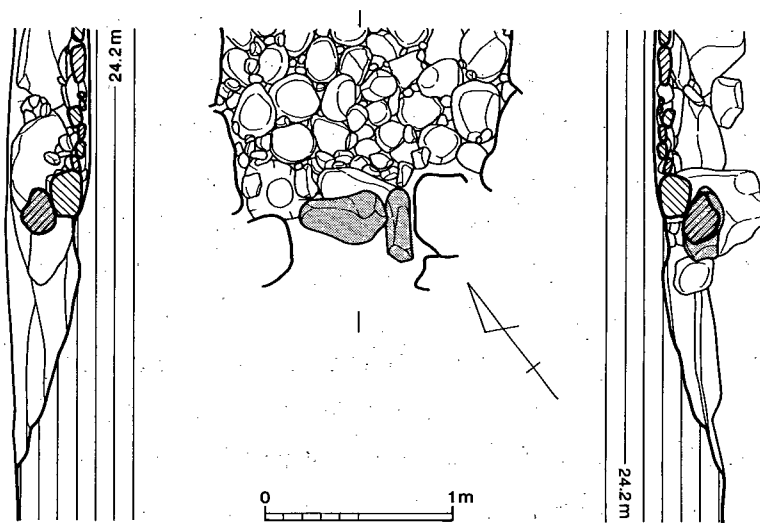
7号墳 (図版9・10, 第36・37図)

上位段丘の端部, 斜面との境に位置する。この斜面は上端部を削り一段下に幅2m程の平坦面を造り, 調査以前は農道として利用されていた。この掘削の際に7号墳は東側周溝と墳丘部の一部が破壊された。このほか8・9・10・11・15号墳では, これによって石室の一部までが壊されている。7号墳の周溝は北西側が4号墳周溝と, 南側が10号墳周溝と, 北東側は3号溝とそれぞれ重複する複雑な関係にある。このため7号墳本来の墳丘がどの部分までであるのかを判断する事は困難であるが, 墳丘は円形で, 縦9m, 横8m程の規模であったと思われる。

石室周壁の腰石には, 他の古墳石室が偏平な石材を立てて構築しているのに対して, 7号墳では幅広の塊状の石材を使用している。奥壁の右半部と右側壁の一部の石は抜き取られているが, 痕跡から奥壁に3個, 左右の側壁にそれぞれ3個の石を並べて腰石としていたと判断出来る。奥壁の腰石は縦位に立て, 側壁の腰石は横位に置く。この石室の場合は腰石に幅の広い塊石を使用していることから, 2段目以降も偏平石の小口積みせず, 塊石で積み上げていた可能性がある。袖石は, 奥壁の腰石と同様に河原石の塊石を縦位に立てているが, 左袖石は既に抜き取られている。左右袖石の手前には各一個の小さな石がある。袖石を立てる時の根締めとしたものであろう。

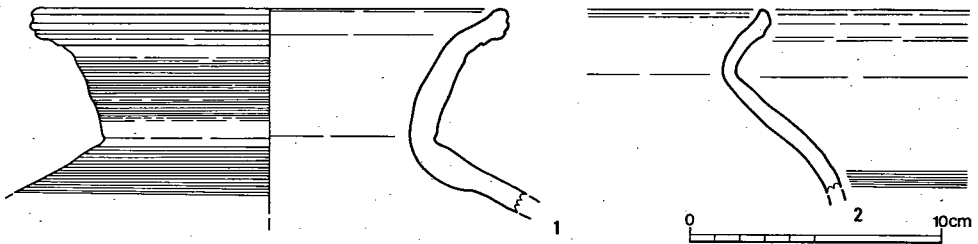
玄室床面は15~20cm大の偏平な河原石を敷き詰め, 5~10cm大の小石がその隙間を埋めている。また, 左右袖石の間には框石を置く。玄門部幅約60cm。また, 框石上には閉塞石の一部が残っていた(第38図)。石室の主軸はN-38°-Eで, 玄室は長さ185cm, 奥幅約130cm, 前幅130cm, 中央幅155cmの, 幅広で胴の張った平面形である。

7号墳には周溝と石室とを結ぶ墓道がない。その代わりに, 玄門部の手前には前庭部状の空間がある。幅140cm



第38図 7号墳石室閉塞石実測図(1/40)

程で, 長さは框石の手前から測って130cmあり, わずかに階段状に段の付いた傾斜で手前が高くなっている。5号墳と同様, 斜め上方から石室内に入る構造となっているが, 5号墳と違って前庭部側壁はもたない。

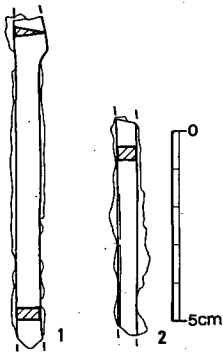


第39図 7号墳出土土器実測図(1/3)

出土遺物(図版39, 第39・40図)

須恵器

甕(1・2) 1は周溝から出土した。頸部の外面にまでカキ目がおよぶ。2は7号墳東の斜面部分から出土した。頸部の短いタイプ。体部は内外面とも回転横ナゲ調整で仕上げる。灰白色を呈し、やや軟質である。



第40図 7号墳出土鉄器実測図(1/2)

鉄器

鉄鎌(1・2) 1は片刃箭式鉄鎌の身部から篋被部の一部である。

2も篋被部の一部であろう。

8号墳(図版11, 第41・42図)

上位段丘面と斜面との境で検出した。上位段丘面上の古墳としては調査区内で最南に位置する。西側の一部は調査区外に当たるため、未調査である。墳丘と石室の上半部は他の古墳同様削平されて既に無いが、8号墳では更に石室および墳丘部の東半部が下を通る農道の掘削時に破壊され、失われている。周溝は北側で9号墳の周溝と合流しており、9号墳とは周溝の一部を共有して連なった形となっている。検出したわずか一部の周溝から墳丘の規模を推測することは困難であるが、墳丘の中心に石室があるとするならば、径6m内外程度の小円墳であったと判断する事が出来る。

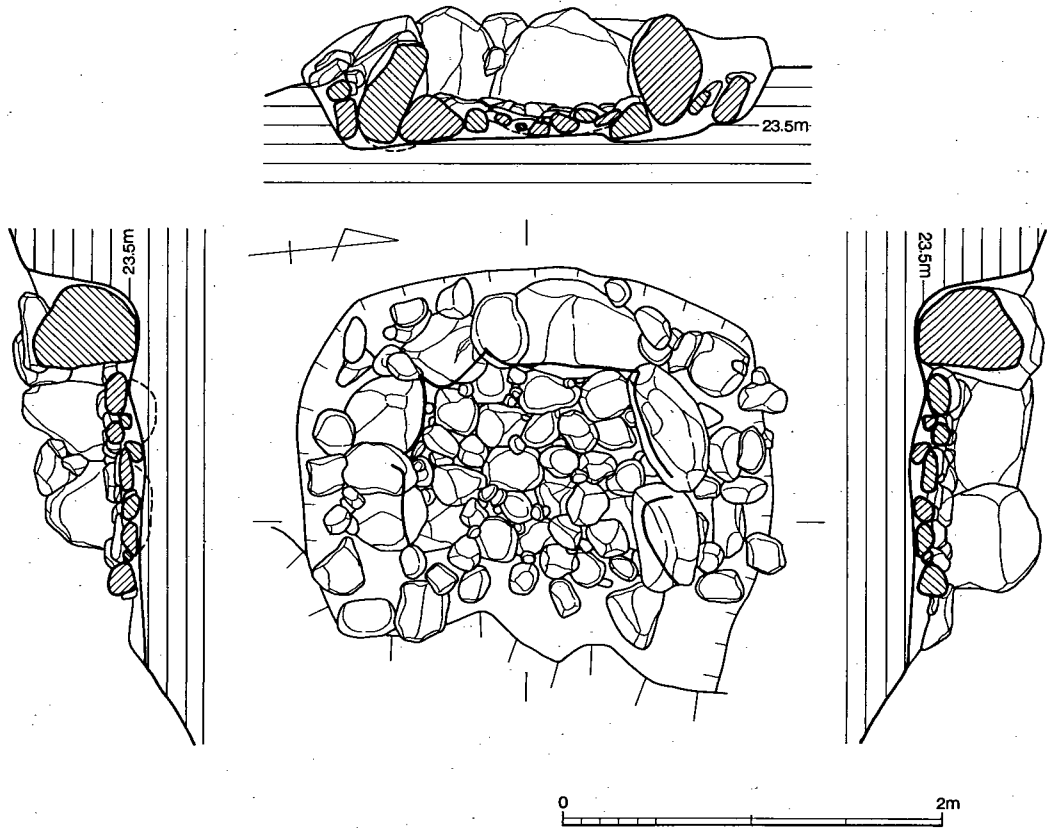
石室は東半部が破壊されているが、奥壁2個と左右の側壁各2個の腰石が残る。6個の腰石は石材の大きさは不揃いであるが、縦位・横位に関係なく上場の高さを合せて立て並べる。

石室床面には15~30cm大の石を敷き並べているが、並べ方が粗雑で上面には凹凸がある。石の隙間には小石が詰まっている。床石の腰石と接する部分には比較的大きめの石を配し、一方腰石と外側の墓壇壁との隙間には石を詰めて、両側から腰石を固定している。

石室主軸はN-84°-Wで、玄室長は現状で150cm程が残り、幅は奥壁側110cm、手前部分で140



第41图 8·9号墳地形測量図(1/100)



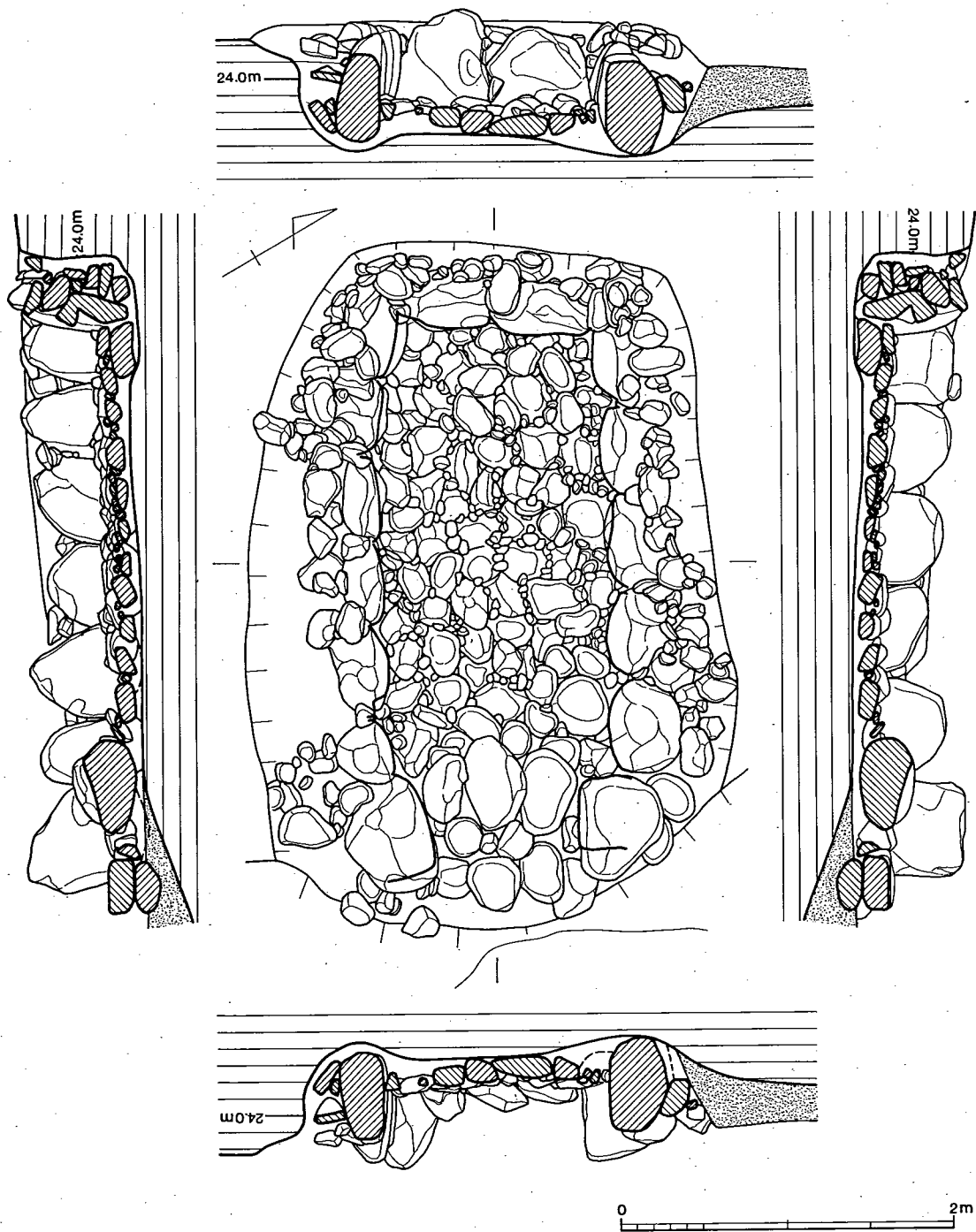
第42図 8号墳石室実測図 (1/40)

cmと奥が狭い。玄門側で再び狭くなる胴張りの平面形であったと思われる。遺物の出土はなかった。

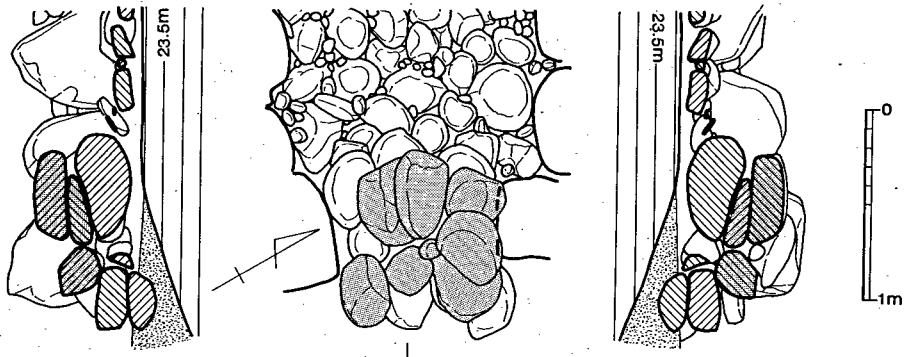
9号墳 (図版12・13, 第43・44図)

8号墳の北側に周溝の一部を共有して隣合う。上位段丘面と斜面との境部に当たる。周溝は南側で8号墳周溝と重複し、北側では削平され残っていない。本来は10号墳周溝と重複していたものと考えられる。さらに北西側で6号墳周溝と接していた可能性もある。周溝は現状で幅110~160cm, 深さは深い所で40cm程ある。墳丘は削平されて残っていないが, 周溝から復元される墳丘の規模は, 縦方向は手前側が破壊されているため不明ながら, 石室が墳丘の中心にあると仮定して7~8m, 横方向は7m程になる。

石室は, 上半部は削平され失われており, 周壁の腰石以下の部分だけが残る。腰石には扁平な河原石を使用し, 奥壁に2個, 右側壁5個, 左側壁は6個の石を縦位に立て並べる。袖石は



第43号 9号填石室实测图 (1/40)



第44図 9号墳石室閉塞石実測図(1/40)

周壁腰石よりも厚みのある塊石を使用しており、左右にそれぞれ1個を側壁腰石より20cm程内側に張り出させて立てる。袖石より手前の構造については、既に破壊されており不明である。

玄室床面には20~30cm大の偏平な石を敷き並べ、その上に5~10cm大の小石を敷く。左右の袖石の間には玄室床石より大きい30~50cm大の石を並べ、玄室床面より10cm程高くなっており、1・3・4・19号墳と同様にこの部分全体で框施設と考えられる。

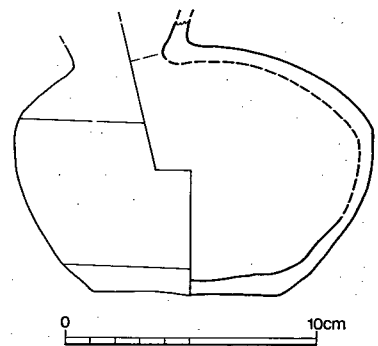
石室の主軸はN-62°-W。玄室長は框施設の手前までを玄室と考えれば250cm、袖石までとすれば265cmとなり、幅は奥壁側115cm、手前側130cmで、ほぼ長方形の平面形となる。左右両袖石間の幅は85cmで、框施設の長さは100cm程である。

なお、この古墳は整地を行なった上で石室を構築した可能性がある。石室部分では黄褐色土の地山は東に低く傾斜しており、この低い部分に黒褐色土を積んで平坦面を造り(第43図アミ部分)、石室墓壇はその上から切り込んでいる。この時期の石室なら、地山に墓壇を掘って石室を構築し、その上に墳丘を盛り上げるのが一般的であり、墓壇掘り込み以前の黒褐色土の盛土は墳丘積土の一部ではなく、石室構築のための整地と考えられる。

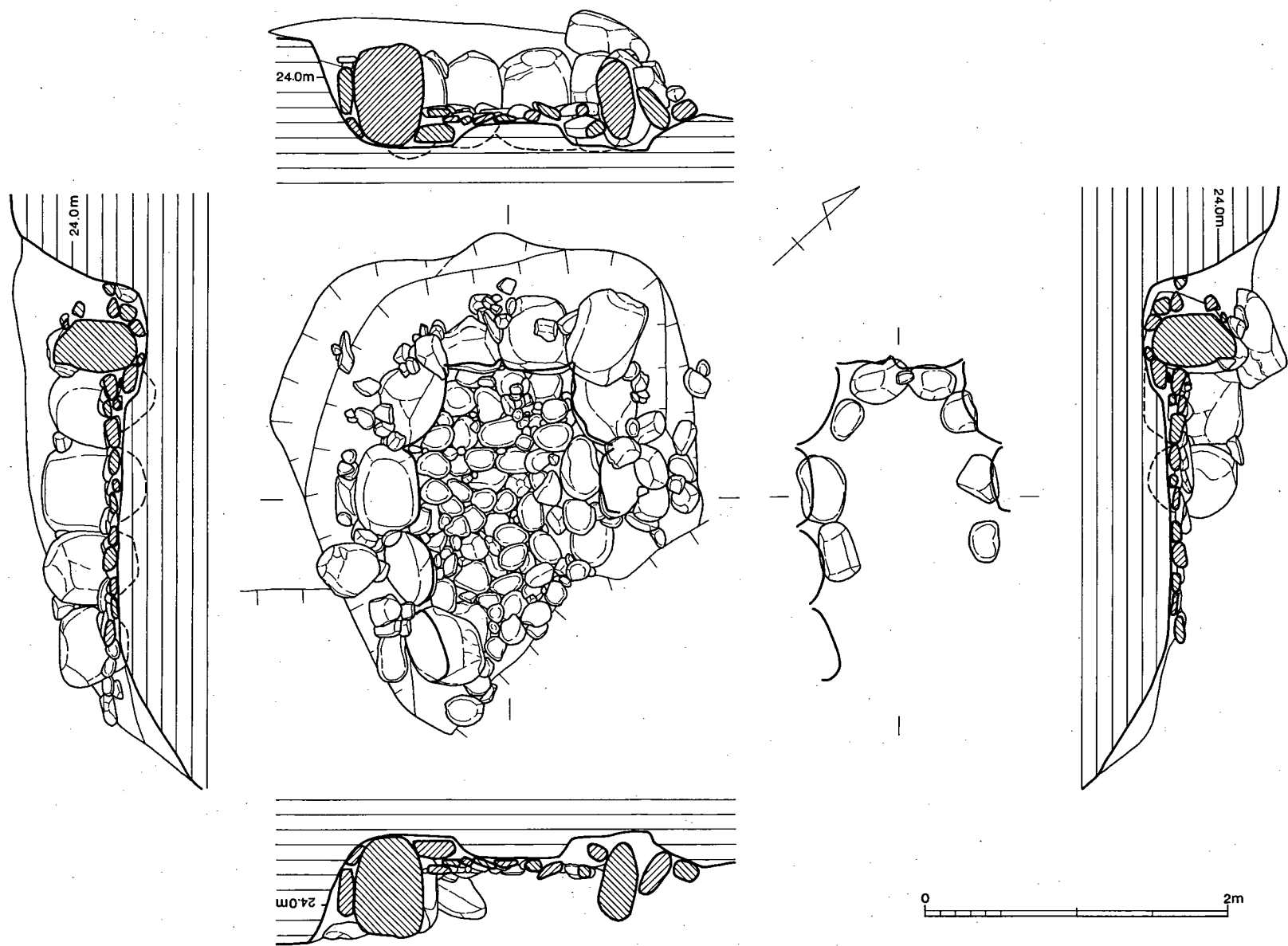
出土遺物(図版39, 第45図)

須恵器

平瓶 体部は肩に鋭い稜をもつ。稜の部分で直径14.1cm。底径7.4cm。



第45図 9号墳出土土器実測図(1/3)



第46图 10号填石室实测图 (1/40)

10号墳 (図版13・14, 第46図)

7号墳と9号墳の間にある。周溝は北側で7号墳の周溝と重複し、南側は削平されているが本来は9号墳の周溝と重複していたと考えられ、さらに西側では6号墳周溝と接していたと思われる。古墳の東側は斜面にあたり、墳丘部分と石室の一部は削り取られている。そのため古墳の規模は不明であるが、残存している周溝から復元すると墳丘は縦方向・横方向共およそ7m程の円墳であったであろう。

石室は手前側が失われているが、奥壁2個、右側壁2個、左側壁4個の腰石が残る。腰石には扁平なものや厚みのあるものの二種の石材を使用し、全て縦位に立てて並べる。手前側が失われているため、玄門部等の構造は不明である。

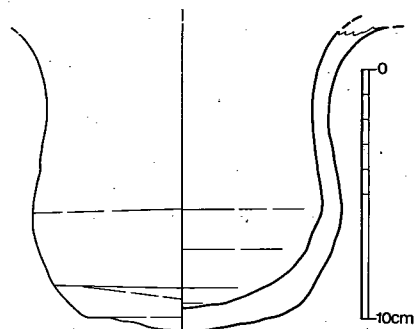
床面には15~30cm大のかなりばらつきのある扁平な石を敷き並べ、上に小石を敷く。床石を全て取り除くと、周壁腰石を安定させるために内側から詰めた根石が、各腰石に対して1個ずつの割合で現れた。一方腰石の外側からは、墓壇との隙間に石を詰めて固定している。つまり10号墳石室の場合はまず周壁の腰石を立て並べ、床石はその後に敷いてる。同様に腰石の内側から根石を詰めて固定した上で床石を敷く構造は3・12・17号墳でも検出している。

石室の主軸はN-48°-Wで、玄室長は現状で240cmが残っている。玄室幅は奥壁側が85cm、中央部120cmで、手前側で再び狭くなっており、胴張りの平面形をしていたと考えられる。

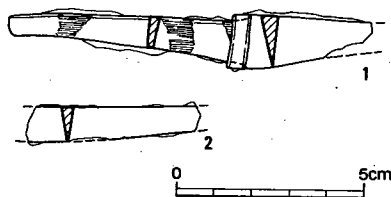
出土遺物 (図版39, 第47・48図)

須恵器

壺 頸部は大きく外反する。体部と底部の境には稜がつくが、完全な平底にはならない。体部内外面は轆轤を使用した回転横ナデ調整、体部外面下半は回転ヘラ削り調整で、底部内外面はナデ調整で仕上げる。淡灰褐色から茶褐色を呈し土師質であり、あるいは土師器である可能性もある。



第47図 10号墳出土土器実測図 (1/3)



第48号 10号墳出土鉄器実測図 (1/2)

鉄器

刀子(1・2) 1は先端部を欠失する。区部の片面には縁金具が残っている。現存長9.7cm、茎長6.4cmで、茎には木柄の痕跡が残る。2は木柄に巻いたと思われる樹皮の痕跡が残っている。

11号墳 (図版15, 第49図)

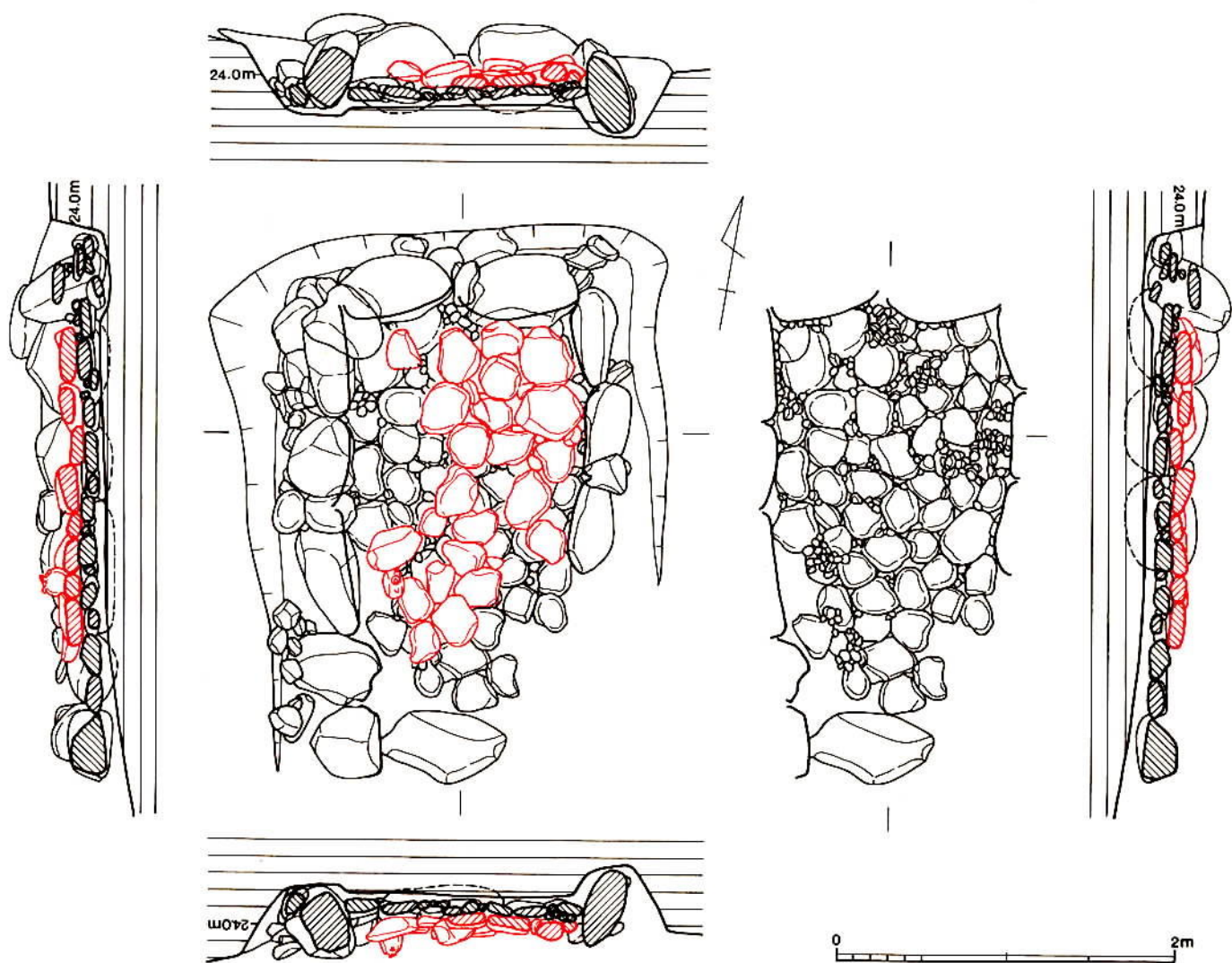
5号墳の南東にあり、上位段丘面の端部で斜面との境に位置する。墳丘と石室の上半部が削平され失われているのは他の古墳と同様であるが、11号墳ではさらに周溝も検出する事が出来なかった。残存しているのは僅かに石室下半部の周壁腰石より下部分だけで、それも石室手前右側の斜面に当たる部分では削り取られている。周溝が残っていないため、墳丘の規模を復元することは不可能に近いが、2～10号墳のように隣合う古墳同志が互いの周溝の一部を共有しながら繋がっているのであれば、11号墳石室から5号墳周溝・7号墳周溝(3号溝)までの距離を測って、およそ7m程の墳丘を推定する事が出来る。

石室は、奥壁に2個、左右の側壁にそれぞれ3個の扁平な河原石を横位に立てて腰石としてゐる。腰石は外側の墓墳との隙間に石を詰めて安定させている。また、右側壁はその手前が失われているが、左側壁を見ると腰石の手前には同じく扁平な石2個を、小口部を内側に向け平置きにして並べている。この2個の石は、腰石部分と石の置き方が違う事、また腰石よりも10cm程内側に張り出している事から、袖石と考えられる。玄室の周壁は最下段に腰石を据え、その上は扁平河原石を小口積みで積み上げ、袖部は基底部から小口積みで積み上げたものと考えられる。

この石室は床の構造が特殊で、上下に2層の床面がある。下層の床面は20～30cm大の扁平な河原石を丁寧に敷き並べ、その上に5cm内外の小石を敷く。この直上に上層の床石を敷いているため上からの攪乱を受けずに済んだためか小石は比較的良く残っており、これを観ると小石は並べた扁平石の隙間に詰めたものではなく、上から全体に敷いて見かけ礫床状にしたものである事が判る。床石の手前には1個の框石が置かれているが、それは袖石の真下に来るのではなく石一つ分手前側にある。今回の調査では3号墳石室が同じく袖石より外側に框石(框施設)があった。

石室主軸はN-9°-Wで、8～10号墳の様に斜面の下方向に開口するわけではない。玄室長は框石までを玄室と考えれば230cm、袖石までとするなら190cmであるが、前者の方が適当と考える。幅は奥壁側で130cm、手前側で120cmのほぼ長方形の平面形で、玄門部幅は破壊されているものの左右対称と考えて90cm程であろう。

上層の床石は25～30cm大のやはり扁平な石を、下層の床面との間に間層を入れずに直ぐ上に敷き並べているのであるが、残存状態は悪く石室の左奥と手前側では床石が失われている。下層と同様にその上に小石を敷いたかは不明である。結果的に床石の厚さ分(約10cm)床面が高くなった事になり、下層の床面より高かった框石の上面が、上層の床面では同一レベルか逆に若干低くなる。また、周壁は腰石を立てた上に扁平石を小口積みにして構築したであろう事は先述の通りであるが、上層の床面からでは腰石がほとんど判らなくなって、石室内からは下から小口積みをしているように見えたであろう。

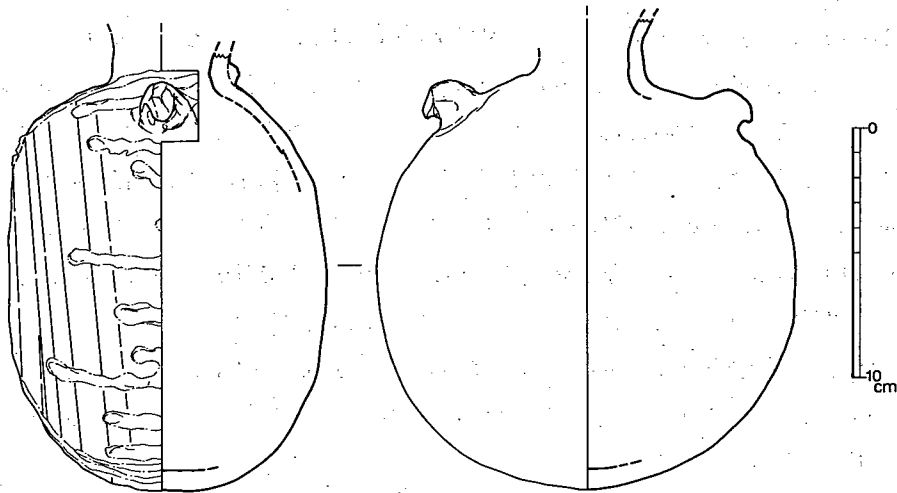


第49图 11号填石室实测图 (1/40)

出土遺物（図版39，第50図）

須恵器

提瓶 玄室上層床面上の左隅部付近に立てた状態で出土した。口頸部を欠損する以外は完形である。体部は一面はカキ目調整を，もう一面には回転ヘラ削り調整を施す。カキ目調整をした面は全面に自然釉が掛かり，それが反対面にまで垂れている様子は見事であり，あたかも意図的にしたようである。肩部には一対の鍵状把手が付いている。頸部径4.7cm，体部で幅16.1cm，厚さ12.7cm。



第50図 11号墳出土土器実測図（1/3）

12号墳（図版16～19，第51・52図）

11号墳の北東にある。11号墳と同様に上位段丘上面と斜面との境に立地し，墳丘と石室上半部は削平されており，周溝も検出する事が出来なかった。11号墳と同様の方法で復元するならば，墳丘はやはり径7m程の規模になるであろう。

石室は今回の調査で検出した19基の古墳のなかで最も残り具合が良く，周壁の石積みは3段程が残っている。玄室の周壁は偏平な石材を奥壁に2個，左右の側壁にそれぞれ3個ずつ横位に立て並べ，2段目から上は同じく偏平な河原石を持ち送りながら小口積みに積み上げる。腰石は奥壁と側壁との間に角を付けるが，2段目以降では角を付けずに丸く並べる。玄門部には左右に各1個の石材を縦位に立てて袖石とする。袖石高は床面から約50cmで袖石上部の構造は不明。

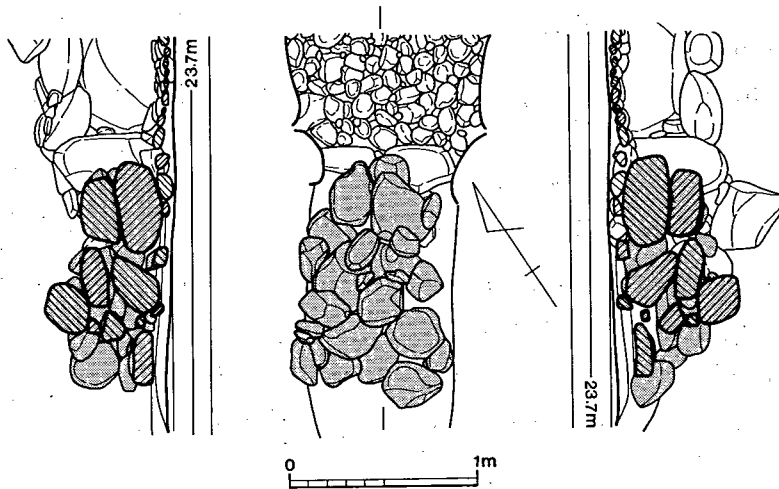
玄室の床には10～25cm大の偏平な石を敷き詰める。他の古墳の石室と比べて，床石が小振りなのが特徴的である。床石の隙間には5cm以下の小石が入る。床石を全て取り除くと，下層か

ら周壁腰石の下に内側から詰めた根石が検出された。床石の下層から根石を検出した石室には他に3・10・17・19号墳がある。腰石と墓壇壁との隙間に詰めた裏込め石は、腰石を外側から固定するのと同時に、一方では腰石の上に平積みにした2段目の石を下から支える役割を合わせ持っているようである。

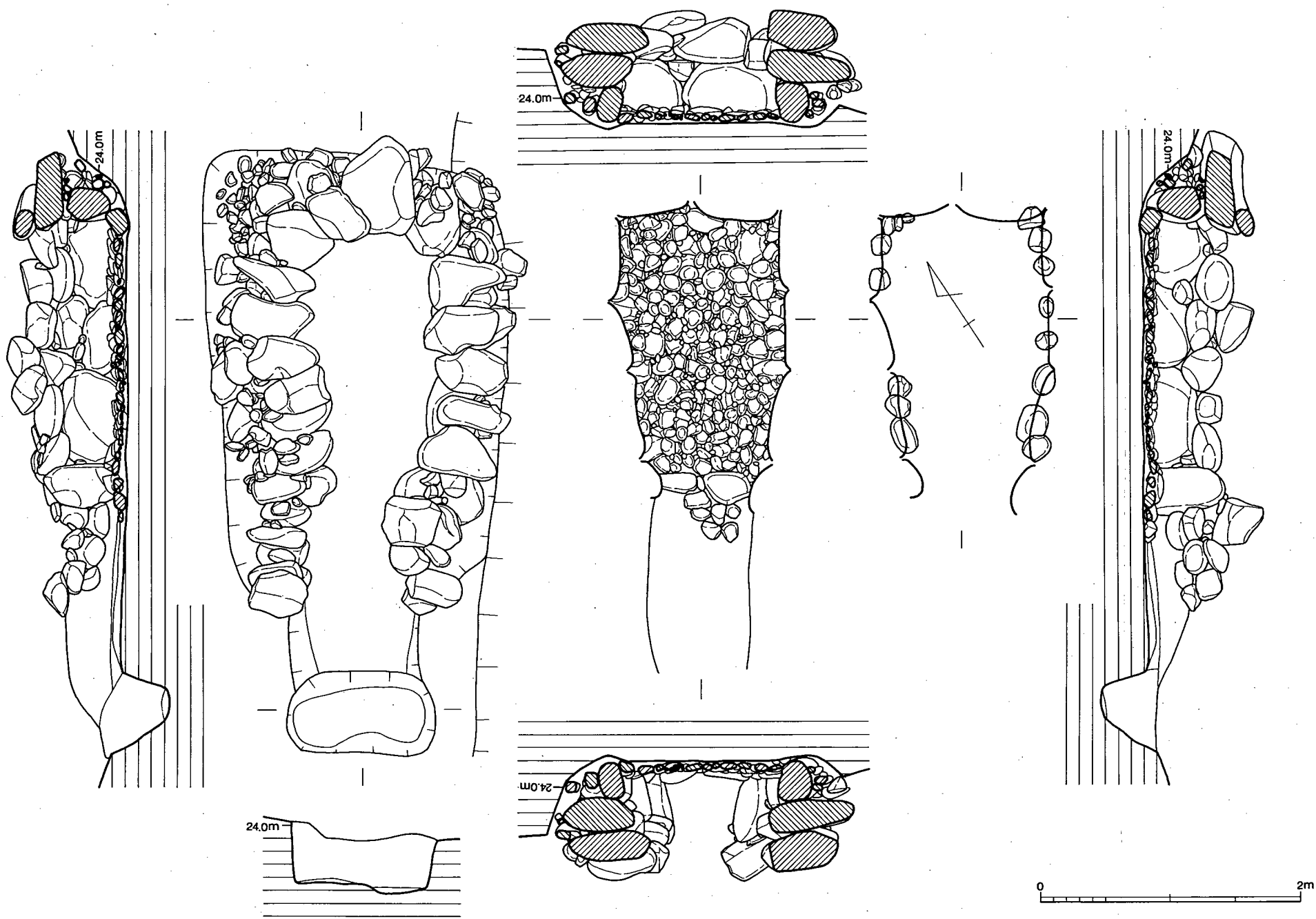
袖石の下には2個の縦長の石を並べて框石としている。2個の石の間には小石を入れて幅を調整する。石室はN-33°-Eを主軸に取り、斜面に対して直行して南西方向に開口する。玄室の長さは框石までで200cm、幅は奥壁側120cm、玄門側95cm、玄門部70cmで羽子板形の平面形となる。高さは現状で80cm程ある。

羨道部側壁は、玄室より小振りの石を一段目から小口積みにしているが、床面より15~20cmほど高い所から積み始める。また、羨道部の框石の手前に接した部分には、僅かながら敷石が残っている。玄室床面の敷石と同様の石を使用し、レベルも玄室床面と同じである。この石敷が本来どこまで手前に広がっていたかは不明。羨道部は下場で幅80cmで、框石から85cmの所までは側壁の石が残り、その手前部分は幅は変わらないが素掘りの墓道状になる。閉塞石は框石から羨道部側壁石積みの残る部分を越えて手前の素掘り部分にまで置かれていた(第51図)。この部分までを羨道に入れて考えるならば、框石から125cmという事になる。

羨道(墓道)の手前側には、長軸110cm、短軸60cm、深さ55cmの平面小判形の土坑が主軸を石室主軸に直行させて掘られている。遺構の性格は不明ながら、位置からみても12号墳に伴うものである事は間違いないであろう。



第51図 12号墳石室閉塞石実測図(1/40)



第52图 12号填石室实测图 (1/40)

出土遺物（図版39，第53・54図）

須恵器

壺(1) 羨道の
手前にある土坑か
ら出土した。脚付
壺の口頸部と思わ
れる。ほぼ直立し
て立ち上がり、外
面にはカキ目調整
を施し下半部には
沈線が入る。復元
口径10.3cm。

提瓶(2) 玄室
右手前の側壁と袖
石との境部分の床
石上に置かれてい
た（図版17-2）。
完形品である。口
頸部は直線的に広
がり、口縁上端部
は面取りをする。

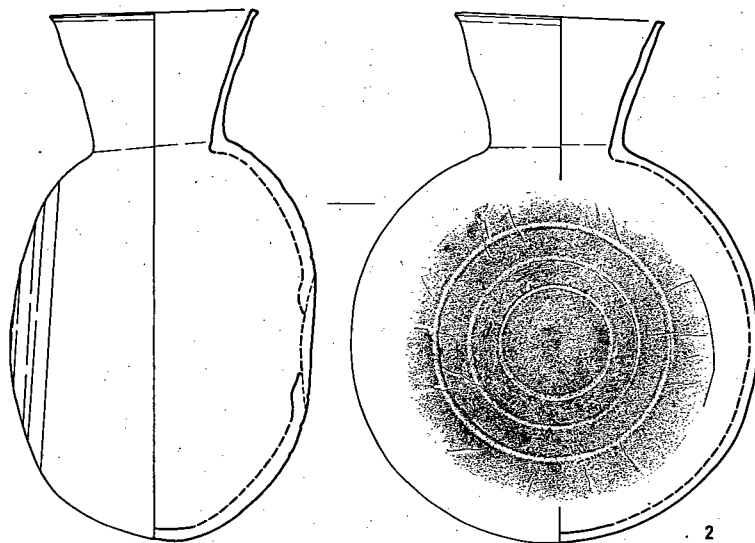
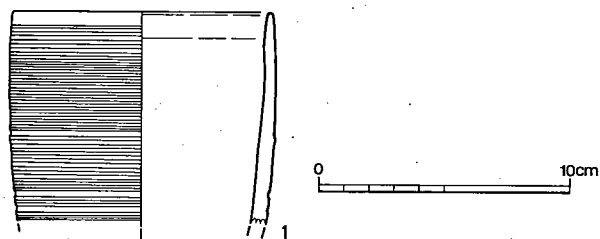
体部外面は一面は
回転ヘラ削り調整

で仕上げ、もう一面（被蓋部側）は回転ナデ調整
の後同心円状に沈線を入れる。肩部には把手が付
かない。口径8.3cm，頸部径5.3cm，体部幅16.2cm，
体部厚さ12.1cm，器高21.0cm。

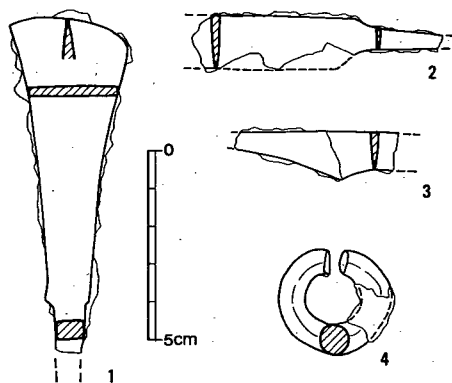
鉄器

鉄鏃(1) 玄室床面から出土した。方頭斧箭式
の鉄鏃である。頭部から関籠被部までで7.6cm残存
長8.9cm，重さ21.1g。

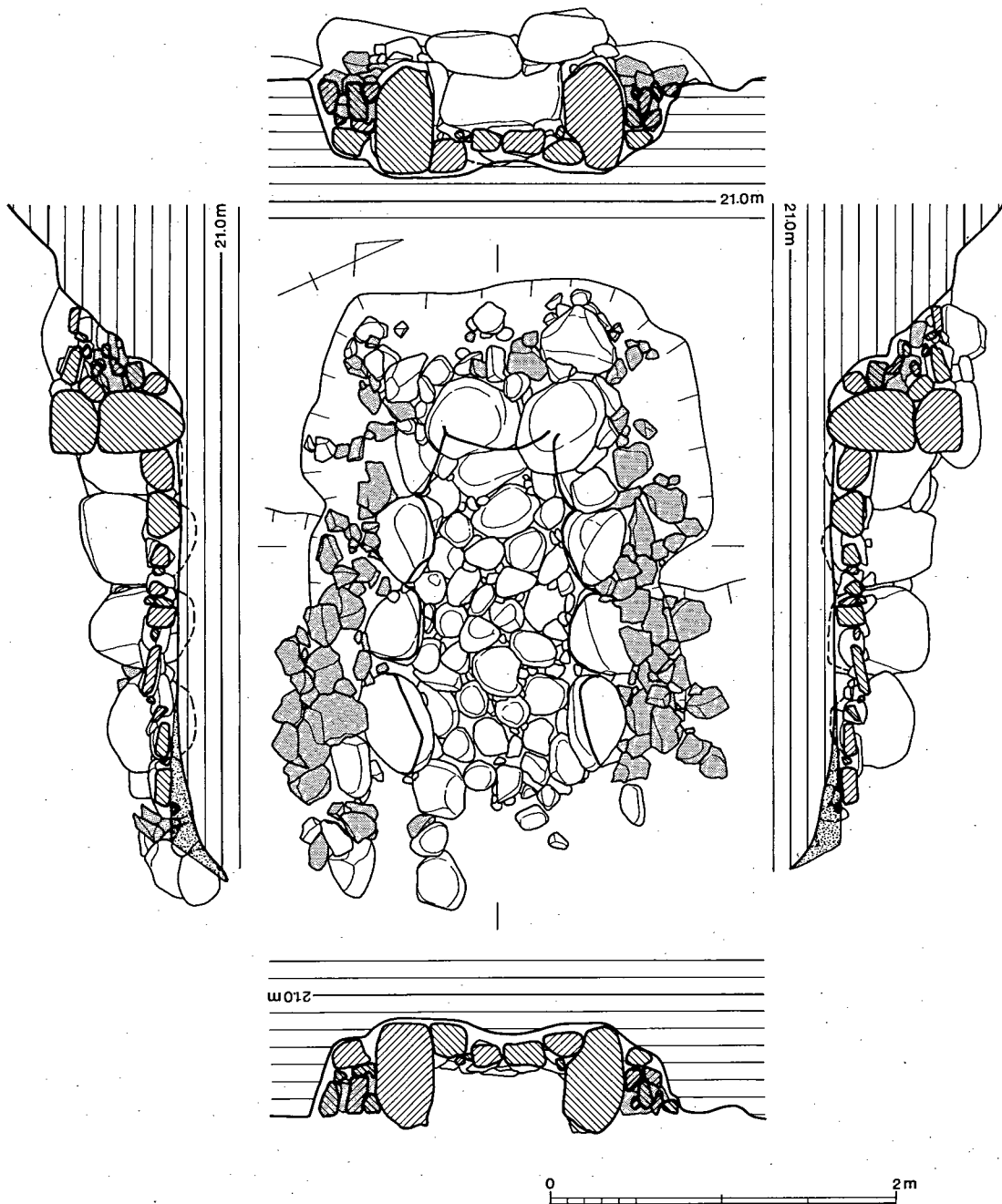
刀子(2・3) 刀子の刃部から茎にかけての部
分であろう。



第53図 12号墳出土土器実測図（1/3）



第54図 12号墳出土鉄器・耳環実測図(1/2)



第55图 13号填石室实测图 (1/40)

装身具

耳環(4) 石室内床面上で出土した。銅地金銅張りの耳環である。直径2.7×3.0cmで、19.1g。

13号墳 (図版20, 第55図)

斜面(段丘崖)上に位置する。13~16号墳の石室は斜面中程のほぼ同一レベル上に並んでおり、4基とも斜面の下方向に開口する。墳丘と石室上半部は削平されており、周溝も検出する事が出来なかった。墳丘の規模は不明である。

石室は上半部が削平され、手前の玄門部周辺も削られて失われている。石室墓壇は斜面に露出した岩盤状になった洪積層を掘り込んで掘削している。玄室周壁の基部には偏平な河原石を奥壁には1個横位に立て、左右の側壁には現状で各4個を縦位に立てて腰石とする。2段目より上は同じく偏平石を小口積みにする。

玄室の床には20~40cm大の石を敷き詰め、その隙間には5cm前後の小石が残る。床石は周壁腰石と接する部分に大きめの石を配して腰石を内側から支える根石の役目を持たせている。また腰石は外側の墓壇壁との隙間にも根石を詰めて固定する。外側の根石の上は、墓壇掘削時に出た岩盤のかけらを使って腰石と墓壇壁との隙間を埋め(第55図アミ部分)、奥壁側ではその上にさらに石を詰めている。

石室の主軸はN-66°-Wで、斜面の下に向かって開口する。玄室長は現状で210cmが残っており、玄室幅は奥壁側60cm、中程が90cmで、玄門側は破壊されているため不明。細長い平面形を持った玄室になるものと考えられる。

13号墳石室の直ぐ下に、石室主軸と直行する方向に延びる溝がある(8号溝)。両者の関係が気になるところではあるが、石室床面と溝の底とはレベル差が80cm程あることから無関係な別遺構と考えたい。

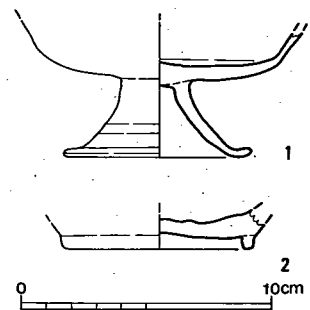
出土遺物 (図版40, 第56図)

須恵器

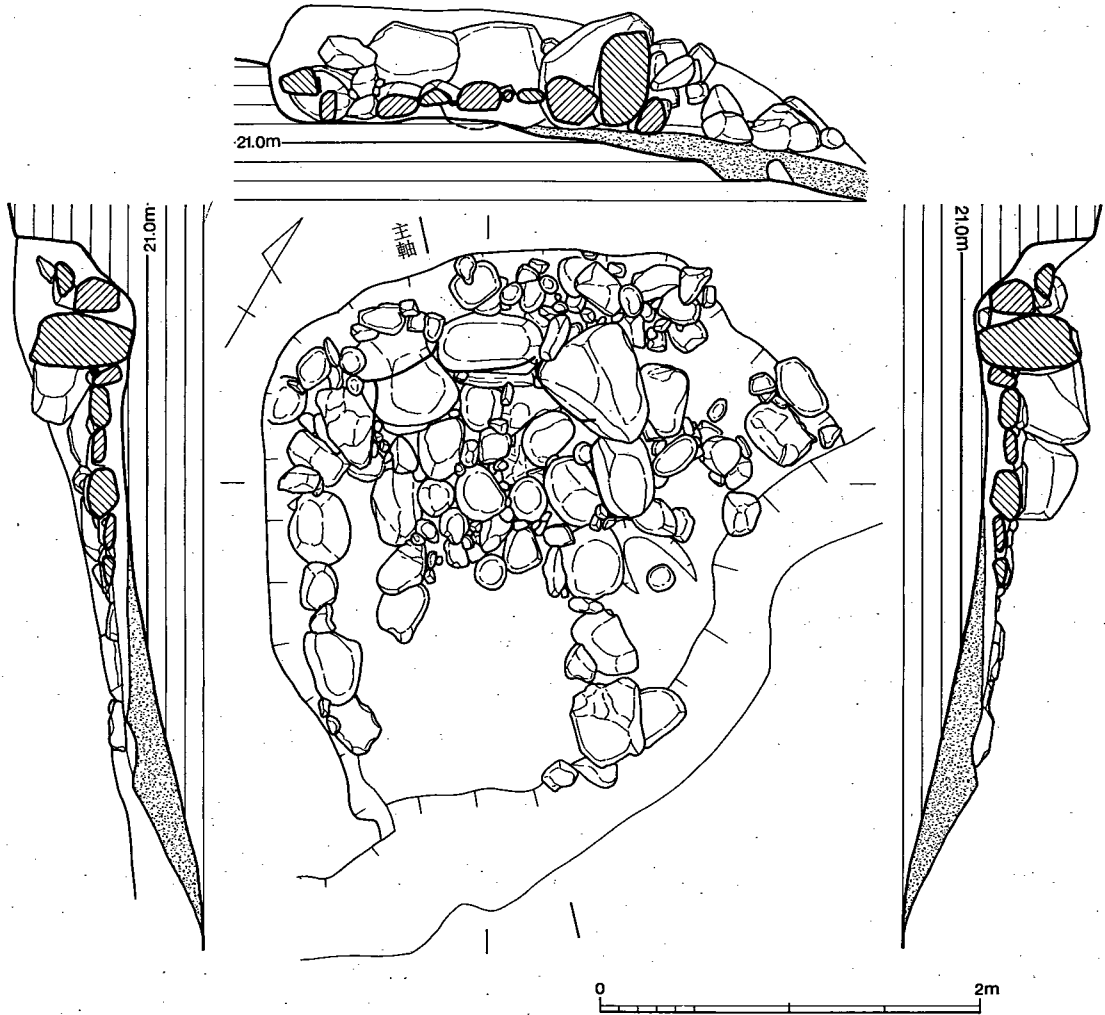
高杯(1) 石室の周辺から出土した。短脚の高杯である。杯部は下半で屈曲して体部と底部とを分ける。「八」の字に開く脚部は端部で屈曲して底を平らにする。焼成は土師質で、淡黄褐色を呈する。

土師器

杯(2) 石室下の斜面で出土した。高台の付いた杯の底部である。



第56図 13号墳出土土器実測図(1/3)



第57図 14号墳石室実測図 (1/40)

14号墳 (図版21, 第57図)

斜面の中程で、13号墳から北に9m離れた所にある。墳丘と石室上半部は削平されて失われており、石室の下半部のみが残るが、それも手前側の半分程は斜面に流されたかのように破壊され残存していない。墳丘の規模・周溝の有無等は不明である。石室の墓壇は斜面を穿って掘られているが、一方で斜面下側の低い部分には盛土による整地を行なう事によって墓壇底の水平面を確保している (第57図アミ部分)。

石室の周壁部分では扁平な河原石を内側に面を揃えて立て並べる事によって腰石としている。玄室床面にはかなり不揃いな石を敷き並べているが、周壁腰石と接する外側部分に大きい石を配して腰石を支える根石の役目を持たせ、中央部には小さめの石を並べる。また、敷き並べた

床石の隙間を埋めるように、小石が残っている。石室の周壁腰石の外側にはやはり根石を詰めており、内側の床石と両者で挟み込む事によって固定している。

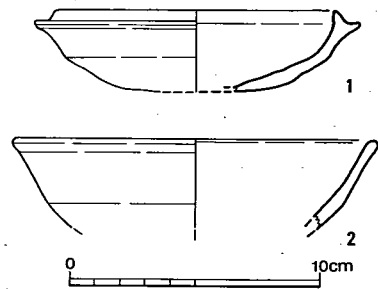
さて、石室の主軸方向であるが、現地ではN-30°-Wとして実測図も作成したが、玄室が左右対称であったと考えるならば残存する床石と外側の根石の状況から12°程西に振ったN-42°-Wの方が適当であるとする。したがって玄室奥壁は腰石2個で構成される事となり、幅は85cm、玄室中央部付近では床石の状況から130cmで、手前側で再び狭くなる胴張りの玄室平面形になるものと思われる。玄室長は現状で220cmが残り、石室は南東の斜面下方向に開口する。

出土遺物 (第58図)

須恵器

杯(1) 石室下の斜面から出土した。短いたちあがり有する。底部外面は回転ヘラ削り調整。復元口径11.1cm、受け部径13.0cm、器高3.2cm。灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。

高杯(2) 石室内から出土した。破片のため器形を復元する事は難しいが、短脚の高杯の杯部ではないかと思われる。



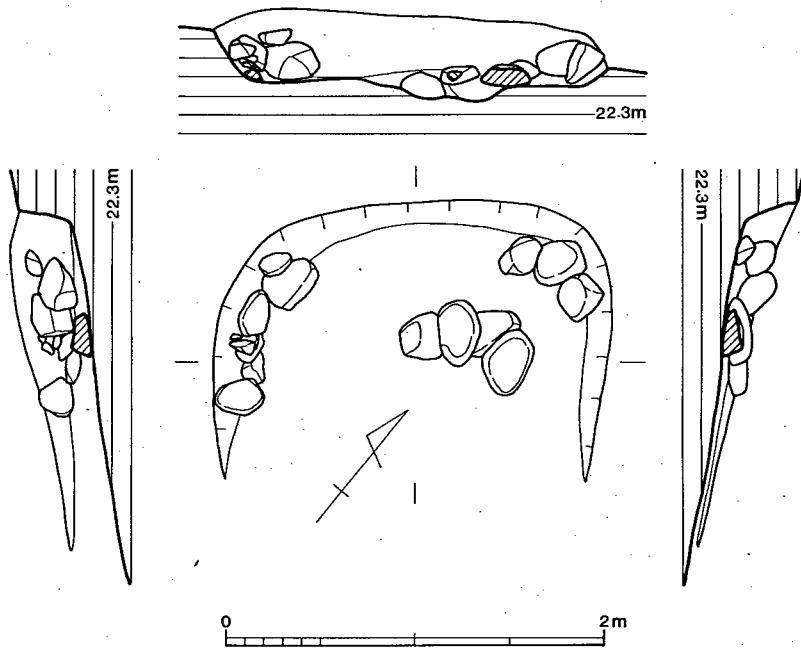
第58図 14号墳出土土器実測図
(1/3)

15号墳 (図版21, 第59図)

14号墳石室から14m北に離れた位置にある。14・15号墳とも石室がある以上は、周溝はともかくも墳丘は存在したはずであるが、両者の石室は心距離で約17m離れており、上位段丘面上の古墳と同様に径6~10m程度の墳丘であったとすれば、二つの墳丘は5~10m程の間隔が開いていたという事になる。

15号墳のある場所は、斜面を削り平坦面を造って農道として現在まで利用されてきた部分にあたり、石室と墳丘の一部がこれに掛かる。このため墳丘は言うに及ばず、石室の下部に至るまで徹底的に破壊されている。それでも、墓壇の一部と玄室床石が数個、それに周壁腰石に外側から詰めた根石が一部分辛うじて残存しており、この位置に古墳が存在したと判断する事が出来た。

それによると、石室は13・14・16号墳と同様に斜面の下方向に開口する。墓壇は幅200cmで、長さは奥から130cm程が残る。玄室の床石は25~30cm大の偏平な河原石が4個残っているが、原位置は留めていないものと考えられる。墓壇の右奥と左奥の隅2箇所には、周壁の腰石を外側から固定して立てるために詰めたと思われる根石が残存する。石室の規模・形状等は不明である。

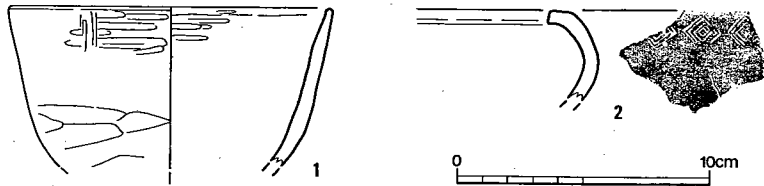


第59図 15号墳石室実測図 (1/40)

出土遺物 (図版40, 第60図)

土師器

碗(1) 体部の上半は直線的に広がり、下半で丸味をもつ。底部に高台の付いた碗形になるのではないか。



第60図 15号墳出土土器実測図 (1/3)

器面は風化しており不明瞭であるが、内外面を丁寧に磨いているようである。外面下半は手持ちのヘラ削り調整。胎土は非常に精良で砂粒はほとんど含まない。

瓦質土器

鉢(2) 口縁部を内側に曲げて上部に平坦面をつくる。器壁は薄手で四重の柵形文を押印する。

16号墳（図版22，第61図）

斜面の中程に立地する。調査区内斜面のほぼ同レベル上に並んで築かれた4基の古墳のなかでは最も北にあり、15号墳とは11m離れている。墳丘と石室の上半部は既に失われており、石室の下半部のみが残る。墳丘の規模等は不明。墓壙は斜面を掘り込んでおり、斜面下方の低くなる部分は逆に埋めて整地をし、墓壙底の水平面を造る（第61図アミ部分）。

周壁の腰石には偏平な河原石を使用し、奥壁に3個、右側壁4個、左側壁3個が残っており、内側に面を揃えて全て縦位に立て並べる。手前側の腰石は抜き取られている。腰石と墓壙壁との間には腰石の上面の高さまで小石を充填する。腰石を外側から支えると共に、周壁の二段目の石を受ける役目も果たしたものと考えられる。

袖石は、玄室の手前側の残り具合が悪いためはつきりとししない。しかし玄室の左側を観ると、側壁の腰石は奥から3個並びその手前が抜き取られているが、そのさらに手前にもう1個石がある。他の石が全て縦位に立てられている事は先述の通りだが、この石だけは横位に立てられている。さらに左側側壁の腰石列と比べると、この石の方が僅かに10cm程だが内側に出ている。これらの事から、この石が袖石になる可能性があると考え。残念ながらこの石と対になる右側の石は失われている。

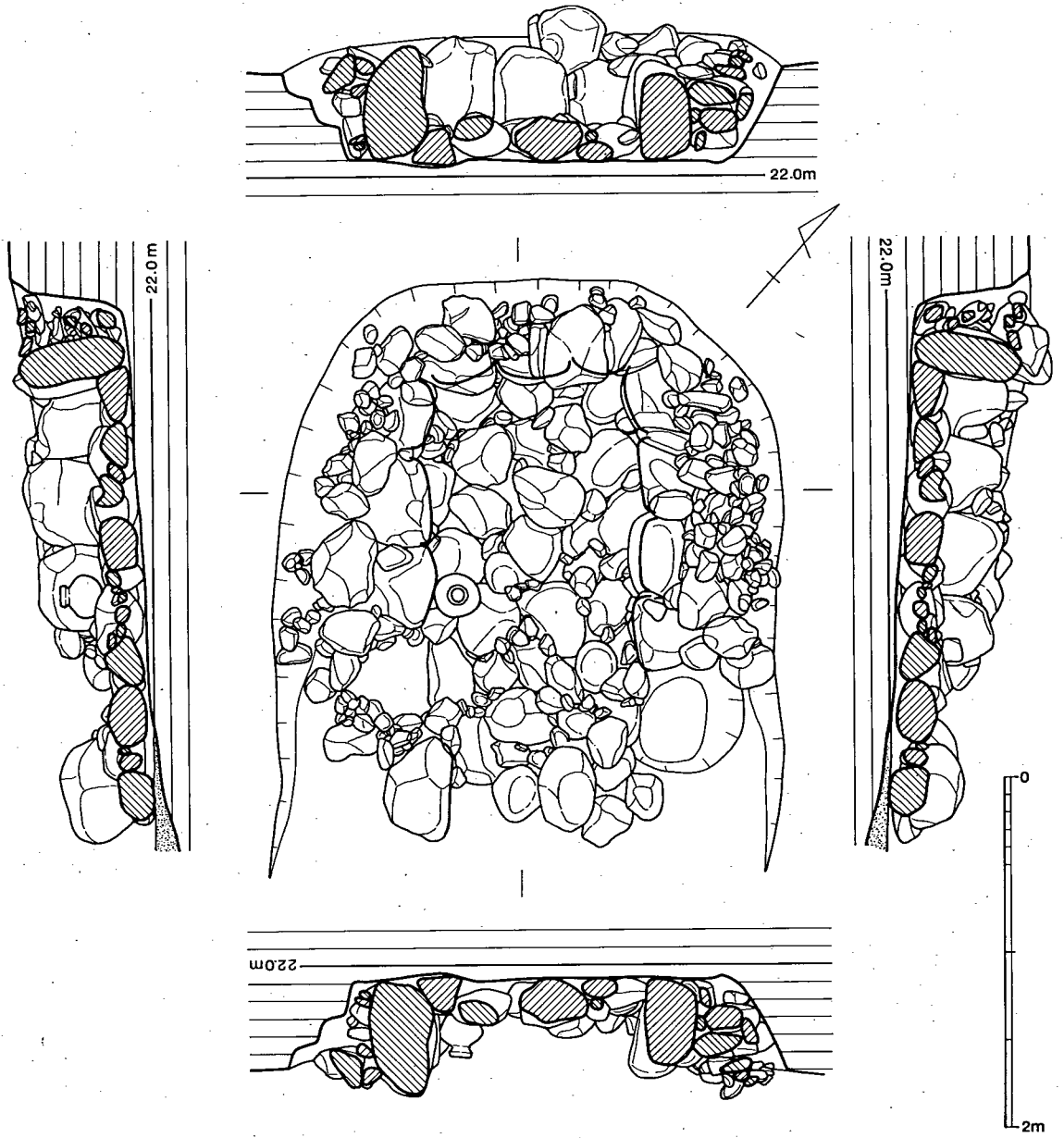
玄室の床には15~40cm大の石を乱雑に敷き並べており、面も揃っていない。言わば「痛そう」で「寝心地が悪そう」な床面である。周壁腰石と接する部分の床石は、腰石下部を内側から押さえる根石を兼ねている。玄門部であるが、先ほど袖石の可能性があった石のすぐ下の床石は玄室内の床石と同レベル上にある。しかし石室中軸線を挟んで右半部分を観ると玄室内床面より上面レベルが15~20cm高い石が1個ある。長軸50cm程あるこの石は一見無関係な石にも見えるが、石を取り除くとその下に敷石が無く、また石の長軸が石室の主軸の方向と合っている。このため、この石は原位置を動いていない可能性が高い。柩施設の一部と考えたい。

石室はN-42°-Wを主軸に取り、斜面の下に向かって開口する。玄室長は210cm、幅は奥110cm、中程が120cmで、手前は側壁腰石が抜き取られているが120cm程になるであろう。玄室は長方形の平面プランを呈する。

出土遺物（図版40，第62図）

須恵器

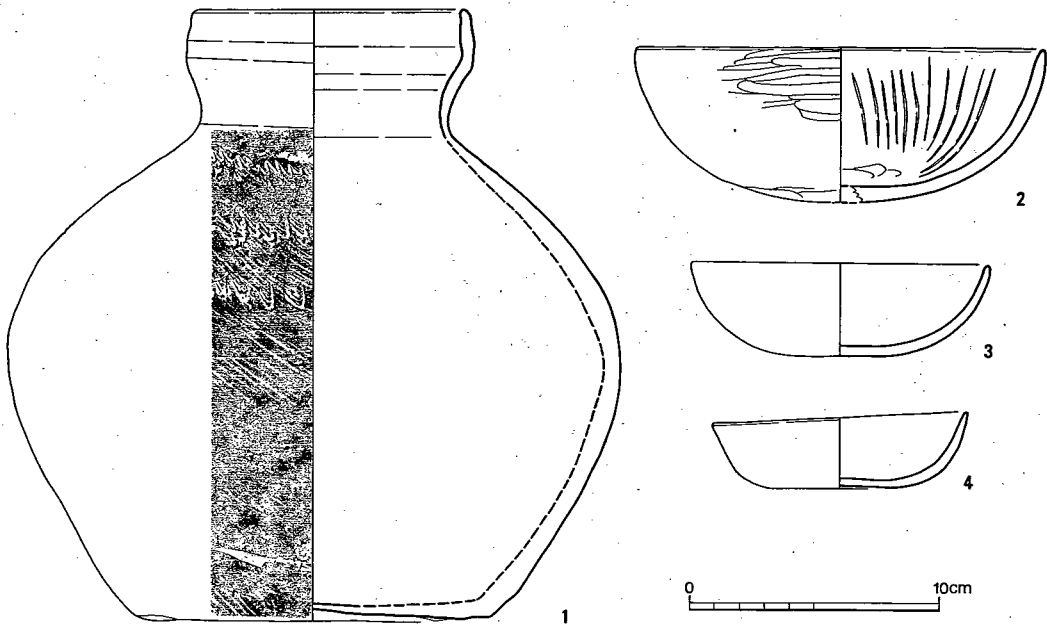
壺(1) 玄室内床面上で左側壁に接して置かれていた。口縁端部の一部を欠く他は完存する。口頸部は中程で屈曲して立ち上がって外面に稜をつくり、口縁部と頸部とを分けている。体部はナデ肩で、最大径は中位にある。底部は平底である。体部外面の肩部は斜め方向の粗い刷毛目で調整し、その後ヨコナデをした上で3段の櫛描波状文を施す。体部外面下部は同じく粗い刷毛目を斜め方向・横方向に入れる。口径11.2cm、体部最大径24.5cm、底径14.1cm、器高24.4cm。



第61图 16号填石室实测图 (1/40)

土師器

碗(2~4) 2は体部が内湾して立ち上がる。内外面を磨き、内面には沈線風の放射状暗文を施す。外底部は手持ちのヘラ削り調整。口径16.4cm, 器高6.2cm。3・4は小型のもの。3は丸底, 4は平底気味である。共に器面が風化しており, 調整は明らかでない。4は内面に放射状暗文が入っている可能性がある。3は口径11.9cm, 器高3.7cm。4は口径10.2cm, 器高3.0cm。

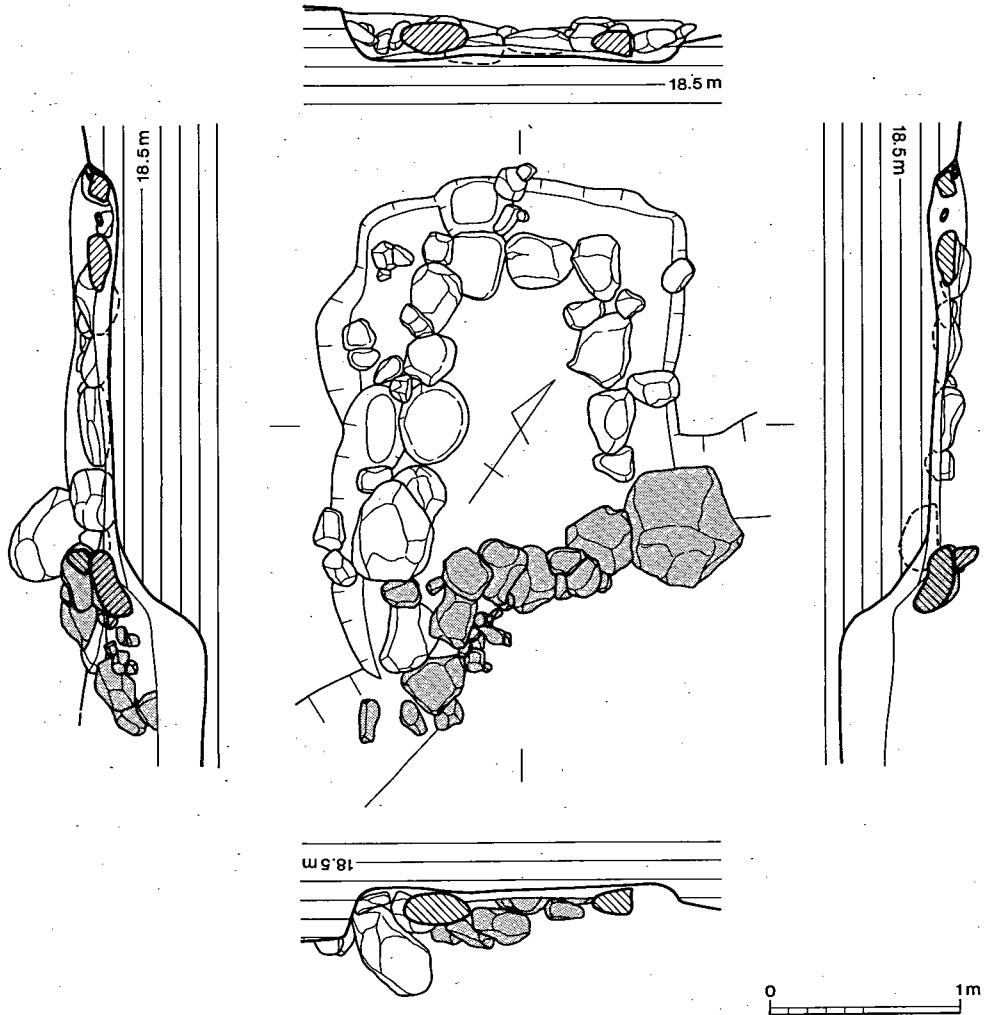


第62図 16号墳出土土器実測図(1/3)

17号墳(図版23, 第63図)

斜面(段丘崖)と低位段丘面との境にあり, 石室が2号住居跡と重複している。2号住居跡は深さが数cmしか残っておらず, 切り合い関係は明瞭ではないが, 当然17号墳石室が切っているものと考えられる。墳丘・石室ともに開墾によって徹底的に破壊されており, 石室墓壙の底部だけが辛うじて残っていた。それも手前側については, 段を設けてその下面が水田として利用されてきたため, 破壊されて石垣が築かれていた(第63図アミ部分)。墳丘の規模等は不明である。

石室は, 周壁・床石とも既に失われており, 周壁の腰石を支えるために内側から詰めた根石だけが残る。根石は30~40cm大の偏平な河原石を, 外側の腰石と接する部分に面を揃えて丁寧に長形状に並べる。この根石の状況をみると, 周壁の腰石を立てた後に内側から詰めたというよりも, 先に根石を敷き並べて玄室の形・寸法を決めたうえで, これに合わせて腰石を立て並べたようである。



第63図 17号墳石室実測図（1/40）

玄室の左側手前には1個だけ側壁の石材が残っており、それによると偏平な石材を立てて腰石としていた事が判る。

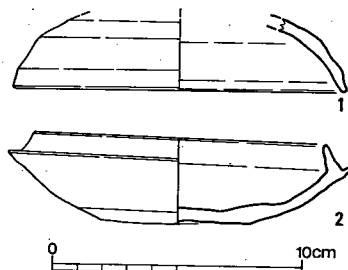
根石の位置から、石室主軸はN-35°-Wで、南東方向に開口する。玄室長は現状で160cmが残り、幅は奥壁側105cm、中程125cmで、手前側は不明。

出土遺物 (図版40, 第64図)

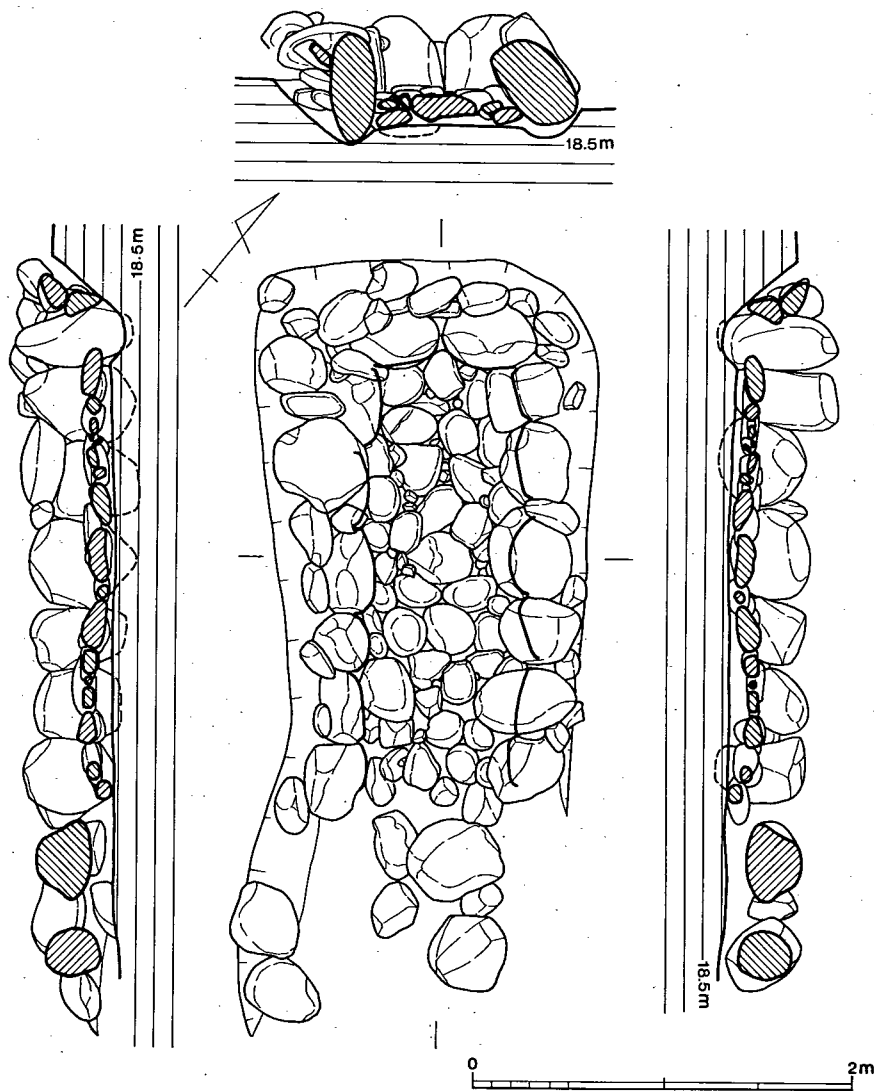
須恵器

杯蓋(1) 天井部と口縁部の境はなだらかで、口縁端部を丸く仕上げる。復元口径13.3cm。

杯(2) たちあがりは内傾し、受け部は短い。復元口径11.8cm, 受け部径13.7cm, 器高3.4cm。



第64図 17号墳出土土器実測図 (1/3)



第65図 18号墳石室実測図 (1/40)

18号墳 (図版24, 第65・66図)

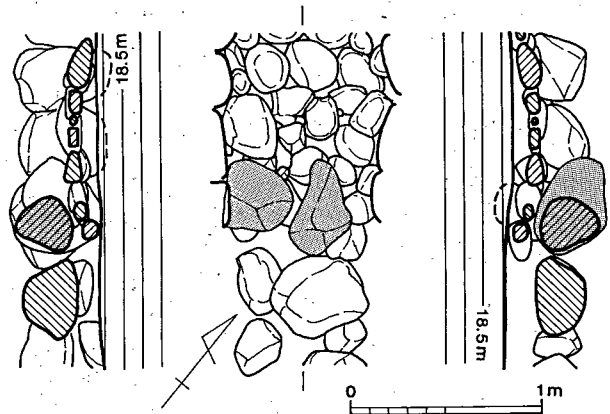
低位段丘上の斜面との境付近に位置する。墳丘は既に失われて石室下半部のみが残るが、北東側の19号墳の石室とは7mの距離をおいて並んでいる。周溝も検出する事が出来なかったため墳丘の規模は知り難いが、19号墳との距離を考えれば墳丘が互いに接していたとしても8m以下の規模であったろう。一方18号墳石室と南側の17号墳石室とは26m離れている。両石室の間は現在一段低くなっており、水田として利用されてきた。このため、この部分には更に1~2基の古墳があったものが削平されて消滅した可能性がある。さもなければ17号墳は他の古墳から離れて1基だけで営まれた事になる。

18号墳石室は上半部が削平され失われており、周壁の腰石以下の部分だけが残存する。腰石には全て偏平な河原石を使用しており、内側の面を揃えて縦位に立て並べる。腰石と外側の墓壇壁との隙間には石を詰めて固定する。また、玄室左奥に残った石の状況から、周壁の2段目より上は石材を小口積みにしたものと思われる。

玄室床面には、15~30cm大の同じく偏平な河原石を敷き並べ、その隙間を埋めるようにして小石が詰まっている。

石室の手前側が攪乱を受けているため、玄門部の構造については明確にし得ないが、手前側の床石上には閉塞石の一部と思われる石が残っていた(第66図)。このため、この付近に玄門部があったものと考えられる。

石室主軸はN-40°-Wで南東方向に開口し、石室長は現状で230cmが残存しており、幅は奥壁側・手前側とも70cmと一定している。石室は幅の狭い縦長の長方形の平面形を呈する。

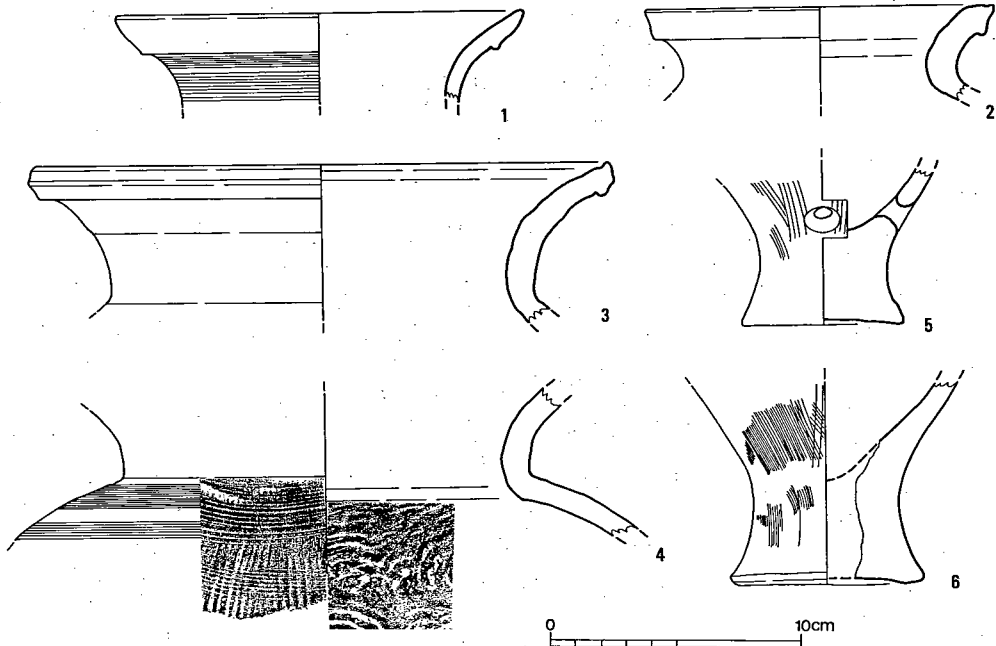


第66図 18号墳石室閉塞石実測図 (1/40)

出土遺物 (図版40, 第67・68図)

須恵器

甕(1~4) 1・2は小型のタイプ。1は器壁が薄く、口縁部を外側に折り曲げて肥厚させるが端部は薄く仕上げている。頸部外面にカキ目調整を施す。復元口径16.4cm。2は口頸部が短く肉厚である。復元口径14.0cm。3・4は中型のもの。3は口縁部に段をつけて肥厚させ、端部を上方につまむ。復元口径23.4cm。4は頸部から体部にかけての部分である。体部外面は平行文叩き板によるタタキの後カキ目調整、内面には青海波文状に当て具痕が残る。



第67図 18号墳出土土器実測図。(1/3)

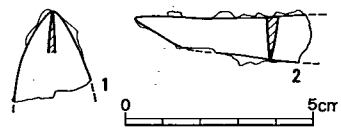
弥生土器

甕(5・6) 5・6とも底部の破片である。5は穿孔の有るもの。両側から錐状の工具で丁寧に開けている。土器の外表面は橙褐色に焼けているのに対して、穿孔部分は割れ口部分と同様に暗灰色を呈する事から、焼成後に開けたものと思われる。6は外表面に粗いものと細かいものの二種類の刷毛目を施す。

鉄器

鉄鏃(1) 鏃の先端部分である。現状で幅2.0cm。

刀子(2) 刃部の一部である。研ぎ直しのため、かなりすり減っている。残存長4.7cm。

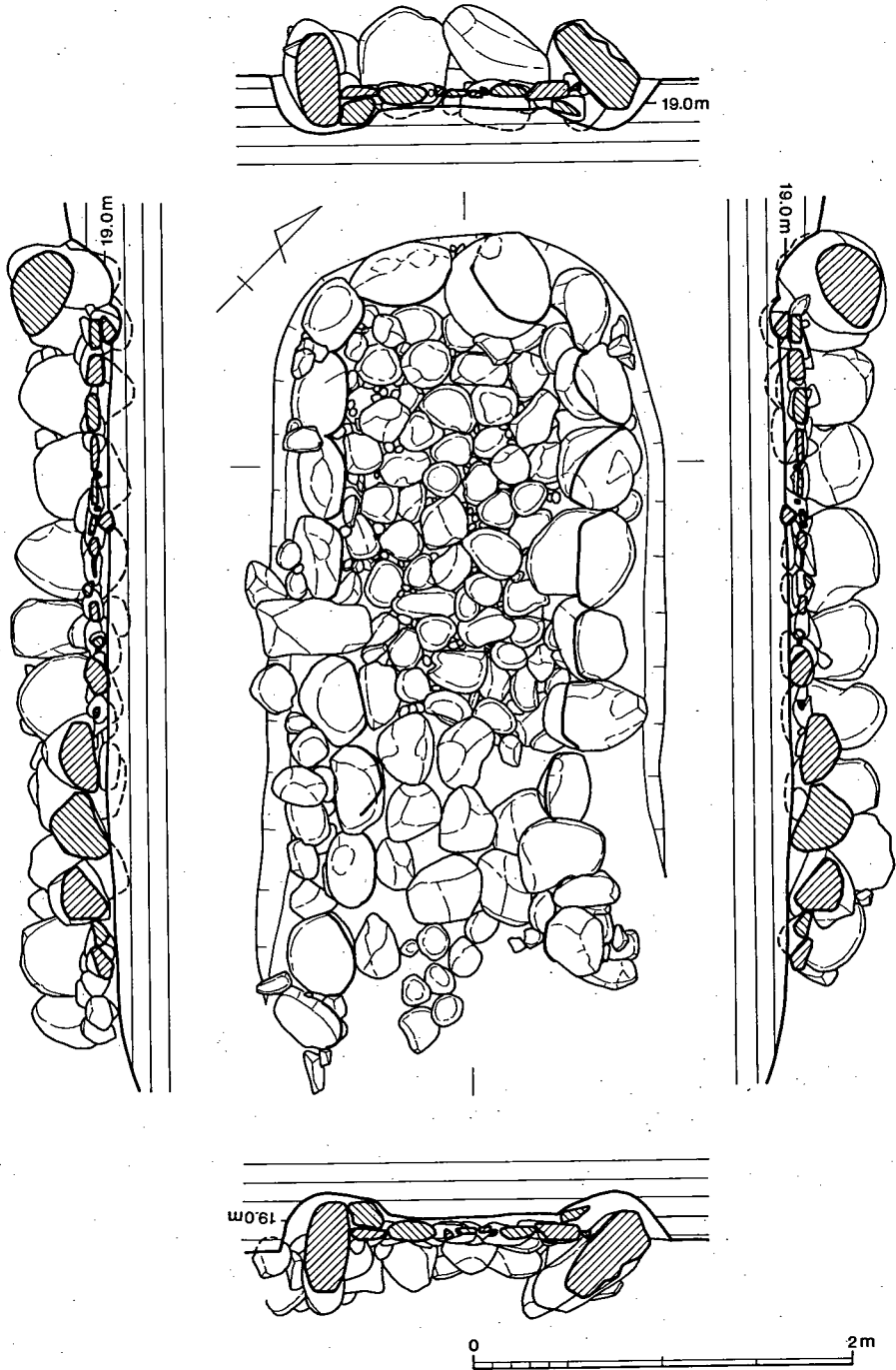


第68図
18号墳出土鉄器実測図(1/3)

19号墳(図版24, 第69図)

低位段丘上に立地し、すぐ西側には斜面が迫る。調査区の東隅部にあたる。墳丘と石室の上半部は削平され失われており、また周溝も検出する事が出来なかった。18号墳石室とは7mの間隔を開け主軸の方向を揃えて並んだ状態で検出しており、両古墳の墳丘規模は不明であるが、墳丘裾を接して連なって営まれていたものと思われる。

石室は、周壁の腰石より下の部分だけが残る。腰石には縦50cm、横40cm程の偏平な河原石を使用し、奥壁に2個、左右の側壁に9~10個を内側に面を揃えて全て縦位に立て並べる。腰石



第69图 19号填石室实测图 (1/40)

の外側に裏込めの石は一部分でしか見られなかった。

玄室床面には20~30cm大の偏平な石を敷き詰めて床石とし、その隙間には小石が詰まっている。石室実測図を観察すると、敷き並べられた床石の下層の周壁腰石に接する部分に、3・10・12・17号墳と同様に腰石を内側から支える根石がある事が判る。しかし現地では不覚にもその意識を持って調査していなかったため、石室断面実測図以外には記録に残していない。

床石は奥壁から215cmの所を境にして手前側が一段高くなっており、石材も大きなものを使用している。また、この部分は奥よりも幅が狭くなっており、玄門部にあたると思われる。更にその手前側の言わば前庭部分の床には、再び玄室と同様の石を使用して高さも玄室と揃った敷石が認められる。

石室はN-46°-Wを主軸に取り、南東方向に開口する。玄室は長さ215cmで、幅は奥壁側と玄門部側が100cm、中程が125cmの隅丸長方形の平面形を呈する。玄室手前の框施設（あるいは羨道部）は長さ110cm、幅85cmで、玄室・前庭部床面より15~20cm高い。

出土遺物（図版40、第70図）

鉄器

刀子 切先部分を欠失している。残存長9.3cm、莖長5.5cm、区部で幅1.0cm。莖には鹿角柄の残痕が認められる。



第70図 19号墳出土鉄器実測図
(1/2)

2 竪穴住居跡

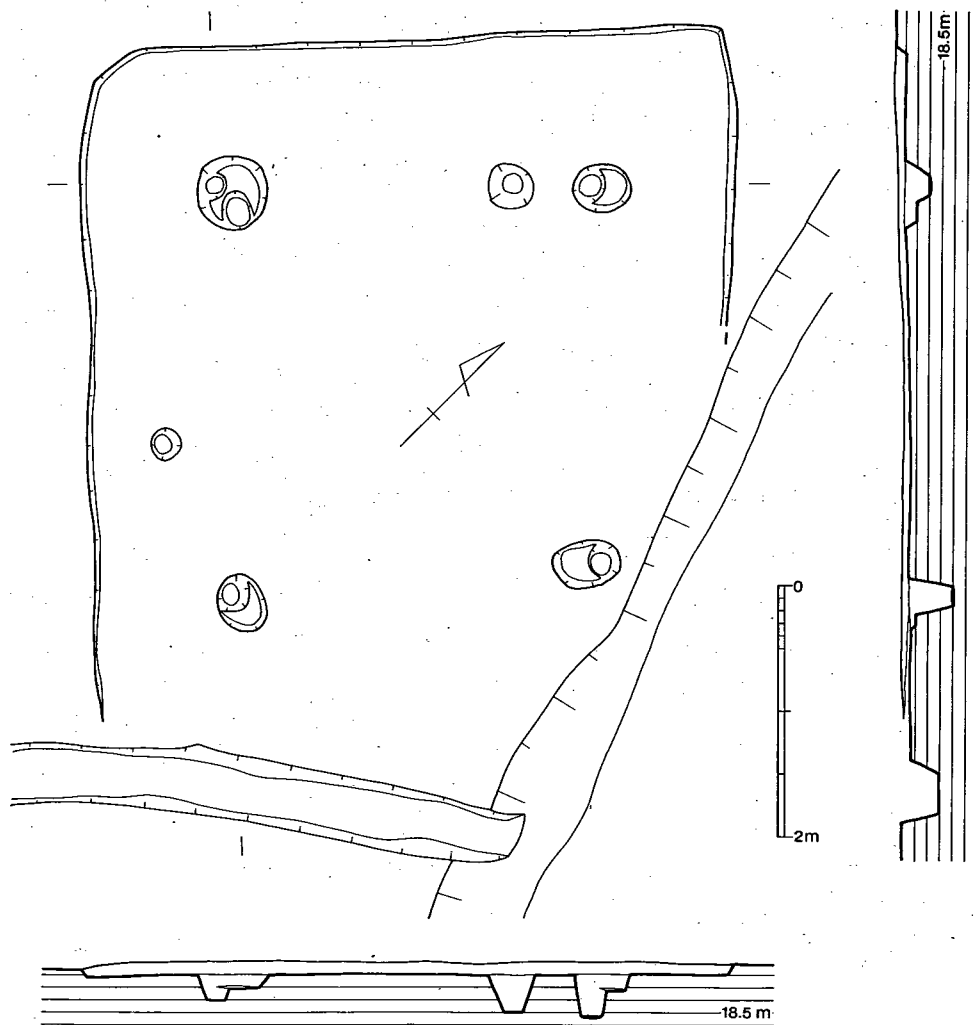
調査区南隅の低位段丘面上で2軒の竪穴住居跡を検出した。2軒の竪穴住居跡は南北方向に8mの間隔を開けて並んでいるが、住居の方向については緩い傾斜を持つ周辺の地形に合わせてられている。

1号竪穴住居跡（図版25、第71図）

低位段丘状の緩やかな傾斜地上にある。調査区の南隅部にあたる。住居跡の南東側は9号溝に切られ、東側には段が有って破壊されている。

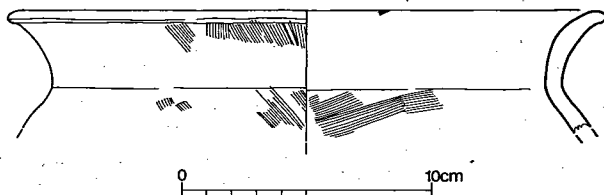
辺長は5.6m以上×5.1mの平面長方形プランで、傾斜に沿った方向にやや長くなる。削平されているため遺存状態は全体に悪く、壁高は3~10cmが残っているに過ぎない。支柱穴は柱間3.0~3.2mで4個がほぼ方形に並び、柱掘形は2段掘り状になっており、深さは20~35cmが残る。南西辺のほぼ中央に直径25cm、深さ25cmの小穴1個が有るのは入口に伴うものか。また、北側支柱穴の脇には径35cm、深さ30cmの穴がある。住居内にカマドを検出する事は出来なかった。

出土した遺物は僅かに土師器甕の破片1点のみであり、時期を決定することは困難であるが、



第71図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)

6世紀中頃であろうか。

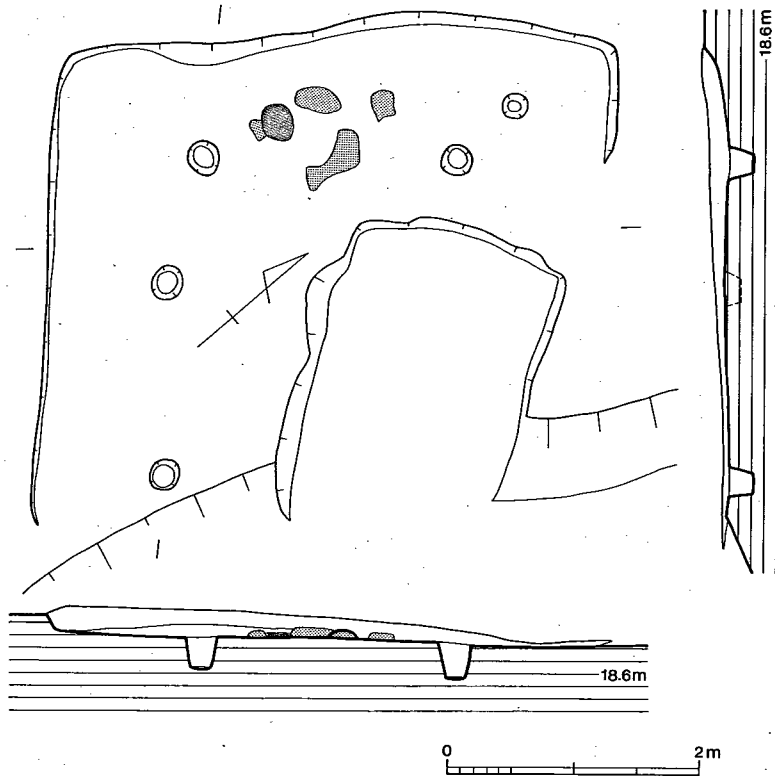


第72図 1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物 (第72図)

土師器

甕 口縁部は外湾して開き、
内面には不明瞭ながら稜を持つ。
外面には縦方向の、内面には横
方向の刷毛目調整を施す。復元
口径23.9cm。



第73図 2号竪穴住居跡出土土器実測図(1/60)

2号竪穴住居跡(図版25, 第73図)

1号竪穴住居跡の北、8m離れた所にある。住居跡の東側部分には現在段が有り、また17号墳石室に切られている。このため、2号竪穴住居跡は約半分が失われており、それ以外の部分についても削平を受けており、残存状況は良くない。

辺長は3.8m以上×4.4mであるが、支柱穴の位置からすれば、やはり1号竪穴住居跡と同様に周囲の地山面の傾斜に沿った方向がやや長くなった長方形プランになるものと考えられる。支柱穴は径・深さとも25cm程で、4個が柱間2.55×2.05mで長方形に並んでいたものと思われるが、17号墳石室のために柱穴の1個は既に失われている。南西側の2個の支柱穴の間やや外側の1号竪穴住居跡とほぼ同様の場所には径25cm、深さ15cmの穴1個がある。北側支柱穴の脇でも同大の穴を検出した。また、北西側の2個の支柱穴と壁との間では、カマドの崩れた残骸の粘土塊と焼土を検出した。

遺物の出土は無かったが、住居跡の形状や方向、穴の位置などの特徴から1号竪穴住居跡と同時期と考えたい。

3 掘立柱建物

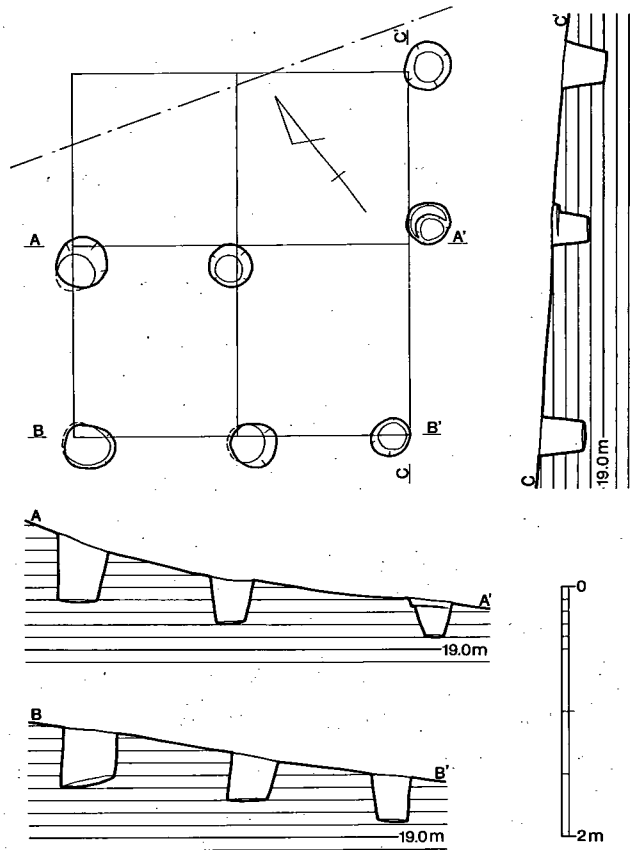
斜面から低位段丘面上の古墳（13～19号墳）の調査が完了した後、傾斜に沿ってトレンチを設定して断ち割り調査を行なった。その結果、斜面部分に黒褐色土が最大60cm堆積しており、下層に更に遺構面が存在することが判明したため、重機を投入して1層掘り下げたところ、1棟の掘立柱建物を検出した（1号掘立柱建物）。

上位段丘面上の3・5号墳周辺には多数の小穴が集中しており、この中には掘立柱建物の柱穴になる可能性のあるものも含まれているが、確実性が無いためここでは除外した。

1号掘立柱建物（図版26，第74図）

斜面と低位段丘面との境のなだらかな傾斜地上にある。北側の2箇所の柱掘形はトレンチのために不明であるが、2間×2間の総柱建物になるものと考えられる。柱掘形は径30～40cmの円形で、現状で30～50cmの深さがある。柱掘形底面のレベルは地山の傾斜に従って南東側のものが低くなっており、建物は上部で水平を合わせたものであろう。建物の規模は2.9m×2.7mで、斜面に直行する方向が僅かに長い。長い方を仮に桁行とすると、柱間は梁行で1.3～1.4m桁行が1.4～1.5mとなり、建物の主軸はN-44°-Eで斜面に対して直行している。

時期を示す遺物の出土は無いが、位置からいって2軒の竪穴住居跡と関連する可能性もあると考えられる。



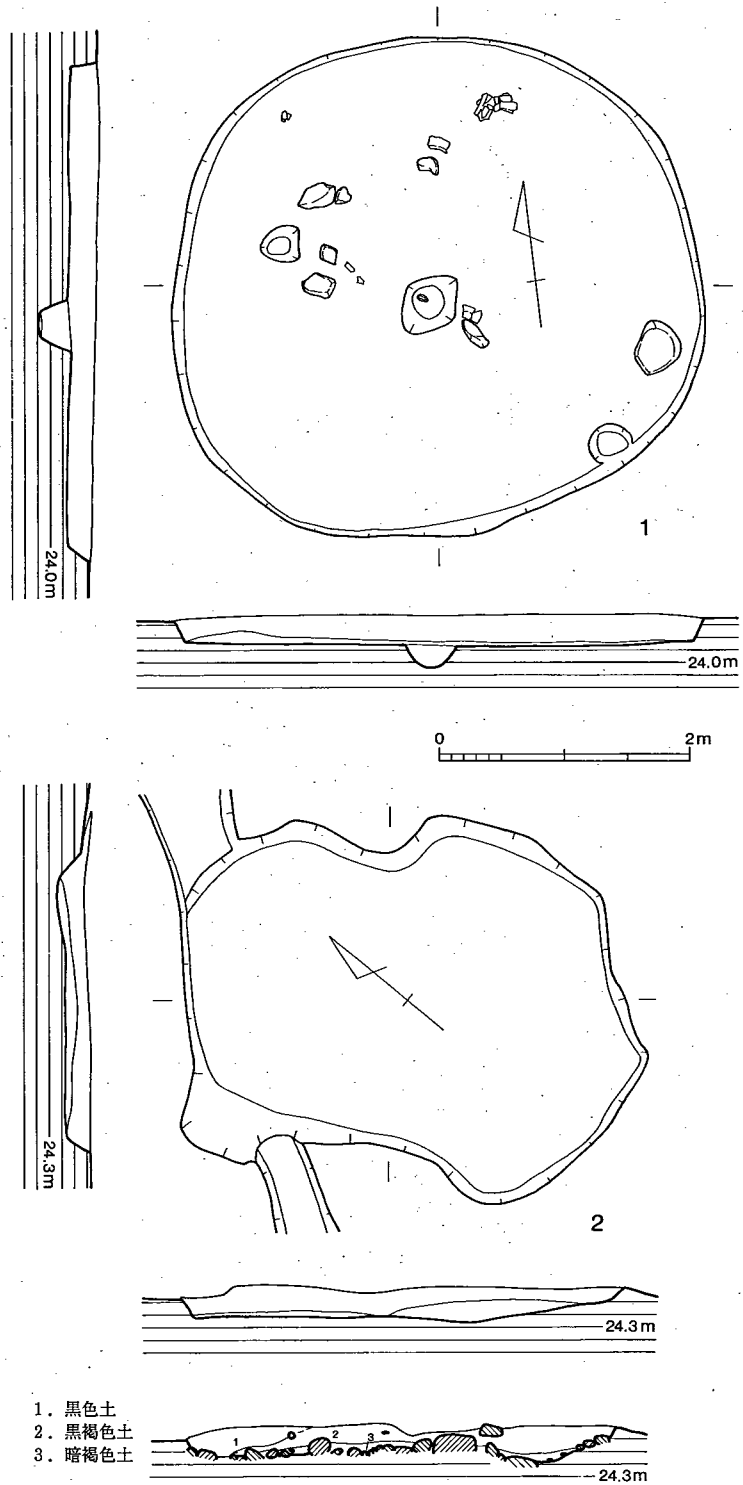
第74図 1号掘立柱建物実測図（1/60）

4 竖穴状遺構

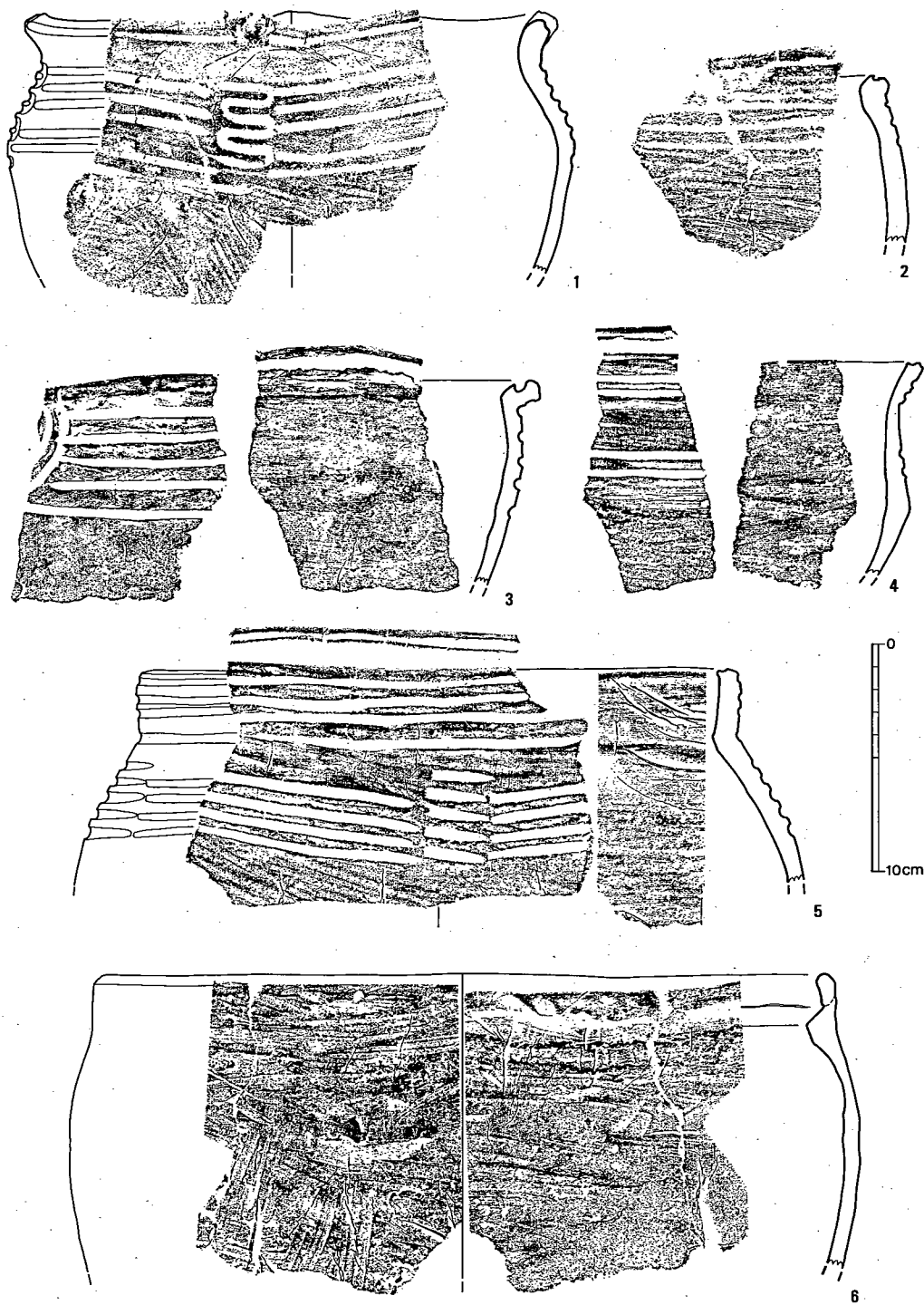
1号竖穴 (図版 26, 第 75 図)

調査区内の北西にある。直径 4.0~4.2 m、深さ 0.2 m で、平面形はほぼ円形となる。床面の中央部には径 40 cm の穴があり、深さは実測図では 25 cm 程になっているが、炉跡である可能性を考えて掘り過ぎ気味に掘った結果このようになったもので、実際にはもう少し浅くなるものと考えられる。穴から焼土等は検出出来なかった。埋土と床面からは縄文土器・石器が相当量出土した。縄文土器・石器は調査区内全体で出土しているが、確実にそれに伴う遺構としてはおそらく唯一のものである。

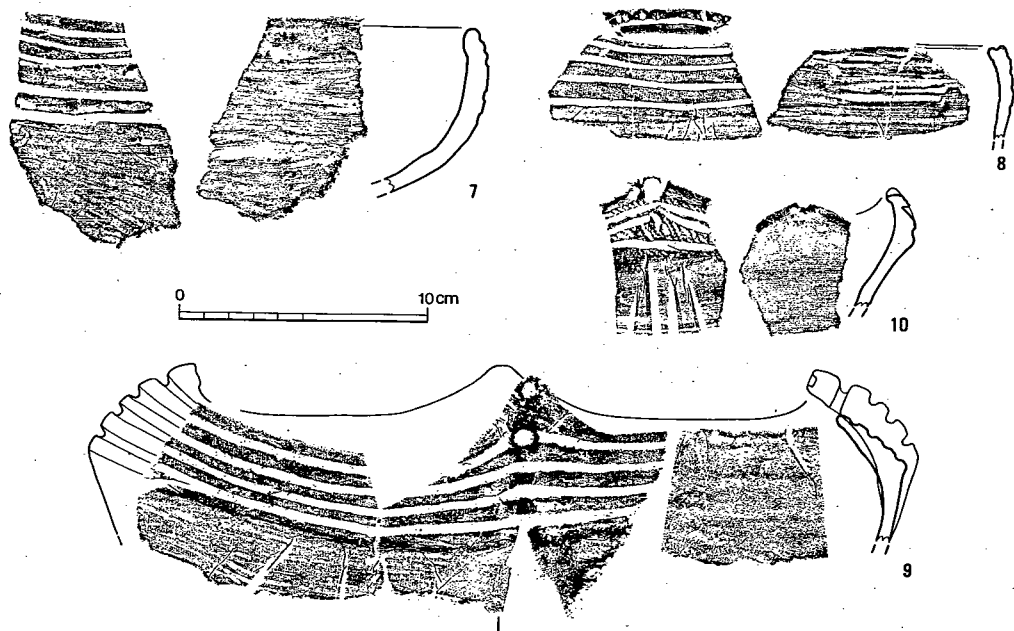
出土した土器には鐘崎Ⅲ式から西平式のものが見られるが、出土割合および出土状態から、ここでは一応遺構は鐘崎Ⅲ式土器に伴う



第75図 1・2号竖穴実測図 (1/60)



第76图 1号竖穴出土土器实测图①(1/3)



第77図 1号竪穴出土土器実測図② (1/3)

ものでその他の土器は埋没時に混入したものと考えておきたい。また、この遺構は一見竪穴住居跡のようであるが、床面中央部の穴は炉跡とは言い得ず、また柱穴となるべき穴も認められない。性格不明の竪穴遺構である。

出土遺物 (図版 41・42, 第 76~78 図)

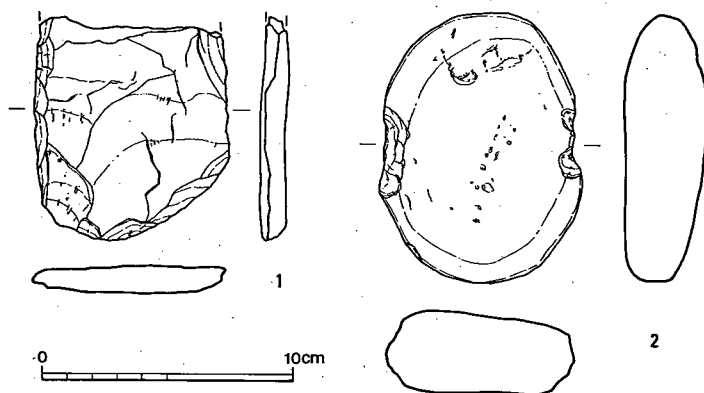
縄文土器 (第 76・77 図 1~10) 床面上と埋土中から出土した。1 は口縁部が屈曲して外方に短く立ち上がる。文様帯は口縁部から肩部にかけてある。口縁部には小さな波頂部をもち、口唇部に 1 条の沈線が入る。肩部には 5 条の横走する沈線が巡り、波頂部下には垂下蛇行文がある。2 は肥厚する口縁部を持ち、口唇部上に 1 条の沈線を巡らす。また、口縁部下に 3 条の横走する沈線がある。3 は屈曲して開口口縁部をもち、1 に比べて口縁部の反りが強い。口唇部上面に 1 条の、肩部に 5 条の横走する沈線が巡る。また、肩部には渦文を配するものと考えられる。4 は口縁部がなだらかに屈曲して開き、肩部に稜をもつ。口唇部上に 1 条、口縁部外面と肩部に各 2 条の沈線を巡らす。5 は屈曲して立ち上がる口縁部が比較的長いもの。口唇部上に 1 条、口縁部と肩部に各 4 条の横走する沈線を巡らす。肩部の一部には短沈線列文を配する。6 は口縁部内面に段をもち、無文のもの。7 は内湾する口縁部をもつ椀に近い鉢形のもの。口縁部に 5 条の横走する沈線を巡らす。8 はキャリパー状口縁になるものと考えられ、口唇部上面に 1 条、口縁部外面に 4 条の沈線を巡らし、口唇部にはキザミを入れる。9 は口縁部は内傾し、幅広の口縁部文様帯に 4 条の沈線が巡る。波頂部には上から凹点を付け、波頂部下の 1

条目の沈線には穿孔を伴う。10は口縁部文様帯に縄文RL Lを施文した後、口唇部に沿って2条の、文様帯下に1条の沈線を巡らして、波頂部に三角形の空間をつくる。波頂部には上から凹点を付し、波頂部下の空間に3つの刺突点を付す。

打製石斧（第78図1）

緑泥片岩製で、短冊形の打製石斧である。基部の過半を欠失する。長さは現状で8.9cm、幅7.7cm、厚さ1.0cmで、重さ137.9g。

石錘（第78図2）安山岩の河原石を利用している。楕円形で扁平な石材の長辺の中央部2箇所を打ち欠く。長さ10.7cm、幅8.1cm、厚さ3.4cm、重さ317.5g。



第78図 1号竪穴出土石器実測図（1/3）

2号竪穴（図版27、第75図）

調査区のほぼ中央、1号墳・4号墳と3号溝の間にある。5号溝と切り合い関係にあり、平面的には確認し得なかったが、土層断面を観察すると5号溝が切っており2号竪穴の方が古い。平面形は隅丸方形気味の不整形で、深さは10~25cmである。縄文土器片以外に遺物の出土はなかった。

5 土墳墓

1号土墳墓（図版27、第79図）

5号墳北周溝と重複している（第24図）。出土遺物からみて明らかに1号土墳墓が切っているものと考えられるが、埋土が同じく黒色土であったため5号墳周溝を掘り上げるまで1号土墳墓の存在に気が付かなかった。

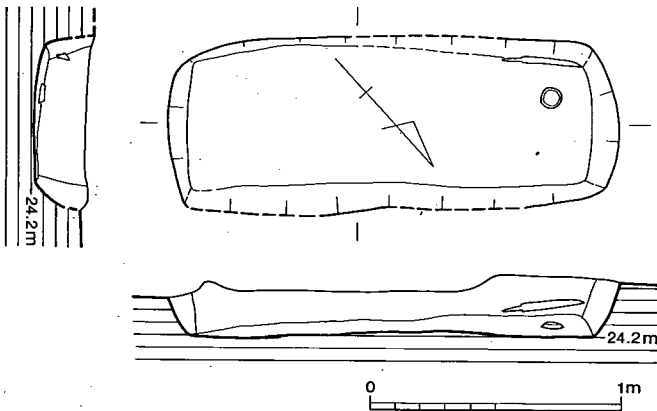
土墳の平面形状は隅丸長方形で、壁は開きながら立ち上がる。上部で長さ180.0cm、幅71.0cm、底部で長さ160.0cm、幅55.0cm、深さは現状で最大25cmが残る。土墳の北東隅の長側辺壁に接して、鋒を北西に向け、刃先を上に向けた状態で短刀が置かれていた。また、その少し内側の床面では土師器皿が口縁部を下にして伏せた状態で出土した。これらの副葬遺物の位置から、

頭位は北西方向であったと考えられ、土壌の主軸はN-48°-Wとなる。

出土遺物(図版42, 第80図)

土師器

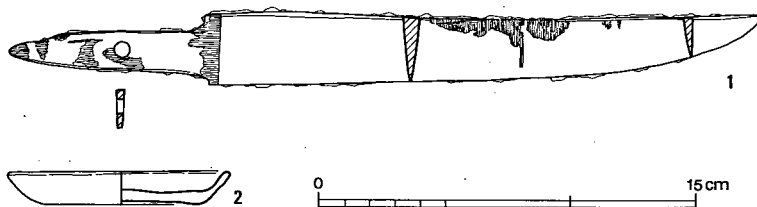
皿(2) 完形品。底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕が僅かに残る。口径8.9cm, 器高1.3cm, 底径6.1cm。



第79図 1号土壌墓実測図(1/30)

鉄器

短刀(1) 全長30.0cmの完形品。茎長8.0cm, 幅は区部で2.1cm中央付近で1.5cm。茎には木柄の痕跡が残っており, また中程には径0.6cmの目釘孔があいている。刃部は刃渡り21.9cm, 幅は区部で2.8cm。棟は僅かに外に反り, 厚さは0.6cm。刀身は平造で断面が三角形になる。



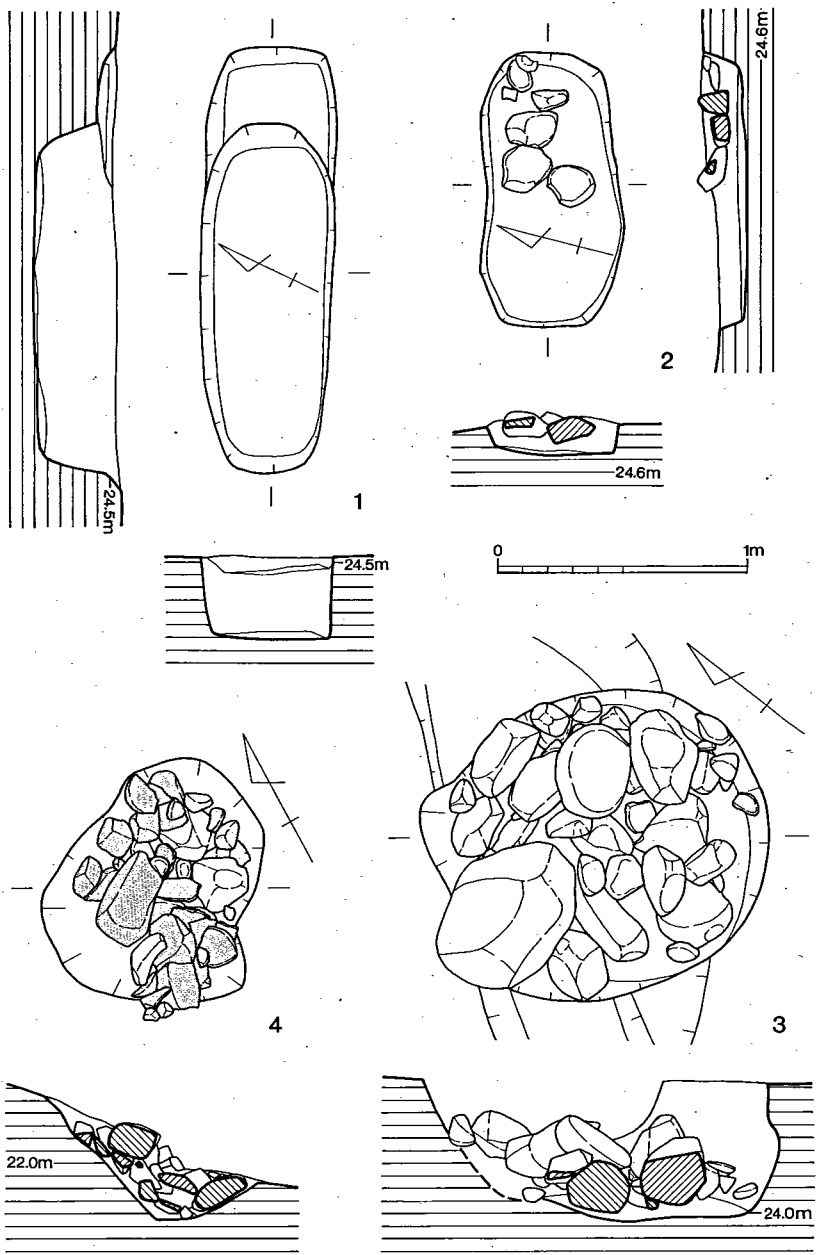
第80図 1号土壌墓出土遺物実測図(1/3)

また、棟から平面にかけての一部に刀身と直行する方向の植物繊維の残痕が付着している。鞘ならば柄と同様に植物繊維の方向が刀身と平行するはずであるから、別の何等かのもので刀身を巻いていたのであろうか。

6 土 坑

1号土坑(図版28, 第81図)

2号墳周溝の南3mの所で検出した。北東-南西方向に長い隅丸長方形の平面形で、北東側は1段高いテラス状になっている。土坑の長軸長は上部で140cm, 底部で125cmで、テラス部分まで含めると170cmある。幅は上部で53cm, 底部で45cm, 深さは33cm。テラス部分は長さが中軸上で30cm, 幅は上部で52cm, 深さは最大でも6cmしかない。土坑の形状から土壌墓である可能性もあるように思う。



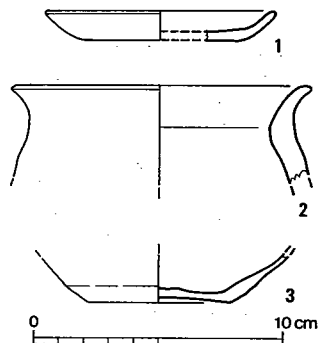
第81图 1~4号土坑实测图 (1/30)

出土遺物 (第82図)

土師器

皿(1) 底部はヘラ切りで端部は丸くおさめる。小破片であるが復元すると口径9.2cm, 底径6.2cmで, 器高は1.2cmとなる。

甕(2) 小形の甕である。外反して開く短い口縁部は端部をシャープに仕上げる。内面の口縁部と体部との境には稜をもち, それ以下の部分はケズリ調整。外面は風化のため調整は不明である。



第82図 1・2号土坑出土土器
実測図 (1/3)

2号土坑 (図版28, 第81図)

4号墳の南西側周溝を切っている。平面形は楕円形に近い隅丸長方形である。長軸長は上部で110cm, 底部で103cm。幅は上部で55cm, 底部で50cm。深さは17cmが残る。土坑内の東半部には最大20cm大の河原石が埋土に混じって数個入っているが, この周辺では地山自体に河原石がいくらかでも含まれている事から, 実測図では図示したものの石には特に意味がないものと思われる。

出土遺物 (図版42, 第82図)

土師器

杯(3) 器壁は薄く丁寧な作りである。外面の体部下半と底部に回転ヘラ削り調整を行なった後, 内外面全体に回転ヘラミガキ調整を施す。底径5.6cm。

3号土坑 (図版29, 第81図)

1号墳の南東側周溝に隣接し, また5号溝と切り合い関係があり, それによると3号土坑の方が古い。径120~130cmのほぼ円形の平面形を呈し, 深さは55cmで底は平らになっているが, 掘削時に地山に含まれる大形の石が露出しても取り除かずそのままにしているため, 石が土坑内に大きく張り出した形となる。土坑内には大小の石が無造作に放り込まれていた。遺物の出土はない。

4号土坑 (図版29, 第81図)

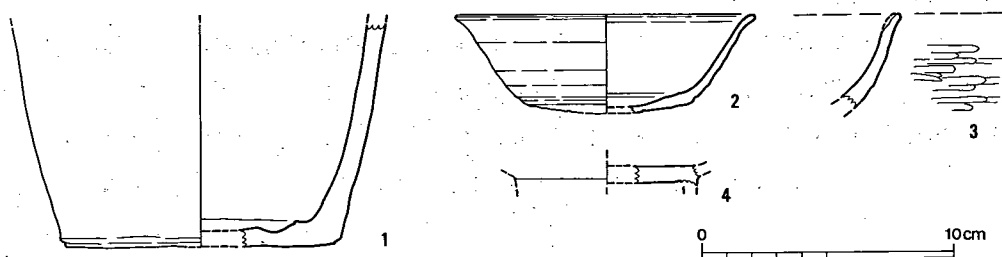
調査区南東の斜面上13号墳石室と14号墳石室の間やや上方で検出した。岩盤状の地山を掘り込んでいる。平面形は不整形で, 径100cm程である。底部は平らになっておらず, 深さは最大で50cm。土坑内には掘削時に出た岩盤のかけら (第81図アミ部分) と河原石が無造作に入っている。遺物は出土しなかった。

7 溝状遺構

調査区内で大小10条以上の溝を検出した。地形に制約されたためか、ほとんどの溝は斜面に平行する方向と直交する方向に大別出来る。6・7号溝はそれには当てはまらず、双方とも弧を描いて調査区外に延びており古墳の周溝である可能性があるものとする。

3号溝 (図版30, 付図)

調査区のほぼ中央部の区外から南東方向に流れる。4・5・7号墳の周溝が重複している部分に流れ込み、それを溝の一部として利用して斜面の上端部まで続く。約50m分を検出した。溝の幅・底面の形とも一定していない事から、自然の流路と考えられる。



第83図 3号溝出土土器実測図 (1/3)

出土遺物 (図版42, 第83図)

須恵器

壺(1) 壺の体部下半から底部にかけての部分で、底部は平底になる。器面調整については、体部外面は横ナデ、底部外面はナデ、内面は横ナデの後体部には縦方向のナデを施す。復元底径11.2cm。

土師器

杯(2) 器壁は薄い。体部は直線的に開き、口縁部で更に屈曲して開く。外底部は回転ヘラ削り調整で、その他の部分は横ナデ調整で仕上げる。復元すると口径12.0cm、底径6.4cm、器高3.9cm。

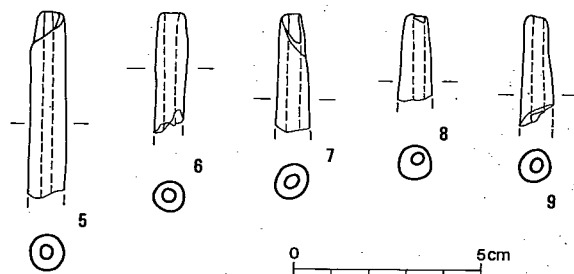
黒色土器

碗(3) 口縁部は僅かに外湾し、端部は丸くおさめる。内面に丁寧なヘラミガキを施し、外面は粗いヘラミガキをする。

緑釉陶器

不明(4) 碗または皿の底部と思われる。胎土は土師質で、内外面に緑釉が掛かる。復元高台径7.3cm。

土錘 (5~9) 5点出土した。5をみると粘土を薄く延ばし、心棒に巻き付けて製作した痕跡が明瞭である。径0.8~1.0cm, 孔径約0.3cmで、最も残りの良い5が現状で長さ5.0cm, 重さ4.6g。



第84図 3号溝出土土錘実測図 (1/2)

6号溝 (付図)

上位段丘面上の調査区東隅にある溝である。3号墳・5号墳周溝とは1.5m程の間隔を開けて弧を描く。幅0.8~1.5m, 深さは0.3~0.4mで13m分を検出した。形状と出土遺物から古墳の周溝である可能性もあるものと考えますが、そうであるならば15m程の墳丘を持ったここでは大形の古墳となる。

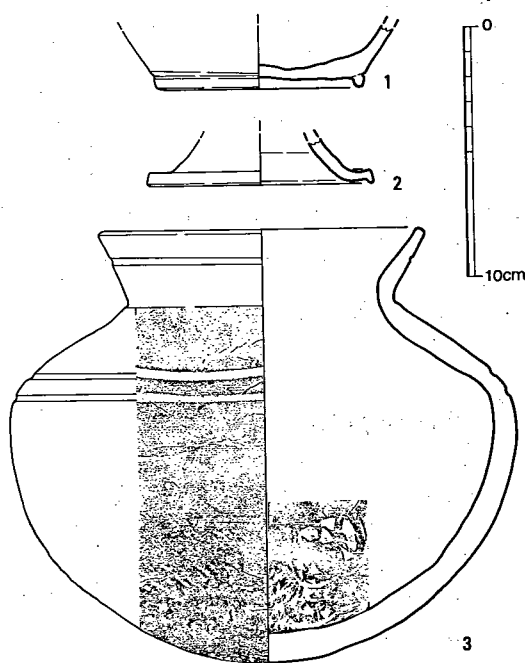
出土遺物 (図版42, 第85図)

須恵器

杯(1) 高台のある杯である。外底部が未調整である以外は横ナデ調整で仕上げる。高台径8.4cm。

高杯(2) 短脚の高杯の脚部であろう。「八」の字に開く脚部が下部で屈曲して水平に開き、端部は下方に折り曲げる。復元すると底径9.1cm。

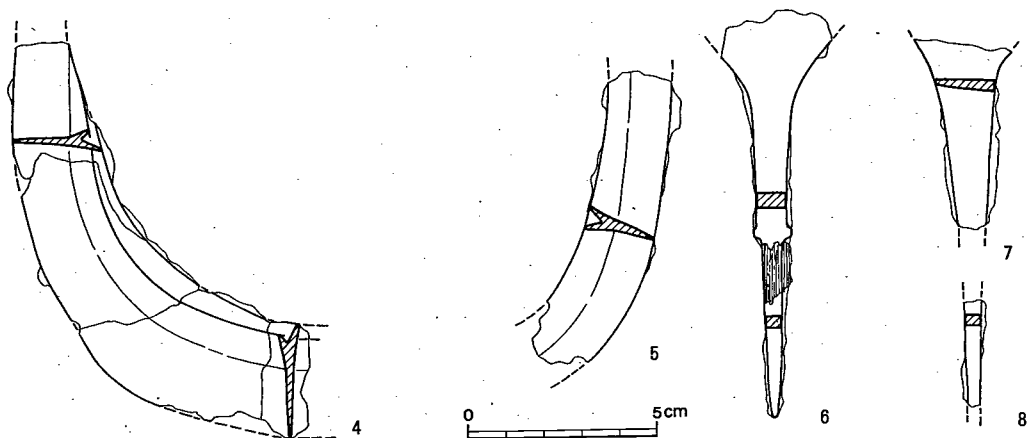
壺(3) 最大径は体部の上位にあり、やや肩の張った器形になり、口頸部は直線的に開く。口頸部中位に1条, 肩部に2条の沈線が巡る。外面体部下半は擬格子目文タタキの後に粗い横ナデ調整を行い、縞模様状に叩き痕が残る。内面体部下半には青海波文状に当て具痕が残る。口径13.0cm, 最大径20.0cm, 器高17.3cm。



第85図 6号溝出土土器実測図 (1/3)

鉄器

鋤先(4・5) 2点出土した。4は耳部の幅が狭く、先端部に向かって幅が広がる。先端部で再び幅が狭くなり刃部が直線的なのは使用による磨耗と思われる。袋部の長さが前面側と背面側とで違っている。5は過半部が直線的に伸び、一方がカーブを描く。直線的な方が耳部



第86図 6号溝出土鉄器実測図(1/2)

と考える。幅はどちら側もほぼ同じである。4・5とも刃は耳部にまで付いている。

鉄鏃(6~8) 6は棘篋被をもち、茎部に矢柄の木質が残る。残存長10.7cm。7は左右が非対称で、あるいは鏃ではないのかもしれない。

8号溝(図版30, 付図)

13号墳石室の玄門部のすぐ下から北東方向に流れる。約8.5m分を検出した。幅40cm~60cm, 深さ20~30cmで、底に10~30cm大の石を1列に並べる暗渠状の溝である。溝の方向は13号墳石室の主軸にほぼ直交するが、溝の底と石室床面はレベル差が80cm程あることから無関係と考える。また遺物の出土もなく時期も不明である。

8 その他の遺構と遺物

1号墳周溝の北西側と、5号墳南周溝の北側墳丘部分に、何れも周溝に切られる方形の土坑状の遺構を検出した(付図)。しかし埋土を掘り下げてみると、底面が不整形になっており遺構として認識し得るものか不明である。また、その他にも土坑状の遺構を幾つか検出したがここでは省略した。

縄文時代の遺物

調査区全面から相当量の縄文時代土器・石器が出土した。しかしながら、この時期の遺構として考えられるのは先述の1号竪穴のみであり、大多数の土器・石器類は遺構に伴っていない。

縄文土器 (図版43~48, 第87~93図)

1・2は楕円押型文土器である。1はベルト施文の可能性がある。2は楕円の粒が小さく、器壁も薄い。

3は爪形の連続刺突文が上下2段に施される。

4・5・8は口唇部にキザミ目をつける。4は外面に凹線の文様がある。5は波状口縁になると思われる。波頂部下に4条の垂下する太目の沈線があり、沈線端部は押さえ付けたような凹みをとまう。また内面にも段状の沈線が巡る。8は外面に細い沈線数条で文様をつける。6は凹点を列点状に施す。7は波状口縁をもち、波頂部にキザミを施す。胴部はわずかに膨らみ、口頸部には磨消縄文で幅広の文様帯をつくる。

9は口縁部内面に段をもち、口縁部を肥厚させる。口縁部外面の文様帯に沿って磨消縄文を施す。10・11は外反して肥厚する口唇部上面に、10は平行沈線を巡らせ、11は渦巻状の文様を描く。

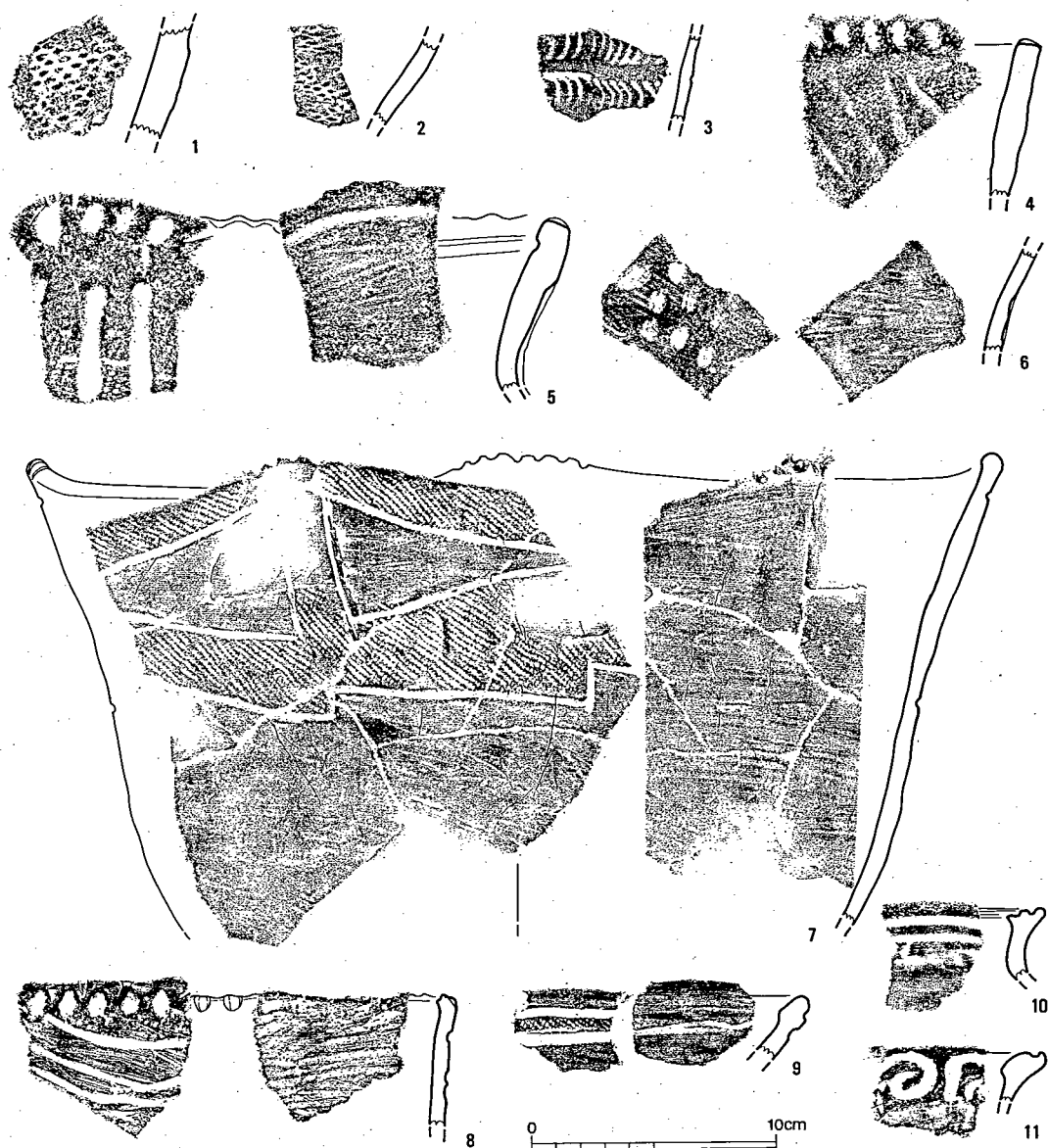
12~14は外反する口縁部に沈線で文様をつける。14は口唇部上面にまで沈線文を施す。15は波頂部の口唇部から外面にかけて5本の垂下する沈線文がある。

16~21は屈曲して外反する口頸部をもち、口唇部から肩部に文様を施す。16は口唇部内外面と肩部に沈線が巡る。18は波頂部の上面と下に文様がある。17・19・20は口縁部と肩部に磨消縄文の文様帯が巡る。17は波頂部の下にも磨消縄文の文様がある。21は肥厚する口縁部の外面に縄文を施文し、沈線と凹点を巡らす。22は口縁部外面の3条の平行する沈線の間に縄文がある。23・24・27は肥厚する口縁部の外面に文様をもつ。23は磨耗しているが沈線で退化した渦巻文を、24は縄文と巻き貝を押し付けた刺突列点を、27は縄文と太い沈線をそれぞれあしらう。26は肥厚した口唇部の上面と外面、肩部に沈線が巡り、磨消縄文がみられる。28~30は肩部の破片で、29・30は太い沈線で区画された磨消縄文がみられ、28は沈線と縄文をあしらうが磨消していない。

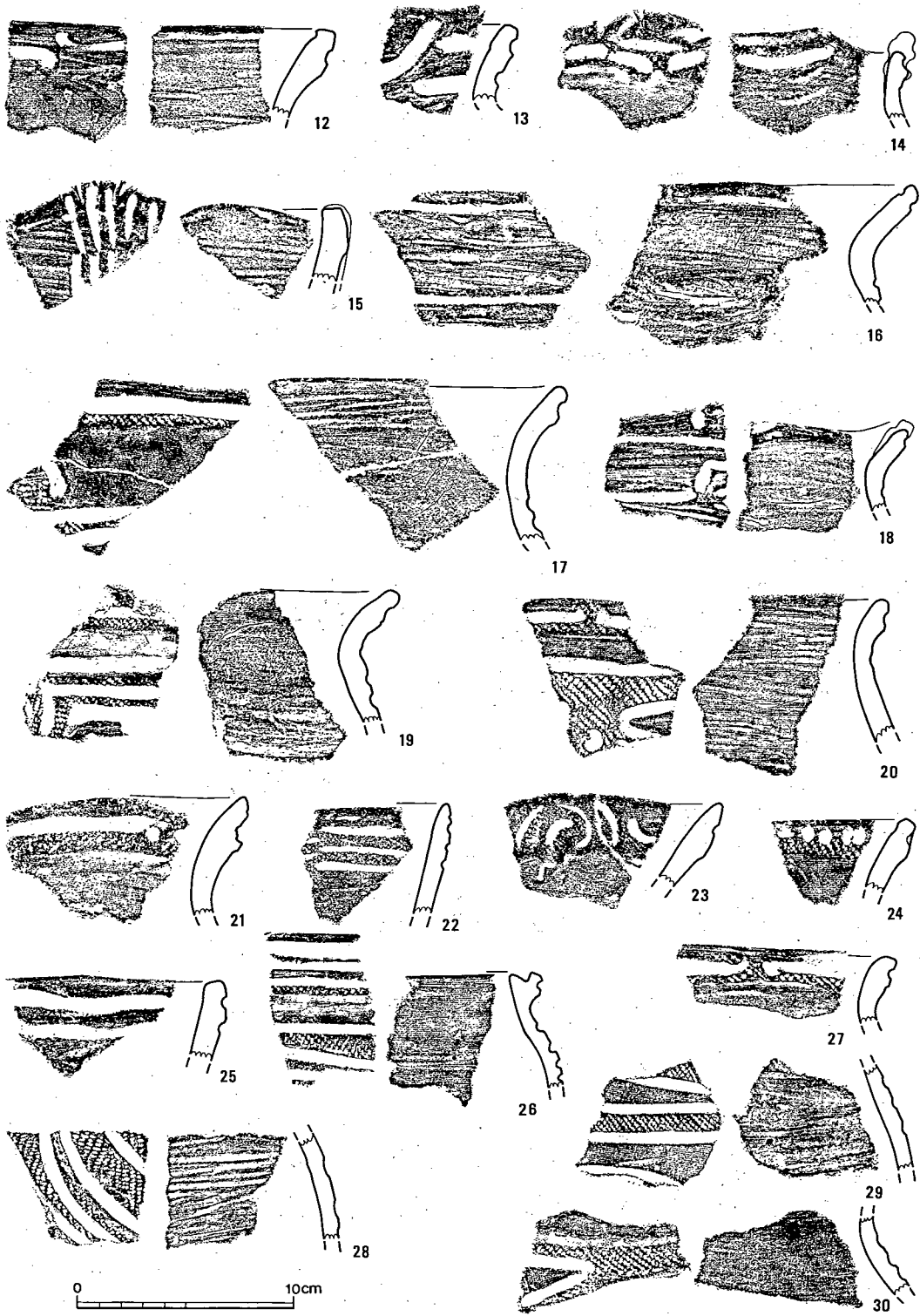
31~41は屈曲して開く短い口縁部をもち、口唇部から肩部に沈線で文様をつける。31・33は橋状把手をもつ。31・33~35・37~41は波頂部に沈線によって渦文またはその変形したと思われる文様が施される。また35・40では波頂部下にも渦文がみえる。42は肥厚した口唇部上面に段をもち、綾杉状にキザミが入る。43は口唇部と肩部に沈線が巡り、波頂部下には列点がみえる。45・46は屈曲して開く短い口縁部をもち、口唇部の先端を外側に巻き込む。46は文様はないが波頂部に小さな瘤状に粘土を張り付ける。

47は口縁部が内湾しながら開く。肩部には平行沈線が巡る。48・49は口唇部と肩部に沈線が巡る。50・51は口縁部が屈曲して強く外反する。52は肩部に平行沈線が巡り、沈線の端部には刺突点が見られる。53は長めの口頸部をもち、肩部にはやはり平行沈線が巡るが、波頂部の下だけは鍵形のS字文様を施す。

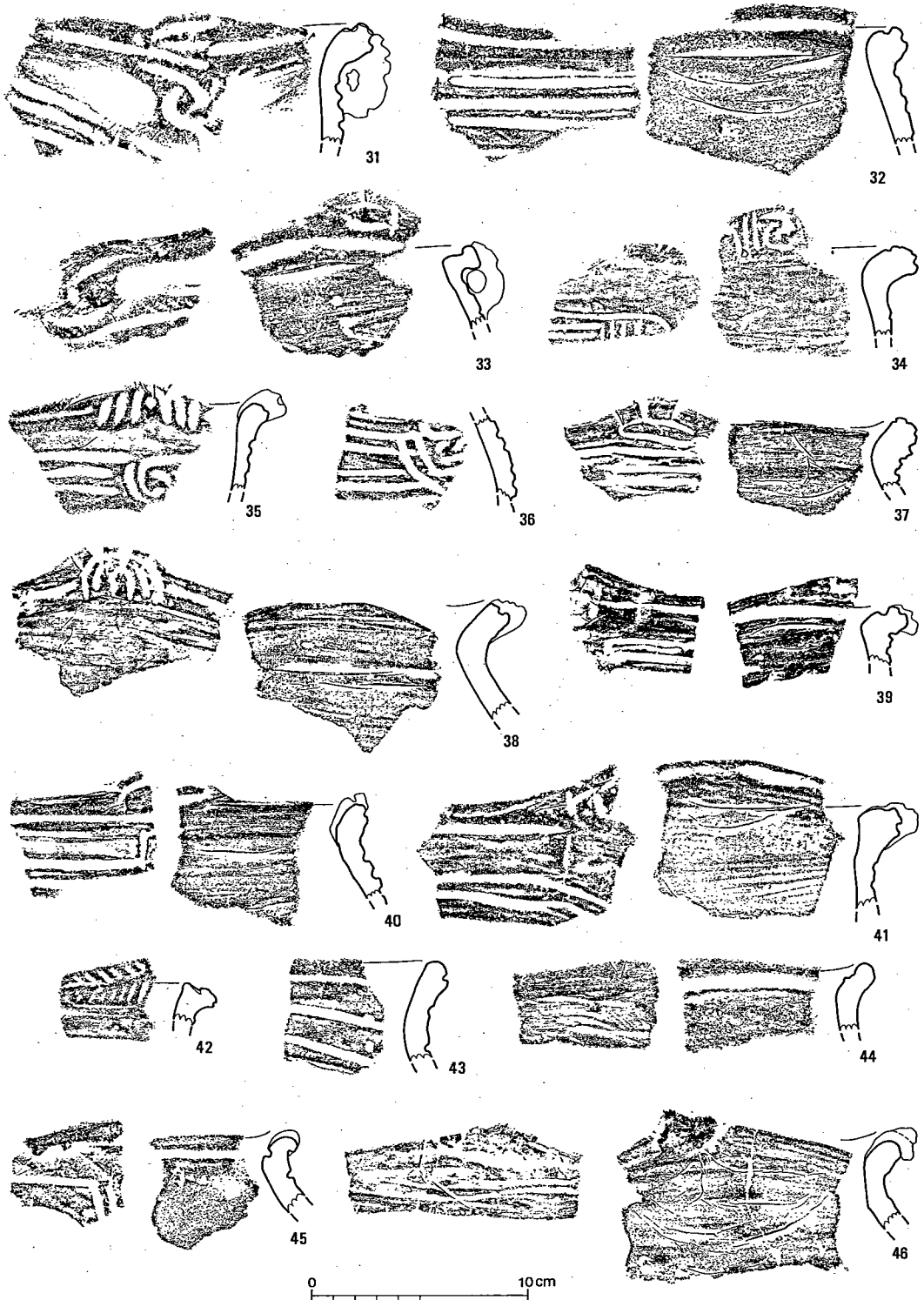
54~56は口唇部と肩部に沈線が巡る。57はキザミの入った突帯をもつ。58・59はキャリパー形口縁になるものと思われる。62は波頂部に2個の瘤状の突起が付き、その中央部には外に摘んだような突起がある。突起の周囲と下には沈線で文様を施すが、あたかも何かの顔を表現したように見える。



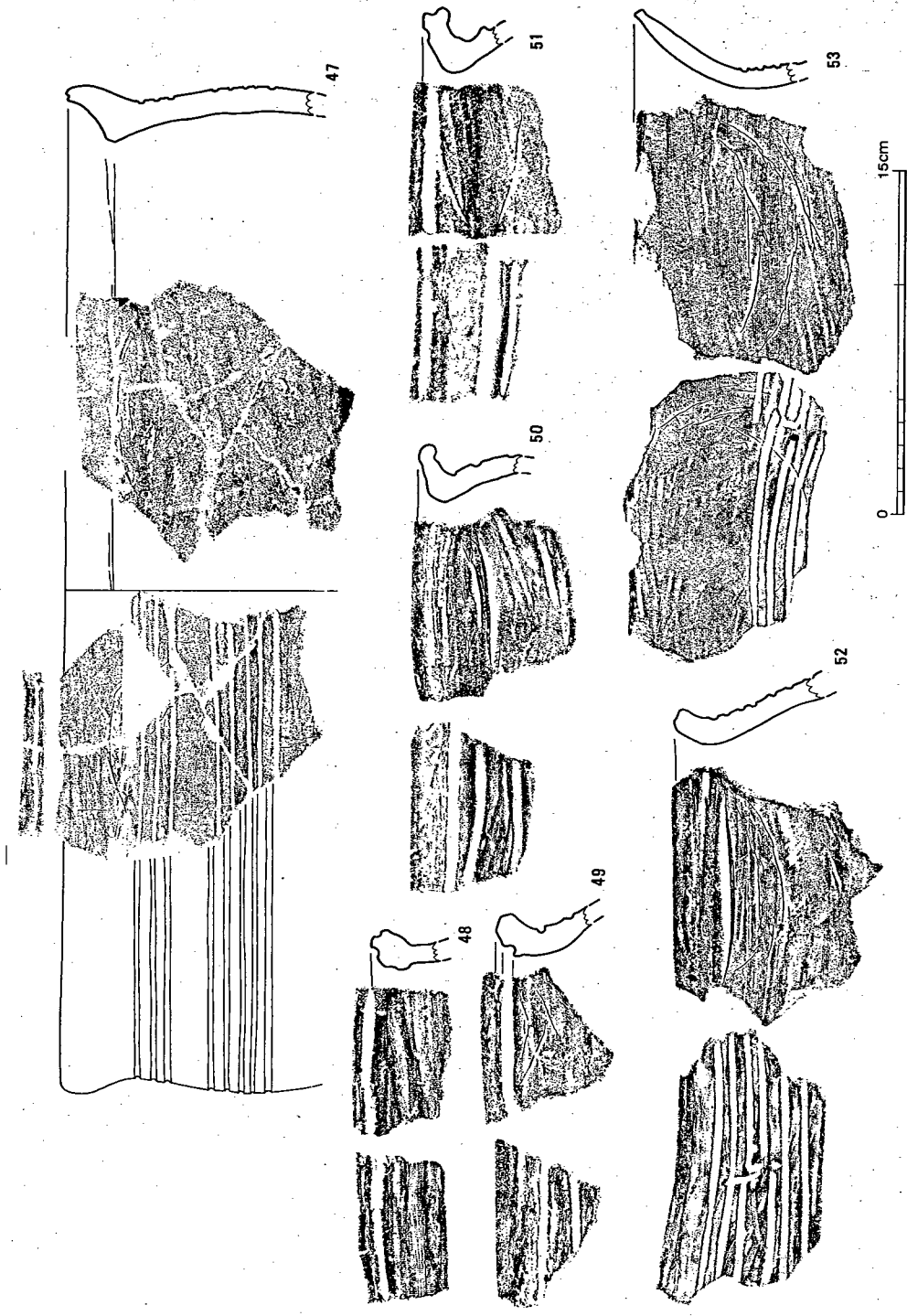
第87図 包含層その他出土の縄文土器実測図① (1/3)



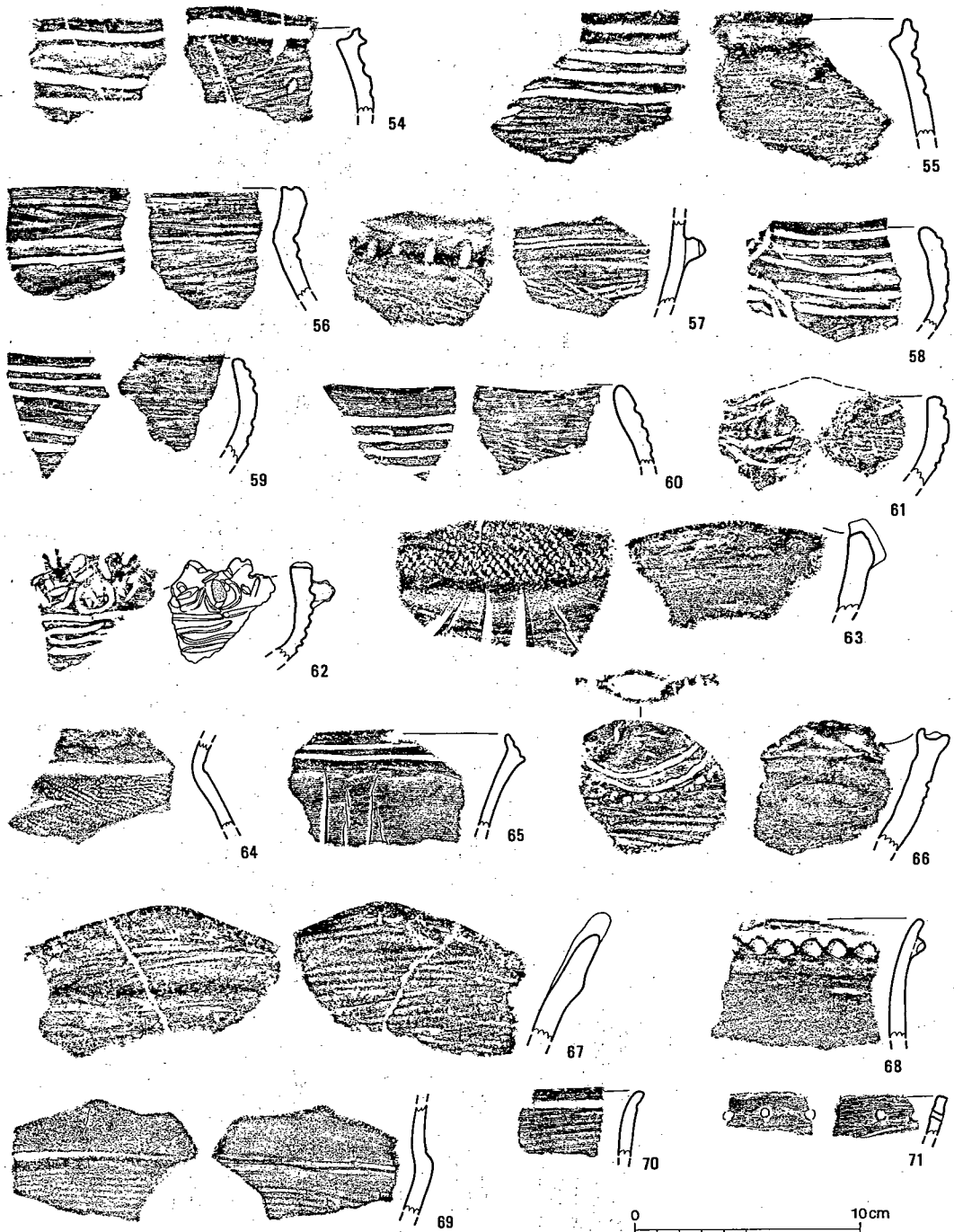
第88図 包含層その他出土の縄文土器実測図② (1/3)



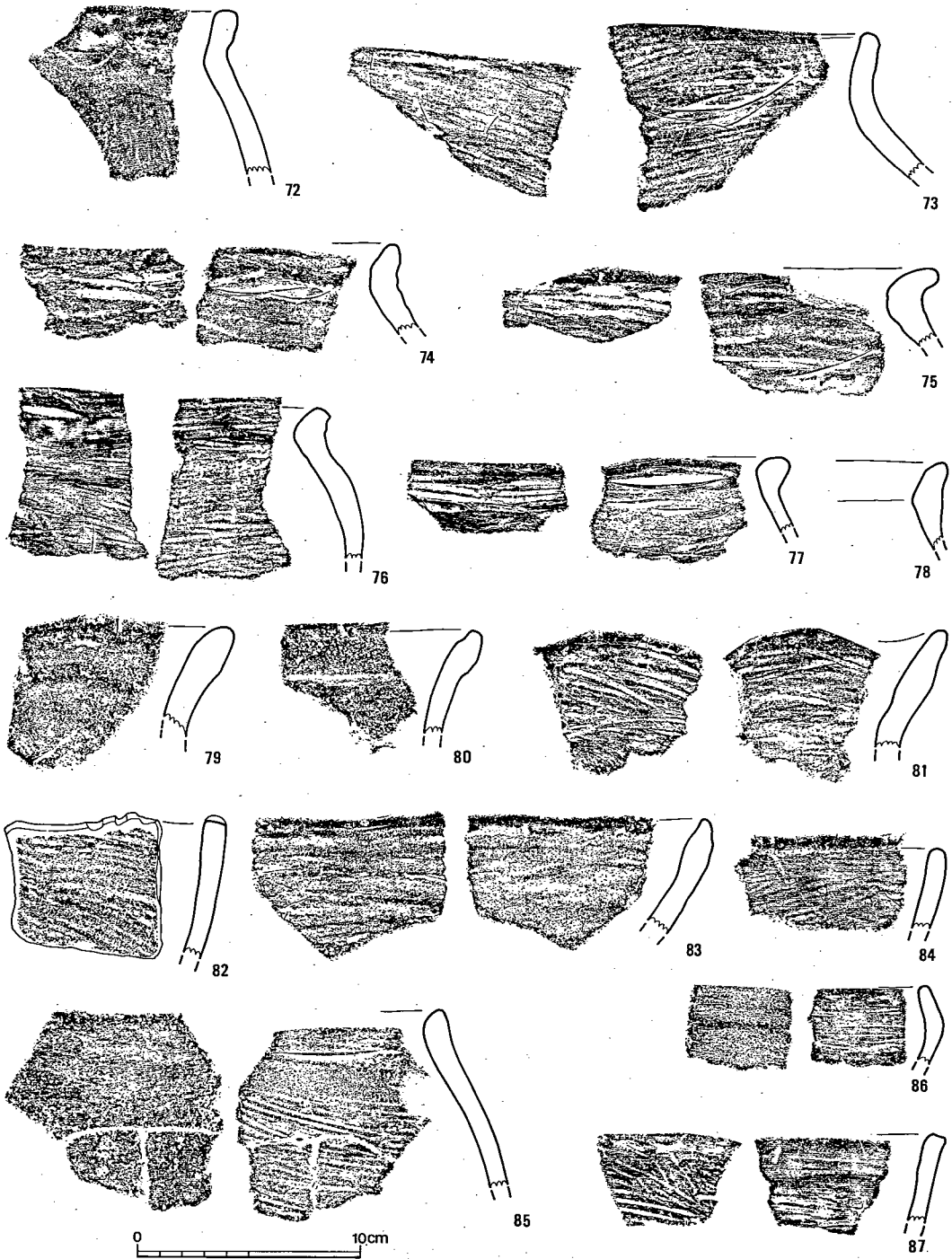
第89図 包含層その他出土の縄文土器実測図③ (1/3)



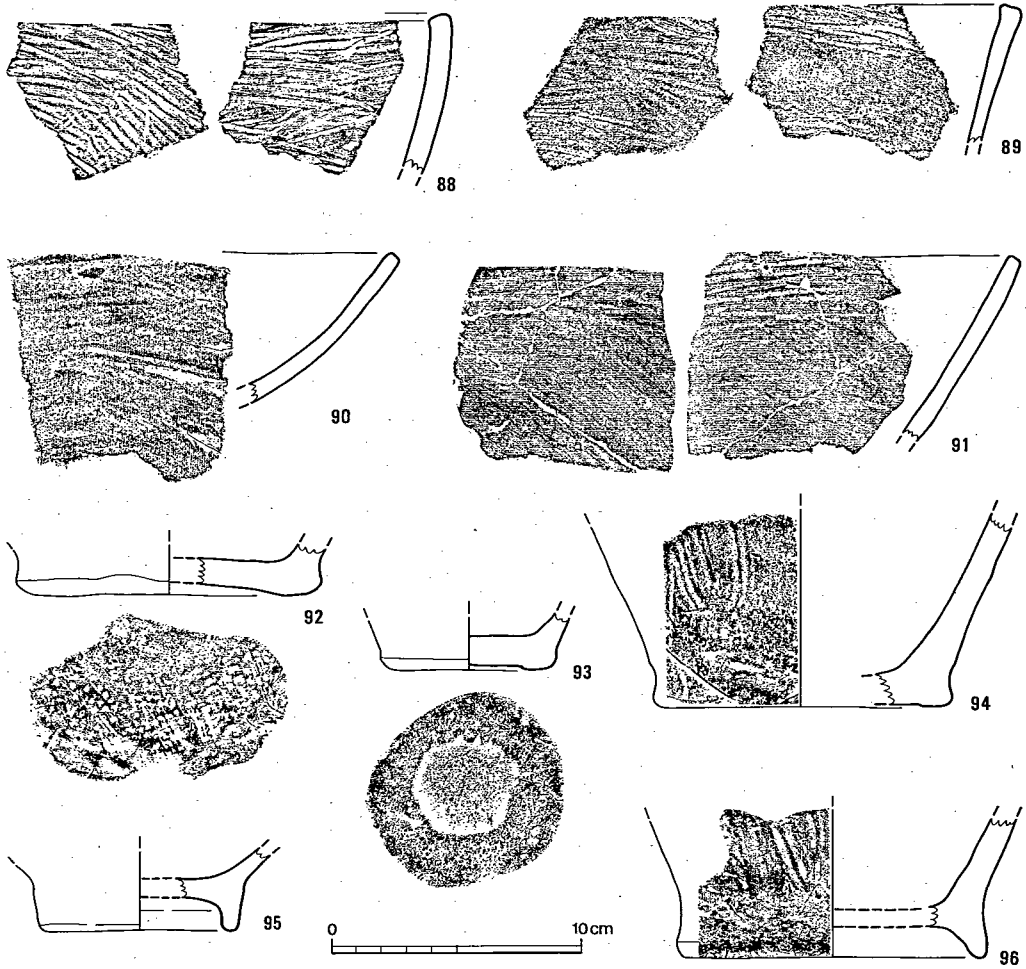
第90図 包含層その他出土の縄文土器実測図④(1/3)



第91図 包含層その他出土の縄文土器実測図⑤ (1/3)



第92図 包含層その他出土の縄文土器実測図⑥ (1/3)



第93図 包含層その他出土の縄文土器実測図⑦ (1/3)

63は肥厚する口縁部の文様帯に縄文を施文する。64は肩部に縄文を施し、磨消縄文になるものと思われる。65は屈曲して内傾する口縁部外面に2条の沈線が巡る。66の波頂部は肥厚し、上面に凹みをもつ。また口唇部にはキザミ目がある。波頂部下には2条の弧線があり、それに沿って刺突列点がみられる。

68は口縁部下に刻み目突帯をもつ。69は肩部に1条の段状の沈線が、70は口縁部下に1条の沈線がそれぞれ巡る。71は孔列土器である。孔は3箇所とも貫通する。

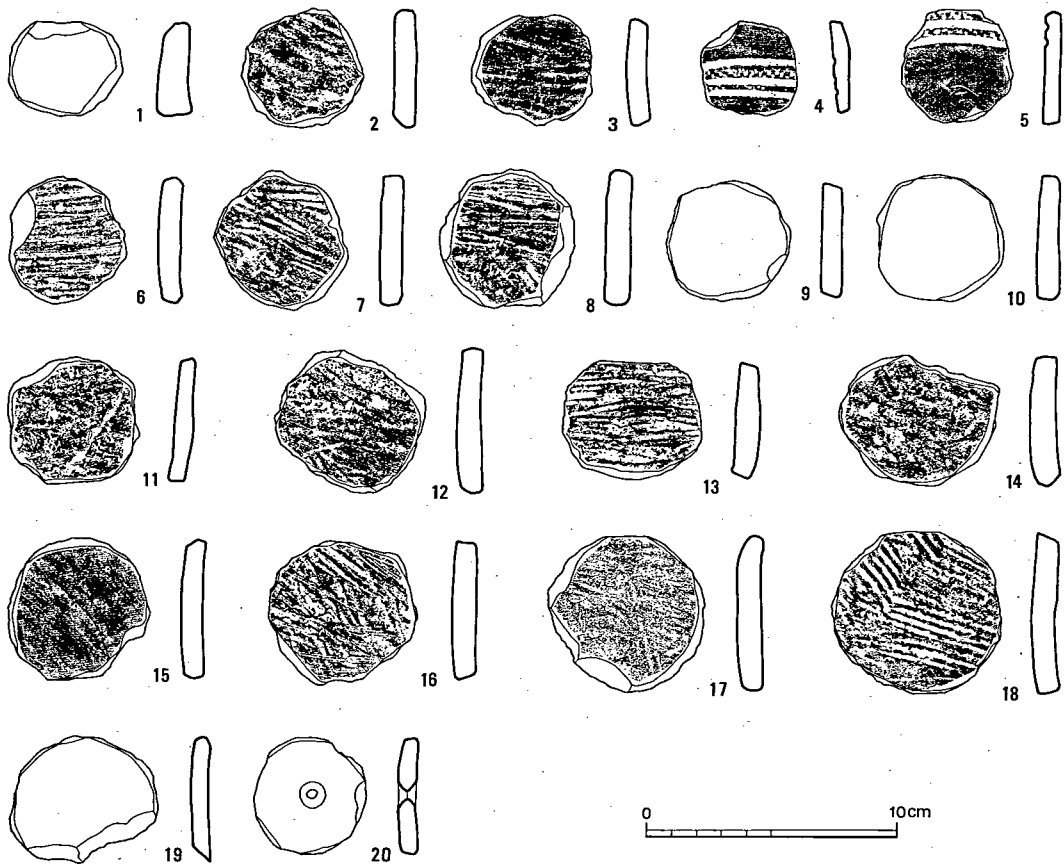
72~91は無文の土器である。72・74~78は屈曲して開く短い口縁部をもつ。73は口縁部がやや長めに外反し、波状口縁になるものと思われる。79~81は口頸部が外反し、口縁部が肥厚する。82~84は逆に内湾気味に立ち上がる。82は低い波状口縁の頂部にキザミが入る。85は口縁

部が肥厚気味に短く立ち上がり、外面はヘナタリ条痕の後ミガキを施し、その上に赤色顔料を塗る。86は口縁部が屈曲して内傾する。87の口唇部上面には擬似縄文らしい痕跡が認められる。90・91は内湾気味に立ち上がり、内外面にミガキを施す。

92～96は底部である。92は底部外面にアンペラ状の圧痕がみられる。93は底部に粘土を輪状に貼り付けて上げ底にしたもの。95・96は底部が高台状に上げ底になっている。

円盤状土製品 (図版48, 第94図)

調査区内から円盤状土製品である可能性のある遺物は大量に出土した。しかし、土器の破片と区別のつきにくいものが多いため、確実に周囲を加工しているとみられるもの20点のみを図示した。縄文土器の口縁部から胴部の破片を使用している。重量は12.0g～52.6gの範囲内で、25g～30gに全体の3分の1程の6点が集中する。20は穿孔のあるもので20.6g。

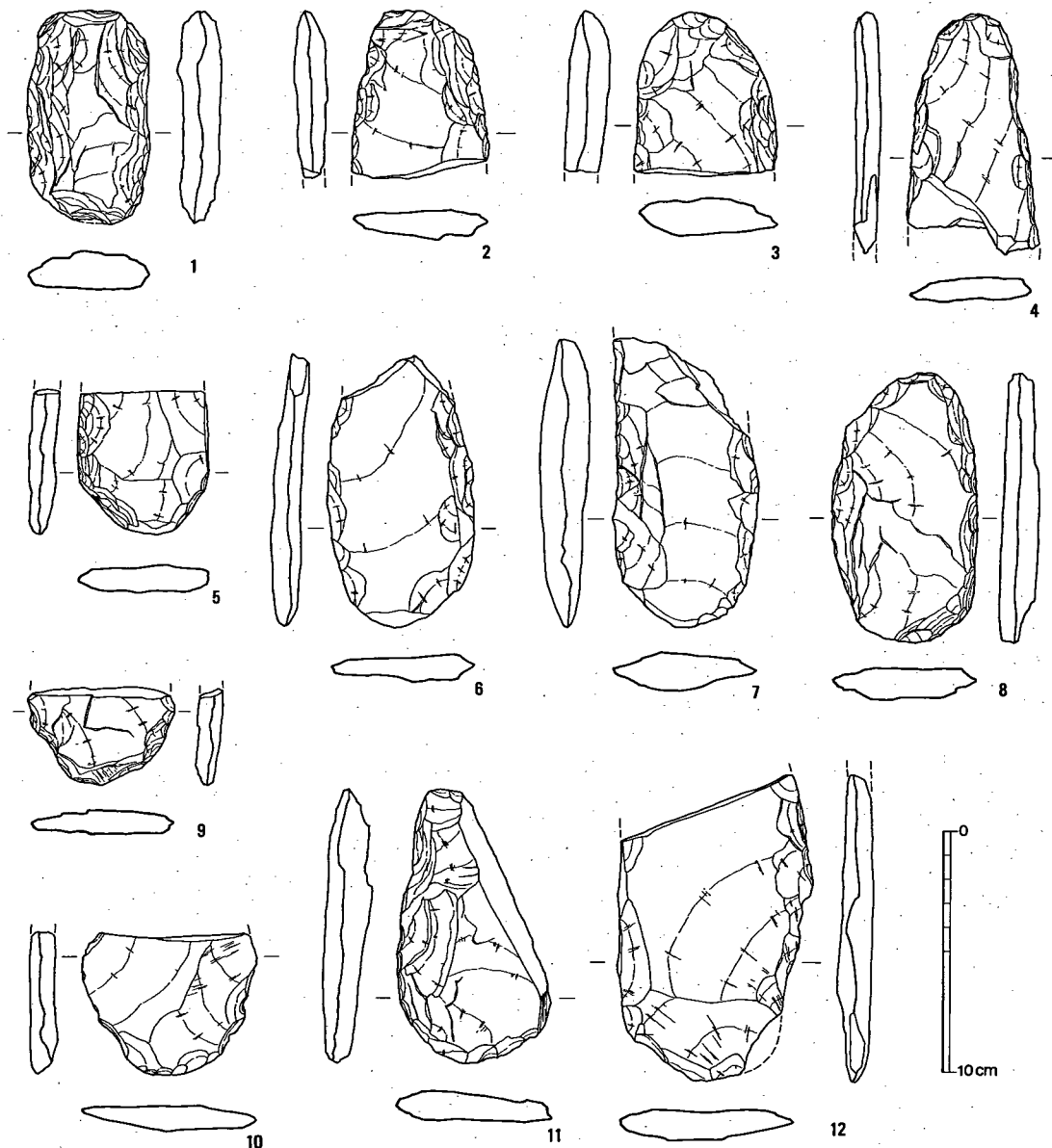


第94図 包含層とその他出土の土製円盤実測図 (1/3)

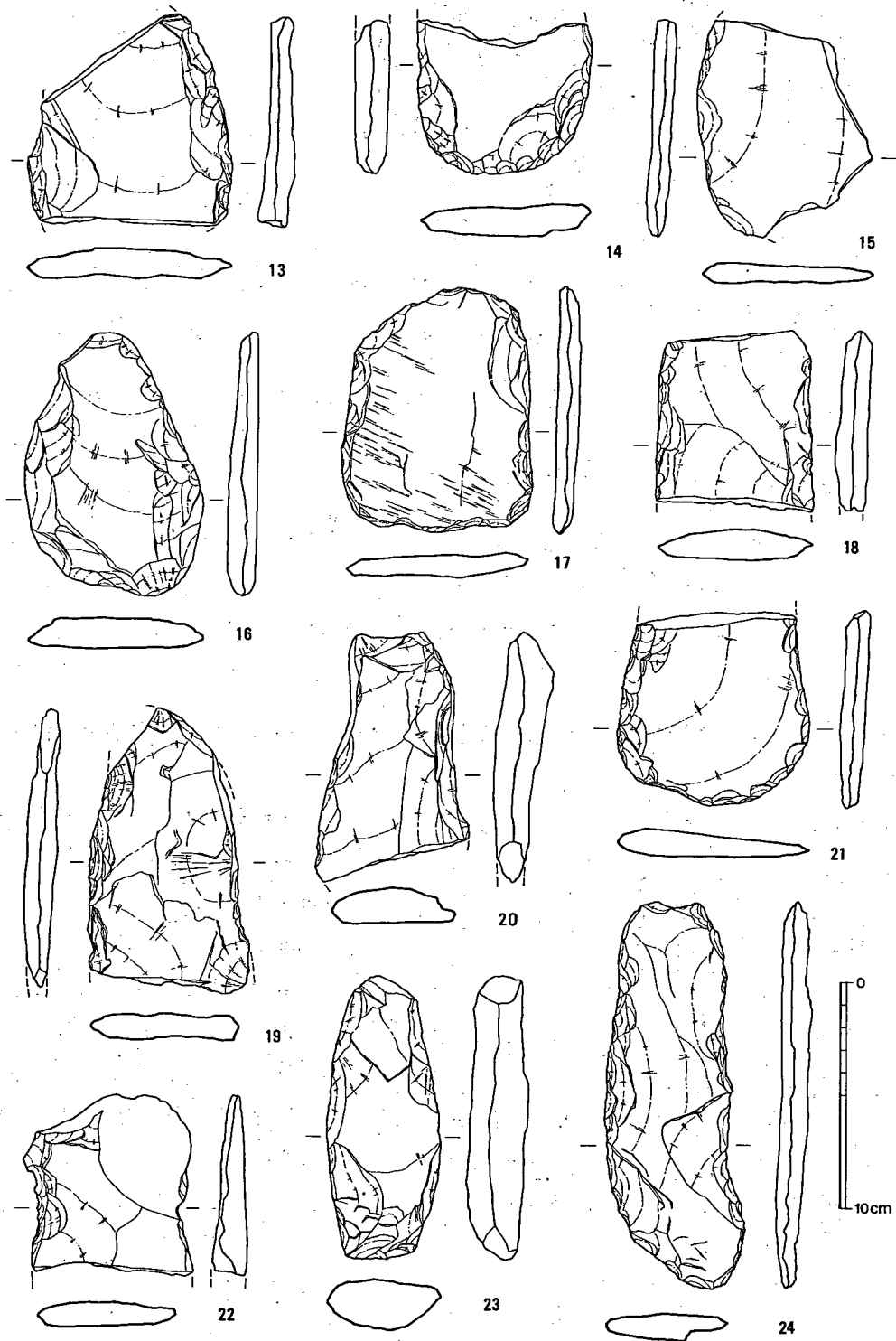
石器 (図版49・50, 第95~99図)

打製石斧(1~24) 24点を図示した。使用された石材は緑泥片岩と安山岩のほぼ2種類である。形態は大別すれば刃部と基部の幅のあまり変わらない短冊形と、刃部の幅の広い撥形に概ね分ける事が出来る。

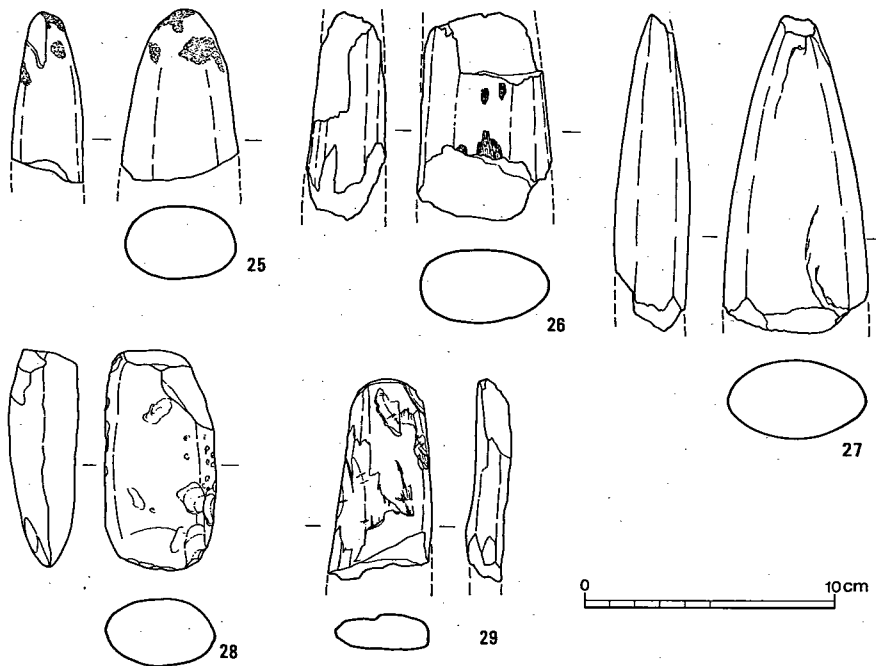
それぞれに幅の狭いタイプと広いタイプがある。22は中央部の幅が狭くなった分銅形として



第95図 包含層その他出土の石器実測図① (1/3)

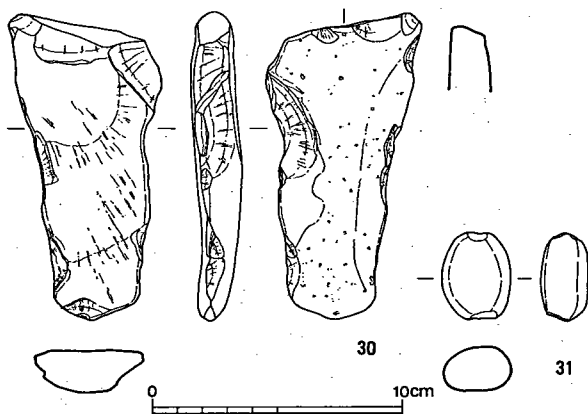


第96図 包含層その他出土の石器実測図② (1/3)



第97図 包含層その他出土の石器実測図③ (1/3)

唯一の例である。23は幅は狭いが厚味のあるもの。24は幅は狭いが長く、刃部が鎌状に湾曲している。



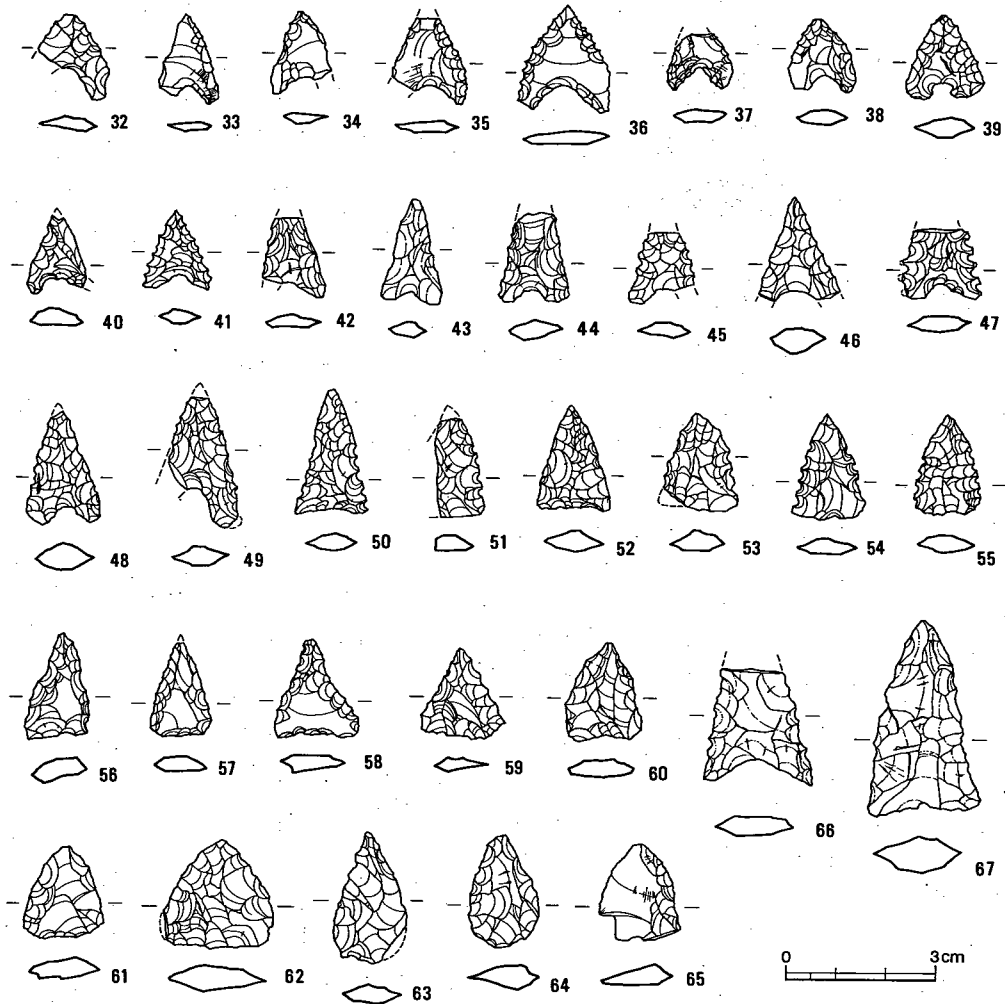
第98図 包含層その他出土の石器実測図④ (1/3)

磨製石斧(25~29) 5点出土したが、全て一部分を欠いている。28・29は小形のもの。29は扁平な体部をもつ。

剝片石器(30) 縦長剝片である。自然面を残しており、全体に器面が風化している。

石錘(31) 凝灰岩の自然石の両端を打ち欠いて製作した石錘。小形のものである。

石鏃(32~67) 36点を図示した。32~49は凹基式で、そのうち32~36は広義の剥片鏃。37は先端部が丸く幅が長さを上回る。50~62は平基式で、幅が広く正三角形に近い形のもの(58・59・62)もある。63・64は円基式のもの。平基式としたものでも54・55・61は基部に丸味をもっており、円基式に近い。45・47・50・51・54・55は鋸歯状の側縁をもつ。32~65は黒曜石製。33・37は伊万里湾周辺産のものを使用し、その他は姫島産黒曜石製である。66はサヌカイト製の凹基式鏃で先端部を欠く。67はチャート製。わたぐりが浅い。

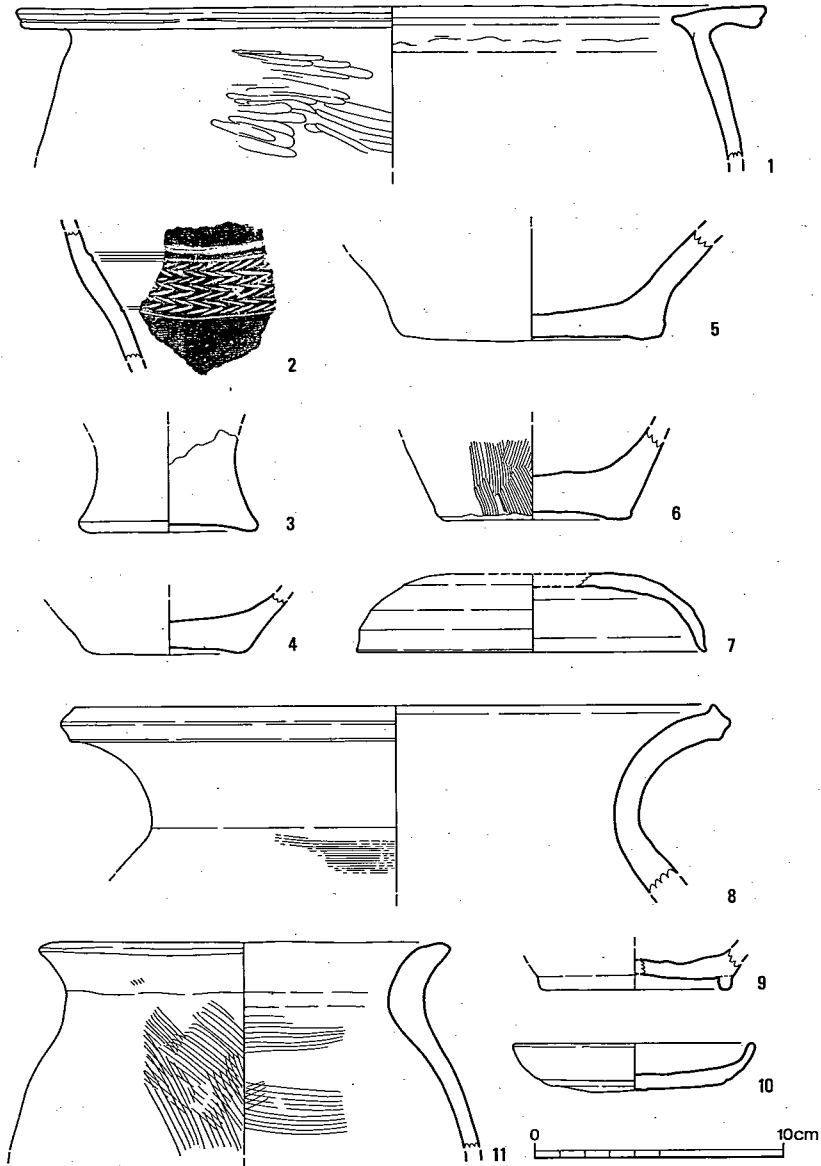


第99図 包含層その他出土の石器実測図⑤(2/3)

その他の遺物

弥生土器 (図版51, 第100図)

壺(2・4・5) 2は頸部から肩部の破片である。頸部と胴部の境には段を有して両者を分けている。肩部には2条のヘラ描き横沈線で上下を区画した中に同様の工具による無軸羽状文を巡らせる。内外面とも丁寧なミガキ調整で仕上げる。4・5は底部である。内外面ともナデ



第100図 その他出土の土器実測図① (1/3)

調整を施す。

甕(1・3・6) 1は鋤先状口縁を呈するもの。胴部外面と口縁部は丁寧に磨き、内面はナデ調整。復元口径30.0cm。3・6は底部破片。3は器肉が厚い。6は底部の器肉が薄く、外面は刷毛目調整。

須恵器 (第100図)

杯蓋(7) 体部と口縁部の境にはわずかに稜があって両者を分ける。天井部外面は回転ヘラ削り調整。復元口径14.0cm, 器高3.1cm。

甕(8) 体部外面はカキ目調整。復元口径27.5cm。

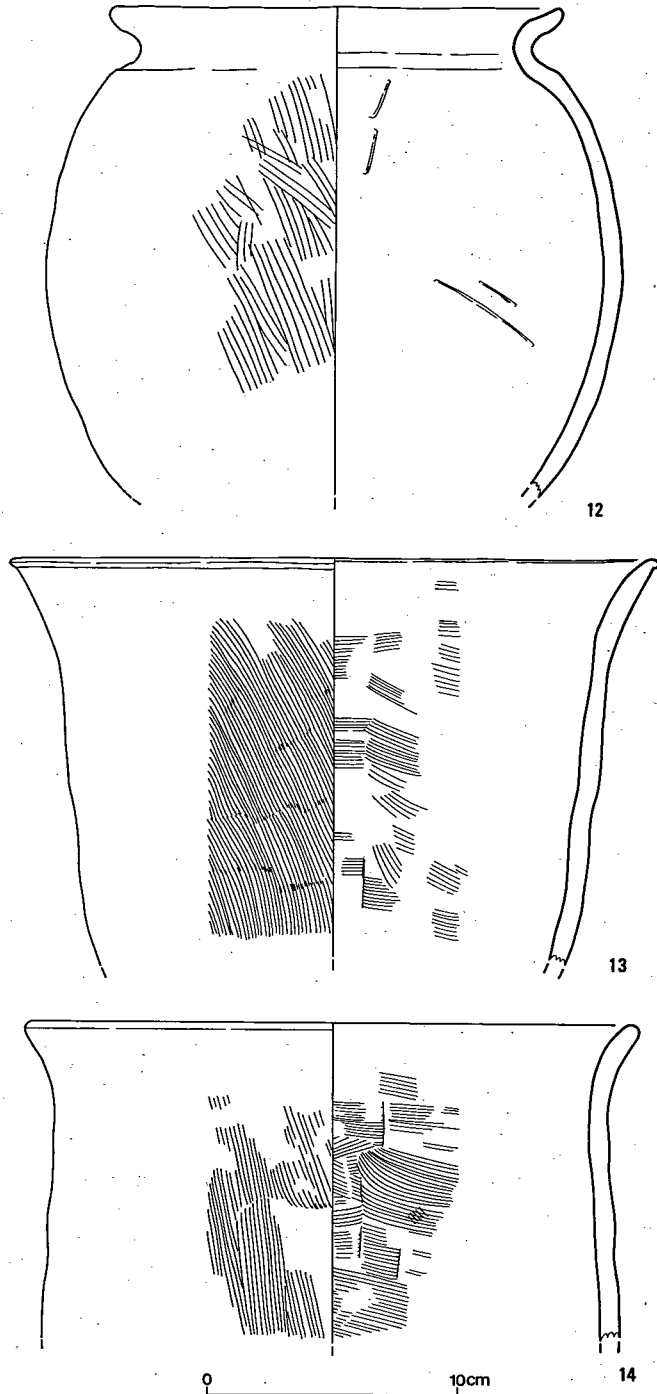
土師器 (図版51, 第100図)

杯(9) 高台のある杯の底部である。復元高台径7.8cm。

皿(10) 煤が付着しており、燈明皿と思われる。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。復元口径9.7cm, 器高1.9cm。

甕(11・12) 11は小形のもの。外反する口縁部をもち、最大径は胴部にある。内外面に刷毛目を施す。復元口径16.4cm。12は頸部がしまり、球形の胴部をもつ。胴部外面は刷毛目調整, 内面は板状工具によるナデ調整。復元口径18.0cm, 胴部最大径23.0cm。

甕(13・14) 2点とも直立



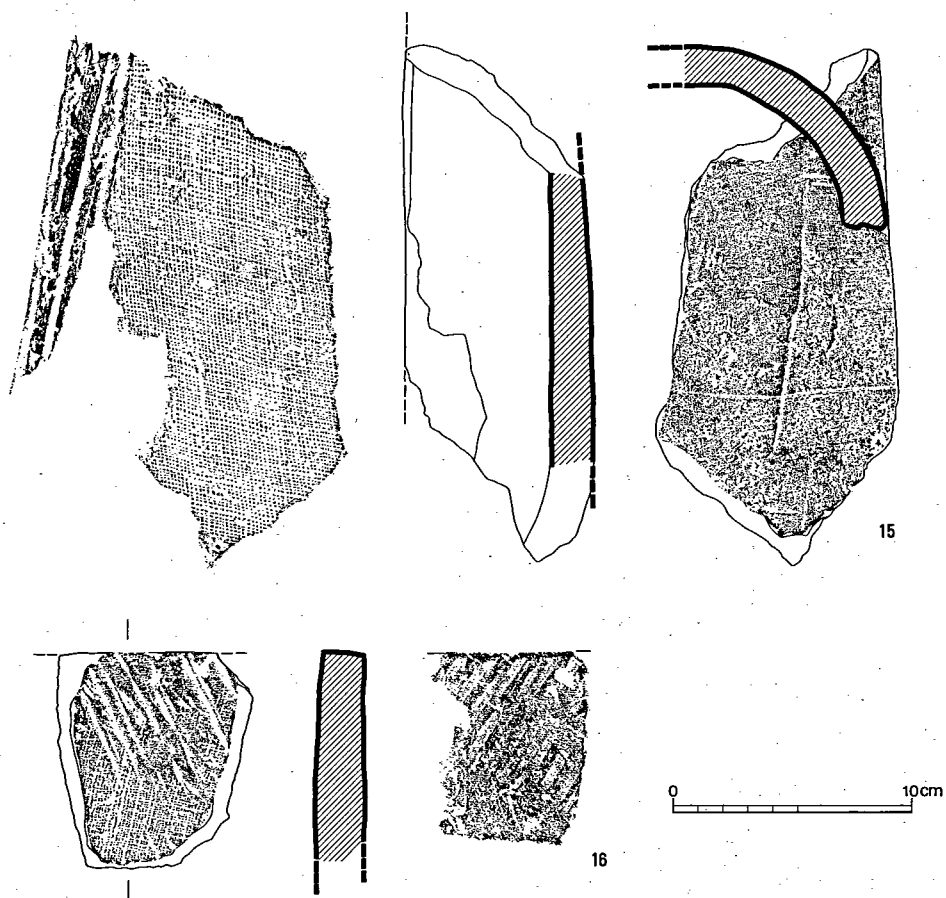
第101図 その他出土の土器実測図② (1/3)

する胴部が外反して口縁部となるが境は明瞭ではない。内外面とも刷毛目を施す。復元口径は13が25.8cm, 14は24.5cm。

瓦類 (図版51, 第102図)

丸瓦(15) 6号溝の上層から出土した。側縁はヘラケズリで角を落とす。凸面は板状の工具によるケズリ調整, 凹面には布目圧痕が残る。

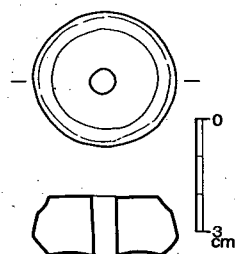
平瓦(16) 1号竪穴の周辺で出土した。凸面には平行線叩き文が残り, 凹面には布目圧痕がみられる。



第102図 その他出土の瓦類実測図 (1/3)

石製品 (図版51, 第103図)

石錘 1・2号住居跡周辺の排土中から出土した。何れの遺構に伴うものかは不明である。滑石製の石錘で37.4g。



第103図 その他出土の石製品実測図 (1/2)

表3 宇野代遺跡出土縄文土器観察表

図番号	No.	色 調	文様の特徴と器面調整		胎 土				
			外 面	内 面	石英	長石	角閃石	雲母	赤褐粒
76	1	暗 褐 色	へ条痕	へ条痕	○	○	○		
	2	暗黄褐色	へ条痕	へ条痕	○	○			
	3	暗灰褐色	ナデ	ナデ	○	○		○	
	4	暗灰褐色	へ条痕→ミガキ	不明	○	○	○		
	5	淡灰褐色	粗なミガキ	粗なミガキ	○	○	○		
	6	暗灰褐色	へ条痕→粗なミガキ	へ条痕→粗なミガキ	○	○			○
77	7	暗灰褐色	へ条痕→ナデ	ナデ	○	○			
	8	橙 色	ミガキ	ミガキ	○				
	9	暗茶褐色	へ条痕→ミガキ	ナデ	○	○	○		
	10	黄 褐色	ミガキ	ミガキ	○	○			
87	1	橙 褐色	押型文	ナデ	○	○			
	2	橙 褐色	押型文	ナデ	○				
	3	茶 褐色	ナデ	ナデ	○	○			○
	4	淡 灰色	ナデ	ナデ	○	○	○		
	5	黄 褐色	ア条痕	ア条痕	○	○	○		○
	6	黄 褐色	ア条痕	ア条痕	○		○		
	7	暗 褐色	縄文R L	ナデ	○	○	○		○
	8	淡 褐色	へ条痕	へ条痕	○	○	○		
	9	暗茶褐色	縄文R L ミガキ	ミガキ	○	○	○		
	10	淡灰褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○		○
88	11	暗 褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○		○
	12	橙 褐色	丁寧なナデ	ア条痕→ナデ	○	○	○		○
	13	黄 灰色	ナデ	ナデ	○	○	○		○
	14	黄 灰色	丁寧なナデ	ア条痕→ナデ	○	○	○		○
	15	橙 褐色	へ条痕→ナデ	へ条痕	○	○	○		
	16	茶 褐色	へ条痕→ナデ	へ条痕	○	○	○		○
	17	灰 褐色	磨消縄文	ア条痕→ミガキ	○	○	○	○	○
	18	茶 褐色	へ条痕→ナデ	へ条痕→ナデ	○	○	○		○
	19	暗灰褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		○
	20	黄 灰色	磨消縄文	ア条痕→ナデ	○	○	○		
	21	黄 灰色	磨消縄文	ナデ	○	○	○		○
	22	黄 灰色	ミガキ	ミガキ	○	○		○	
	23	黄 褐色	磨消縄文	ミガキ	○	○			
	24	淡黄灰色	磨消縄文	条痕→ナデ	○	○	○		○
	25	橙 褐色	条痕→ナデ	ナデ	○	○	○		○
	26	茶 褐色	磨消縄文	ナデ→ミガキ	○	○	○		○
27	黄 灰色	磨消縄文	ミガキ	○	○	○		○	
28	黄 灰色	縄文	へ条痕	○	○	○		○	
29	黄 灰色	磨消縄文	へ条痕→ナデ	○	○	○		○	
30	淡 茶 色	磨消縄文	条痕→ナデ	○	○	○		○	
89	31	橙 色	ナデ	ナデ	○	○	○		
	32	橙 色	ナデ	ナデ	○	○	○		
	33	淡黄灰色	磨消縄文	へ条痕→ナデ	○	○	○		○
	34	橙 褐色	ナデ	へ条痕→ナデ	○	○			○
	35	橙 褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		
	36	淡 褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		○

図番号	No.	色 調	文様の特徴と器面調整		胎 土				
			外 面	内 面	石英	長石	角閃石	雲母	赤褐粒
89	37	暗 灰 色	ナデ	ミガキ	○	○	○		○
	38	暗灰褐色	条痕→ナデ	条痕→ナデ	○	○			○
	39	暗 灰 色	ナデ	ナデ	○	○			○
	40	暗灰褐色	ナデ	条痕→ナデ	○	○	○		
	41	黄 褐 色	ア条痕→ナデ	ア条痕→ナデ	○	○	○		○
	42	暗灰褐色	ナデ	ナデ	○	○			○
	43	黄 褐 色	ナデ	ナデ	○	○	○		
	44	灰 褐 色	ナデ	ナデ	○	○	○		
	45	灰 褐 色	ナデ	ナデ	○	○	○		
	46	灰 褐 色	条痕→ナデ	ナデ	○	○	○		
90	47	黒 褐 色	へ条痕→ナデ	ナデ	○	○	○		○
	48	灰 褐 色	ナデ	ナデ	○	○	○		
	49	淡灰褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		○
	50	暗灰褐色	へ条痕→ナデ	へ条痕→ナデ	○	○	○	○	○
	51	橙 灰 色	ナデ	ナデ	○	○			○
52	橙 灰 色	条痕→ナデ	条痕→ナデ	○	○		○	○	
53	暗灰褐色	条痕→ミガキ	条痕→ミガキ	○	○	○			
91	54	茶 褐 色	ナデ	条痕→ナデ	○	○	○		
	55	淡灰褐色	条痕→ナデ	条痕→ナデ	○	○	○		○
	56	灰 褐 色	へ条痕→ナデ	へ条痕→ナデ	○	○	○		○
	57	暗 褐 色	条痕→ナデ	ア条痕	○	○	○		
	58	灰 褐 色	ナデ	ナデ	○	○	○		
	59	灰 色	ナデ	ナデ	○	○			
	60	茶 褐 色	ナデ	へ条痕→ナデ	○	○			
	61	暗 橙 色	不明	ア条痕	○	○			
	62	橙 褐 色	ナデ	不明	○	○			○
	63	橙 褐 色	縄文	条痕→ナデ	○				
	64	灰 色	磨消縄文	ナデ	○	○			○
	65	橙 褐 色	ミガキ	ミガキ	○	○	○		
	66	灰 色	ア条痕→ナデ	ナデ	○	○			
	67	黄 褐 色	へ条痕→ナデ	ア条痕	○	○			○
	68	淡黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		
69	淡 褐 色	ア条痕→ミガキ	ア条痕→ミガキ	○		○			
70	暗灰褐色	ア条痕→ミガキ	ミガキ	○	○				
71	黒 褐 色	不明	不明	○	○				
92	72	灰 褐 色	へ条痕→ナデ	ナデ	○	○			
	73	灰 褐 色	条痕→ナデ	条痕→ナデ	○	○		○	○
	74	橙 褐 色	板ナデ	板ナデ	○	○			○
	75	橙 灰 色	条痕→ナデ	不明	○	○		○	○
	76	灰 褐 色	へ条痕	へ条痕→ナデ	○	○	○		○
	77	暗灰褐色	条痕→ナデ	ナデ	○	○	○		
	78	橙 灰 色	ナデ	ナデ	○	○			○
	79	黄 褐 色	ナデ	ナデ	○		○		○
	80	暗灰褐色	ナデ	ナデ	○	○			
	81	橙 色	条痕	へ条痕	○	○	○		
	82	暗灰褐色	条痕→ナデ	条痕→ナデ	○	○	○		○
	83	暗 褐 色	カキナデ	ナデ	○	○	○		
	84	黄 橙 色	へ条痕→ナデ	ナデ	○	○	○		○
	85	暗赤褐色	ミガキ	条痕→ナデ	○	○	○		
	86	黄 褐 色	ナデ	ナデ	○		○		○
93	87	灰 褐 色	ア条痕	ア条痕	○	○	○		
	88	黄 褐 色	へ条痕	へ条痕	○	○			○
	89	橙 灰 色	へ条痕	へ条痕→ナデ	○	○	○		
	90	橙 褐 色	条痕→ミガキ	条痕→ミガキ	○		○		
	91	暗 灰 色	条痕→ミガキ	条痕→ミガキ	○	○			
	92	橙 褐 色	ナデ (圧痕あり)	ナデ	○	○	○		
	93	橙 色	ナデ	ナデ	○	○	○		○
	94	黄 褐 色	へ条痕	ナデ	○	○			
95	灰 褐 色	ナデ	ナデ	○		○			
96	黄 褐 色	へ条痕	ナデ	○		○			

表4 宇野代遺跡出土石器観察表

図番号	No.	形態	遺存	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
95	1	打製石斧	完形	緑泥片岩	8.9	5.0	1.6	123.2
	2	〃	刃部欠	安山岩	6.9	5.2	1.3	71.6
	3	〃	刃部欠	安山岩	6.8	5.8	1.5	103.4
	4	〃	刃部欠	緑泥片岩	10.0	5.2	1.0	71.6
	5	〃	基部欠	緑泥片岩	6.0	5.4	1.1	60.8
	6	〃	基部欠	安山岩	11.2	6.1	1.1	108.0
	7	〃	基部欠	安山岩	12.0	6.0	2.0	167.4
	8	〃	完形	緑泥片岩	11.2	6.0	1.4	156.9
	9	〃	基部欠	緑泥片岩	4.1	6.1	1.0	35.1
	10	〃	基部欠	安山岩	5.7	7.3	1.0	63.8
	11	〃	基部欠	緑泥片岩	11.3	6.3	1.7	143.2
	12	〃	基部欠	安山岩	12.7	8.0	1.3	204.4
96	13	〃	刃・基部欠	安山岩	9.3	9.1	1.3	150.5
	14	〃	基部欠	安山岩	6.8	7.7	1.3	107.3
	15	〃	刃・基部欠	安山岩	9.6	7.4	0.9	92.9
	16	〃	完形	安山岩	11.6	7.8	1.4	164.1
	17	〃	完形	緑泥片岩	10.8	8.3	1.0	158.8
	18	〃	刃部欠	安山岩	7.9	7.0	1.4	118.7
	19	〃	刃・基部欠	緑泥片岩	12.6	7.1	1.1	172.6
	20	〃	刃部欠	緑泥片岩	11.0	6.7	1.6	163.2
	21	〃	基部欠	安山岩	8.6	8.5	1.2	117.3
	22	〃	刃・基部欠	安山岩	7.9	7.3	1.5	102.2
	23	〃	完形	緑泥片岩	12.5	5.0	2.3	219.8
	24	〃	完形	緑泥片岩	17.1	5.5	1.2	200.8
97	25	磨製石斧	刃部欠		6.8	4.7	2.8	129.8
	26	〃	刃・基部欠		8.3	5.3	2.9	188.5
	27	〃	刃・基部欠		12.6	5.7	3.2	298.3
	28	〃	基部欠		8.8	4.5	2.7	164.2
	29	〃	刃部欠		8.0	3.9	1.4	75.9
98	30	剝片石器						
	31	石錘	完形	凝灰岩	3.5	2.7	1.9	20.9
99	32	石鏃	片脚欠	姫島黒曜石	1.7	1.4	0.3	0.5
	33	〃	〃	黒色黒曜石	1.8	1.2	0.2	0.3
	34	〃	〃	姫島黒曜石	1.7	1.2	0.2	0.4
	35	〃	先・片脚欠	〃	1.7	1.5	0.2	0.6
	36	〃	完形	〃	2.1	1.7	0.2	0.7
	37	〃	先端欠	黒色黒曜石	1.1	1.3	0.3	0.3

図番号	No.	形 態	遺 存	材 質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
99	38	石 鏃	完 形	姫島黒曜石	1.4	1.3	0.3	0.5
	39	”	”	”	1.7	1.6	0.4	0.7
	40	”	先・片脚欠	”	1.6	1.1	0.3	0.5
	41	”	完 形	”	1.6	1.4	0.3	0.3
	42	”	先・片脚欠	”	1.6	1.2	0.3	0.5
	43	”	完 形	”	2.1	1.2	0.3	0.6
	44	”	先 端 欠	”	1.8	1.4	0.4	1.8
	45	”	先・片脚欠	”	1.4	1.3	0.3	0.5
	46	”	両 脚 欠	”	2.1	1.6	0.5	0.9
	47	”	先 端 欠	”	1.4	1.6	0.3	0.7
	48	”	先 端 欠	”	2.3	1.5	0.6	1.2
	49	”	先・片脚欠	”	2.6	1.4	0.4	1.1
	50	”	完 形	”	2.5	1.5	0.3	0.8
	51	”	先・片側欠	”	2.0	0.9	0.3	0.6
	52	”	完 形	”	2.1	1.4	0.4	0.9
	53	”	片基部欠	”	2.0	1.5	0.4	1.0
	54	”	完 形	”	2.1	1.5	0.3	0.7
	55	”	”	”	2.0	1.3	0.4	0.8
	56	”	”	”	2.1	1.2	0.4	1.1
	57	”	ほぼ完形	”	1.9	1.2	0.3	0.6
	58	”	完 形	”	2.0	1.7	0.3	0.8
	59	”	”	”	1.8	1.7	0.3	0.7
	60	”	”	”	2.0	1.5	0.3	1.0
	61	”	”	”	1.8	1.5	0.4	1.1
	62	”	ほぼ完形	”	2.2	2.2	0.5	1.9
	63	”	”	”	2.6	1.5	0.4	1.4
	64	”	完 形	”	2.3	1.4	0.5	1.2
	65	”	基 部 欠	”	1.9	1.6	0.4	1.0
	66	”	先 端 欠	サヌカイト	2.4	2.2	0.4	2.0
	67	”	完 形	チャート	4.0	2.2	0.8	5.4

IV おわりに

縄文時代の遺構と遺物について

宇野代遺跡では、調査区内のほぼ全面から相当量の縄文時代遺物が出土した。土器をみると、早期の押型文土器から晩期の夜臼式まで中期を除いて各期のものがみられる。しかし、後期の小池原上層式・鐘崎式の土器以外はいずれも破片数点の出土であり、後期前半から中葉にかけての時代が中心であることがわかる。

この時期には大平村土佐井遺跡（註1）、上唐原遺跡（註2）、豊前市中村石丸遺跡（註3）、小石原泉遺跡（註4）、椎田町山崎・石町遺跡（註5）、豊津町節丸西遺跡（註6）、中津市ボウガキ遺跡（註7）、三光村佐知遺跡（註8）、佐久保畑遺跡（註9）、宇佐市尾畑遺跡（註10）、安心院町飯田二反田遺跡（註11）などで竪穴住居跡が最近相次いで調査されている。この地域ではその前後の時期の性格が今一つ判然としないなかで、ほぼ後期前半から中葉・後半の時期に限って遺跡数が多くなり、にわかには生活のにおいが漂う。この時期に人口が増加して生業の場が拡大したことは確実であろう。宇野代遺跡で検出した遺構・遺物についても、それらの中に位置付けることが出来よう。

宇野代遺跡は、学史的にも名高い同村垂水遺跡（註12）とは800mの至近距離にあり、ともに友枝川左岸の河岸段丘上に立地する点も共通している。垂水遺跡出土の遺物が宇野代遺跡のものとはほぼ同時期であることから、両者は同一遺跡とするには距離があるとしても遺跡のもつ性格はほぼ同様であると考えられる。

今回の調査区内で確実に縄文時代の遺構と言えるのは1号竪穴のみである。この遺構は一見したところ円形住居跡のようであるが、炉跡も柱穴も検出することが出来なかった。また、1号竪穴は遺物の出土状況から鐘崎Ⅲ式の土器に伴うものと考えたが、この時期では平面方形の住居がこの地方における主流であり、円形住居跡は次の北久根山式の段階にならないと発見例がない（註13）。このことから、この遺構が住居跡である可能性は低い。宇野代遺跡は立地や遺物の出土状況などから集落の一部と考えられるが、住居跡の未検出な現状ではそれを証明することは出来ない。これについては隣接地の調査を待つほかはない。垂水遺跡から宇野代遺跡にかけて活動した縄文人の住まいはまだ地下に眠っているのであろうか。

古墳について

今回の調査区内では19基の古墳を調査した。古墳は全て削平を受けて墳丘と石室の上半部を

表5 宇野代古墳群石室一覧表

古墳名	墳丘径 (m)	石室長 (cm)	石室幅(奥) (cm)	石室幅(最大) (cm)	玄室比	石室形	主軸方位
1号墳	6.8	150	125		1.2	長方形	N-42°-W
2号墳	6.8			110		長方形	N-21°-W
3号墳	8.0	230	85	110	2.7	胴張り長方形	N-25°-E
4号墳	9.0	260	140		1.9	羽子板形	N-65°-E
5号墳	10.9	220	135	150	1.6	長方形	N-37°-E
6号墳	(7~8)		90	135		胴張り長方形	N-54°-W
7号墳	9.0	185	130	155	1.4	長方形	N-38°-E
8号墳	(6)		110	140		長方形	N-84°-W
9号墳	(7~8)	250	115	130	2.2	長方形	N-62°-W
10号墳	(7)		85	120		胴張り長方形	N-48°-W
11号墳		230	130		1.8	長方形	N-9°-W
12号墳		200	120		1.7	羽子板形	N-33°-E
13号墳			60	90		胴張り長方形	N-66°-W
14号墳			85	120		胴張り長方形	N-42°-W
15号墳							
16号墳		210	110	120	1.9	長方形	N-42°-W
17号墳			105	125		長方形	N-35°-W
18号墳			70			長方形	N-40°-W
19号墳		215	100	125	2.2	隅丸長方形	N-46°-W

既に失っており、本来の姿を復元することは難しい。しかし、残された石室下半部から知り得た事もまた多かった。以下石室構造を中心に宇野代古墳群について整理をしたい。

埋葬施設 19基とも単室の横穴式石室である。玄門部を失った6・10・13・14・15・17号墳等については不明であるが、残りの石室に片袖のものはみられず、ほとんどが両袖で、1・18号墳等はあるいは無袖になるのかもしれない。

石室周壁 石室の奥壁と左右の側壁は、最下段に偏平な河原石を立てて腰石とし、2段目より上は同じく偏平河原石を小口積みにして構築する。

腰石の並べ方には次の5種がみられた。

1. 奥壁・側壁とも石材を縦位に立て並べる(9・10・14・16・18・19号墳)
2. 奥壁・側壁とも横位に立て並べる(3・11・12号墳)
3. 奥壁を縦位に、側壁を横位に立て並べる(5・7号墳)
4. 奥壁を横位に、側壁を縦位に立て並べる(13号墳)
5. 縦位・横位にかかわらず腰石の上場を揃える(8号墳)

また、7号墳については偏平というよりも塊石に近い石材を周壁腰石に使用しており、2段目以降の石材も違ってくるのかもしれない。

袖部 袖部は内側に大きく張り出さず、むしろ側壁と石材の積み方を変える事によって袖を表現する。次の4種がある。

1. 側壁腰石は横位に立て、袖は石材を縦位に立てる（5・7・12号墳）
2. 側壁腰石は縦位に立て、袖は横位に立てる（16号墳）
3. 側壁・袖石ともに縦位に立てる（9・19号墳）
4. 袖部を偏平石の小口積みで作る（3・11号墳）

框部 框には次の2種がある。

1. 左右の袖部の間に、縦長の石材を石室主軸に直行させて置く（5・7・11・12号墳）
2. 左右の袖部の間に、玄室床面の敷石より厚みのある石を並べる（1・3・4・9・16・19号墳）

1はいわゆる通有の框石である。2は数個から10個以上の石を左右の袖部の間に敷き並べて、玄室床面より高い部分を作るものである。16号墳石室は石が1個しか残っておらずはっきりしないが、その他の石室をみると、この框部分が長さ1m程もある。このため、この部分を縮小化した羨道部と考える事も不可能ではない。しかし、19号墳石室をみると框施設とした部分の手前側の前庭部に玄室内床石と同レベルの敷石があり（第69図）、この玄室と前庭部に挟まれた部分は明らかに意識的に1段高く作っているが、筆者は羨道部だけが高くなった例を他に知らない。ここを框部と考えれば前後の敷石との関係は12号墳石室と同じという事になり（第52図）、より自然と考える。

羨道部 12・19号墳石室には羨道部のあった可能性がある。12号墳は袖部の手前側の左右に石積みが残っている。床面より10cm以上高いところから1段目を積み始めており、墓道につながる前庭部の側壁とも考えられるが、石積みを持ち送りがみられる事から天井を架構した羨道部であると考えられる。19号墳も袖部の手前側の左右に石が並ぶが、袖部から「八」の字に開き手前では玄室幅を上回る。こちらについては前庭部側壁としたほうが良いのではないか。その他の石室には羨道部はみられない。

前庭部 5・7号墳は墓道がなく、袖部の手前に前庭部を作り、1段高い外側から前庭部に一旦下りて石室内に入る構造になっている。5号墳は「八」の字に開く前庭部側壁を作ってこの部分を区画し、7号墳は前庭部に階段状に段を付けることで同様のスペースを確保している。

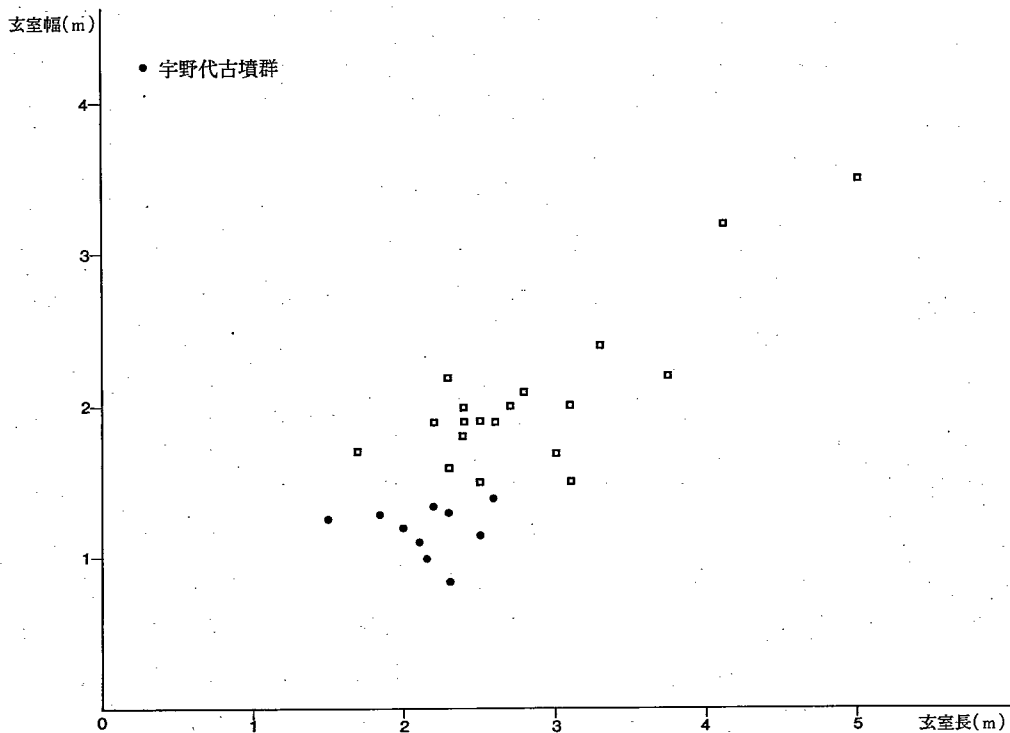
玄室床面 16号墳石室を除いて、玄室内には偏平な河原石を敷き並べて床面とし、その隙間には小石が詰まっている。11号墳の下層床面の状況や、調査時に玄室埋土中から隙間に詰めるだけにしては多い量の小石が出土することから、小石は偏平石の上に全面に敷いて見かけ礫床状にしていた可能性もあるように思う。

根石 3・10・12・17・19号墳石室では、床石の下層に周壁腰石の下に内側から詰めて固定した根石があった。石室の構築段階で、3・10・12・19号墳では墓壇底にまず腰石を並べ、内外から根石を詰めて固定したうえで床石を敷くということになる。17号墳は根石がきれいに長方形に並んでいる事から、先に内側の根石を並べて石室の形を決め、その後腰石を立てて固定し、床石を敷く順序が復元出来る。一方8・13・14号墳等は床石下層に根石はないものの腰石に接する部分の床石が大きめで、腰石を立てると同時に床石で内側を固定したと考えられる。

整地 斜面に立地する13・14・16号墳と石室手前側が斜面にかかる9・10・11号墳石室では、墓壇を掘る際に、手前側の低い部分は逆に埋める事によって墓壇底の水平面を確保しており、墓壇を深く掘る労力を節約している。

墓道部の土坑 12号墳では、石室主軸と直行する方向に長軸を向ける土坑が、墓道部にあった(図版19-2, 第52図)。位置からいっても12号墳に伴うものであることは間違いないであろう。ほぼ同様の土坑状の施設が、村内の宇野台1号墳でも検出されている。ともに土坑の性格は不明である。

規模 残存する周溝から墳丘径を復元することの可能な1~10号墳をみると、5号墳の10.9mが最大で、他は全て10m未満である。



第104図 宇野代古墳群石室と周辺古墳石室の規模

調査した19基の石室の規模も、周辺の6世紀後半から7世紀初頭のもの（大平村穴ヶ葉山古墳群（註14）、穴ヶ葉山南古墳群（註15）、上ノ熊古墳群（註16）、土佐井古墳群（註17）、新吉富村宇野台古墳群（註18）、桑野題古墳群（註19）、巨石塚古墳（註20）、吉富町天仲寺古墳、広運寺古墳（註21）、の各石室）と比較しても殊更小さく、特に幅の狭さが目立つ（第104図）。

比較的玄室規模に近い穴ヶ葉山2号墳、上ノ熊2号墳、桑野題2号墳の石室と使用された石材を比較すると、上記3古墳石室では石材が概して大きめで、殊に周壁腰石には、重さ数トンはする穴ヶ葉山2号墳の鏡石を別にしても、大型の石材を使用している。また、袖石上には同じく大型の楣石を渡し、前壁構造を有する。一方、宇野代古墳群の石室では、玄室周壁の腰石はあるものの大人1人～2人で運ぶ事が出来る程度の偏平な小型河原石を立てて使用しており、上部の壁体は更に小さい河原石を小口積みにして構築する。同様に手近にある河原石を使用した石室としては周辺に土佐井古墳群の石室がある。ただし石室規模が大きい分だけ、宇野代古墳群例よりは大きめの石材を使用している。

竪穴系横口式石室 最近の研究では、北部九州の横穴式石室には、幅が広く大型の石室と、幅が狭く小型の石室の2種の石室があり、前者は前方後円墳や大型の円墳の埋葬施設に採用されて副葬品が豊富で、後者は中小の円墳に採用されて副葬品も貧弱である、という。特に後者の狭長な石室は竪穴系横口式石室とも呼ばれ、初源期の横穴式石室と考えられた時期もあったが、近頃では幅広の石室と比べて被葬者の階層がより劣位であったとする事にほぼ落ち着いている（註22）。

竪穴系横口式石室については、蒲原氏が細かい概念規定を行っており、それによると「単体埋葬を前提とした竪穴系の埋葬施設を基本的に踏襲したものでなければならない」ことから、「楣石・前壁など横穴式石室特有の構造を持つものを」含めず、竪穴の埋葬施設と同様に「主軸並行葬を原則とする」ために「石室の最大幅は原則として1.4m以下」であるという（註23）。森下氏もほぼ同様の考えであるが、古墳時代成年男子の平均身長から1.6mで分かれるとしている（註24）。

さて、宇野代古墳群の19基の石室をみると、全ての石室が上半部を既に失っており、楣石・前壁の有無は不明である。しかし、楣石と前壁が石室高を上げるための構造であるならば、基礎に小石材を立てて腰石とした宇野代古墳群の石室では、それらを支えるのは構造的に無理があると考えられる。したがって、楣石・前壁はなかった可能性が高い。また、石室幅については、森下氏の規定に従えば19基とも全て竪穴系横口式石室となり、蒲原氏によれば5・7号墳は除外されることになる。

森岡秀人氏は、群集墳における石室石材の運搬に要した労働者数を検討し、「一時的にせよ一墳造営集団をはるかに超える大きさの集団労働がなければ、個々の石室さえ築くことはできなかった」として、「諸家族集団全体の技術提携による協業を基盤として」構築したとした（註

25)。そこで再び宇野代古墳群に目をやると、石室石材には周辺にいくらかでも転がっている河原石の、成年男子なら1～2人で容易に運搬することの出来る大きさのものを選んで使用している。また石室構築に際しても、小型の石室を造り、それを納める墓壇も斜面上に立地する古墳では低い部分を埋めて整地することで深く掘らずに済ませている。このように、この古墳群では労働力の省力化がとにかく目立ち、それから考えれば、墳丘についても周溝を掘削した際の排土を盛り上げた、石室を覆う程度の低いものであった可能性が高い。正確な見積りは、なお詳細な検討を要するであろうが、調査を担当した人間として感覚的にもものを言うならば、この程度の規模の古墳であれば3～4人の労働力で数日もあれば完成するのではないだろうか。一方、穴ヶ葉山古墳群や天仲寺古墳、巨石塚古墳等の石室に使用された文字通りの巨石は森岡氏の言う「通常支群と呼ばれているぐらいの造営単位」の人間を動員したとしても運搬することが出来たかどうか。いかに石室規模が近いといっても、数トンもするような石材を使用した穴ヶ葉山2号墳等の古墳とは、その造営に要した労働力においては格段の差があったものと考えられる。

堅穴系横口式石室を論じる際には、4世紀末ないし5世紀初頭に造営された老司古墳石室から6世紀中頃の石室までを対象とするのが約束事のようにになっている。ここで、「堅穴系の埋葬施設」を直接のモデルとして踏襲しているのは、それぞれの地域でこの種石室を造り始めた頃の、せいぜい当初の10～20年であり、その後の世代は新たな型式の石室をモデルとして順次造るのであって、系譜的には確かに「堅穴系」であっても、その概念までをそのまま受け継いでいくわけではない。宇野代古墳群の石室は、6世紀中頃よりも更に新しい6世紀後半から末にかけての時期を中心とするもので、たとえ堅穴系横口式石室の範疇に含まれるとしても、この種の石室が採用されて以来200年近くを経過したこの時期に、もはや「堅穴系」である必要はないものと考えられる。

大型の古墳の埋葬施設である幅広の石室と、中・小型の古墳の埋葬施設としての狭長な石室との差を階層差と捉える諸氏の論に添うならば、むしろ「少ない労働力で造ることが出来る」簡単な石室であることが重要なのではないか。そうすれば自ずと小さな石材を使った狭長な石室になろう。換言すれば、石室・墳丘の規模の差は被葬者がその場に動員することの可能な労働力の差であるとする事が出来よう。

宇野代古墳群に埋葬された人々は、中・小規模の古墳をもつ周辺古墳群の被葬者の属した集団と比較しても、政治的・社会的か或いは経済的かはともかくも明らかに劣位の階層に位置していたものと考えられる。

古墳の時期 検出した19基の古墳は全て近時の削平を受けており、さらに石室内から古代・中世の遺物が出土したことから、かなり古い時期から盗掘・攪乱を受けていたものと考えられる。このため、遺物の残存状況は決して良好なものではなく、時期決定に有効な遺物の得られ

なかった古墳もいくつかある。

出土した土器から判断すると、大半の古墳は6世紀後半から末にかけての時期に造営されたものである。しかし、いくつかの古墳からは7世紀の中頃以降の時期に降る土器が出土している。1号墳から出土した須恵器は7世紀後半代のもので、共伴した土師器碗もこの時期でよいと思われる。隣合う2号墳も須恵器甕1点の出土であるが7世紀後半代としてよいのではないか。10号墳の須恵器壺は周溝からの出土で、古墳に伴うものかは不明であるが、同種の土器を出土した豊前市荒堀雨久保遺跡の共伴須恵器からやはり7世紀後半代に位置付けられる(註26)。16号墳出土の土師器碗は1号墳出土のものと同形・法量ともにほぼ同じで、同時期と考えて差し支えないであろう。15号墳出土の土師器碗も破片1点のみの出土ではあるが7世紀後半代のものである可能性が高い。

この5基の古墳をみると、石室形態および技法的には16号墳がやや異質である以外は6世紀後半代のもものと比べて特に目立った差異はない。しかし古墳の立地では、上位段丘面上の3～10号墳が互いの周溝を共有して連結しながら密集して造営されているのに対して、1・2号墳のみやや離れた位置にある。周溝の形状からこの2基は方墳である可能性があることも考えるとあるいは後出するものであるのかもしれない。一方斜面上の15号墳は南の14号墳と石室の中心距離で17mとかなり離れており、15・16号墳の方が13・14号墳よりも1m程高い位置にある。同じく斜面上にあるからといって必ずしも時期的に同列上に扱う必要はないのではないか。

新しい遺物の出土が、新たな古墳の造営を意味するのか追葬によるものなのかはさておいても、宇野代古墳群では6世紀後半代から始まった古墳の造営が、遅くとも7世紀の初頭には一旦中断しており、7世紀の後半代に再び埋葬活動を開始したと判断する事が出来る。

- 註1 大平村教育委員会「土佐井地区遺跡」『大平村文化財調査報告書』第5集 1990
- 註2 福岡県教育委員会「上唐原遺跡」『豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集 1995
- 註3 豊前市史編纂委員会『豊前市史 考古資料』1993
- 註4 註3に同じ
- 註5 福岡県教育委員会「山崎遺跡Ⅰ」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』(7) 1992
- 註6 豊津町教育委員会「豊前国府および節丸西遺跡」『豊津町文化財調査報告書』第9集 1990
- 註7 三保の文化財を守る会・中津市教育委員会「ボウガキ遺跡」1992
- 註8 大分県教育委員会「佐知遺跡」『大分県文化財調査報告書』第81輯 1989
- 註9 大型店舗建設に先立って三光村教育委員会が1992年に調査を行なった。
- 註10 大分県教育委員会『一般国道10号宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅰ～Ⅲ 1988～1990
- 註11 大分県教育委員会『一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う発掘調査概報』Ⅰ・Ⅱ 1989・1990
- 註12 福岡県高等学校教職員組合『北九州古文化図鑑 第1輯』1950
渡部正気「福岡県築上郡新吉富村垂水遺跡調査報告」『古文化談叢』第11集 1983
- 註13 小池史哲「豊前地域の縄文後期住居跡」『古文化談叢』第30集(下) 1993
- 註14 大平村教育委員会「穴ヶ葉山古墳群」『大平村文化財調査報告書第3集』1985
大平村教育委員会「土佐井ミソソデ遺跡 穴ヶ葉山4号墳 穴ヶ葉山墳墓群」『大平村文化財調査報告書』第7集 1991

- 註15 大平村教育委員会「穴ヶ葉山南古墳群」『大平村文化財調査報告書』第2集 1984
- 註16 大平村教育委員会「上ノ熊古墳群」『大平村文化財調査報告書』第1集 1978
- 註17 註1に同じ。
- 註18 新吉富村教育委員会「宇野台古墳」『新吉富村文化財調査報告書』第5集 1990
- 註19 新吉富村教育委員会「桑野題古墳」『新吉富村文化財調査報告書』第4集 1989
- 註20 正式に調査された事はない。
新吉富村教育委員会「吉岡遺跡」『新吉富村文化財調査報告書』第6集 1991
- 註21 吉富町教育委員会「天仲寺古墳・広運寺古墳」『吉富町文化財調査報告書』第1集 1983
- 註22 柳沢一男「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982
蒲原宏行「竪穴系横口式石室考」『古墳文化の新視角』1983
土生田純行「九州の初期横穴式石室」『古文化談叢』第12集 1983
森下浩行「九州型横穴式石室考—畿内型出現前・横穴式石室の様相—」『古代学研究』115号 1987
重藤輝行「北部九州の初期横穴石室にみられる階層性とその背景」『九州考古学』第67号 1992
- 註23 蒲原宏行 前掲論文
- 註24 森下浩行 前掲論文
- 註25 森岡秀人「群集墳の形成」『古代を考える 古墳』1989
- 註26 福岡県教育委員会「荒堀雨久保遺跡」『福岡県文化財調査報告書』第99集 1992

最後に

宇野代遺跡の調査では、調査を開始して早々の1992年1月20日に、杭打ち作業中の垂永典夫氏の頭に抜けた掛け矢の槌部が当たるといった事故が起こった。直ちに病院に連れて行ったところ、頭蓋骨骨折・脳挫傷・脳内出血の重症であるとの診断をうけた。即日手術を行ない、一時は命の危ぶまれる場面もあったが、幸いその後順調に回復され、同年5月28日には現場作業に復帰できるまでになった。大事には至らなかったものの、この事故を境にして筆者の安全管理に対する認識は明らかに変化した。3年以上を経過した今でもこの時の想いは鮮明に脳裏に残っている。検出した遺構とともに忘れ得ぬ調査である。

(小川)

圖 版



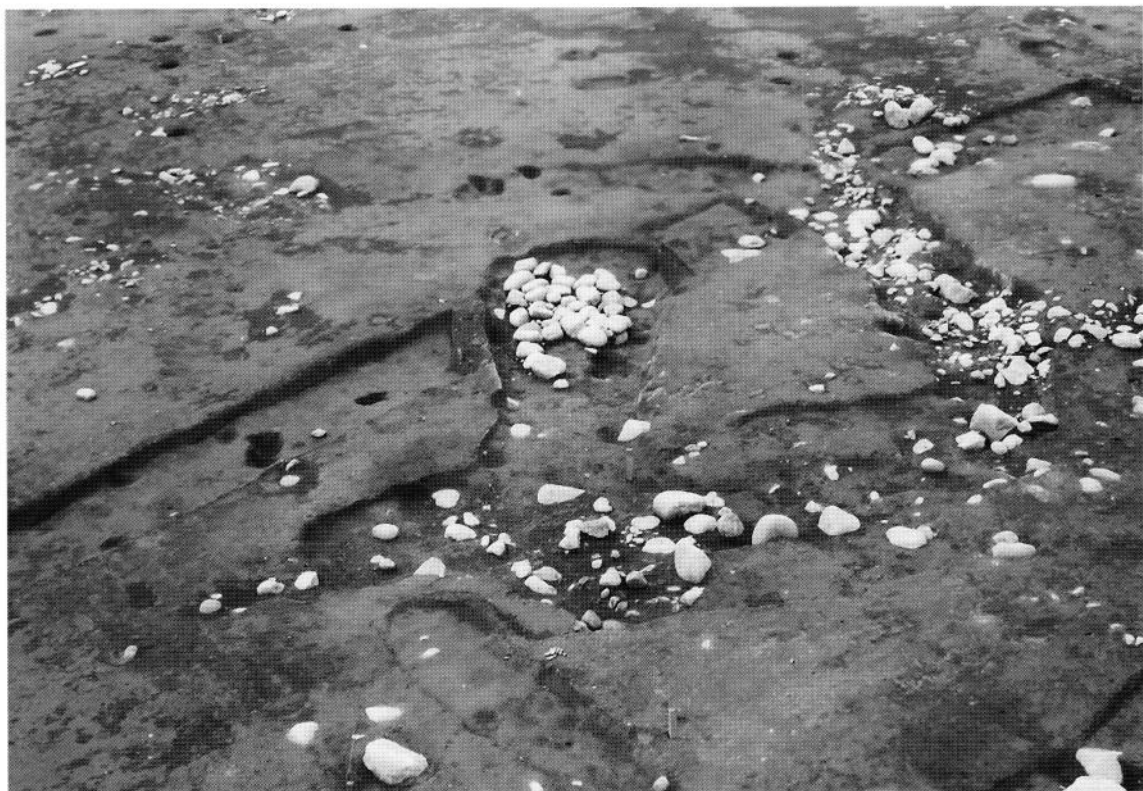
宇野代古墳群全景（空中写真 南東から）



1 1号墳全景 (南東から)



2 1号墳石室全景 (南東から)



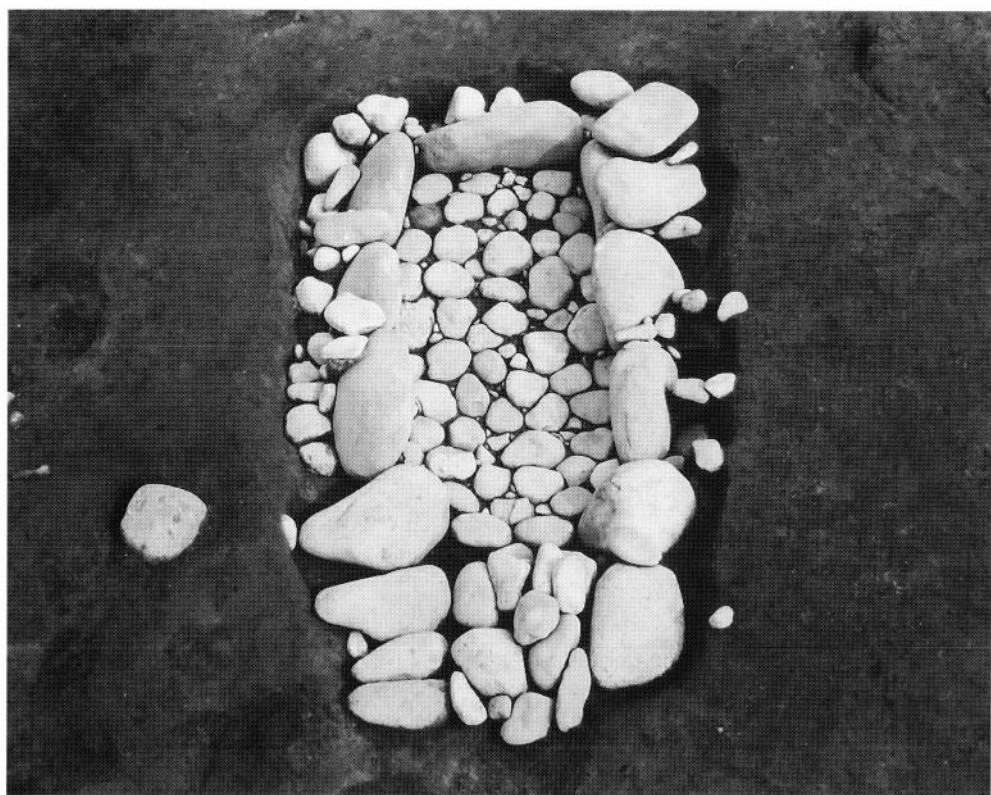
1 2号墳全景（南東から）



2 2号墳石室全景（南東から）



1 3号墳全景（南西から）



2 3号墳石室全景（南西から）



1 3号墳石室近景（南西から）



2 4号墳全景（南東から）



1 4号墳石室全景 (南東から)



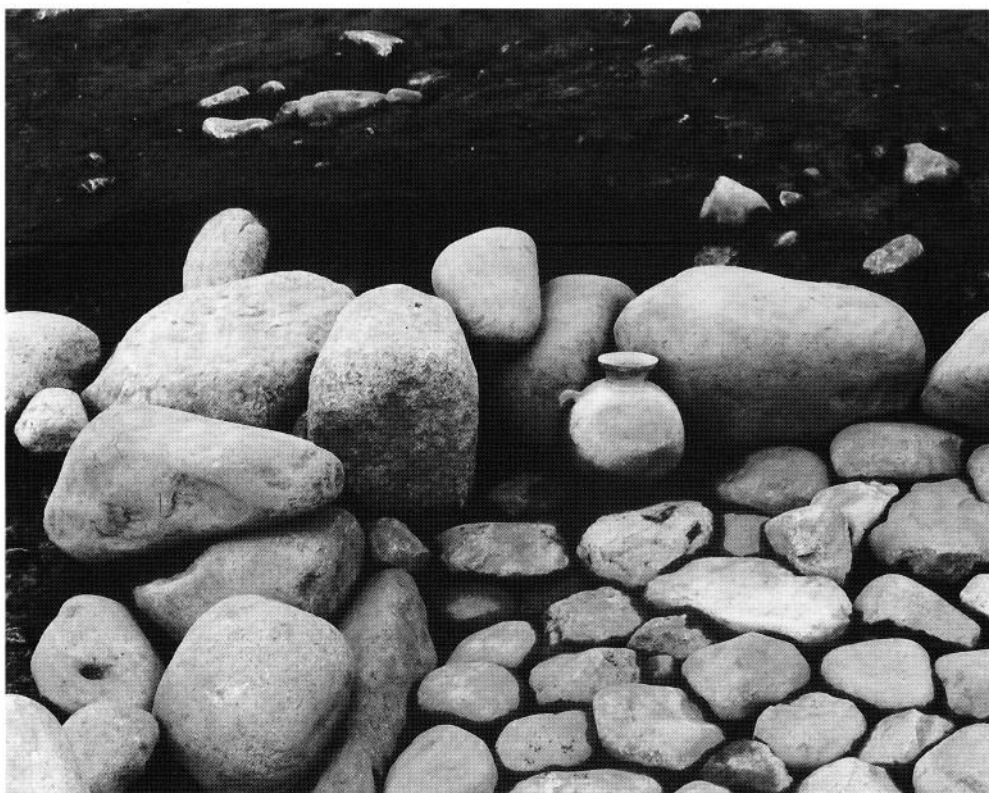
2 5号墳全景 (南東から)



1 5号墳石室全景（南西から）



2 5号墳石室近景（南西から）



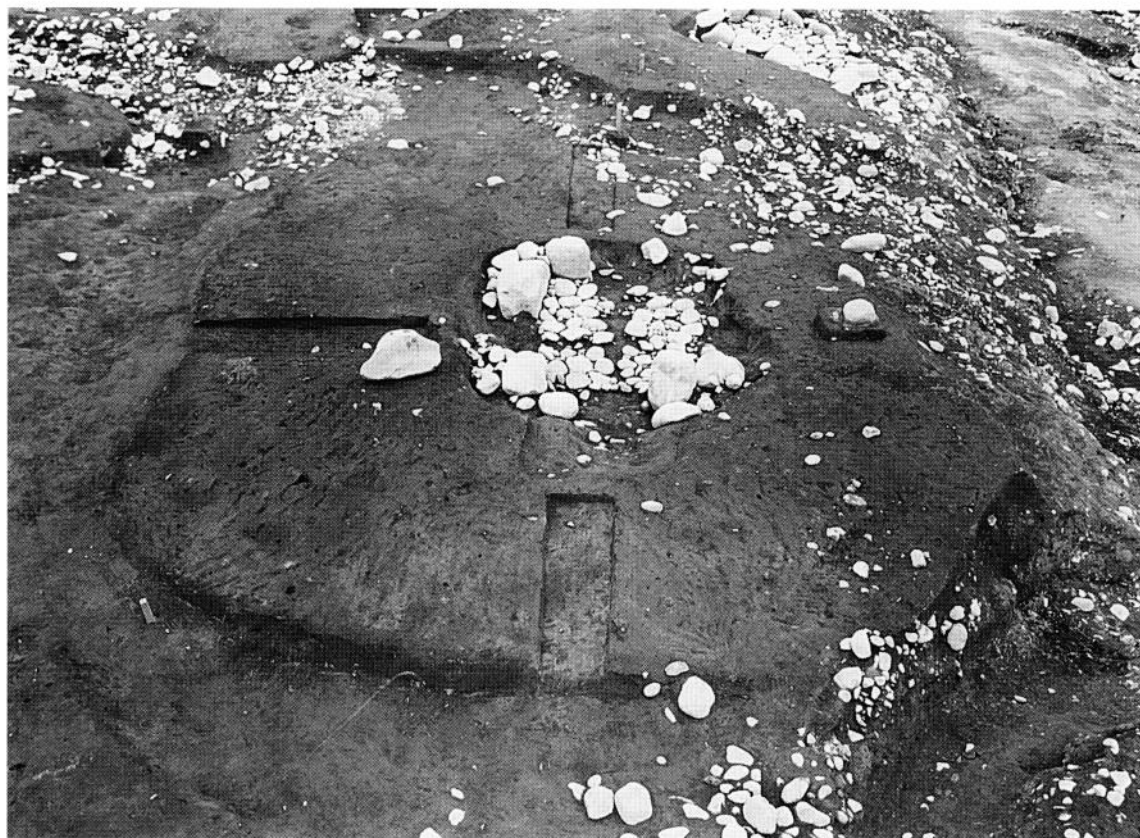
1 5号墳石室内土器出土状況 (南東から)



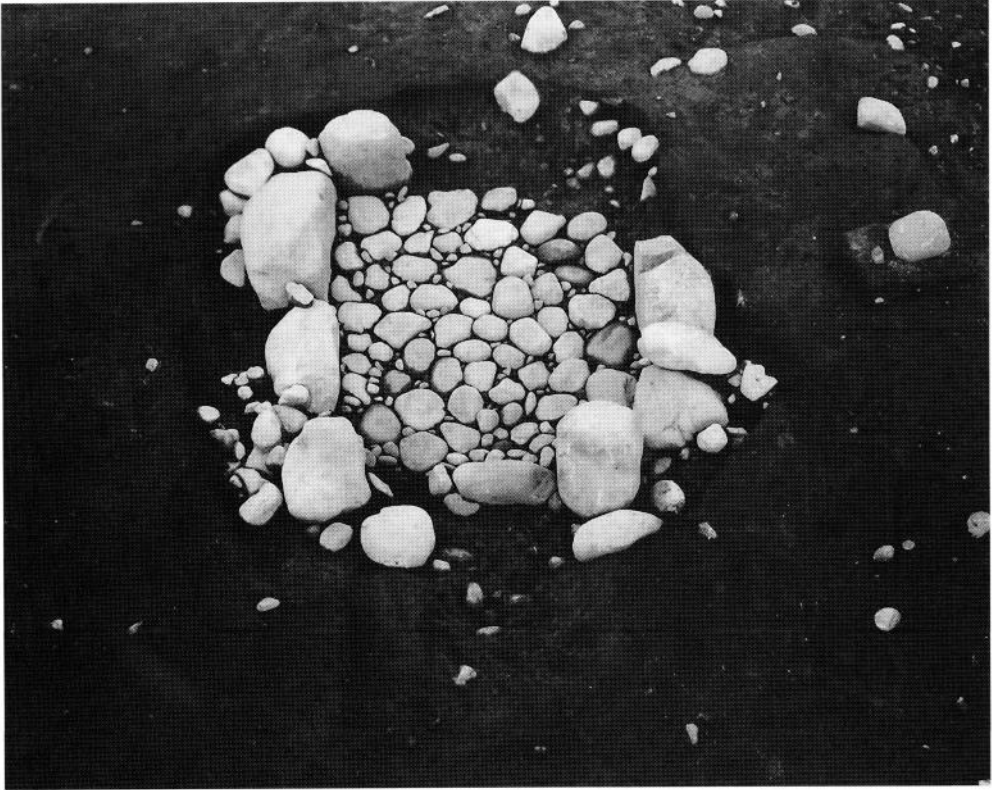
2 6号墳全景 (南東から)



1 6号墳石室全景 (南東から)



2 7号墳全景 (南西から)



1 7号墳石室全景（南西から）



2 7号墳玄門部状況（北東から）



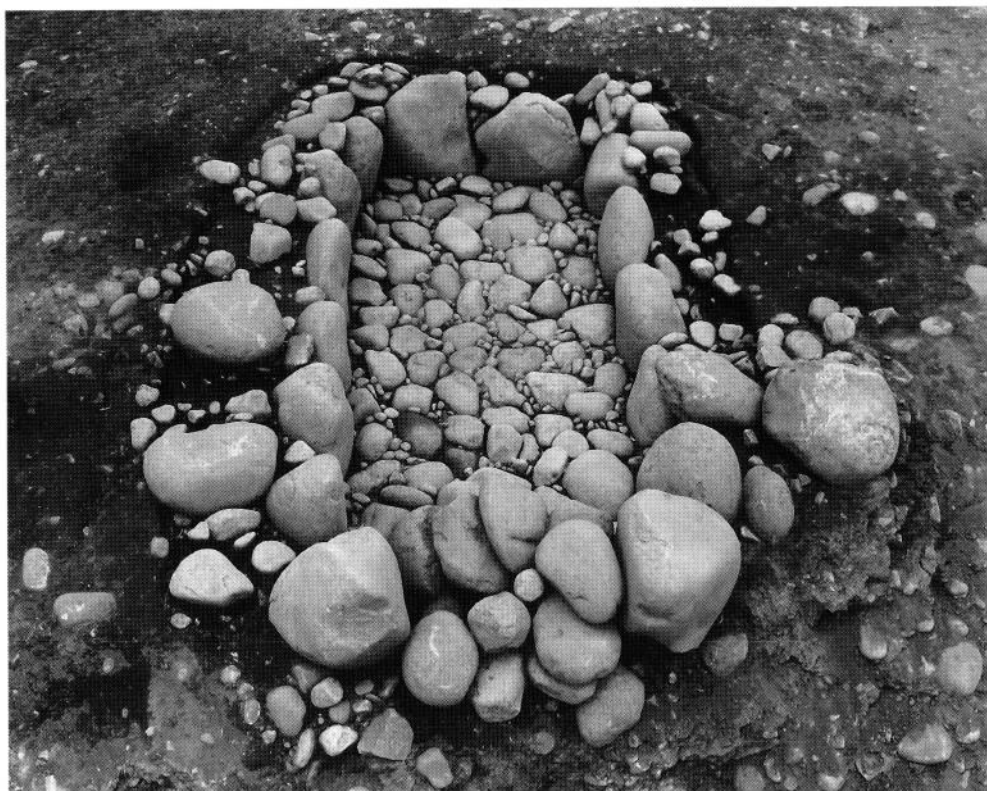
1 8号墳全景（東から）



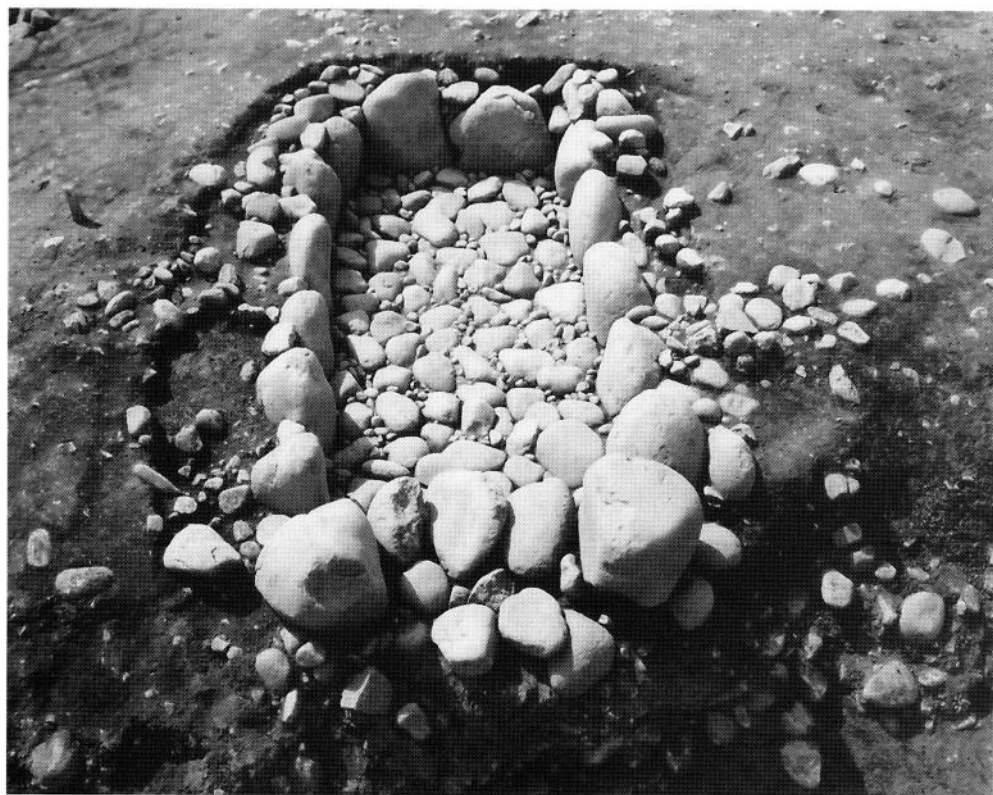
2 8号墳石室全景（東から）



1 9号墳全景（南東から）



2 9号墳石室全景 閉塞石除去前（南東から）



1 9号墳石室全景（南東から）



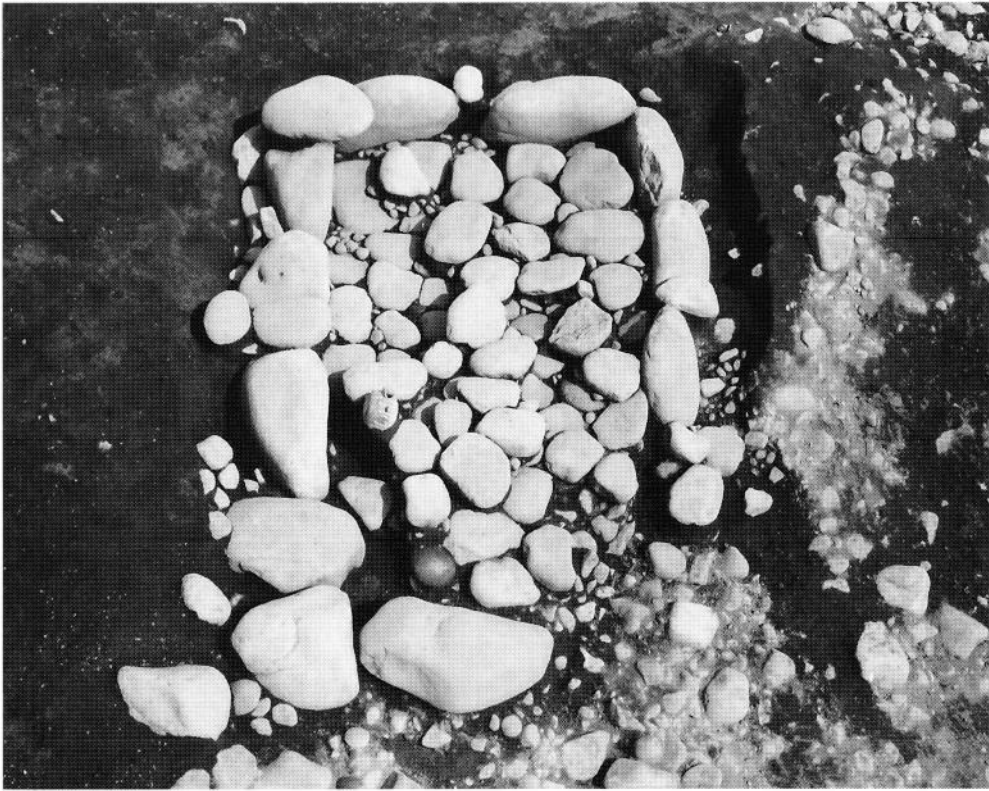
2 10号墳全景（南東から）



1 10号墳石室全景（南東から）



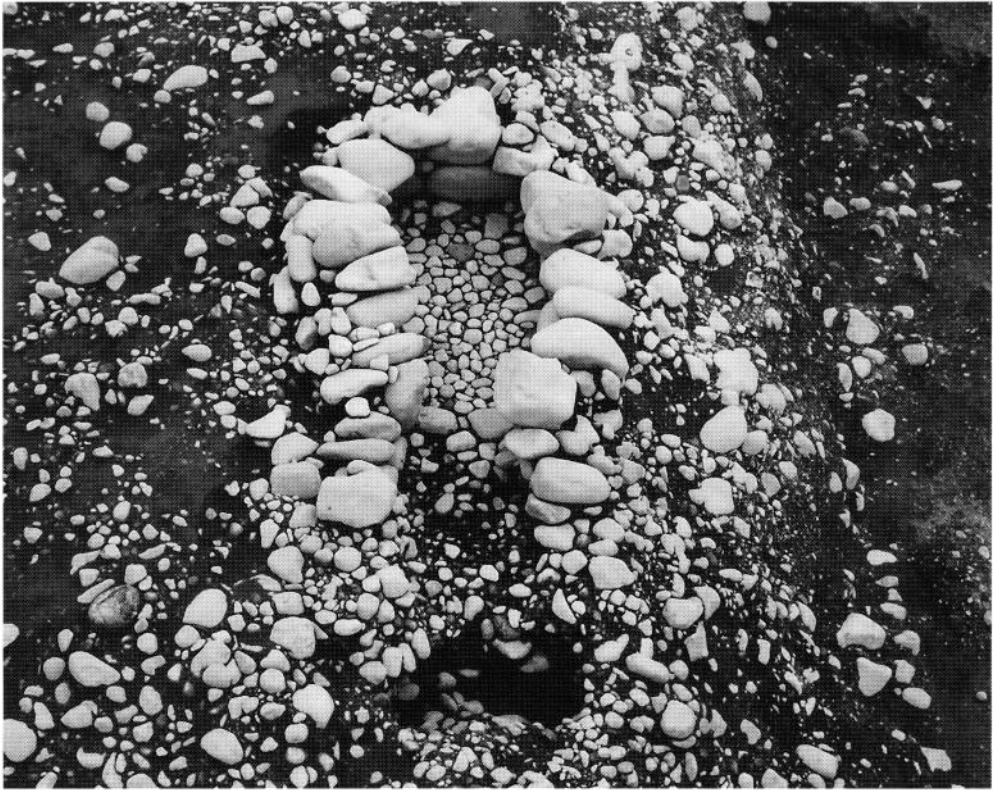
2 10号墳根石状況（南東から）



1 11号墳石室全景 上層床面（南東から）



2 11号墳石室全景 下層床面（南東から）



1 12号墳石室全景（南西から）



2 12号墳石室全景（南西から）



1 12号墳石室閉塞石状況（北東から）



2 12号墳石室内土器出土状況（北から）



1 12号墳石室左側壁状況（南から）



2 12号墳石室右側壁状況（北西から）



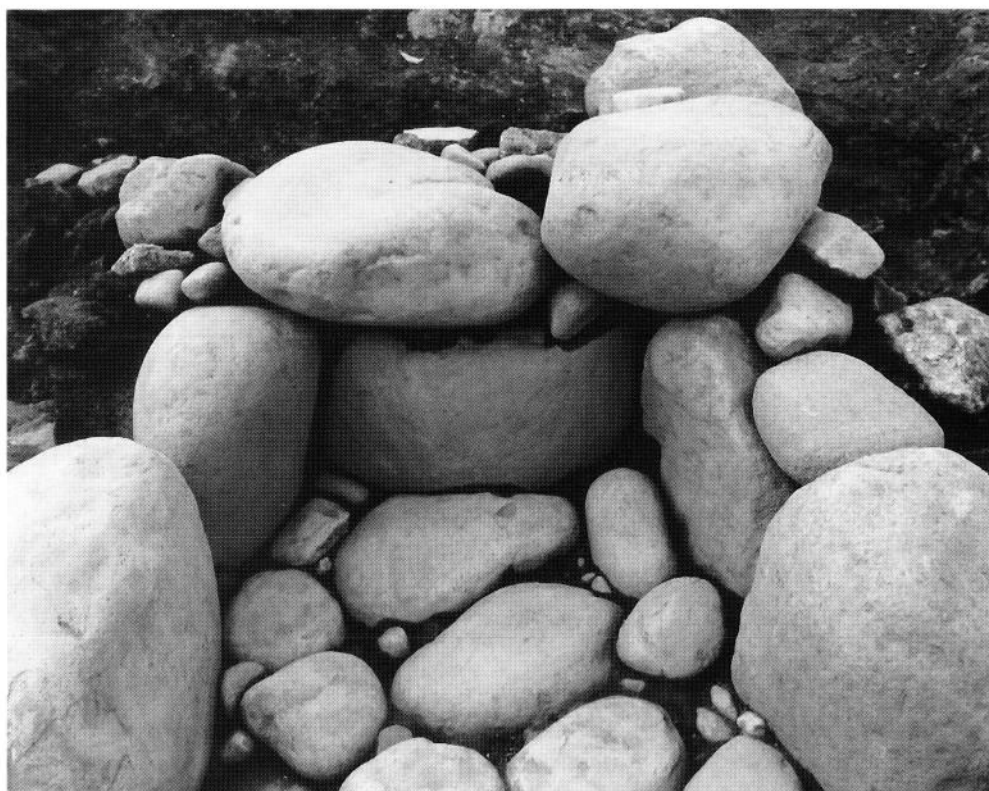
1 12号墳石室奥壁状況 (南西から)



2 12号墳墓道の土坑 (南西から)



1 13号墳石室全景（東から）



2 13号墳石室近景（東から）



1 14号墳石室全景（南東から）



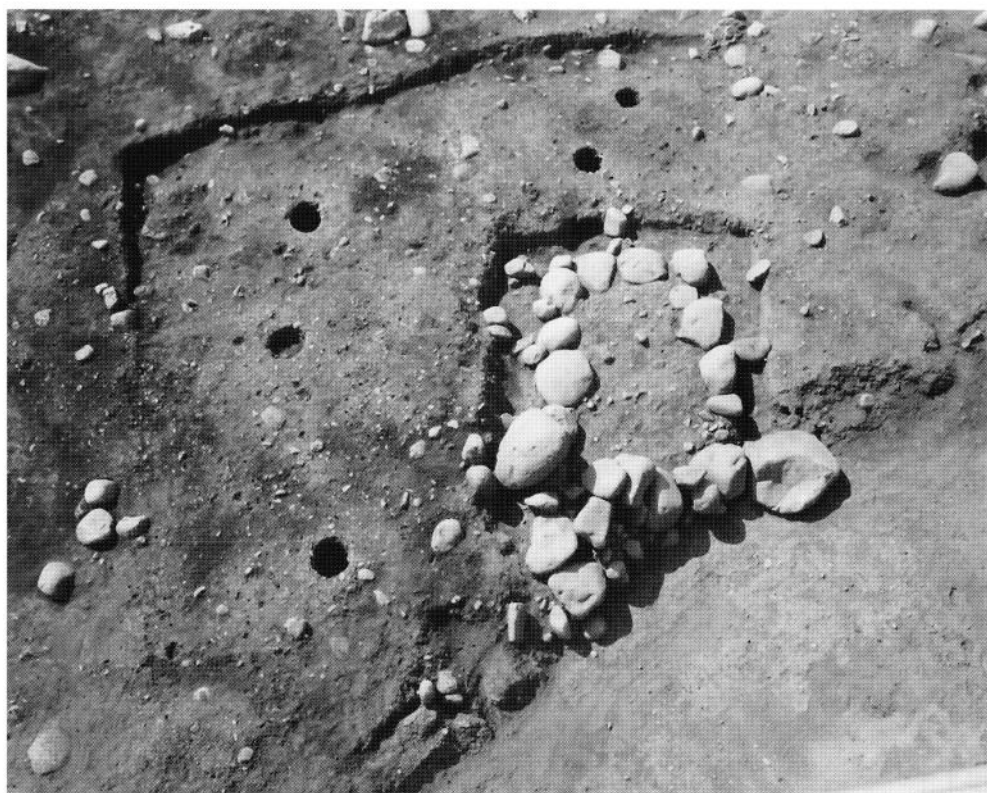
2 15号墳石室全景（南東から）



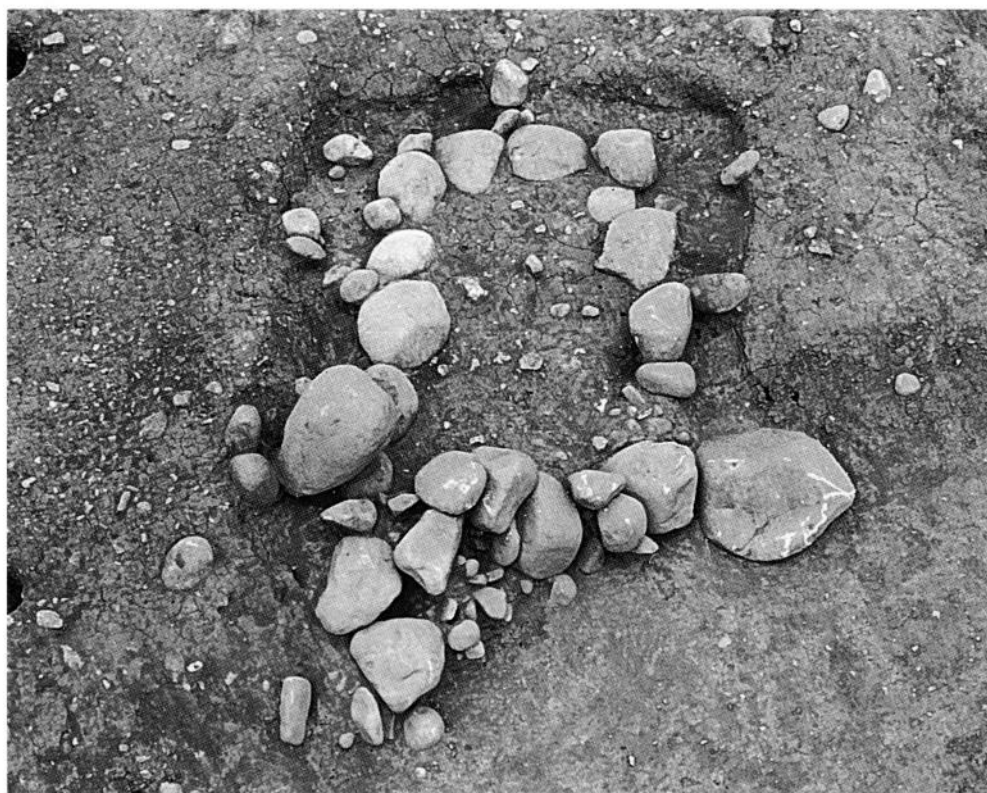
1 16号墳石室全景（南東から）



2 16号墳石室近景と土器出土状況（南東から）



1 17号墳石室と2号竪穴住居跡の重複状況（南東から）



2 17号墳石室全景（南東から）



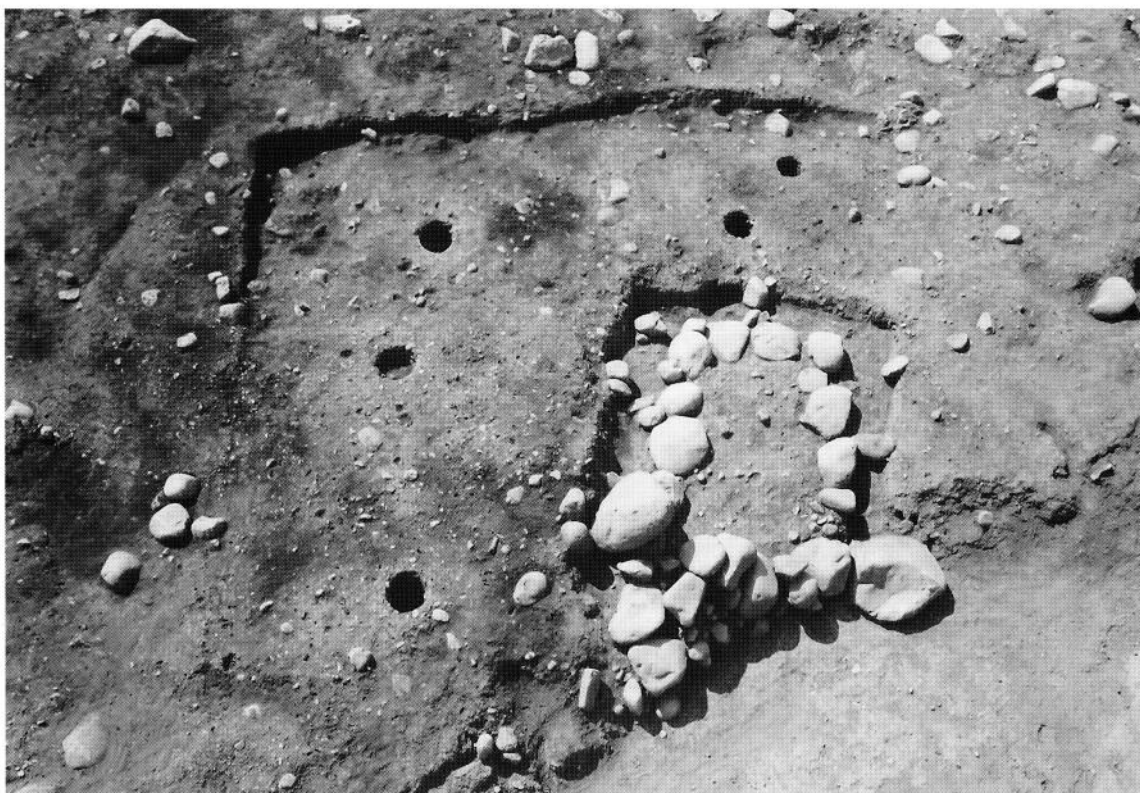
1 18号墳石室全景（南東から）



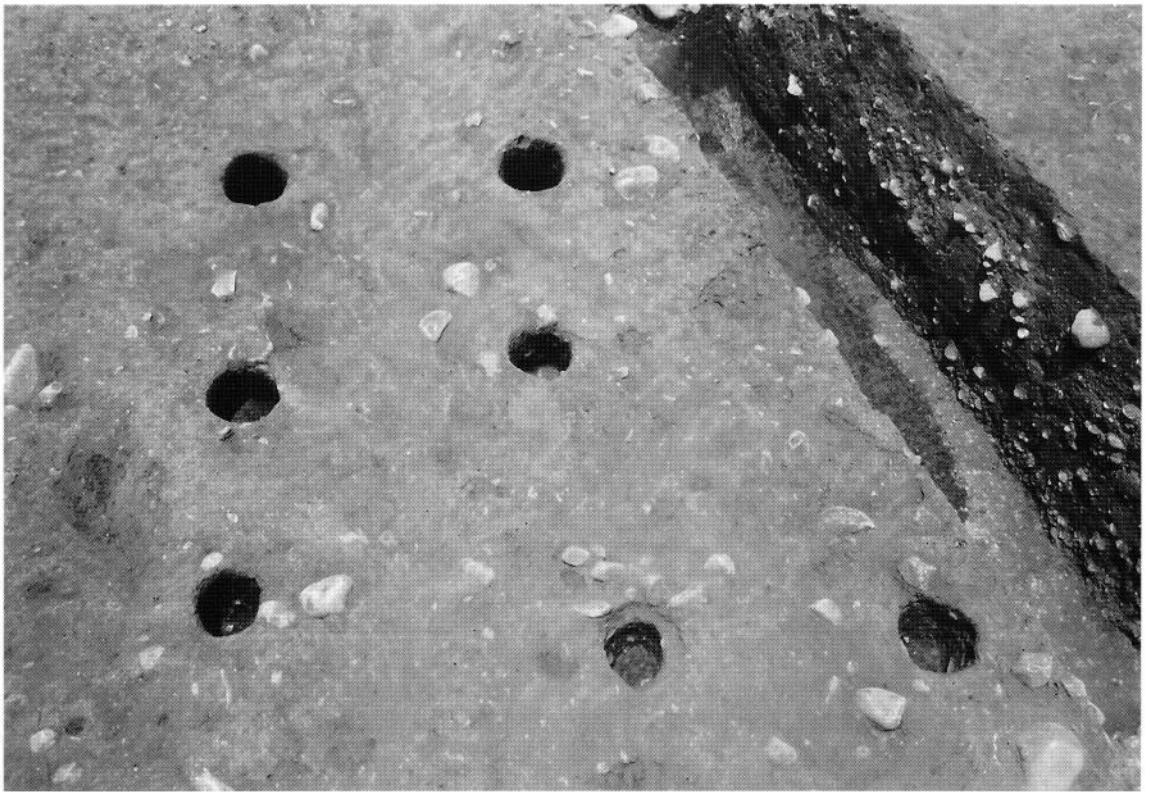
2 19号墳石室全景（南東から）



1 1号竪穴住居跡（北東から）



2 2号竪穴住居跡（南東から）



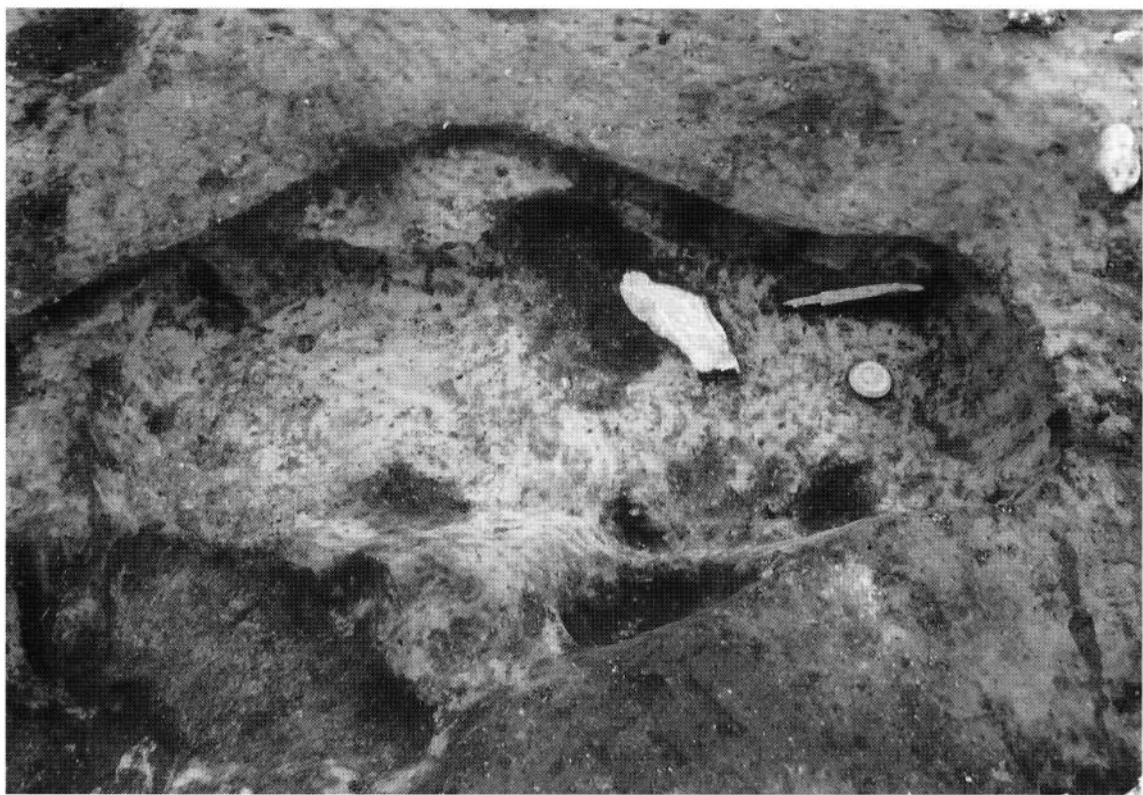
1 1号掘立柱建物（南東から）



2 1号竪穴（西から）



1 2号竖穴 (北西から)



2 1号土壙墓 (南西から)



1 1号土坑（北西から）



2 2号土坑（南から）



1 3号土坑（北西から）



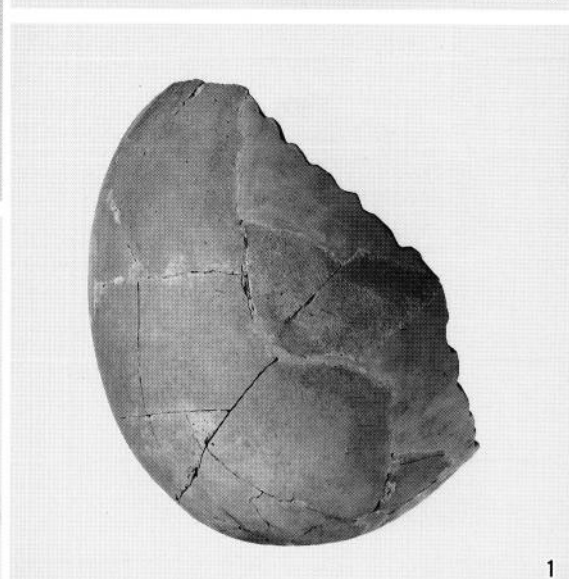
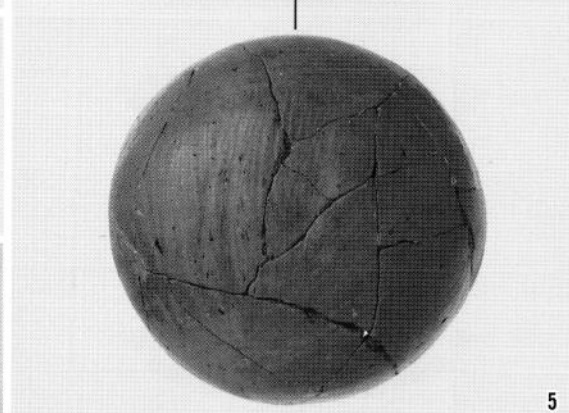
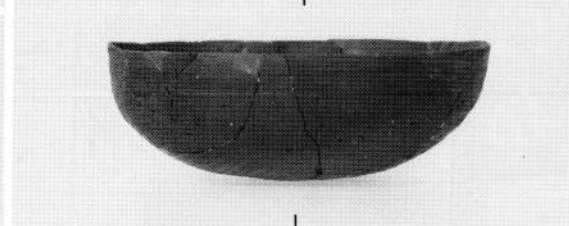
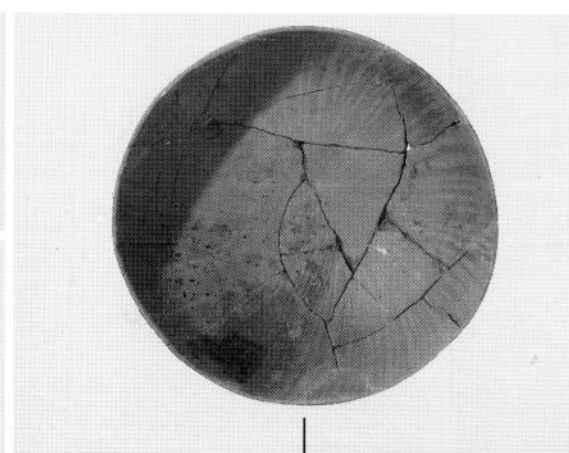
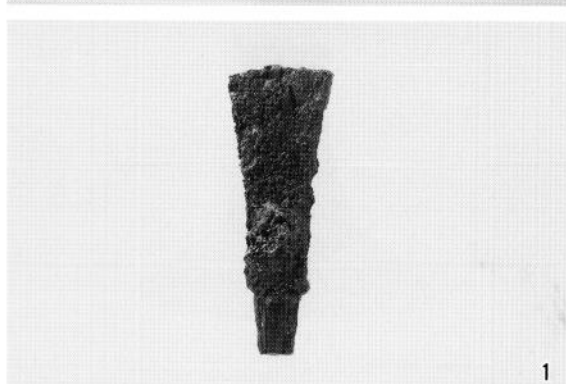
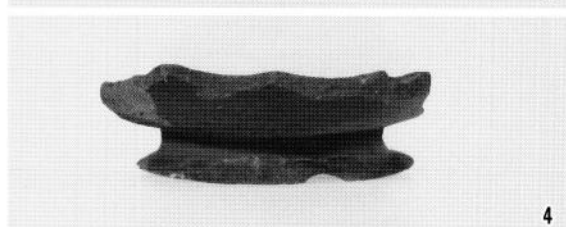
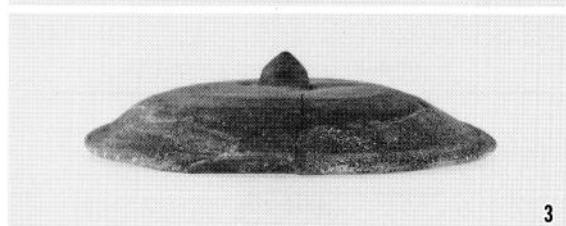
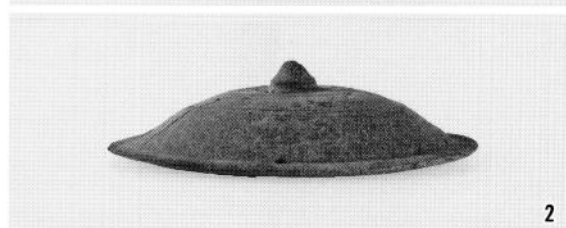
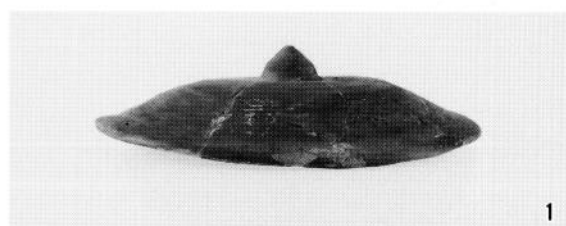
2 4号土坑（東から）



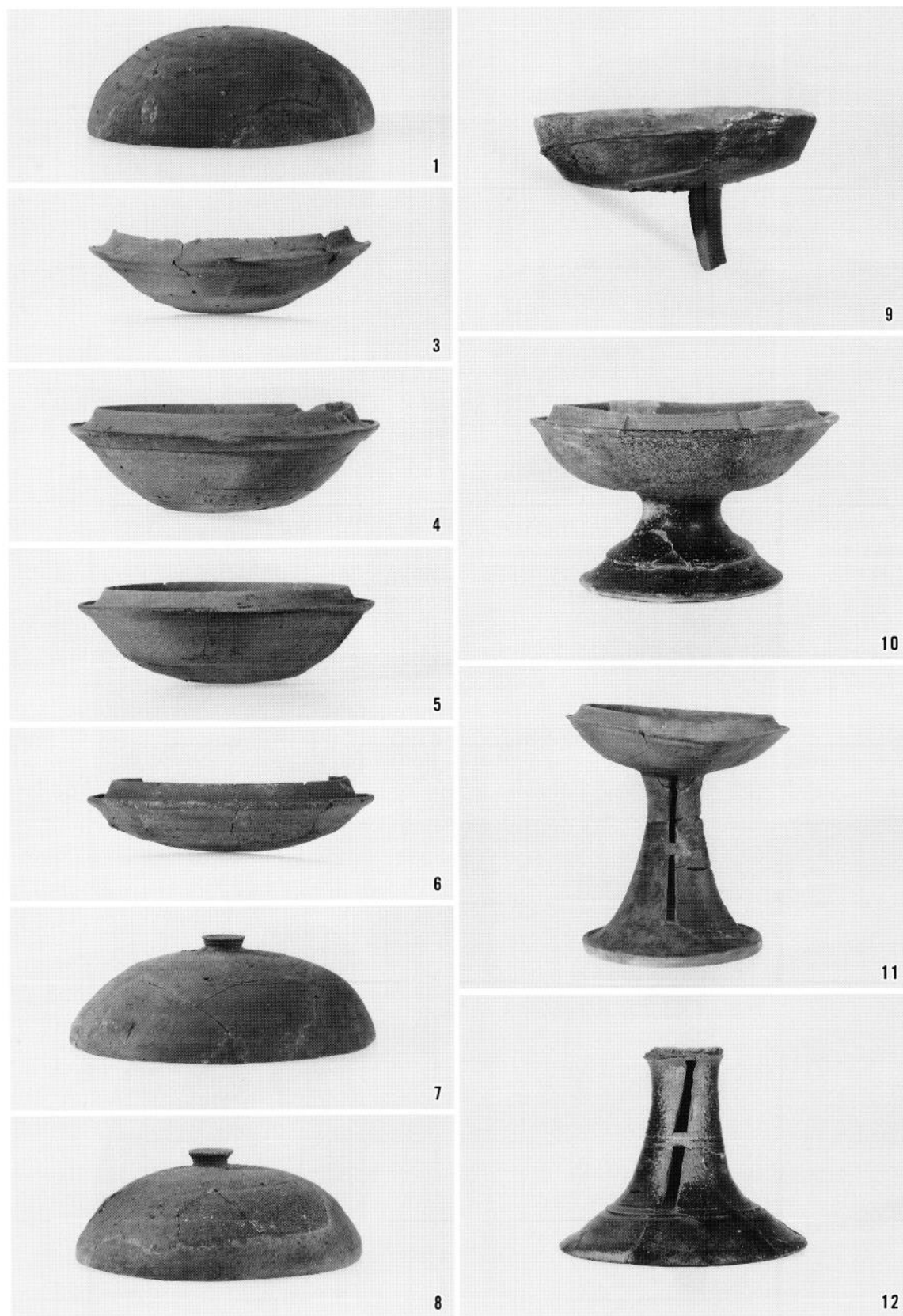
1 3号溝 (南東から)



2 8号溝 (北東から)



1~3号墳出土土器・鉄器



4号墳出土土器



13



16



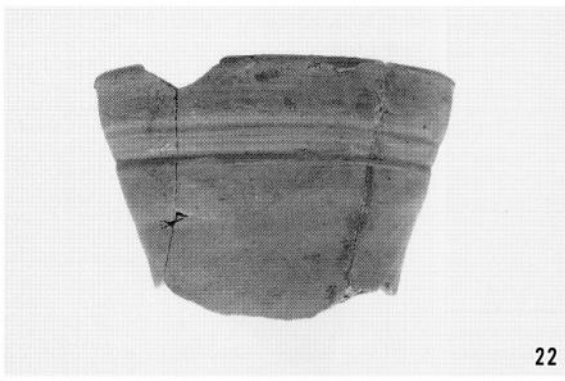
17



21



18



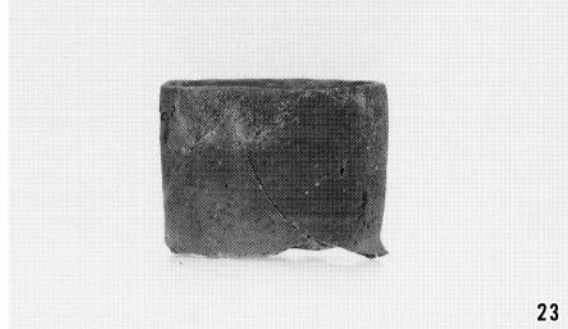
22



19



24



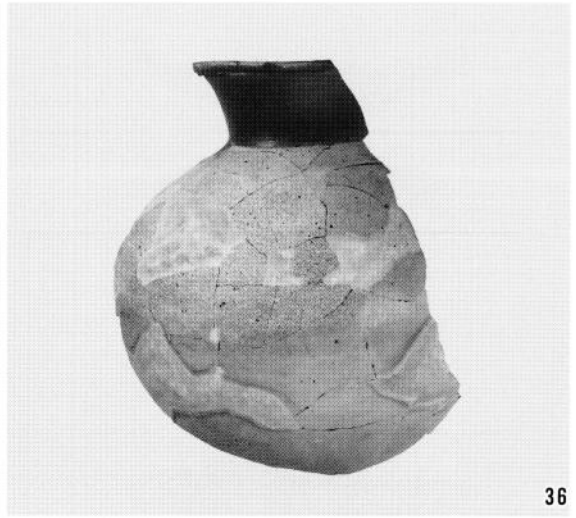
23



4号墳出土土器



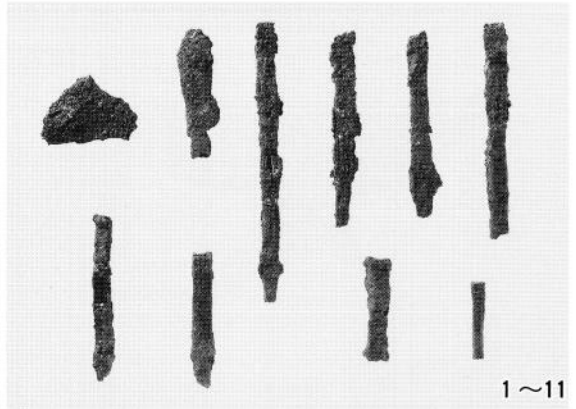
37



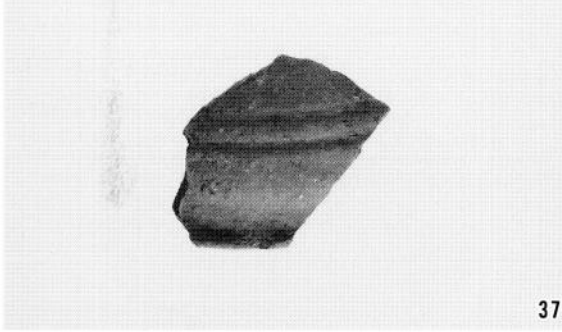
36



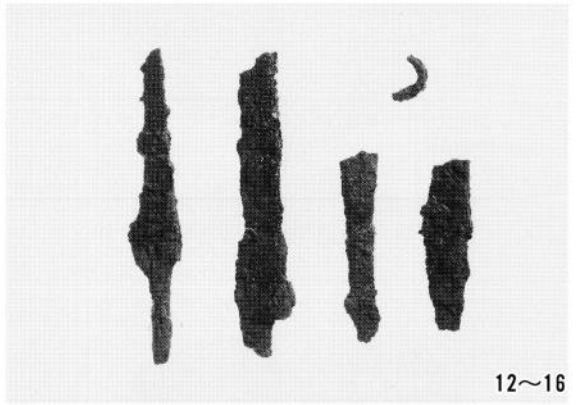
37



1~11

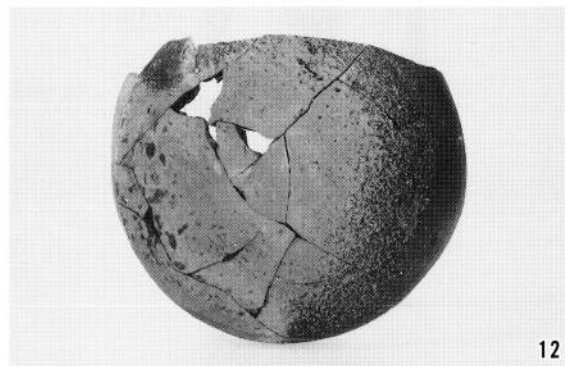


37

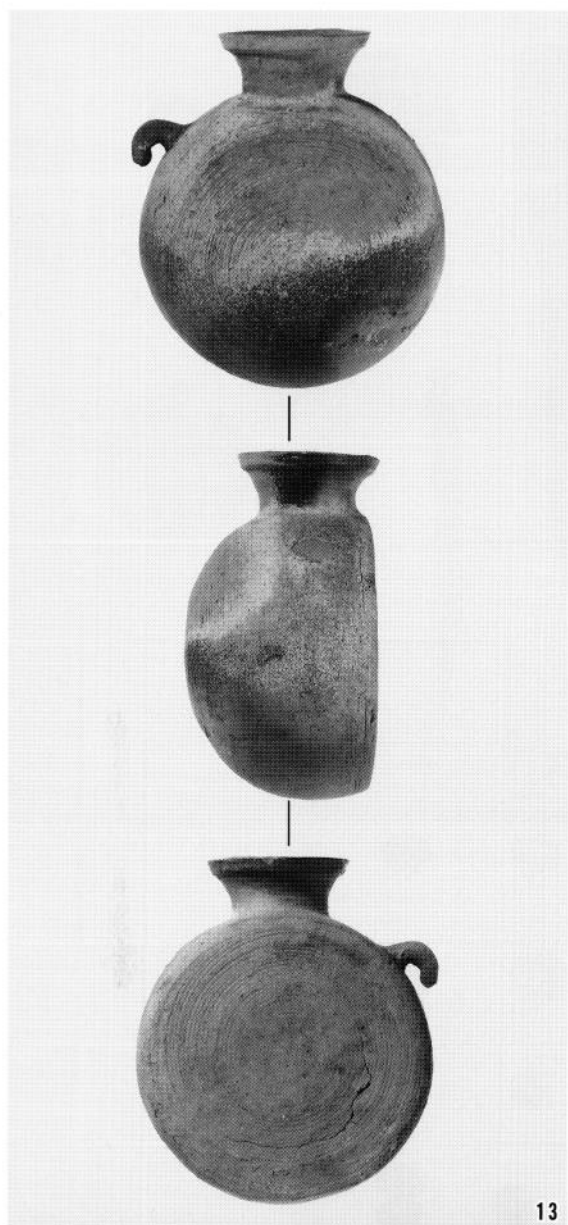


12~16

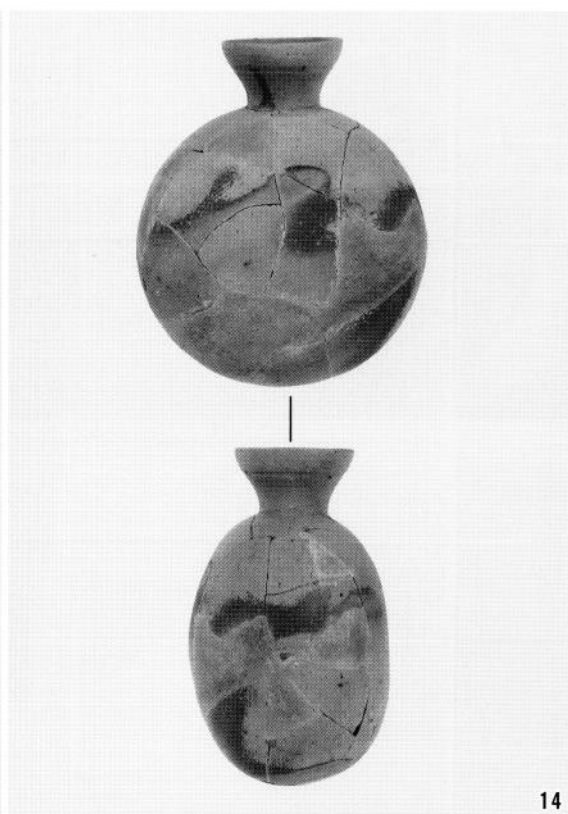
4号墳出土土器・鉄器



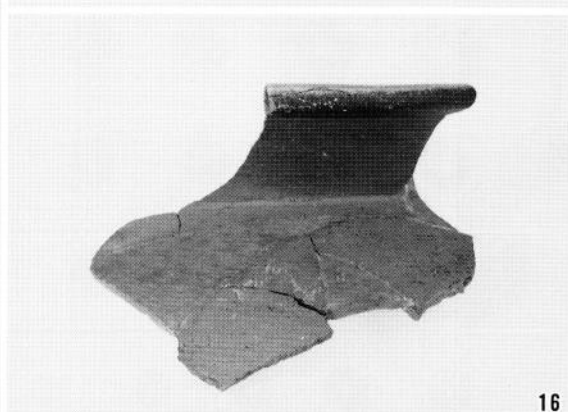
5号墳出土土器



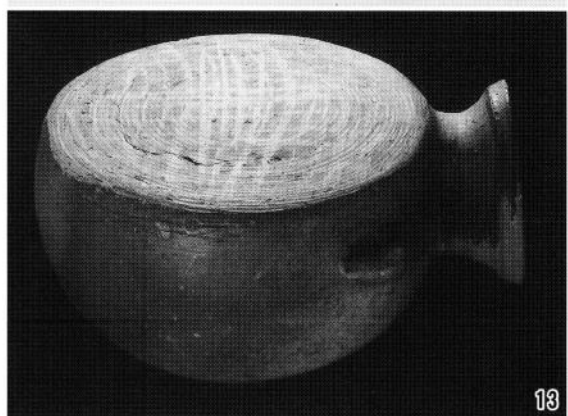
13



14



16

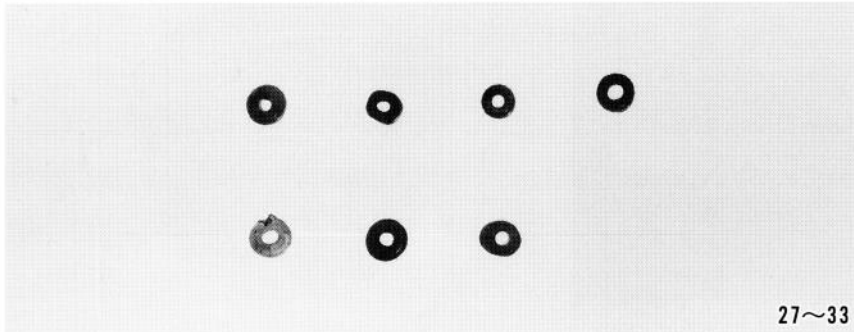
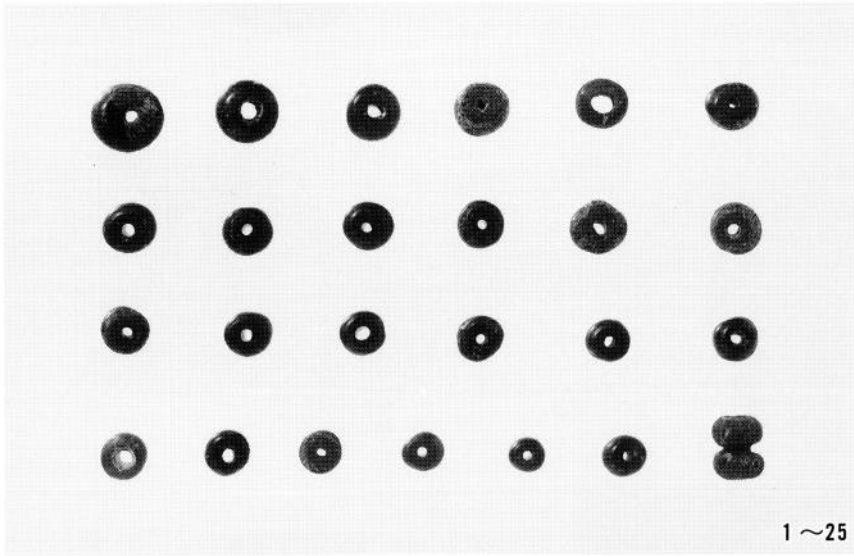
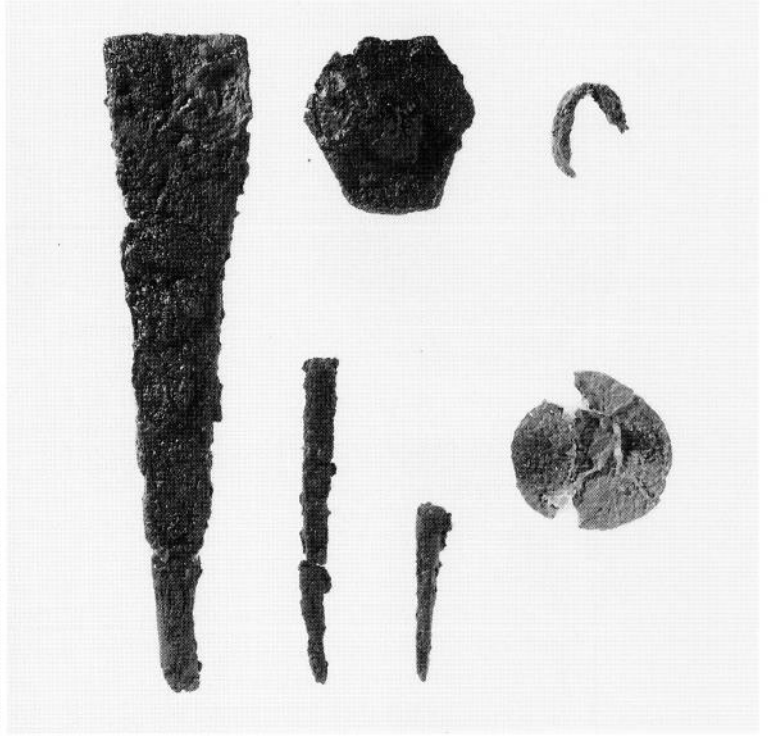
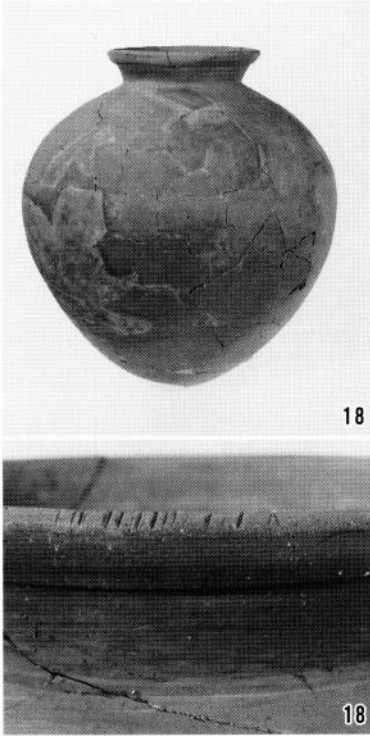


18

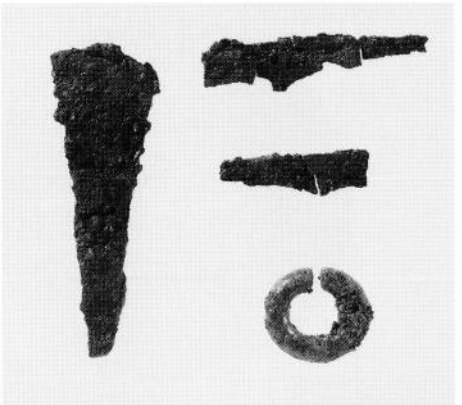
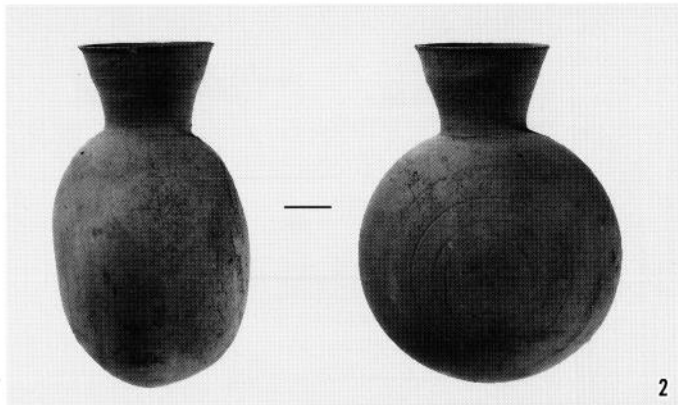
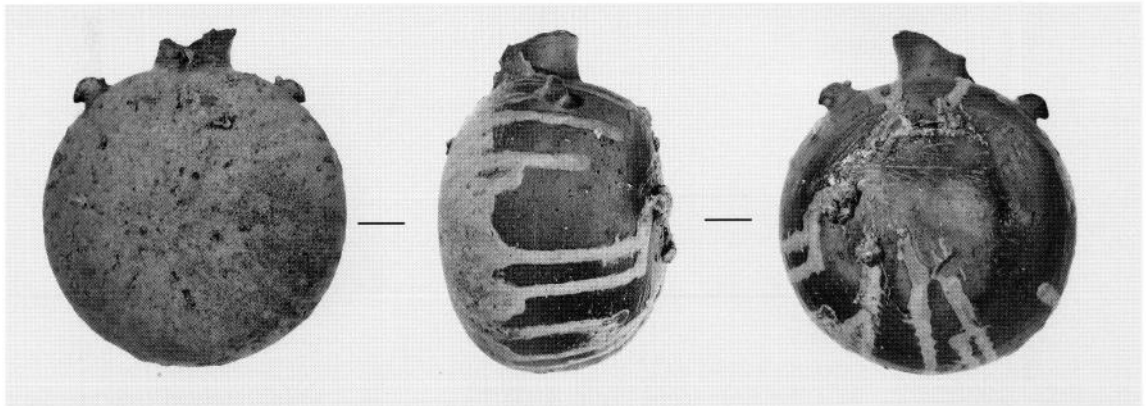
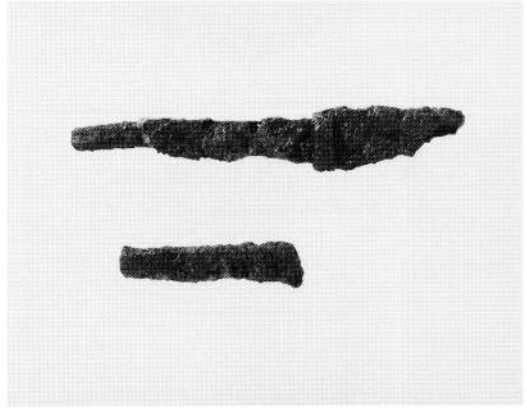
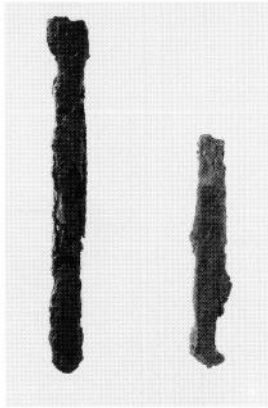
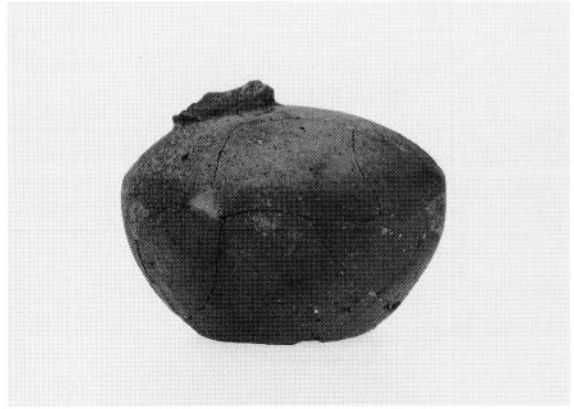
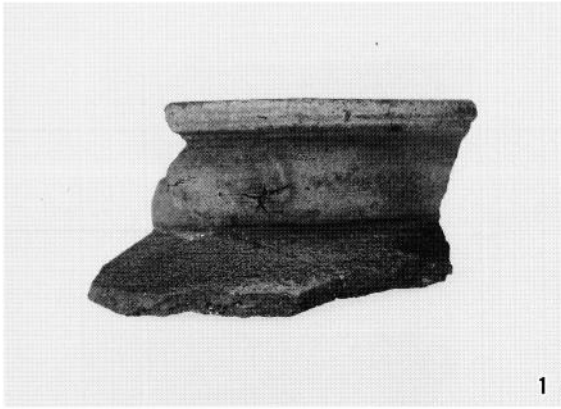


17

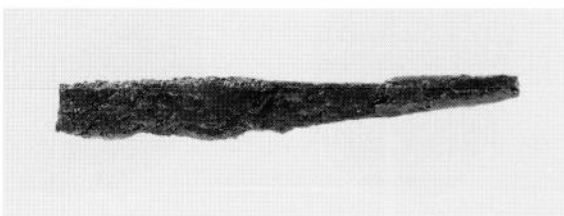
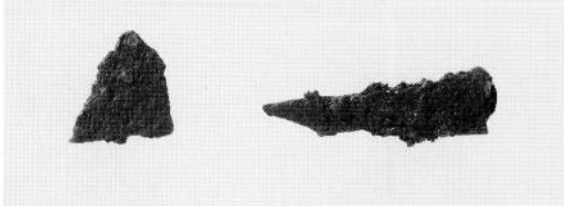
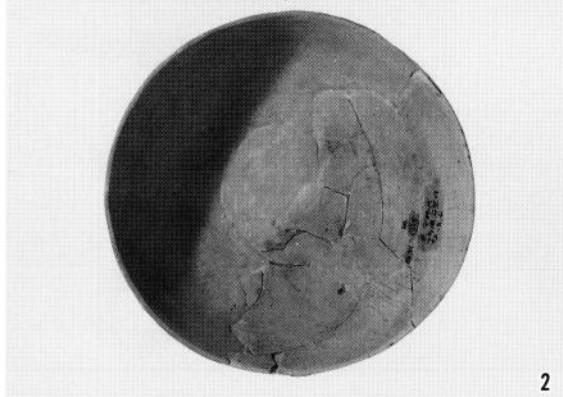
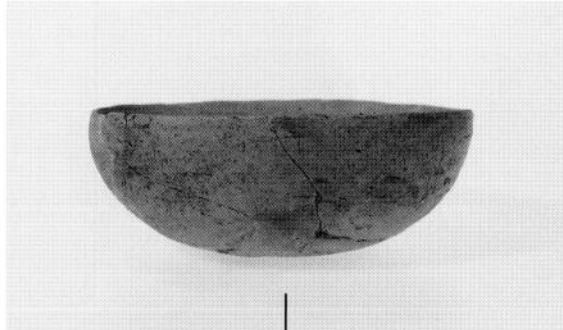
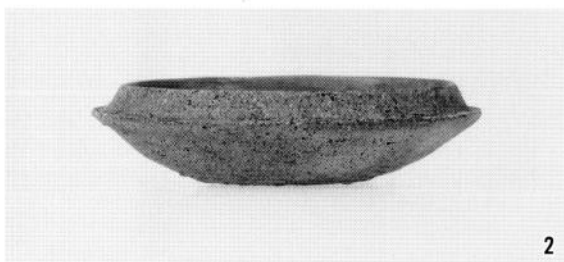
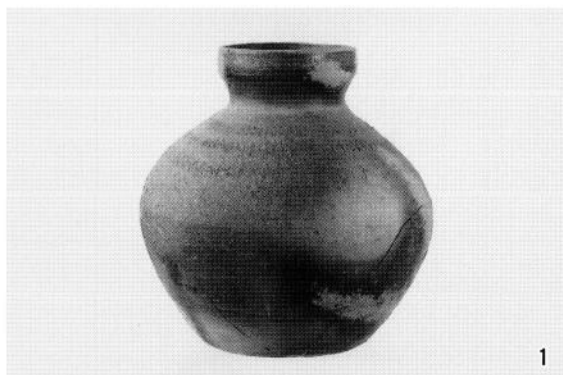
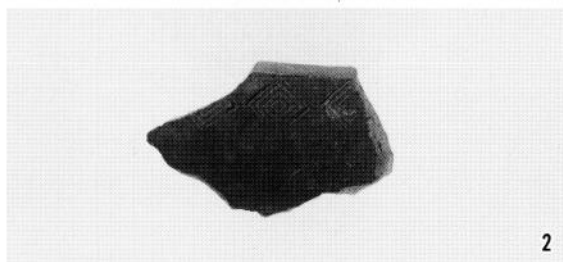
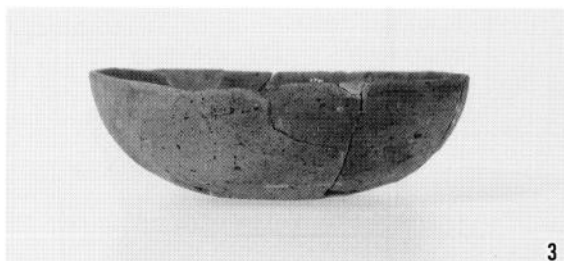
5号墳出土土器



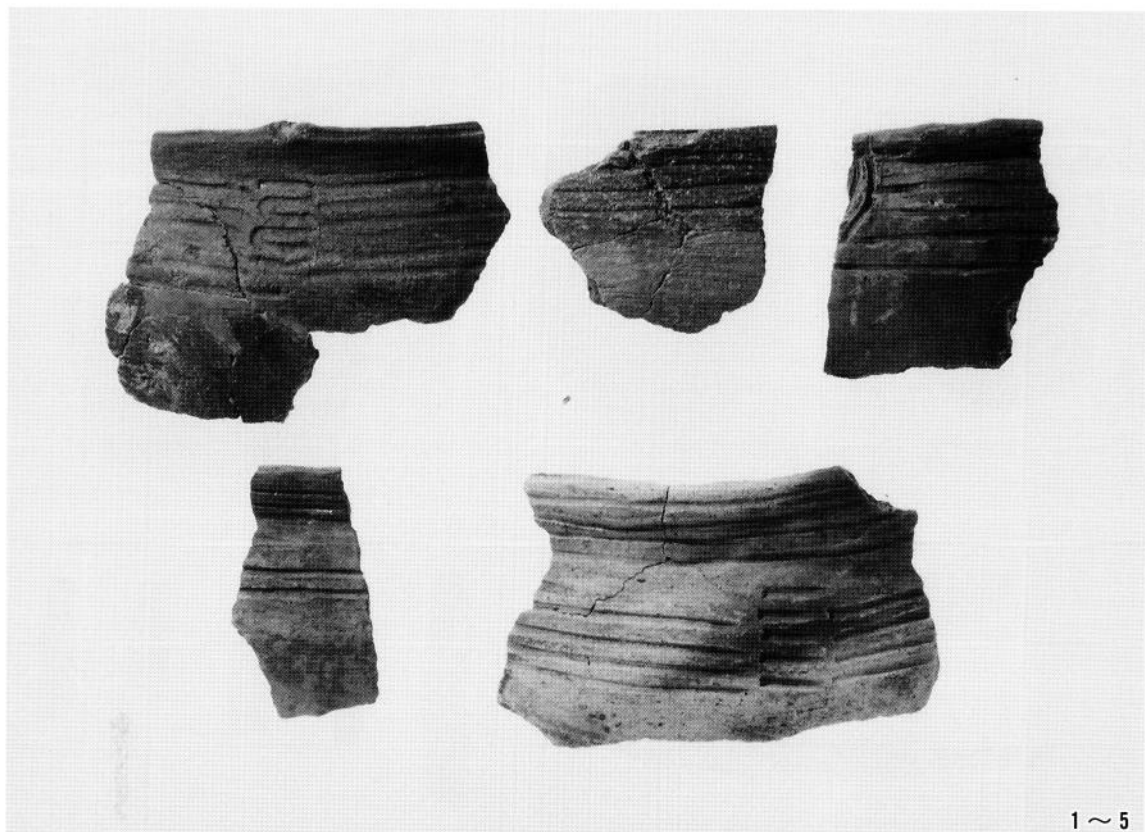
5号墳出土土器・鉄器・玉類



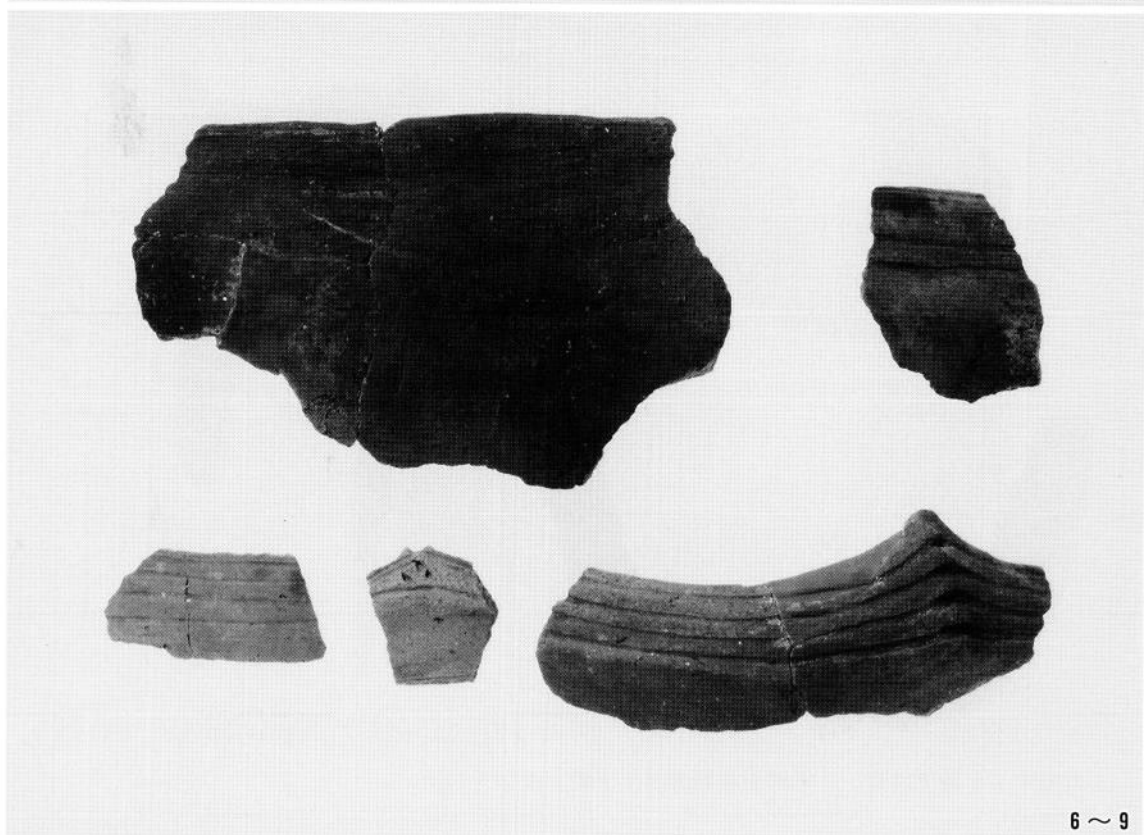
7~12号墳出土土器・鉄器



13~19号墳出土土器・鉄器

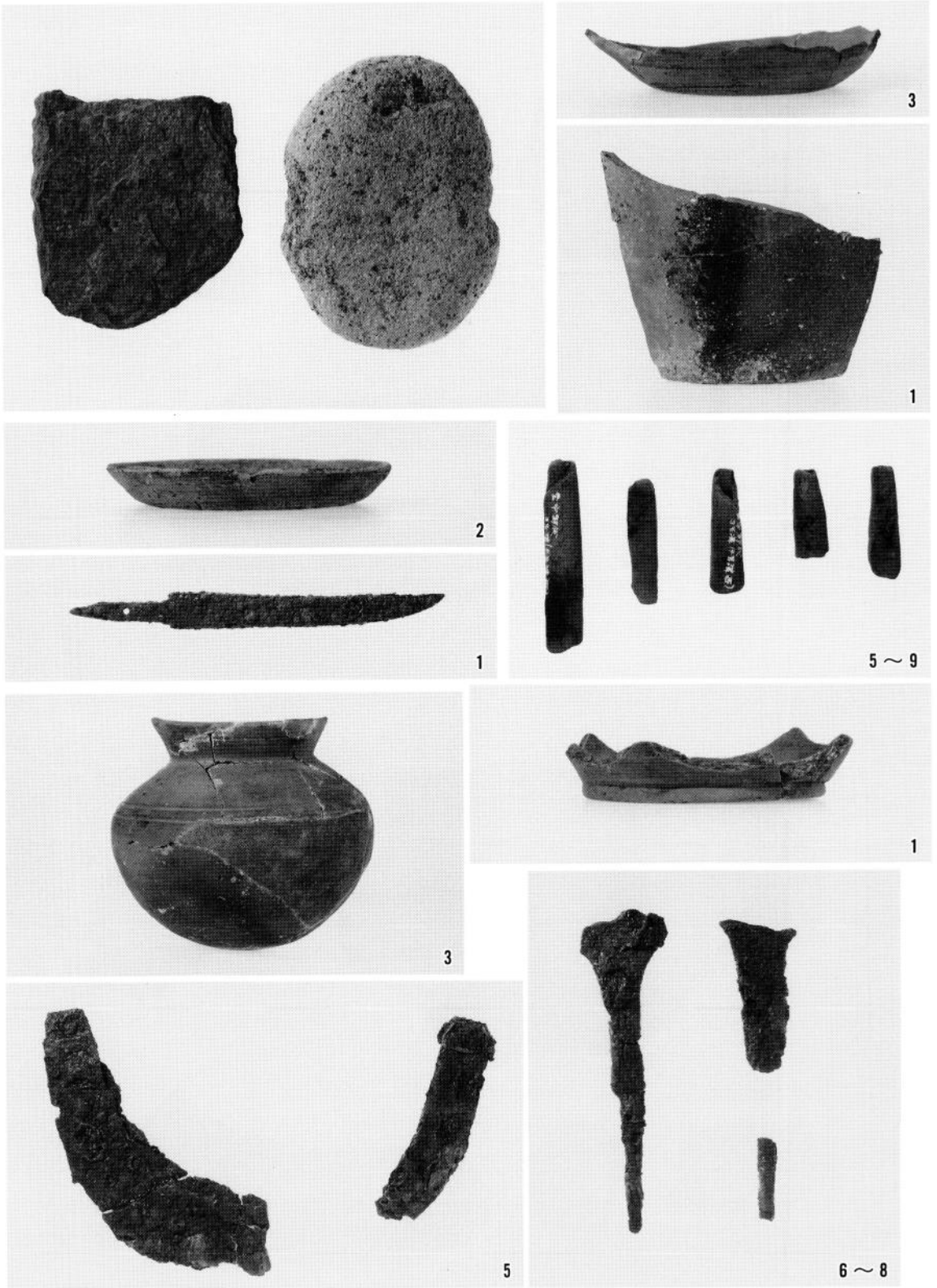


1 ~ 5

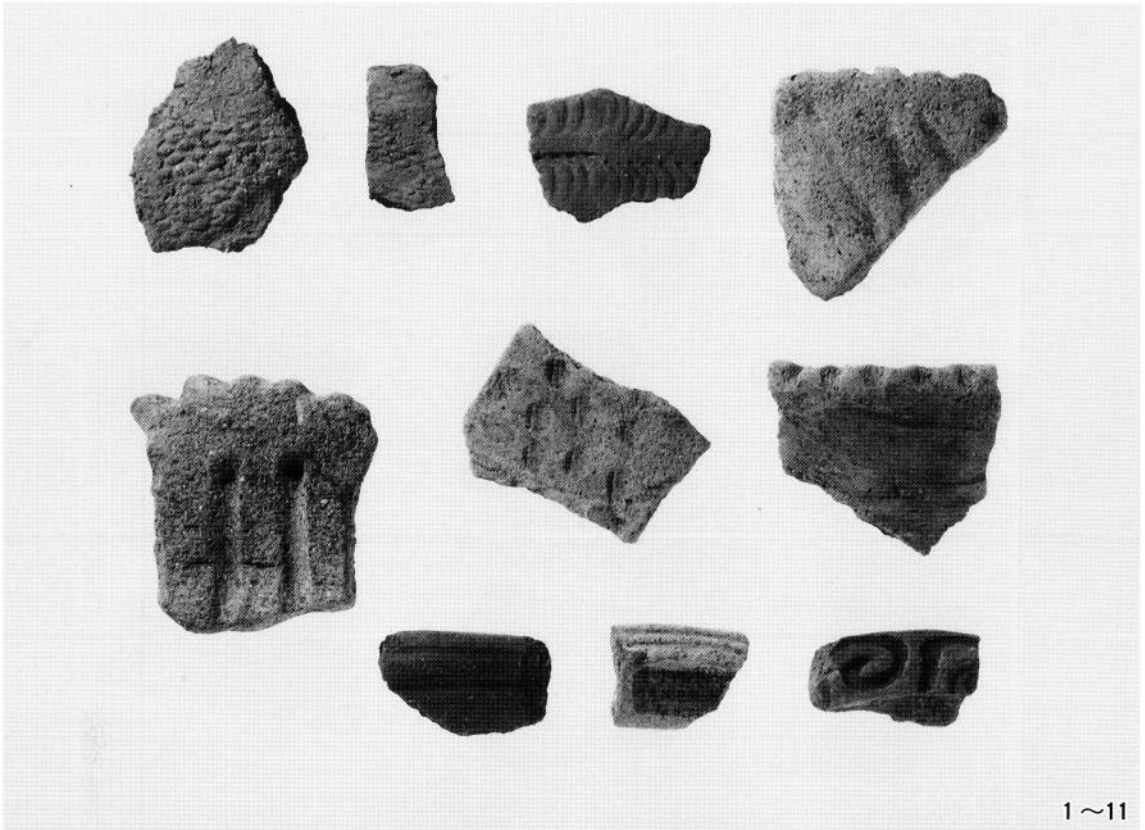


6 ~ 9

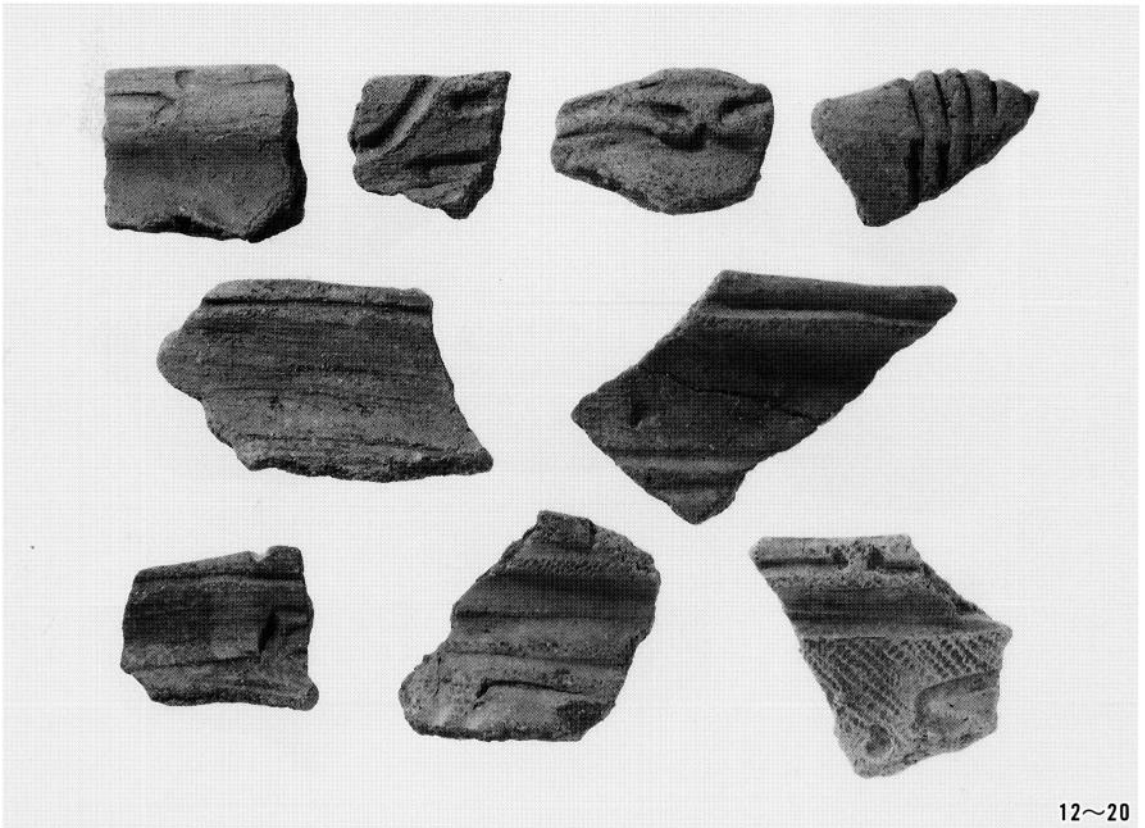
1号竖穴出土土器



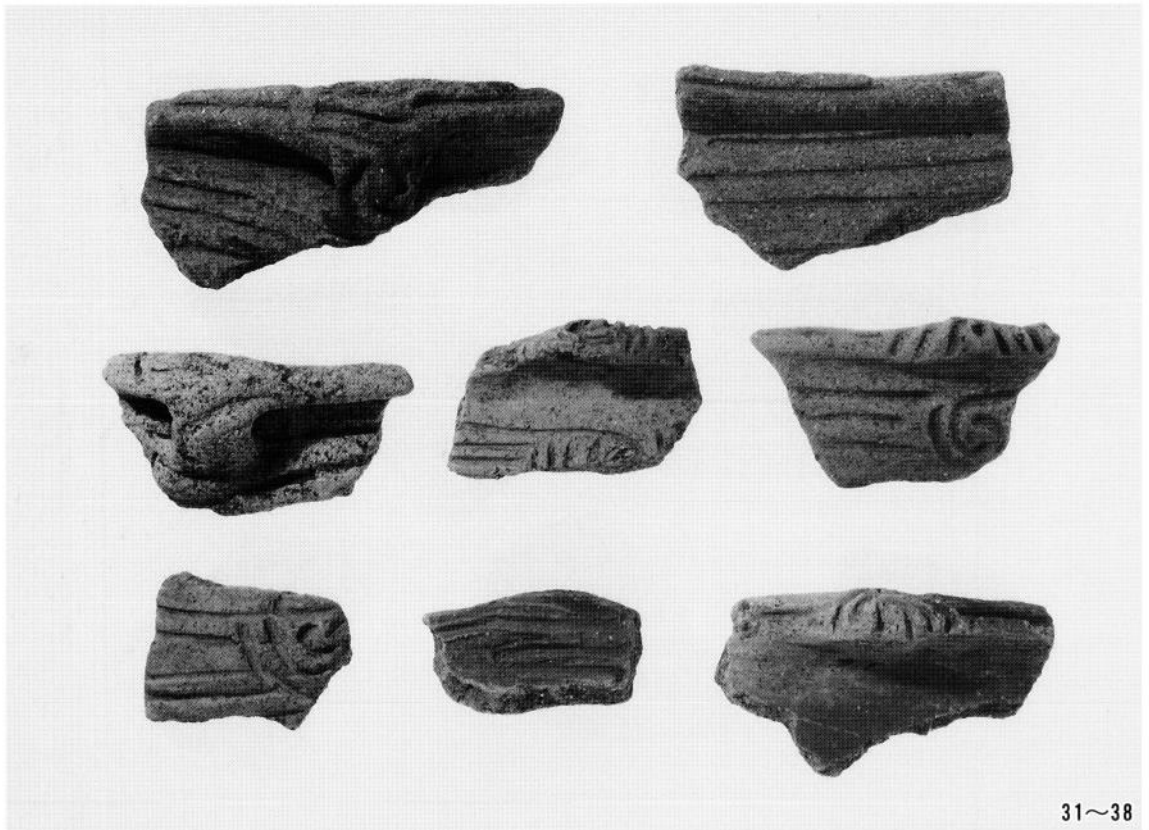
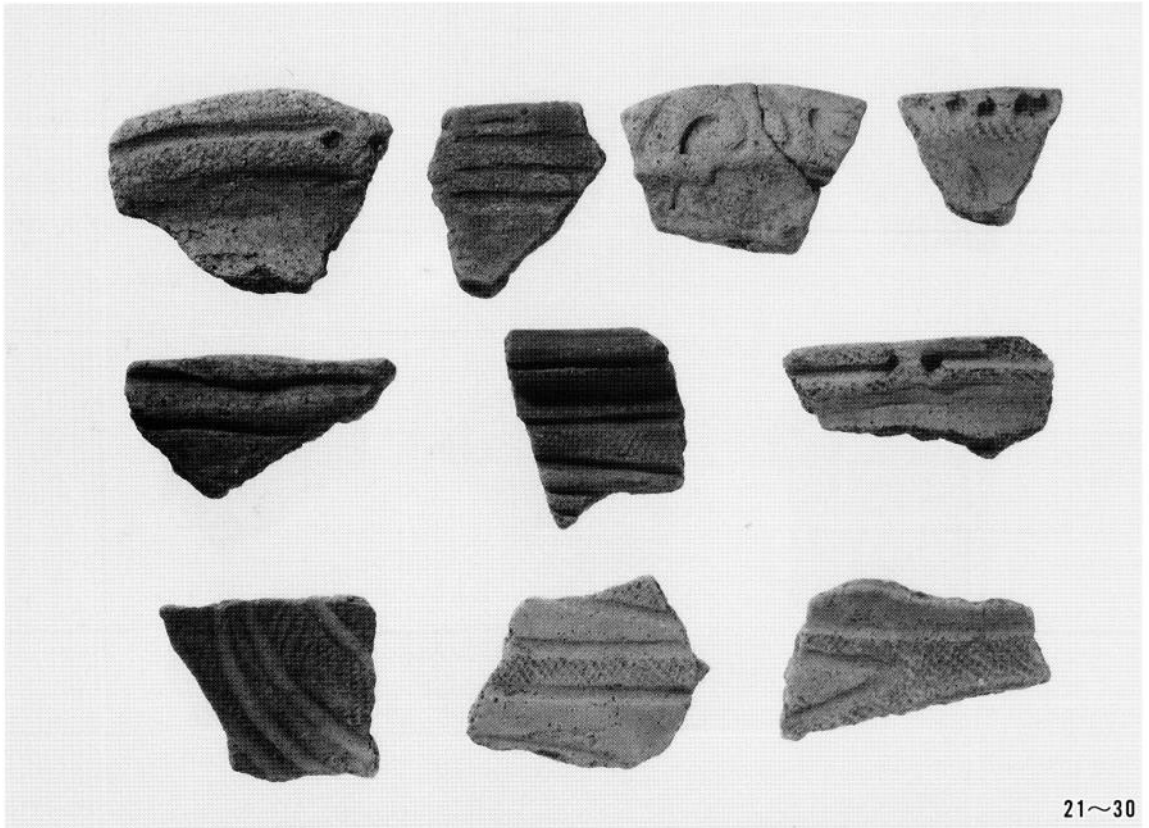
1号竖穴・1号土壇墓・3号溝・6号溝出土土器・鉄器・石器



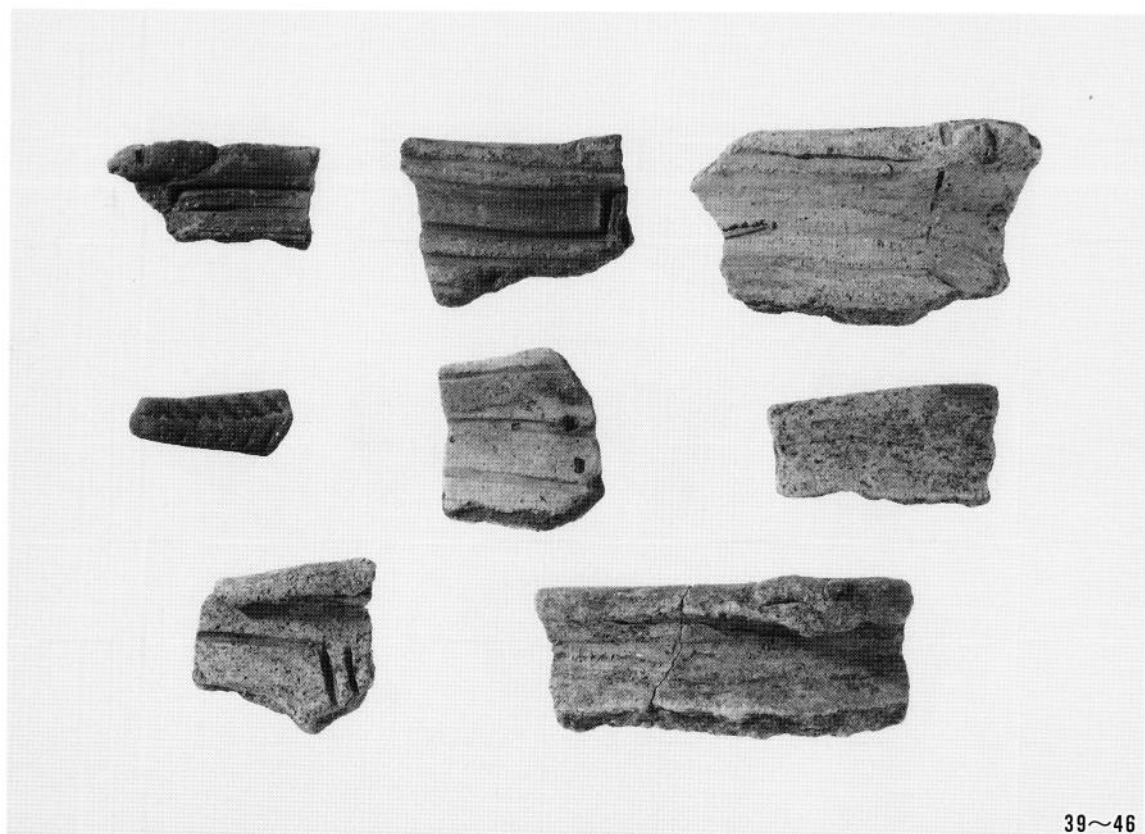
1~11



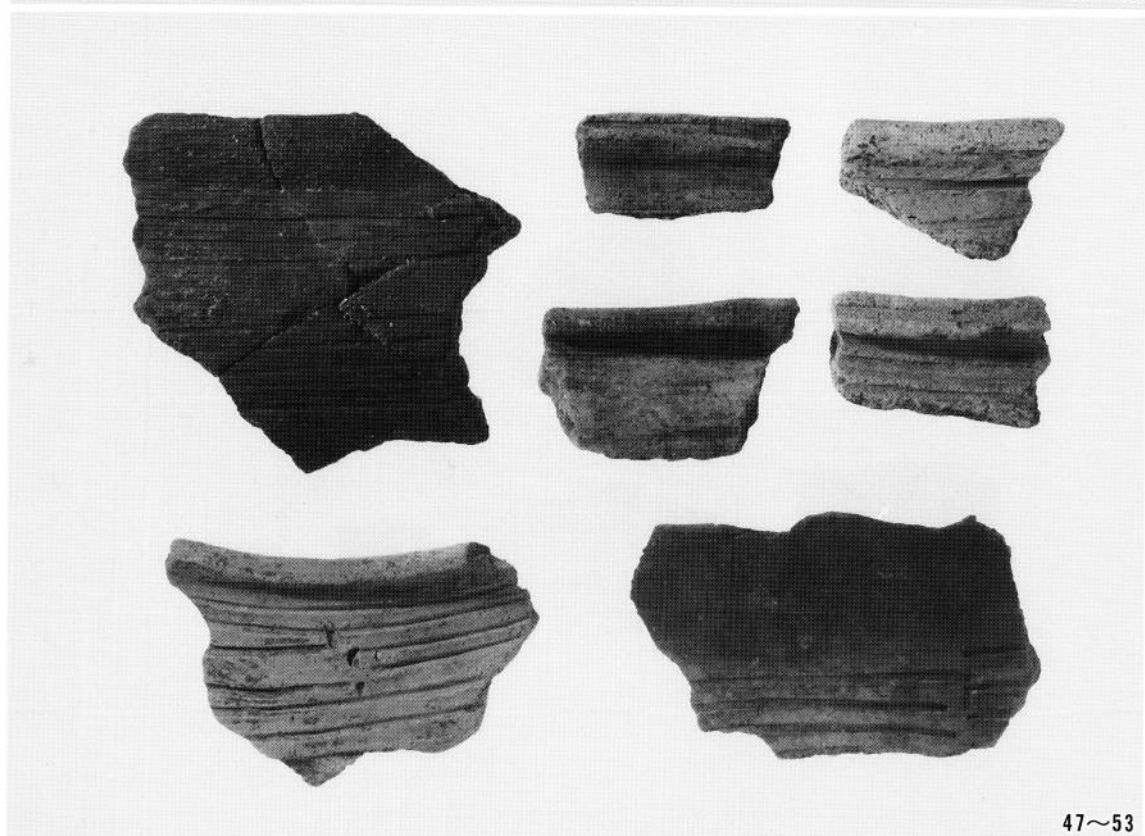
12~20



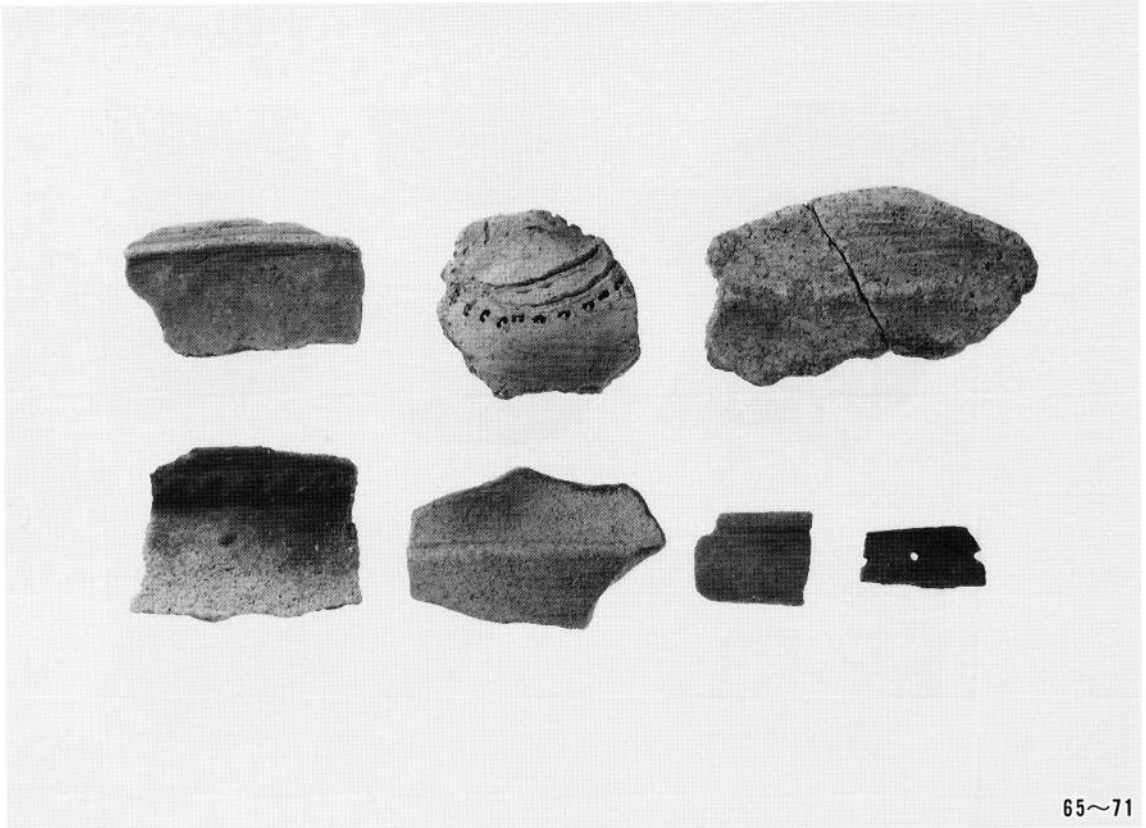
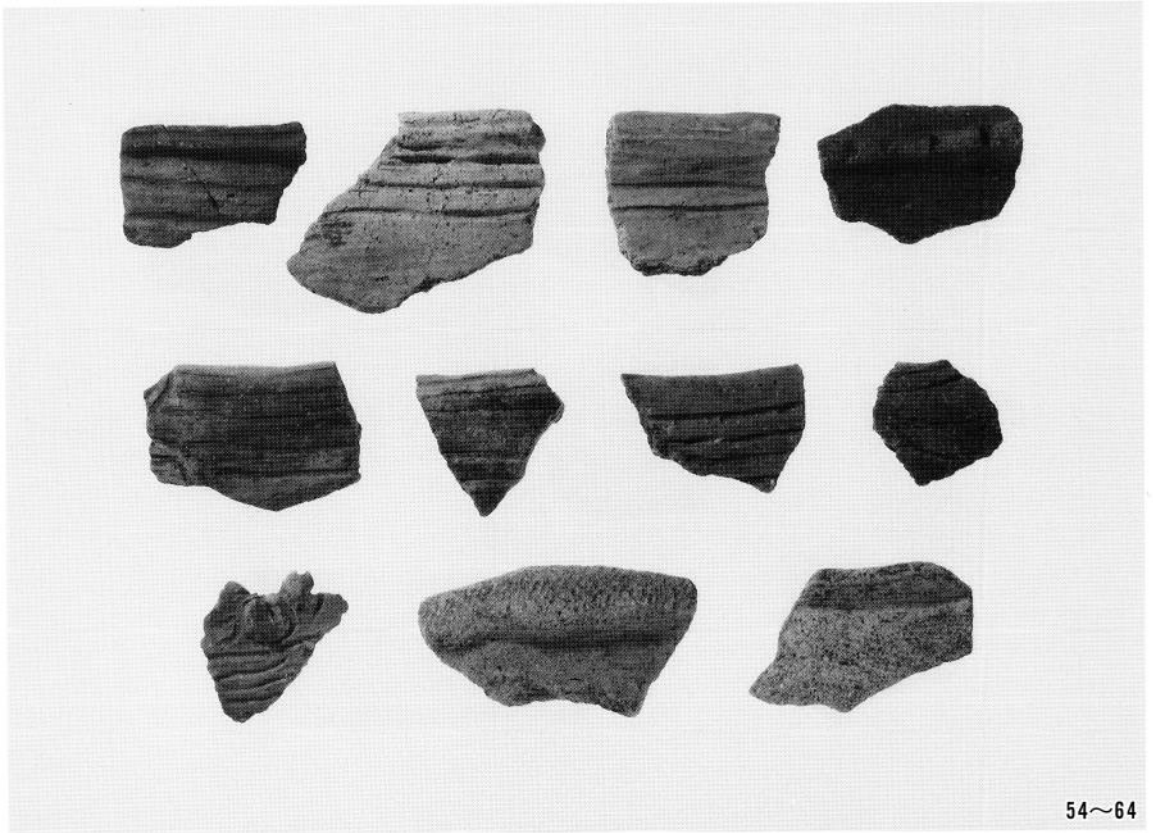
包含層その他出土土器



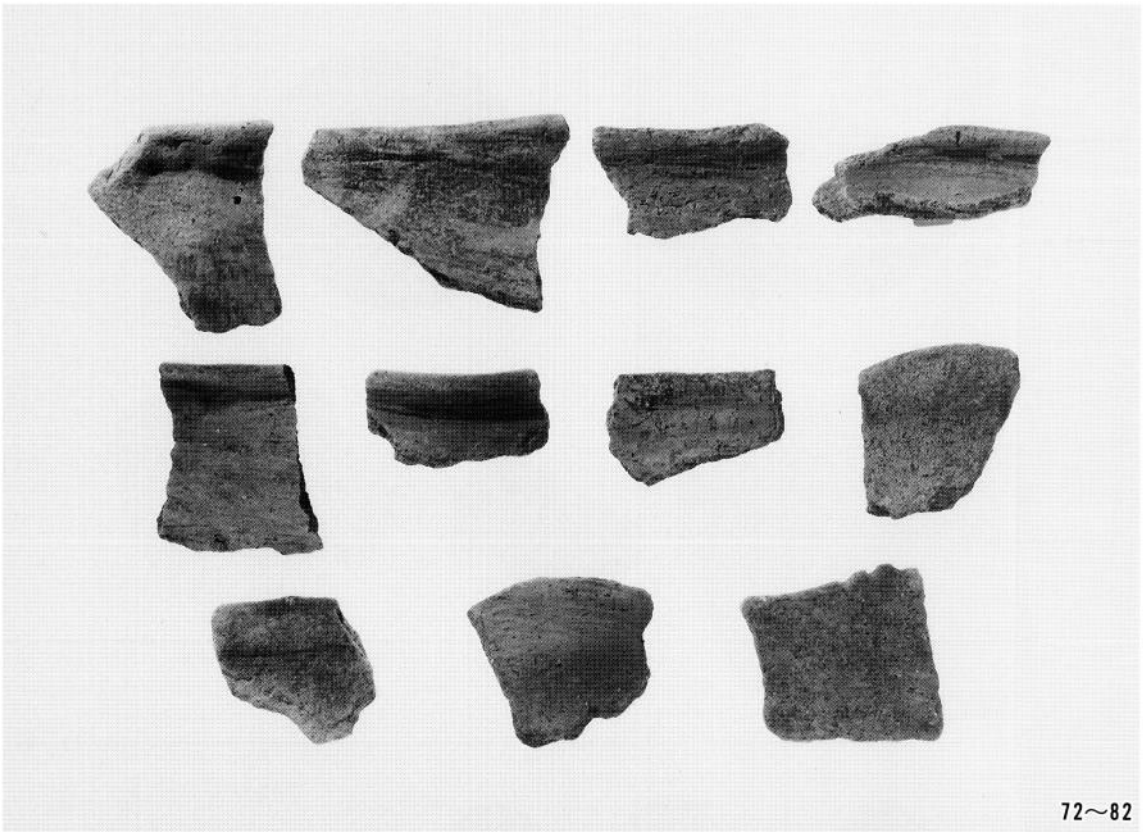
39~46



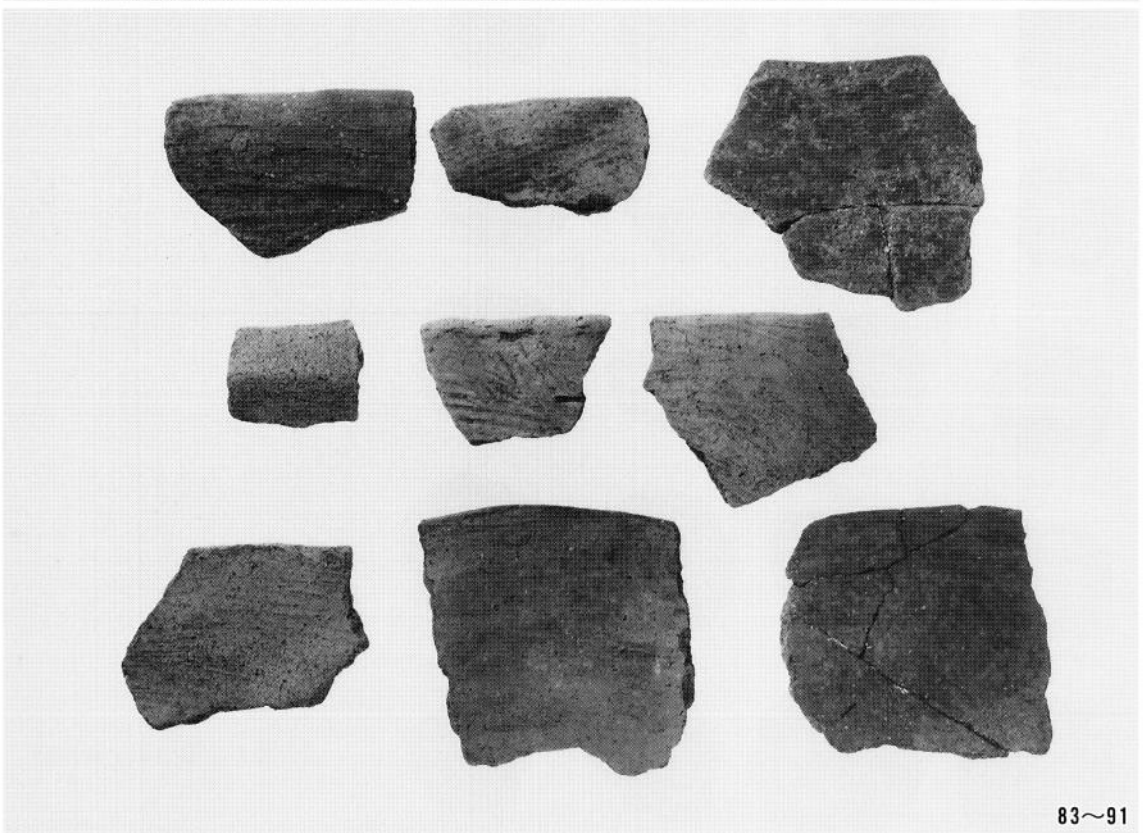
47~53



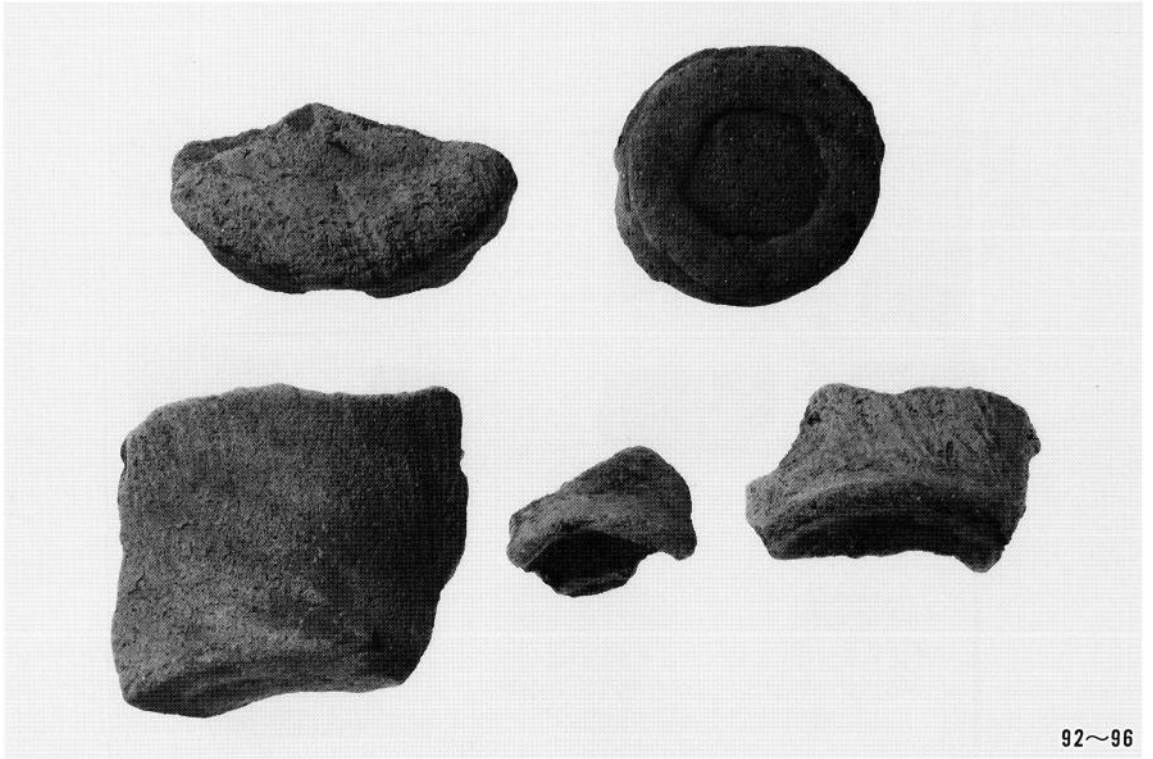
包含層その他出土土器



72~82

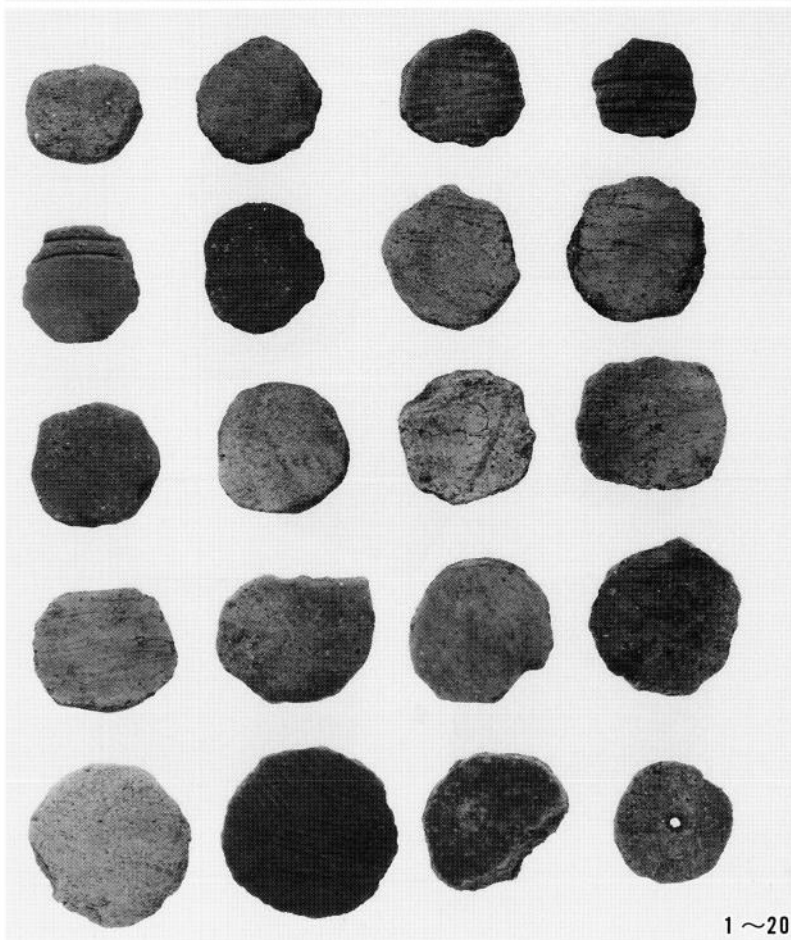


83~91



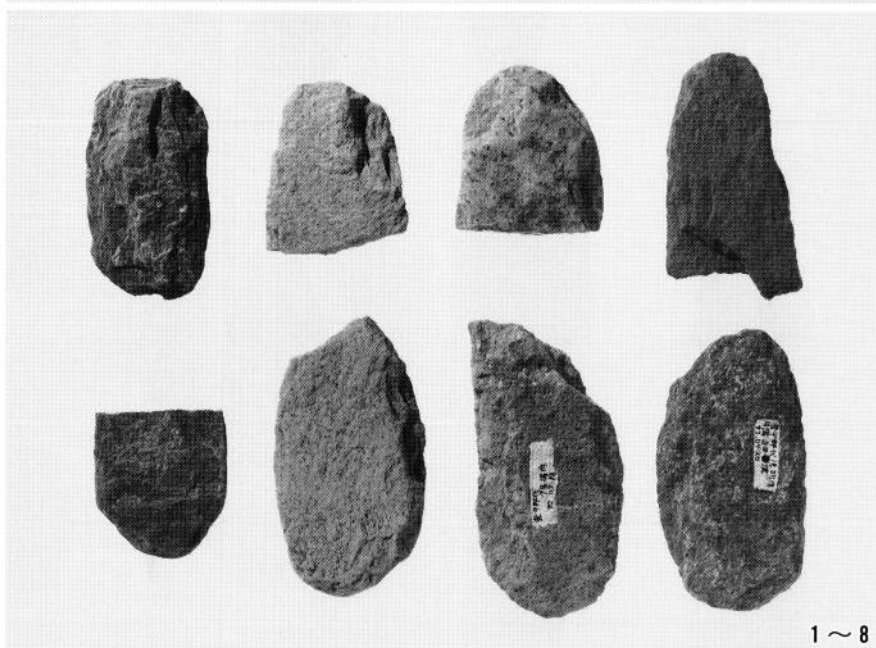
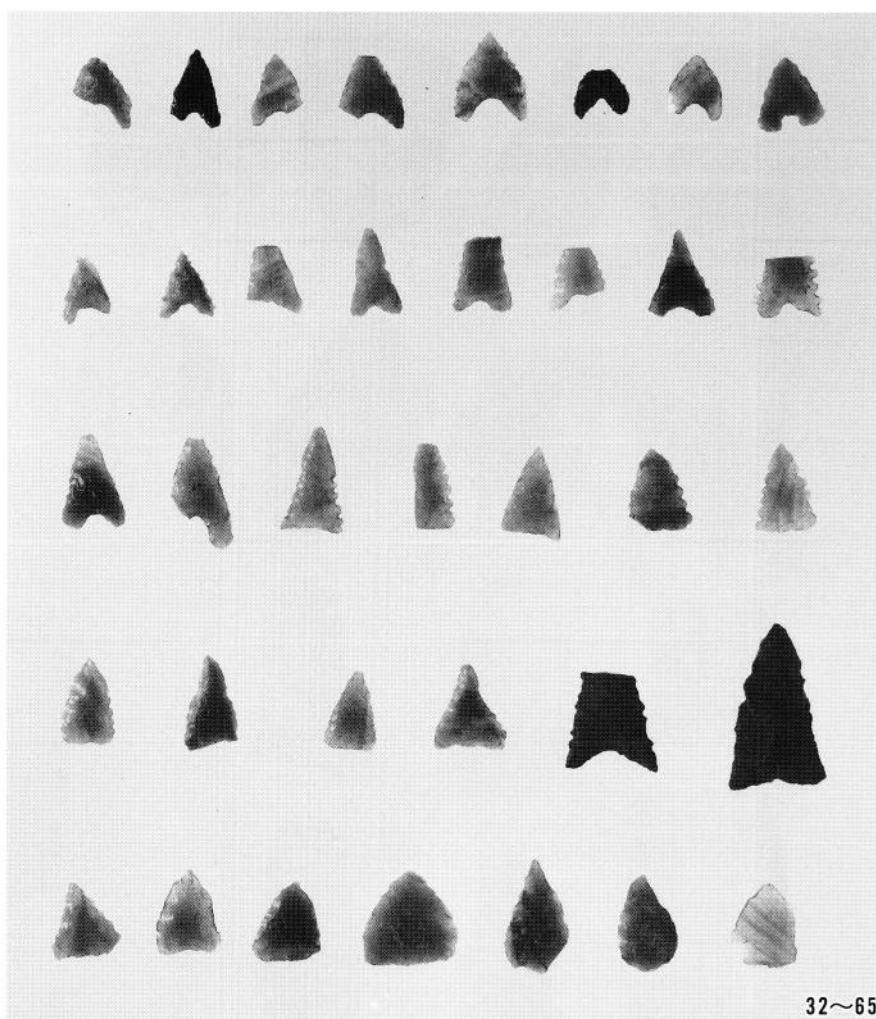
92~96

包含層その他出土土器

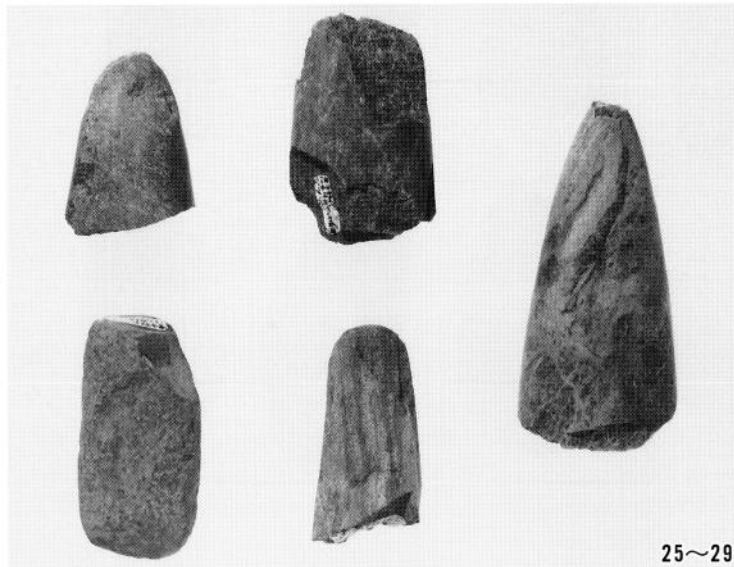
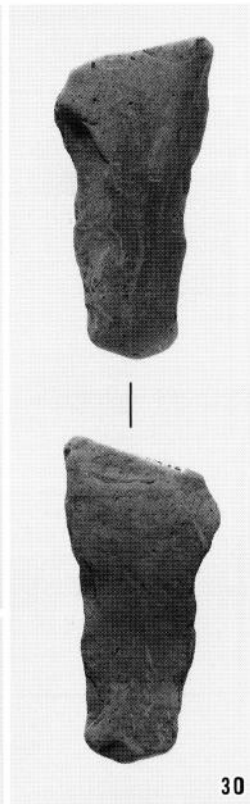
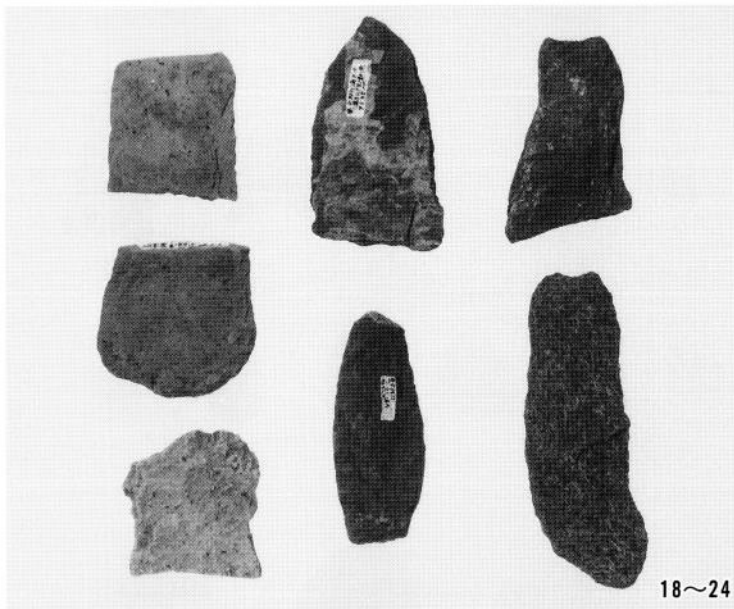
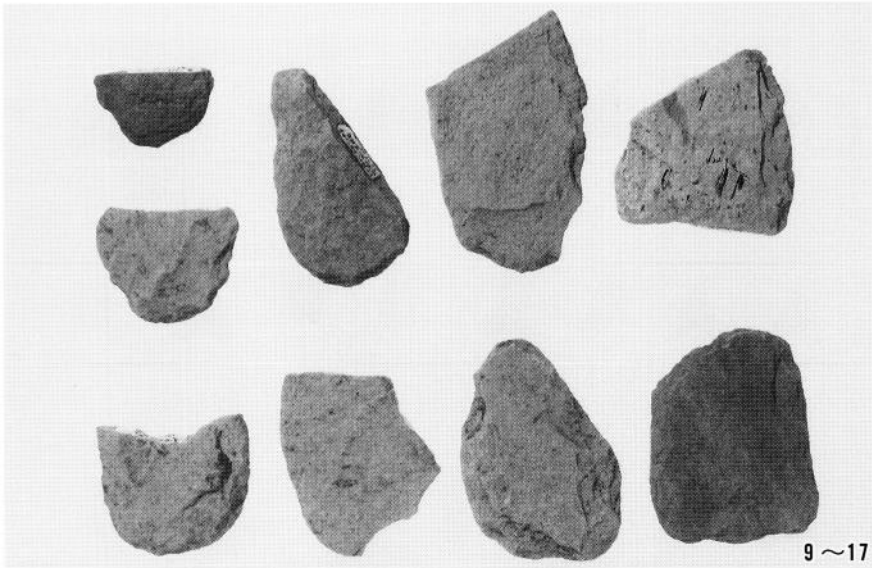


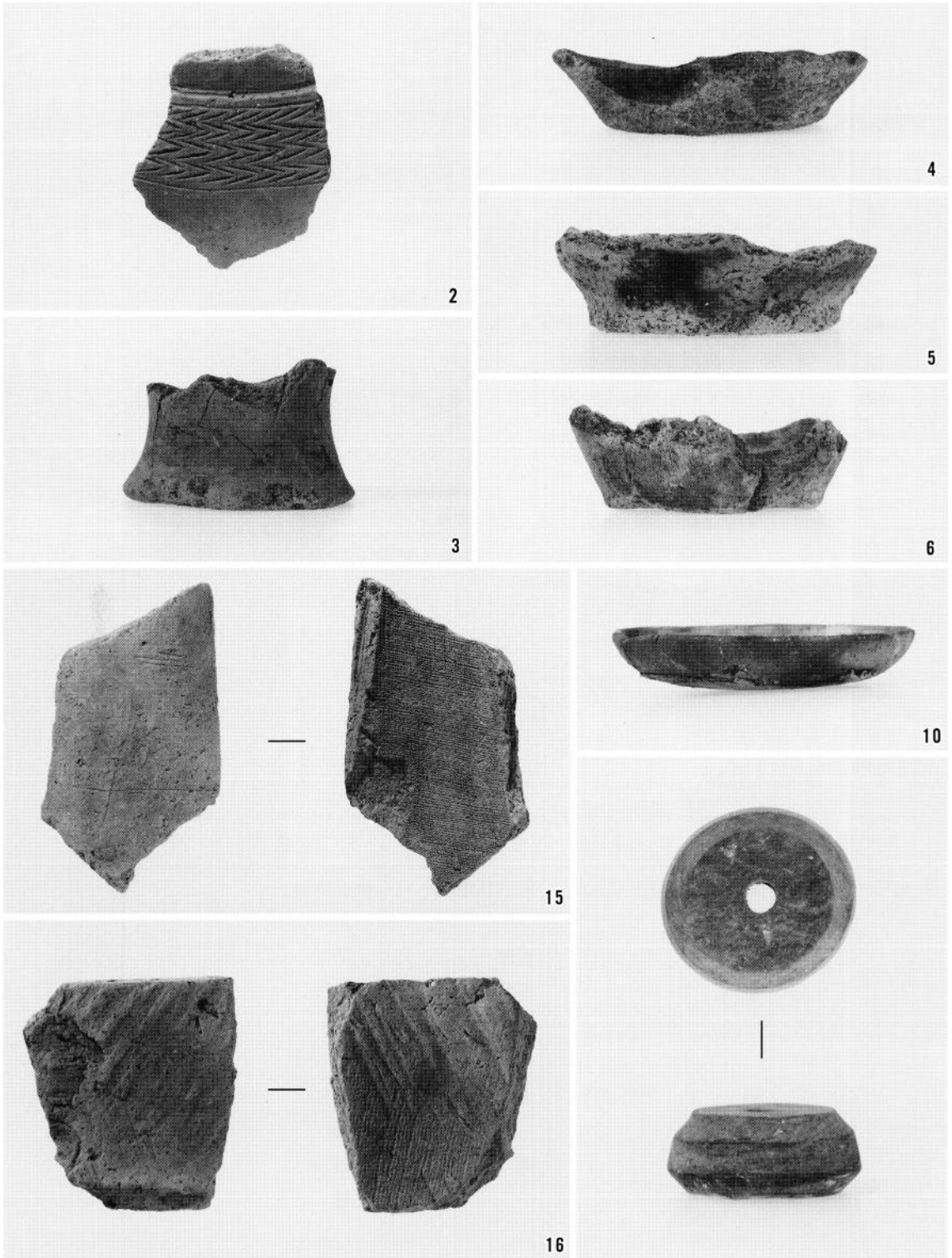
包含層その他出土土製円盤

1~20



包含層その他出土石器





包含層その他出土土器・瓦・石器

報告書抄録

ふりがな	うのだいいせき							
書名	宇野代遺跡							
副書名	一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書							
巻次	第1集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	柳田康雄・小川泰樹							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL 092-651-1111							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うのだい 宇野代	ふくおかけんちくじょうぐん 福岡県築上郡 しんよしとみむらおおあぎたる 新吉富村大字垂 み 水	406449	970074	33°34'	131°10'20"	1992. 1.16 ～ 1992. 7.22	5,000	道路(国道10号線バイパス)建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
宇野代	集落	縄文時代	竪穴状遺構 1	縄文土器 石器				
	墓	古墳時代	古墳 19	土師器				
	集落		竪穴住居跡 2	須恵器 鉄器 玉類				
	墓	平安時代	土壇墓 1	土師器 鉄器				
			溝 1	陶磁器 土錘				

一般国道 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第1集
10号線

宇野代遺跡

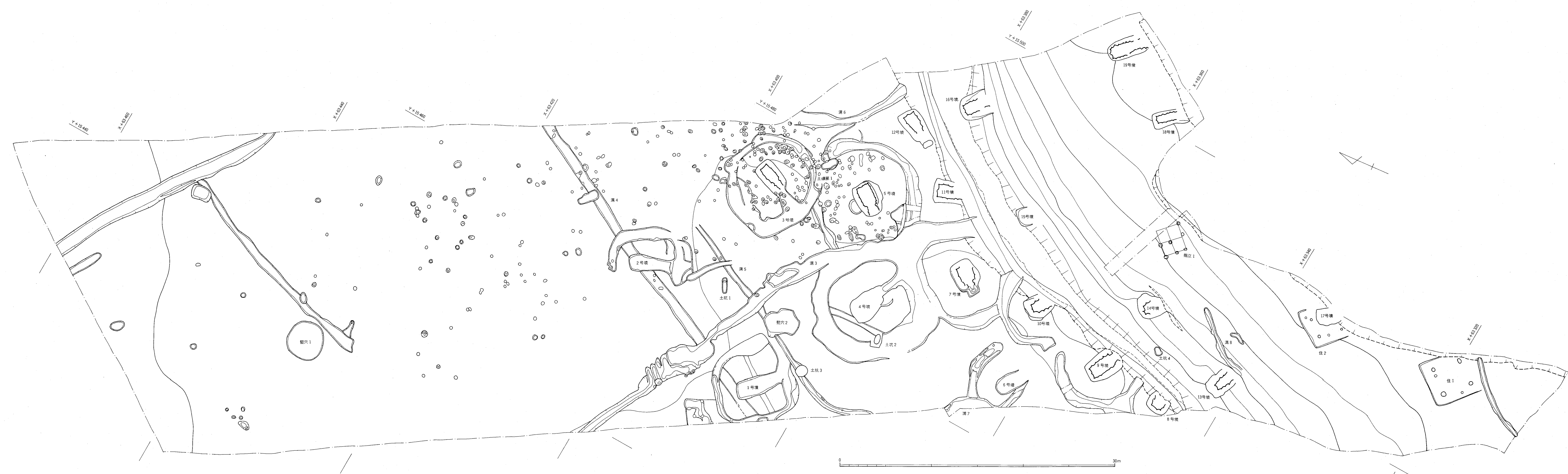
1995年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 (株)昭和堂印刷
博多市博多区榎田2丁目2番52号
電話 (092) 471-8200

福岡行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 6	登録番号 10

付 図



付圖 宇野代遺跡遺構配置図 (1/200)